

長岡京跡・淀城跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇一一年一七

長岡京跡・淀城跡

2012年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

長岡京跡・淀城跡

2012年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、京阪本線淀駅周辺整備事業に伴う長岡京跡・淀城跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

平成 24 年 3 月

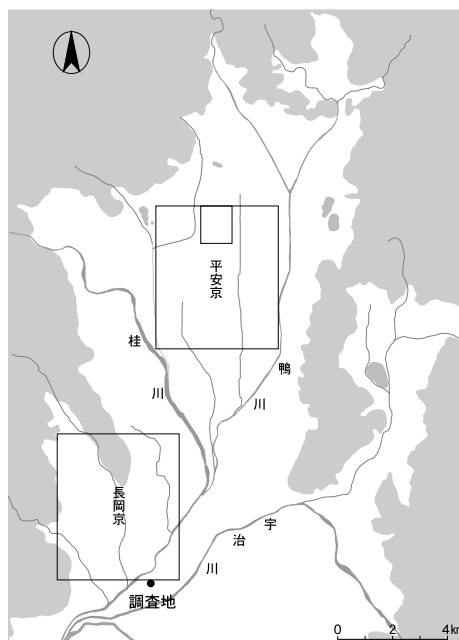
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 長岡京跡・淀城跡
長岡京左京第 549 次調査
- 2 調査所在地 京都市伏見区淀木津町・下津町地内
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2011 年 9 月 20 日～2011 年 12 月 7 日
- 5 調査面積 1,727 m²
- 6 調査担当者 高橋 潔・菅田 薫・津々池惣一
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1 : 2,500）「神足」、「納所」、「円明寺」、
「淀」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系 VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 各調査区ごとに通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺構規模 特に断らない限り、遺構検出面での規模を記載する。深さも検出面からの深度を示した。
- 13 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 14 本書作成 高橋 潔・菅田 薫・竜子正彦
- 15 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。

(調査地点図)



目 次

1. 調査の経緯	高橋	1
(1) 調査に至る経緯		1
(2) 調査の経過		3
2. 遺 跡	高橋	5
(1) 遺跡の位置と環境		5
(2) 周辺の調査		7
3. 遺 構		11
(1) 遺構の概要	高橋	11
(2) A 1 区の調査	菅田	11
(3) A 2 区の調査		13
(4) B 1 区の調査		16
(5) B 2 区の調査		18
(6) B 3 区の調査		24
(7) B 4 区の調査	高橋	26
(8) B 5 区の調査		27
(9) C 1 区の調査		35
(10) C 2 区の調査		47
(11) C 3 区の調査		56
4. 遺 物	高橋	57
(1) 遺物の概要		57
(2) 土器類		58
(3) 瓦類		65
(4) 金属製品		73
(5) 木製品・漆器		77
(6) 土製品		78
(7) 石製品		79
5. 土壌分析の成果	竜子	82
6. ま と め	高橋	85
(1) 淀城以前		85
(2) 淀城期		86

図 版 目 次

- 図版 1 A 1 区平面図 (1 : 200)
- 図版 2 A 2 区平面図 (1 : 200)
- 図版 3 B 1 区平面図 (1 : 200)
- 図版 4 B 2 区平面図 (1 : 200)
- 図版 5 B 3 区平面図 (1 : 200)
- 図版 6 B 4 区平面図 (1 : 200)
- 図版 7 B 5 区平面図 (1 : 200)
- 図版 8 C 1 区第 1 面平面図 (1 : 200)
- 図版 9 C 1 区第 3 面平面図 (1 : 200)
- 図版 10 C 2 区第 1 面平面図 (1 : 200)
- 図版 11 C 2 区第 3 面平面図 (1 : 200)
- 図版 12 1 A 1 区全景 (北東から)
2 A 1 区南東壁断面 (東から)
3 A 2 区全景 (北東から)
4 A 2 区下層石列検出状況 (東から)
- 図版 13 1 B 1 区全景 (北東から)
2 B 1 区下層墨書・線刻石出土状況 (北から)
3 B 2 区全景 (北東から)
4 B 2 区石垣検出状況 (東から)
- 図版 14 1 B 3 区全景 (北東から)
2 B 3 区石垣・盛土断割り断面 (北東から)
3 B 3 区石垣検出状況 (北から)
- 図版 15 1 B 4 区全景 (西から)
2 B 4 区石垣検出状況 (西から)
3 B 5 区全景 (南西から)
4 B 5 区石垣 27 検出状況 (南から)
- 図版 16 1 B 5 区溝 17 検出状況 (東から)
2 B 5 区石垣 29・石罫 25 検出状況 (東から)
3 B 5 区石垣 28・29、石罫 25 検出状況 (南から)
- 図版 17 1 C 1 区第 1 面全景 (北東から)
2 C 1 区第 1 面階段状列石 52 検出状況 (南西から)
3 C 1 区第 3 面全景 (北から)

- 4 C 1 区第 3 面地業 53 底面瓦敷検出状況 (南西から)
- 図版 18 1 C 1 区第 5 面全景 (北東から)
- 2 C 1 区第 6 面全景 (北東から)
- 3 C 2 区第 1 面全景 (東から)
- 4 C 2 区第 3 面全景 (東から)
- 図版 19 1 C 2 区第 4 面全景 (北東から)
- 2 C 2 区第 4 面町屋 67 検出状況 (東から)
- 3 C 2 区完掘状況および北西壁断面 (南から)
- 図版 20 B 1・B 2 区出土土器
- 図版 21 C 1 区出土土器 1
- 図版 22 C 1 区出土土器 2
- 図版 23 C 1・C 2 区出土土器
- 図版 24 軒丸瓦・棟丸瓦
- 図版 25 軒丸瓦・軒平瓦
- 図版 26 軒平瓦・棟丸瓦・軒棧瓦
- 図版 27 輪違瓦・鬼瓦
- 図版 28 金属製品 1
- 図版 29 1 金属製品 2
- 2 木製品 1
- 図版 30 1 木製品 2・土製品 1
- 2 土製品 2
- 図版 31 出土銭貨
- 図版 32 1 石製品 1
- 2 石製品 2
- 3 C 2 区町屋 67 出土壁土・編物

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 5,000)	1
図 2	調査区配置図 (1 : 2,000)	2
図 3	調査前全景 B 3 区 (北東から)	3
図 4	重機掘削 C 2 区 (南から)	3
図 5	測量作業風景 B 3 区 (北から)	3

図6	掘削作業風景 C2区(南西から)	3
図7	現地説明会の様子 B4区(西から)	4
図8	淀城下町復元図および周辺調査位置図(1:5,000)	8
図9	A1区平面図(1:200)	12
図10	A1区南東壁断面図(1:100)	12
図11	A2区平面図(1:200)	13
図12	A2区南東壁断面図(1:100)	14
図13	A2区礎石列10実測図(1:50)	15
図14	A2区石塁7実測図(1:50)	15
図15	B1区平面図(1:200)	16
図16	B1区南東壁断面図(1:100)	17
図17	B1区下面検出石実測図(1:40)	18
図18	B2区平面図(1:200)	19
図19	B2区南東壁断面図(1:100)	20
図20	B2区建物18実測図(1:100)	21
図21	B2区石垣4実測図(1:50)	22
図22	B2区井戸13実測図(1:50)	23
図23	B3区平面図(1:200)	24
図24	B3区石垣実測図(1:50)	25
図25	B3区石垣・盛土断割断面図(1:50)	26
図26	B4区平面図(1:200)	27
図27	B4区南東壁断面図(1:100)	28
図28	B4区石垣1実測図(1:50)	29
図29	B4区石垣1断面図(1:50)	30
図30	B5区平面図(1:200)	31
図31	B5区南東壁断面図(1:100)	32
図32	B5区陸部盛土内石塁検出状況(北東から)	33
図33	B5区溝17実測図(1:40)	33
図34	B5区石垣27実測図(1:50)	34
図35	B5区石垣28実測図(1:50)	35
図36	B5区石垣29実測図(1:50)	36
図37	B5区堀直交方向断割断面合成図(1:50)	37
図38	C1区第1・2面、第3面平面図(1:200)	38
図39	C1区第4面・第5面平面図(1:200)	39
図40	C1区第6面平面図(1:200)	40

図 41	C 1 区南東壁断面図 (1 : 100)	42
図 42	C 1 区第 1 面階段状列石 52 実測図 (1 : 50)	44
図 43	C 1 区第 3 面地業 53 (1 : 50)	45
図 44	C 1 区第 3 面土坑 4 実測図 (1 : 50)	46
図 45	C 2 区第 1 面、第 2 面平面図 (1 : 200)	48
図 46	C 2 区第 3 面、第 4 面平面図 (1 : 200)	49
図 47	C 2 区北西壁断面図 (1 : 100)	50
図 48	C 2 区第 1 面石垣 1 ~ 3 実測図 (1 : 50)	52
図 49	C 2 区第 2 面石垣 4 実測図 (1 : 50)	53
図 50	C 2 区第 3 面土坑 6 断面図 (1 : 50)	54
図 51	C 2 区第 4 面町屋 67 実測図 (1 : 50)	55
図 52	C 3 区平・断面図 (1 : 200)	56
図 53	土器実測図 1 (1 : 4)	59
図 54	土器実測図 2 (1 : 4)	60
図 55	土器実測図 3 (1 : 4)	62
図 56	土器実測図 4 (1 : 4)	64
図 57	軒丸瓦拓影・実測図 1 (1 : 4)	66
図 58	軒丸瓦拓影・実測図 2 (1 : 4)	67
図 59	軒丸瓦拓影・実測図 3 (1 : 4)	68
図 60	軒平瓦拓影・実測図 (1 : 4)	69
図 61	軒平瓦、棟丸瓦拓影・実測図 (1 : 4)	70
図 62	鳥衾、輪違瓦、軒棧瓦拓影・実測図 (1 : 4)	71
図 63	鬼瓦実測図 (1 : 4)	72
図 64	丸瓦刻印拓影 (1 : 1)	73
図 65	金属製品実測図 1 (1 : 4)	74
図 66	金属製品実測図 2 (1 : 2)	75
図 67	銅銭拓影 (1 : 1)	76
図 68	木製品実測図 (1 : 4)	77
図 69	土製品・石製品実測図 (1 : 2)	79
図 70	石製品実測図 (1 : 4)	80
図 71	石垣線刻拓影 (1 : 4)	81
図 72	同定資料 壁土	82
図 73	同定資料 炭化物	83
図 74	淀城以前 町屋関連主要遺構分布図 (1 : 1,000)	86
図 75	淀城期 主要遺構分布図 (1 : 2,000)	88

表 目 次

表 1	周辺調査一覧表	9
表 2	遺構概要表	11
表 3	遺物概要表	57
表 4	C 1 区第 3 面整地層出土土器の構成 (破片数)	61
表 5	C 1 区第 4 面整地層出土土器の構成 (破片数)	61
表 6	C 1 区第 5 面整地層出土土器の構成 (破片数)	63
表 7	種実等一覧表	84

付 表 目 次

付表 1	土器観察表	90
付表 2	瓦観察表	97
付表 3	銭貨一覧表	100
付表 4	土製品観察表	101

長岡京跡・淀城跡

1. 調査の経緯

(1) 調査に至る経緯

本調査は、京阪本線淀駅周辺整備事業に伴う発掘調査である。京阪本線淀駅駅舎の移転と周辺の高架化工事に伴って、1999年から継続的に行ってきた発掘調査の9次調査であり、一連の調査の最終年度にあたる。調査は京都市建設局事業推進室から委託を受け、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という。）の指導の下、(財)京都市埋蔵文化財研究所が実施した。

本年度の調査対象地は、移転した新しい京阪本線淀駅の大阪側（南西側）線路に沿った約420mの区間である。なお、隣接する該当線路の北東部は、これまでに調査を行い（調査22・23）、線路の高架化工事も終了している。

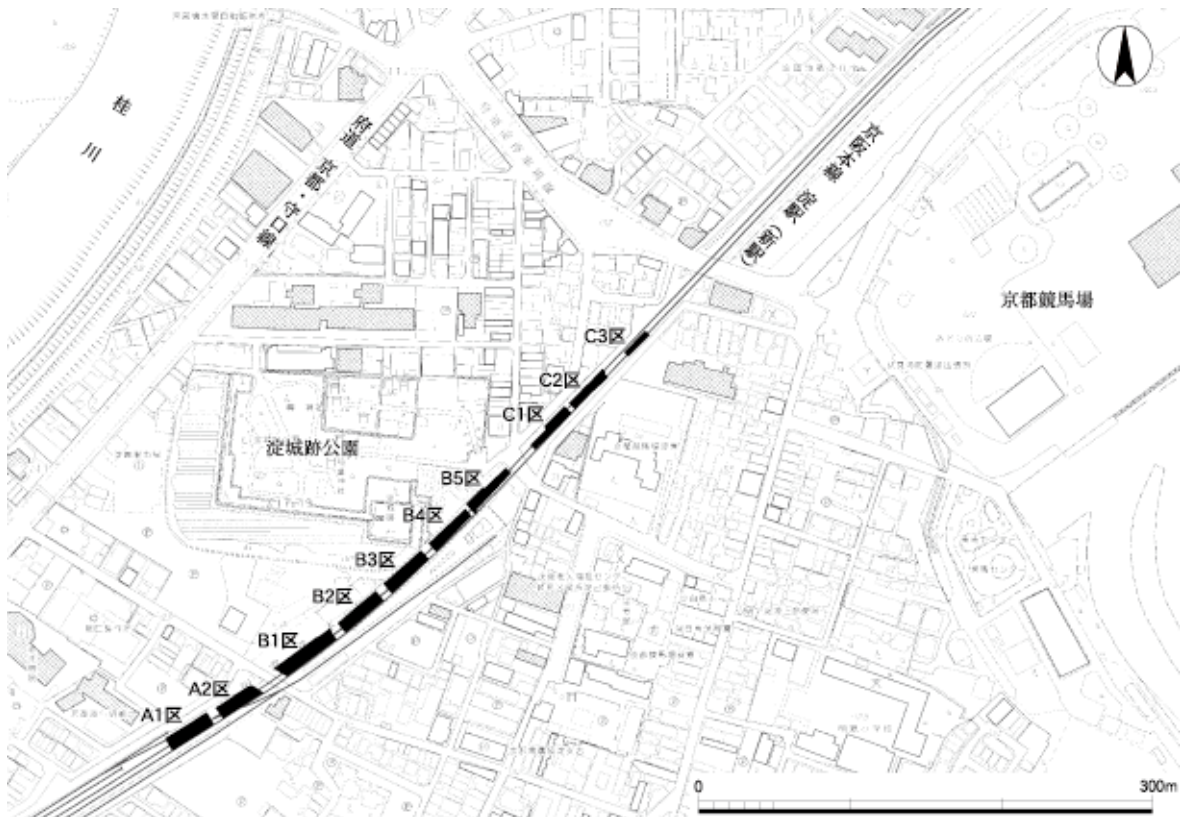


図1 調査位置図（1：5,000）

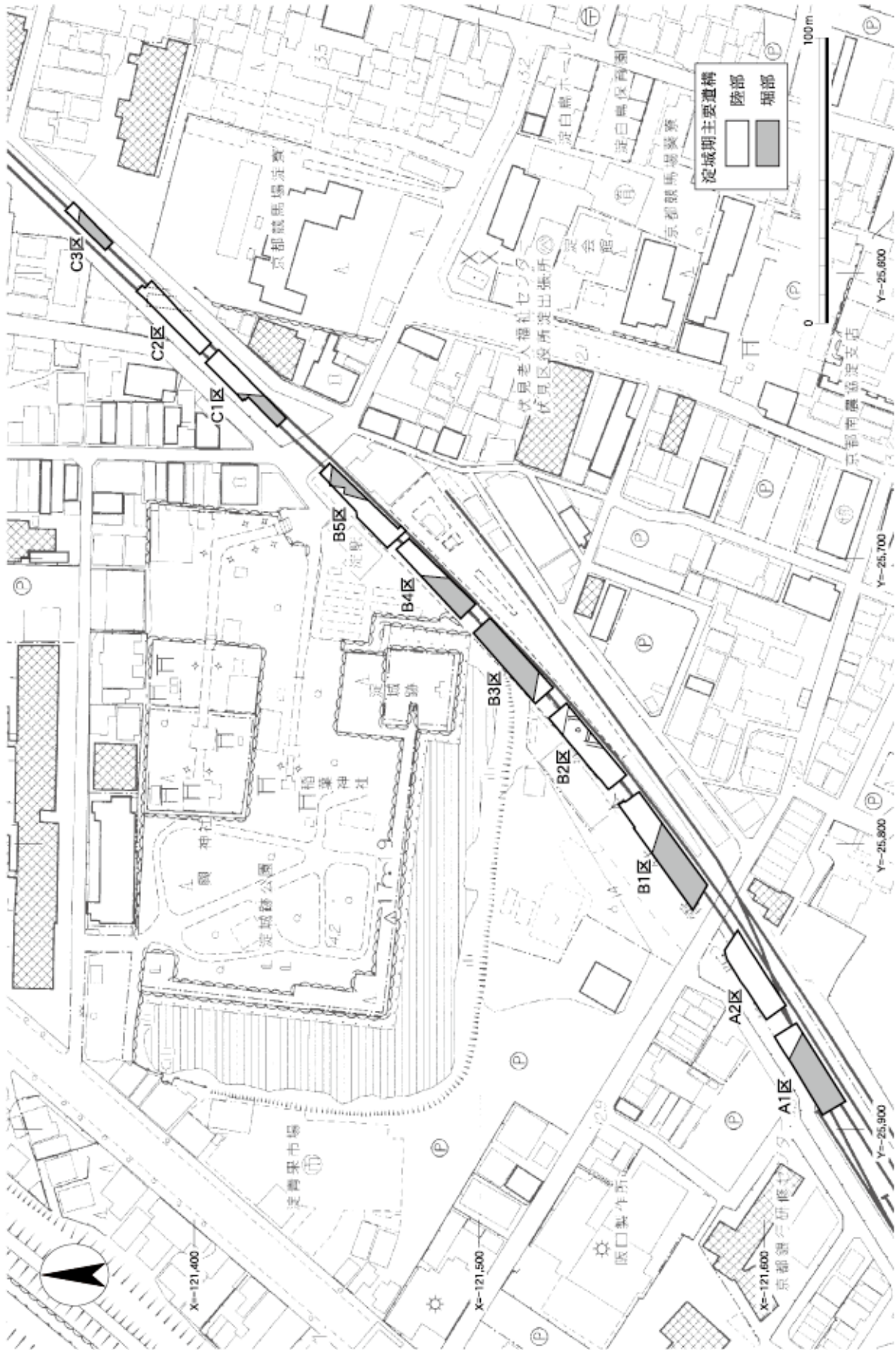


図2 調査区配置図 (1 : 2,000)

(2) 調査の経過 (図2～7)

調査区の設定 調査区は前年度調査(7次調査)までと同様に、南からA1・2区、B1～5区、C1～3区と工事による工区名をそのまま調査区名称とした。調査区は、工事によって掘削される範囲であり、土留め作業(鋼矢板、H鋼打ち込み)などにより調査区が設定された。調査範囲の設定後は、高架橋柱基礎の構築(ボーリングのち鉄筋コンクリート柱構築)、1次掘削を経て、埋蔵文化財の調査に入るという作業工程であった。また、調査の深度は各調査区とも遺構が破壊される工事掘削深までとし、それ以下については調査しなかった。

調査の目的 調査の対象となる遺跡は長岡京左京跡と江戸時代の淀城跡である。これまでの調査成果では、C1・C2区で桃山時代の大坂街道および町屋に関する遺構・遺物、全域で江戸時代淀城に関する遺構・遺物が検出されるものの、長岡京期の遺構・遺物は検出されていない。本調査でも同様の成果が予想された。

調査経過 調査はB3区から開始した。C2区、B2区、C1区、B4区、B1区、B5区、A1区、A2区、C3区の順に、3箇所前後の調査区を平行して進めた。各調査区とも、調査は重機掘削により現代盛土層を除去し、淀城期の堀部分については工事掘削深まで掘り下げを行った後、人力掘削に入った。遺構の記録は、随時平面図・断面図を作成し、写真撮影を行った。各調査区で検出した石垣・石畳などについてはオルソ測量により図化した。調査終了後は埋め戻しをするこ



図3 調査前全景 B3区(北東から)



図4 重機掘削 C2区(南から)



図5 測量作業風景 B3区(北から)



図6 掘削作業風景 C2区(南西から)



図7 現地説明会の様子 B4区（西から）

となく、それぞれの工区の工業者に引き渡した。

調査中は適宜、文化財保護課の検証を受け、学識経験者の当研究所検証委員である京都産業大学の鈴木久男教授、立命館大学の高正龍教授にも視察をお願いし現地でご指導いただいた。また、11月6日には、地元向け現地説明会を開催し、これまでの成果も含め公表し調査中の現地を公開した。約150名の参加があった。

また、調査中は北垣聰一郎氏、高田徹氏、森岡秀人氏、藤川祐作氏、多賀左門氏、中井均氏に現地でご指導・ご教示頂いた。記して謝意を示したい。

2. 遺 跡

(1) 遺跡の位置と環境

現在の淀は、淀川水系の宇治川と桂川に挟まれた地域である。桂川と宇治川は、南東から北上する木津川と男山丘陵と天王山が迫る約3km南西の地点で合流して淀川となる。このような地形は、度重なる洪水やこれに対処する中世末期以降の人工的な改変の繰り返しによって、形作られたものである。かつては、北東から桂川、南東から木津川、東から宇治川が合流し、東の巨椋池の出口に形成された中洲とその周辺地域を淀と呼んだ。「淀」は、川が合流し緩んでできた「よどみ」に由来するという。京都盆地の西の出入り口にあたり、標高が10m前後と低く、盆地内の河川がすべてこの淀で合流して、西方、大坂湾・西国方面などと盆地内を繋ぐ水陸交通の要衝であった。

文献史料にみえるのは、平安京遷都後の延暦二三年（804）に「幸_二与等津_一」（『日本後紀』延暦二三年七月二四日条）とあるのが初見で、桓武天皇が当地に行幸したことが記され、平安時代前期には淀が「津」として認識されていたことがわかる。西国からの物資は大坂湾などから淀川沿いに淀津を経由して、平安京へ運び込まれた。当時の淀津は桂川西岸に中心があったと考えられている。また、大同五年（810）の藤原薬子の変に対して宇治橋や山崎橋とともに与渡市津にも頓兵が置かれる（『日本紀略』大同五年九月一一日条）など、有事に際しては都を護る前線でもあった。平安時代中期頃には、洪水によって「与度渡口四辺」の30余家が流された（『日本三代実録』貞観一六年〔874〕八月二四日条）記録があり、多くの人々が家を構えて住んでいたことを窺わせる。平安時代末期から中世には「淀魚市」で魚介類のほか、塩・米穀・木材など様々な物品の取引が行われ賑わっていた（『玉葉』、『東寺百合文書』、『北野社家日記』など）。

永正元年（1504）九月、執政・細川政元に対して謀反を起こして摂津国守護代・薬師寺元一が占拠した城（『細川両家記』・『実隆公記』）が淀城（古淀城）と考えられ、室町時代前半に納所に置かれた山城守護代の守護所を引き継いだものとみられる。永禄二年（1559）八月に管領・細川氏綱、続いて岩成友通が入城する（『細川両家記』）。天正一〇年（1582）六月、本能寺の変の後、山崎の戦いでは明智光秀の砦となるが、光秀が敗れ豊臣秀吉の支配下となる。秀吉は愛妾茶々（淀殿）の産所に充てることを決め修築をなし、天正一七年（1589）三月に茶々が入城、五月に男子鶴松を出産した。しかし、九月には淀殿・鶴松ともに大坂城へ移り、文禄三年（1594）に伏見城の築城が計画されるに伴って、三月古淀城は破却された。また、周囲が淀堤により圍繞され、津としての機能も移されてしまう。

江戸時代に入り、元和九年（1623）七月、伏見城の廃城が決定し、八月には京都守護の城として、松平定綱が淀藩の居城・淀城の築造を命じられ、三万五千石で入封した。先の古淀城は宇治川の北岸に築かれたが、新しい淀城は桂川・宇治川・木津川の三川合流地点の淀の中島がその地として選ばれた。寛永三年（1626）六月に大御所・徳川秀忠、八月には秀忠・家光が淀城に入っており、これまでに主要殿舎は完成していたとみられる。北を宇治川、南を木津川に挟まれた範囲の

北寄り中央に本丸・天守台と二ノ丸、これを内堀・曲輪・中堀が囲み、南に内高嶋、東に東曲輪・魚市などが配された。京都と大坂を結ぶ大坂街道は、東曲輪の東の城下を通る。以後、城主は歴代、譜代大名が勤め、寛永一〇年（1633）永井尚政、寛文九年（1669）石川憲之、正徳元年（1711）戸田光熙と続き、享保八年（1723）に稲葉正知が入封の後は幕末まで稲葉家が藩主となった。2代目城主・永井尚政は城下の南を北西へ流れる木津川を南へ付け替えに着手（木津川川違え）、寛永一五年（1638）内高嶋・外高嶋など城下町の拡張に成功する。

江戸時代を通じて、淀は城下町・宿場・港町として栄えた。しかし、宝暦六年（1756）落雷によって天守を始め城内の大半の建物が焼失した後、再建されることはなかった。幕末、慶応四年（1868）一月の官軍と幕府軍の鳥羽伏見の戦いの際、幕府軍の本陣となり城下町も戦火に見舞われた。

明治維新後、明治四年（1871）廃藩置県によって、淀藩は淀県となり、淀城も廃城となった。先立つ慶応四年（1868）の大雨による大規模な洪水を契機として、明治元～三年（1868～1870）まで京都府と淀藩による現在の河道への木津川付け替え工事、明治八～二一年（1875～1888）には淀川に蒸気船を就航させる目的で行われた「淀川修築工事」、明治二九～四三年（1896～1910）には洪水対策のため宇治川・桂川を付け替えた「淀川改良工事」などが行われ、周囲の景観が一変した。また、明治七年（1874）には京都府の淀裁判所建設計画（実施されず）に伴って、淀城の石垣解体工事が実施され、現在残されている天守・本丸の石垣を残し、大半の石垣の石材が取り去られた。もと、桂川の西岸、水垂に鎮座していた与杼神社は、明治三五年（1902）「淀川修築工事」に伴って、現在の地、淀城本丸に遷宮された。また、明治四三年（1910）に大坂天満と京都五条を結ぶ京阪電気鉄道が開通し、残されていた堀などを埋めて本丸天守台の間近に線路が敷設され、駅舎（旧淀駅）が建設された。

現在では、淀城跡公園として本丸・天守台の石垣と南・西の内堀が残されている。淀の町並みは、今回の京阪電気鉄道淀駅の高架化事業によって、さらに景観が大きく変化を遂げようとしている。

【参考文献】

京都市編『史料 京都の歴史 16 伏見区』平凡社、1991年1月

西川幸治編『淀の歴史と文化』淀観光協会、1994年9月

『京都市の地名』日本歴史地名大系 27、平凡社、1979年9月

京都市文化市民局文化財保護課『京の城 ―洛中・洛外の城館―』京都市文化財ブックス第20集、2006年3月

(2) 周辺の調査（図8、表1）

本調査地周辺は長岡京跡および淀城跡にあっている。ただし、長岡京跡については、旧条坊案では左京九条三・四坊に含まれていたが、新条坊案では京城全体が二町北へ引き上げられたのに伴って京城からは外れる。また、淀城は先述のように、中世から知られる文禄三年（1594）に破却される古淀城と、元和九年（1623）に築城され明治四年（1871）に廃城となる淀城とがある。古淀城は本調査地よりも北、旧宇治川の北岸、現在の納所辺りにあったと考えられており、淀城は淀城跡公園として天守台・本丸の石垣および南の内堀が遺されている。本調査で対象となったのは後者、江戸時代になってから淀中島に築かれた淀城である。なお、当地周辺には淀城以前にも京と大坂を結ぶ大坂街道が南北に通じ、街道沿いの町並みが形成されていた。

淀城跡に対する主な調査は表1に示した通りである。京阪淀駅の移転とこれに伴う線路の高架化、周辺の整備事業などに先立ち、あるいは並行して1999年頃より継続して調査が行われた。これまでに検出した遺構は、主として江戸時代前期以降の淀城期と築城以前の桃山時代末期から江戸時代初期に分けることができる。各調査でこれらよりも古い平安時代から室町時代の遺物も出土しているが、遺構は確認されていない。

淀城期（江戸時代前期以降） 現存する石垣などに対しては、1977・78年に天守台四周の石垣の測量調査がなされ、石垣の立面図作成された（調査2）。これを基に1987年石材・刻印などの詳細調査が行われた（調査4）。これらの調査以前より石垣崩壊の危険性が指摘され、石垣改修積替工事が計画されており、それに先立って状況把握のために行われた調査であった。石垣改修工事は1989年8月から翌90年3月に実施された（調査5）。

本丸天守台に対する発掘調査は1977・78年に南西隅部の試掘調査が行われ、天守台に地下施設が存在することが知られた（調査2）。これを受けて、天守台の全面調査が1987年に実施され、地下室（石蔵）があったことが判明、宝暦六年（1756）の落雷による火災で全面が著しく焼けていた（調査6）。

東曲輪では、比較的北端部分の調査が進んでいる。溝に栗石を詰め込んだ布掘基礎に礎石の伴う幅8m・長さ40mの長大な土蔵跡が検出されており、絵図などにみられる米蔵の基礎と考えられる（調査13・14・17）。この米蔵などを囲う施設である石垣や溝、前面に広がる路面状の整地（調査22・23）、角櫓の一部と考えられる石垣やこれに取り付く門の礎石など（調査24）などを検出している。

南曲輪でも、東曲輪同様の米蔵など蔵の基礎とみられる布掘基礎と礎石根石、東面する石垣などが検出されている（調査22・23）。

本丸の南西を北東から南西へ縦断する形となった調査22・23では、各所で堀とそれに伴う石垣を検出している。東曲輪北側の外堀と南辺石垣（調査24）、本丸東の中堀と東辺石垣・西辺石垣、本丸南東部の内堀と東辺石垣・南辺石垣、南曲輪南の中堀と北辺石垣、さらに南の外堀などで、いずれも明治以降に石垣は壊され、さらに後に堀は埋められる。

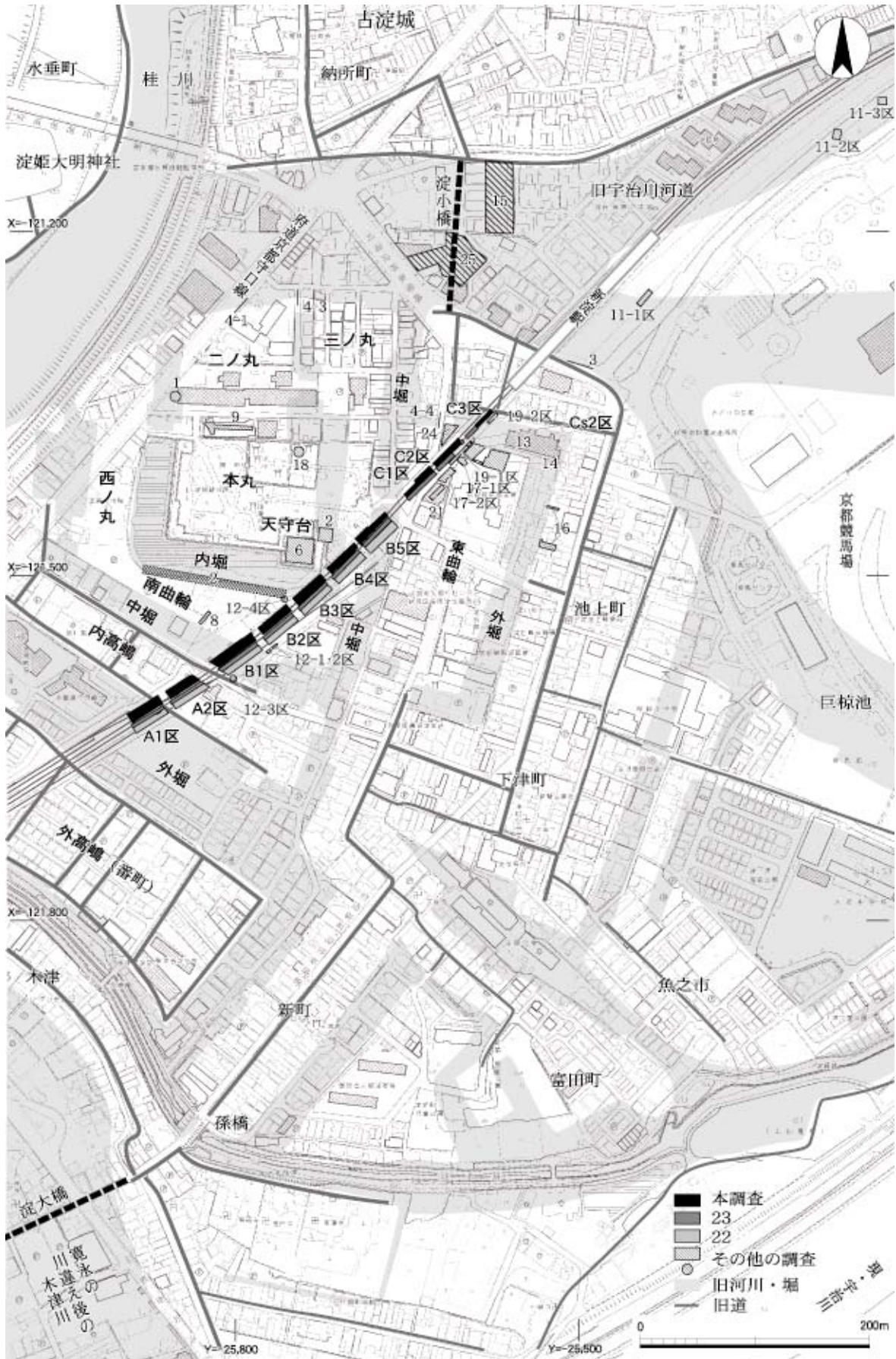


図8 淀城下町復元図および周辺調査位置図 (1 : 5,000)

表1 周辺調査一覧表

調査番号	調査地点	調査種類	調査機関	所在地	調査期間	面積(m ²)	主な成果	文献番号
1	二ノ丸西側内堀	試掘		淀本町	1976.12		二ノ丸西側の内堀東辺の石垣検出。	6の表23-1
2	本丸天守台、内堀南辺石垣	立会・試掘、石垣調査	淀城跡調査団	淀城跡公園	1977.8~9 1978.3~5		天守台4面石垣立面図作成。天守台南西隅を試掘、石蔵の存在を確認。北東角を試掘犬走りの状況を確認。内堀南辺の石垣を検出(A~F)。	1
3	城下北端部	立会		淀池上町地内	1984.6~		北面する石垣を検出、旧宇治川の護岸石垣か?	6の表23-7
4	二ノ丸北端部	立会		淀本町ほか	1984.8~		8-1・3人頭大の集石を検出、旧宇治川の護岸石垣か? 8-4 東西方向の石垣検出。	6の表23-8
5	本丸屋敷南西隅櫓台	立会		淀城跡公園	1986.8~10		石垣改修工事に伴っての立会調査	1
6	本丸天守台、西・南・天守台石垣	発掘、石垣石材調査	淀城跡調査団	淀城跡公園	1987.7.30~11.15		天守台：石蔵(地下室)の存在明らかになり、柱礎石などを検出。全面が著しく焼けている(宝暦6年の落雷)。石垣調査：全面の石材計測・図化と刻印・墨書などの有無の確認。	2~4
7	本丸天守台	石垣改修工事	市建設緑地部	淀城跡公園	1989.8~1990.3		天守台の四周石垣の積替え改修工事が実施された。	5
8	内堀・内高嶋	試掘	市埋文研	淀本町174-62、148-1	1990.10.1	36.4	内堀および、北面する内高嶋南辺の石垣。	6
9	本丸北側	試掘	市埋文セ	淀本町173-10	1996.2.7~9	129	本丸と二ノ丸の境界となる逆「L」字状の石垣を検出。	7
10	城外北西部	試掘	市埋文研	葦島渡場町32(京都競馬場内)	1998.3.3~4.21	300	5箇所調査区。GL-2mまで現代盛土、以下湿地状堆積。	8
11	城外北西部	試掘	市埋文研	納所町(京都競馬場北西外周道路)	1999.8.16~9.3	115	3箇所調査区。GL-2mまで現代盛土、以下1区では時期不明遺構面、2・3区では流路・湿地状堆積。	9
12	南曲輪、内高嶋、内堀、中堀	試掘	市埋文セ	淀池上町(京阪電鉄構内)	2003.2.17、11.10・13	22	1区：土坑、2区：内高嶋相当部で東西方向石垣、3区：中堀南辺の石垣、4区：内堀南辺の石垣裏込め	10
13	東曲輪	発掘	市埋文研	淀池上町地内	2003.11.7~2004.1.19	200	14の西側。淀城期：布堀基礎建物の西延長部検出。	11
14	東曲輪	発掘	市埋文研	淀池上町	2003.11.13~2004.1.21	280	淀城期：布堀基礎の長大な建物(土蔵)を検出、絵図などにみられる「米蔵」に相当すると考えられる。	12
15	旧宇治川河道	試掘	市埋文セ	納所町560-1ほか	2003.12.25	33	3箇所調査区。GL-2mまで現代盛土、以下流路・湿地状堆積。	13
16	東曲輪外堀東	試掘	市埋文セ	淀池上町38ほか	2004.10.14	14	2箇所調査区。淀城期：1区で外堀に直交する東西方向の石垣、外堀に連結する小規模な堀か。	14
17	東曲輪	発掘	市埋文研	淀池上町地内	2004.11.30~2005.3.2	130	2箇所調査区。淀城期：布堀基礎建物の南西角部、その西の石垣、東曲輪の路面状整地。淀城以前：町屋関連建物・カマド、井戸	12
18	本丸北東部	試掘	市文保課	淀本町167 興軒神社境内	2006.4.26	3	境内北辺・東辺の石垣が淀城期のものであると確認。	15
19	東曲輪	発掘	市埋文研	淀池上町地内	2006.5.8~6.13	116	2箇所調査区。淀城期：東曲輪の区画に関する石垣(石列)、井戸など	16
20	本丸北西部城内	試掘	市文保課	淀木津町~納所下野(京阪電鉄構内)	2006.5.9	28	淀城期：築土層・溝・整地層など確認。⇒発掘調査を指導。	15
21	東曲輪	発掘	市埋文研	淀池上町地内	2006.6.14~7.11	64	東曲輪にあたるが、淀城期の遺構残存せず。淀城以前：大坂街道の路面・石列、町屋関連の柱穴など	17
22	本丸北西部城内	発掘	市埋文研	淀池上町地内(京阪電鉄構内)	2006.8.21~2007.2.28	1350	A1~2・B1~5区の7箇所調査区。	18
23	本丸北西部城内	発掘	市埋文研	淀池上町地内(京阪電鉄構内)	2010.2.15~8.31	980	A1~2・B1~5・C1~3・Cs2区の11箇所調査区。	19
24	東曲輪	発掘	市埋文研	淀池上町地内	2011.2.22~3.31	115	淀城期：東曲輪における石垣(角櫓)門礎石(京口門)、中堀。淀城以前：大坂街道およびこれに伴う境界石列、面する建物礎石列など	20
25	旧宇治川河道	試掘	市文保課	淀本町215-2ほか	2011.4.6	28.3	3箇所調査区。GL-1.2mまで以下流路・湿地状堆積。	
26	本丸北西部城内	発掘	市埋文研	淀木津町・下津町地内(京阪電鉄構内)	2011.9.22~12.7	1727	A1~2・B1~5・C1~3区の10箇所調査区。	本書

※ 調査機関については、以下のように略記した。

京都市建設局公園緑地部：市建設緑地部。京都市埋蔵文化財調査センター：市埋文セ。

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課：市文保課。(財)京都市埋蔵文化財研究所：市埋文研。

※ 調査番号22・23・26については、煩雑さを避けるため、図8には共通する調査区名のみを表示した。

淀城以前（桃山時代） 淀城が築城される以前の遺構が検出されるのは、大坂街道とみられる路面が検出される調査 17 および調査 18・19 の C 1・C 2 区周辺に限定される。検出される遺構は、大坂街道の路面、その両側には道路に面して、直交する地割りが行われ、柱穴や礎石による町屋、溝や井戸などがある。比較的短時間の間に、何度も嵩上げ（整地）がなされるが、その度に地割りは踏襲されており、洪水などで埋まる度に何度も復興されていた様子が見て取れる。

関連文献一覧表（番号は表 1 の文献番号に一致）

- 1 星野猷二・三木善則『器瓦録想 其三 淀城』伏見城研究会 2007 年 2 月
- 2 星野猷二・藤井重夫『淀城跡調査概要 I（淀城跡・天守台調査概報）』京都市建設局公園管理課・淀城跡調査団（伏見城研究会） 1988 年 3 月
- 3 江谷寛「発掘から見た淀城天守閣」『淀の歴史と文化』淀観光協会 1998 年 9 月
- 4 藤井重夫「石垣に残る刻印」『淀の歴史と文化』淀観光協会 1998 年 9 月
- 5 中村石材工業株式会社『淀城跡公園石垣改修工事報告書』京都市建設局公園緑地部 1990 年 8 月
- 6 久世康博「淀城跡（TB29）」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成 2 年度』京都市文化観光局 1991 年 3 月
- 7 馬瀬智光「淀城跡 No.21」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 8 年度』京都市文化市民局 1997 年 3 月
- 8 吉崎伸「長岡京左京九条四坊」『平成 10 年 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、2000 年 3 月
- 9 上村和直「長岡京左京九条四坊」『平成 11 年 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、2002 年 6 月
- 10 馬瀬智光「長岡京跡・淀城跡 No.17」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 15 年度』京都市文化市民局 2004 年 3 月
- 11 内田好昭「長岡京跡・淀城跡（2 次・3 次調査）」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2006- 3 2006 年 6 月
- 12 内田好昭『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-13 2004 年 3 月
- 13 「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 15 年度』京都市文化市民局 2004 年 3 月
- 14 馬瀬智光「長岡京跡・淀城跡 No.102」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 16 年度』京都市文化市民局 2005 年 3 月
- 15 「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 18 年度』京都市文化市民局 2007 年 3 月
- 16 尾藤德行「長岡京跡・淀城跡（4 次調査）」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2006- 3 2006 年 6 月
- 17 尾藤德行「長岡京跡・淀城跡（5 次調査）」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2006-23 2007 年 3 月
- 18 尾藤德行・丸川義弘・能芝勉「淀城跡（6 次調査）」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2006-23 2007 年 3 月
- 19 尾藤德行・長戸満男・南出俊彦『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2010-7 2010 年 9 月
- 20 尾藤德行『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2010-17 2011 年 5 月

3. 遺 構

(1) 遺構の概要 (表2)

調査区は10箇所を設定し、南からA1～C3区と工事による工区名と同一とした。各調査区の南東に接して2006年・2009年度に調査を行っており(調査22・23)、おおむねそれらの調査の成果と大きな齟齬はなかった。

遺構の時期は、今も本丸・天守台や堀の残る江戸時代前期に築造された淀城に関する時期(淀城期)と、それ以前の桃山時代の大坂街道やこれに沿った町屋に関する時期(淀城以前)の大きく2時期である。絵図などによれば、調査地は淀城期本丸の南東側を北東から南西に縦断する範囲にあたる。淀城期の遺構は各調査区で検出しているが、淀城以前の遺構の検出はほぼC1・C2区に限られている。

(2) A1区の調査 (図9・10、図版1・12)

調査区は、淀城本丸の南にある曲輪「内高嶋」の南端および外堀にあたる。南東に隣接する調査22・23では陸地部分と外堀を確認している。その結果、外堀の埋土からは明治時代の遺物が出土しており、本年度の調査では陸地部分と外堀肩部のみを調査の対象とした。

調査区は長辺35m、短辺9mの方形で、地表面の標高は11.1～11.3mで、北から南へ緩やかに低くなっている。軌道敷きに伴う現代盛土直下が淀城期の整地層で遺構面となる。遺構面の標高は、約11.2mである。曲輪「内高嶋」にあたる陸部と外堀を検出した。

陸部 調査区の北東端から4.5～7.0mで外堀の北肩となる。陸地部は黄褐色から褐色の砂層、粘質土層を交互に積み上げ構築している。少量の中世土師器・瓦器が出土した。緩やかに南へ落ち、掘削範囲内では護岸施設は検出できなかった。

堀 北肩は、隣接する調査23に比べ比較的穏やかに立ち上がる。工事掘削深内では、底は確認できなかった。埋土からは明治初期の陶磁器類、ガラスなどが出土した。

表2 遺構概要表

時 代	調査区	遺 構
淀城以前：桃山時代～江戸時代初期	C1区 C2区	大坂街道路面、整地・地業、土坑、礎石建物、柱列、柱穴・柱礎石 大坂街道路面、東側溝、町屋整地、土坑、柱列、柱穴・柱礎石
淀城期：江戸時代前期以降	A1区 A2区 B1区 B2区 B3区 B4区 B5区 C1区 C2区 C3区	内高嶋(盛土)、外堀 内高嶋(盛土、盛土内石塁)、土坑、礎石列 南曲輪(盛土、盛土内置き石)、土坑、集石 南曲輪(盛土)、建物(布掘基礎・集石)、石垣、石列、集石、井戸、土坑 南曲輪(盛土)、北面石垣、内堀 曲輪(盛土)、西面石垣、内堀 曲輪(盛土)、溝、土坑、柱穴、中堀、東面石垣 東曲輪(盛土)、階段状石列、中堀 東曲輪(盛土)、石垣、土坑 外堀および北肩部

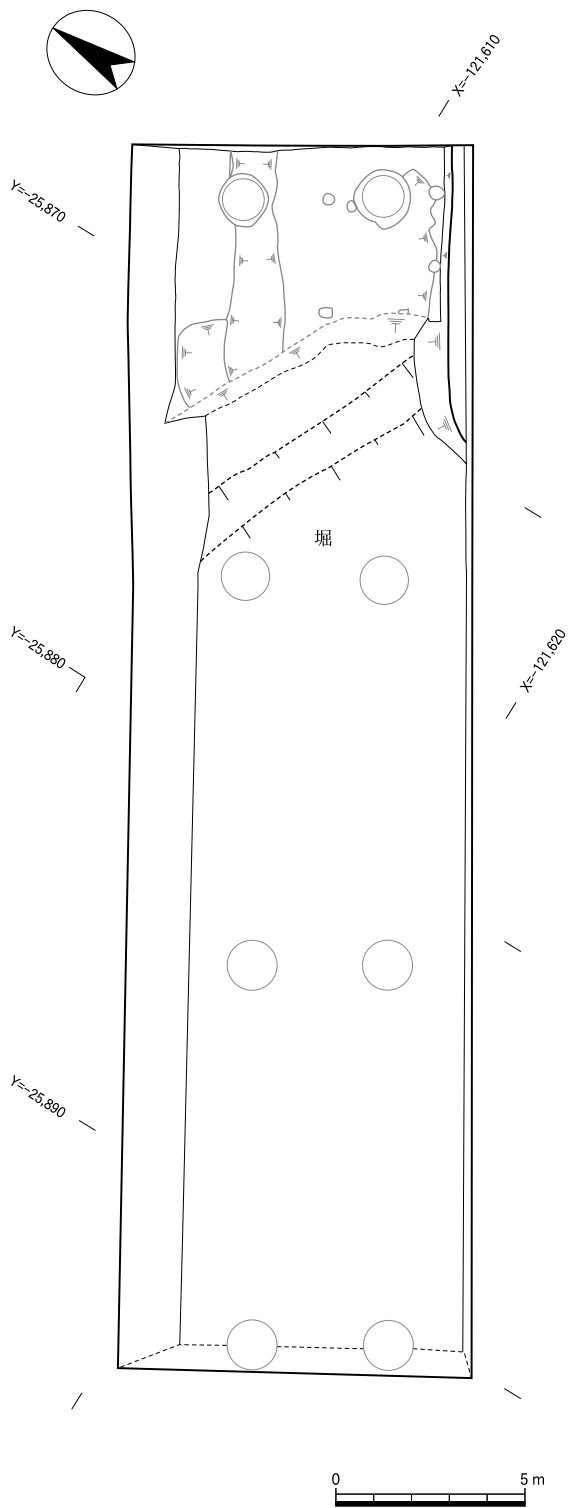


図9 A1区平面図 (1:200)

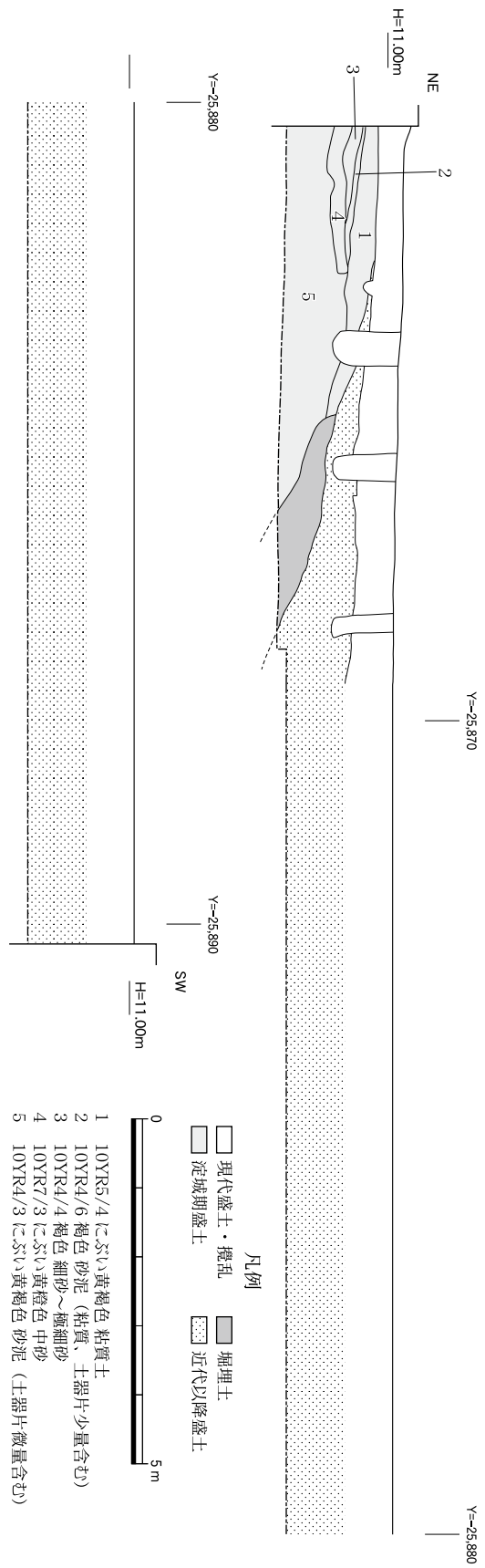


図10 A1区南東壁断面図 (1:100)

(3) A2区の調査（図11～14、図版2・12）

調査区は、淀城本丸の南にある曲輪「内高嶋」の陸地部にあたる。調査22・23においては、建物遺構に伴う礎石・集石、土坑、溝などを検出した。なお、調査22・23では、2面にわたり遺構面を検出して調査を実施しているが、本年度調査区は軌道敷き直下のためか、削平をうけて1面だけの調査となった。

調査区は南東辺が32 m、北西辺が28 m、幅が9 mの南北に細長い台形である。地表面の標高は11.6 mであり、軌道敷きに伴う現代盛土直下が淀城期の盛土層で遺構面となる。遺構面の標高は、約11.2 mである。検出した遺構には、土坑、礎石列、石罫などがある。盛土層を掘り進めた段階で、純粋に中世の土師器や瓦器を包含する層を確認したが、整地層の一部であることが判明した。また、盛土内には断面図（図12）に示したように、東西方向に堤状に盛土を行い、土留め効力を持たせる「堤状盛土」が確認できた。

土坑1 長径0.92 m、短径0.84 m、深さ0.37 mの楕円形の土坑である。埋土はオリーブ褐色砂泥層で炭化物をわずかに含む。土師器、染付、磁器が少量出土した。また鉄釘が出土している。

土坑2 長径1.20 m、短径0.96 m、深さ0.27 mを測る。埋土はオリーブ褐色砂泥層で炭を含む。土師器、染付、施釉陶器、焼締陶器、磁器、焼塩壺などが少量出土した。

土坑5 長径1.1 m以上、短径0.87 m、深さ0.38 mの楕円形の土坑である。南東部が攪乱される。土師器、染付、磁器、施釉陶器、瓦などが出土した。

礎石列10（図13） 礎石8・9よりなる。礎石8は攪乱の肩部で検出、 0.5×0.35 mの扁平な川原石を据える。掘形はない。礎石9は直径0.5 mの掘形に 0.4×0.2 mの扁平な川原石を使用する。他に並ぶ礎石または柱穴が認められないため、建物として並ぶかは不明であるが、心々で2.4 mあり、方位は座標北に対して東へ25度

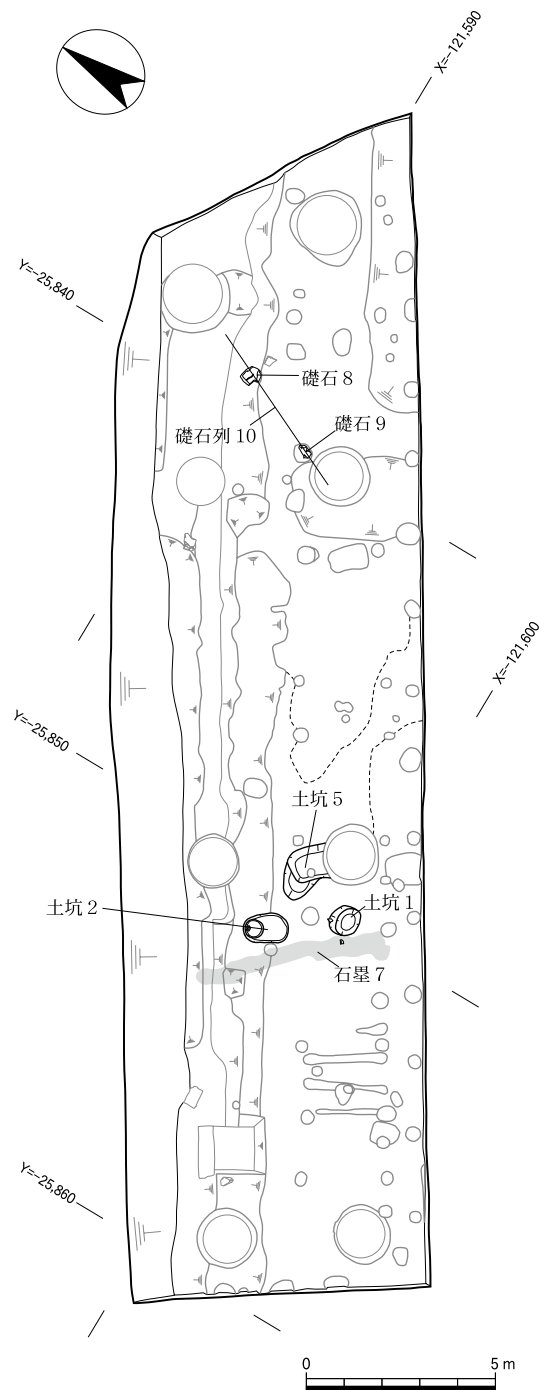
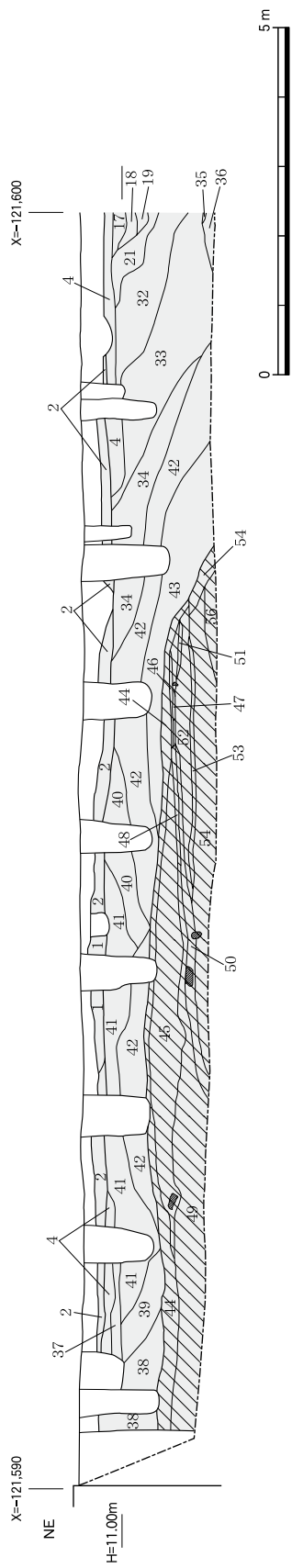


図11 A2区平面図（1：200）



- 凡例
- 現代盛土・攪乱
 - 淀城期盛土
 - ▨ 堤状盛土
- 23 2.5Y5/4 黄褐色砂質シルト (5Y7/1 灰白色粗砂混)
- 24 10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト
- 25 2.5Y5/1 黄灰色粘土+5Y7/1 灰白色粗砂
- 26 5Y6/2 灰オリーブ色微砂
- 27 5Y6/2 灰オリーブ色細砂
- 28 10YR6/6 明黄褐色粘土
- 29 5Y6/6 オリーブ色粘土
- 30 10YR4/4 褐色粘土質シルト (5Y6/6 オリーブ色粘土混)
- 31 5Y6/6 オリーブ色粘土+10YR4/4 褐色粘土質シルト
- 32 10YR4/2 灰黄褐色極細砂
- 33 5Y7/1 灰白色粗砂 (φ0.2cm礫多混)
- 34 5Y7/1 灰白色粗砂
- 35 2.5Y2/1 黒色粘質土 (炭化物層)
- 36 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細砂~細砂混
- 37 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 (炭化物少量混)
- 38 2.5Y6/3 にぶい黄色粗砂
- 39 2.5Y6/4 にぶい黄色粗砂
- 40 2.5Y6/2 灰黄色粗砂
- 41 2.5Y7/2 灰黄色粗砂
- 42 2.5Y5/3 黄褐色粗砂~中砂
- 43 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂~中砂
- 44 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥
- 45 2.5Y6/4 にぶい黄色粗砂 (粗砂と中砂が層状=ラミナ)
- 46 2.5Y6/3 にぶい黄色粗砂
- 47 2.5Y5/4 黄褐色極細砂 (炭化物をブロック状に含む)
- 48 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 (炭化物を層状に多く含む)
- 49 5Y6/2 灰オリーブ色粗砂 (φ0.3cm礫多混)
- 50 5Y5/6 明赤褐色細砂
- 51 5Y6/1 灰色細砂
- 52 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂
- 53 10YR6/2 灰黄褐色細砂
- 54 5Y4/2 灰オリーブ色極細砂 (シルト、炭化物をブロック状に含む)
- 55 10YR4/4 褐色細砂
- 1 10YR4/2 灰黄褐色粗砂 (φ1~3cm礫少量混)
- 2 10YR6/2 灰黄褐色粗砂
- 3 2.5GY4/1 暗オリーブ色砂質シルト (砂多)
- 4 2.5Y4/1 黄灰色粗砂
- 5 2.5Y7/4 浅黄色細砂
- 6 10YR5/4 にぶい黄色粘質シルト (粘性強)
- 7 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト (炭化物混)
- 8 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト (5Y6/1 灰色微砂混)
- 9 5Y6/1 灰色微砂
- 10 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト (5Y6/1 灰色微砂・5Y7/1 灰白色粗砂混)
- 11 2.5Y7/4 浅黄色粗砂 (φ2~6cm礫混)
- 12 10YR4/6 褐色砂質シルト (炭化物混)
- 13 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト
- 14 10YR3/3 暗褐色砂質シルト (砂質強)
- 15 5Y6/2 灰オリーブ色微砂 (5Y5/1 灰色シルトブロック混)
- 16 5Y7/1 灰白色粗砂 (φ0.2cm礫多混)
- 17 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土 (炭化物少量混)
- 18 2.5Y6/2 灰黄色砂混 (炭化物少量混、鉄分沈殿)
- 19 5Y6/1 灰色粘質土 (炭化物多混)
- 20 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質シルト+5Y7/3 浅黄色微砂
- 21 5Y6/3 オリーブ黄色極細砂 (炭化物少量混、鉄分沈殿)
- 22 5Y7/1 灰白色粗砂

図 12 A2区南東壁断面図 (1:100)

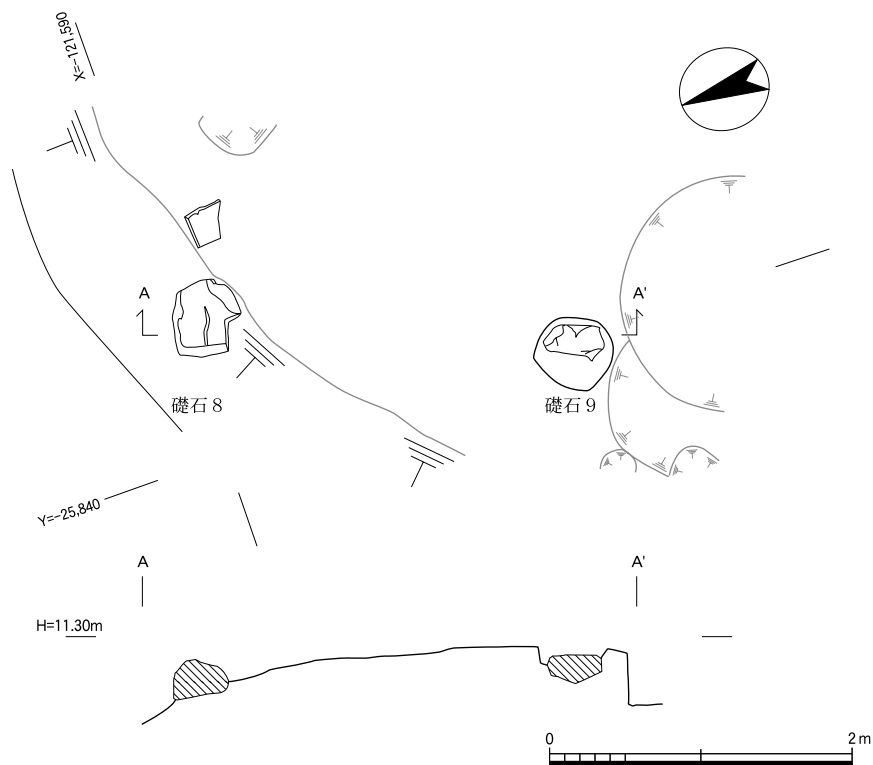


图 13 A 2 区礎石列 10 实测图 (1 : 50)

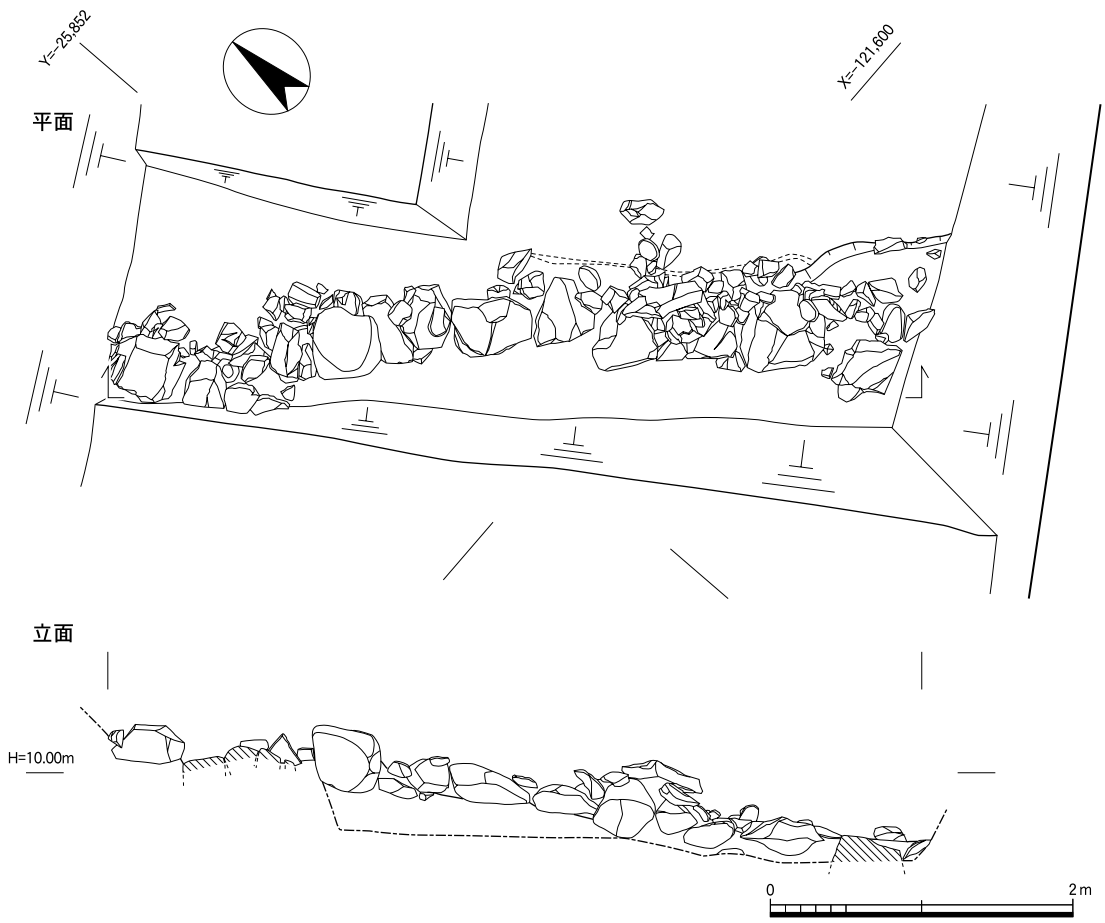


图 14 A 2 区下層石墨 7 实测图 (1 : 50)

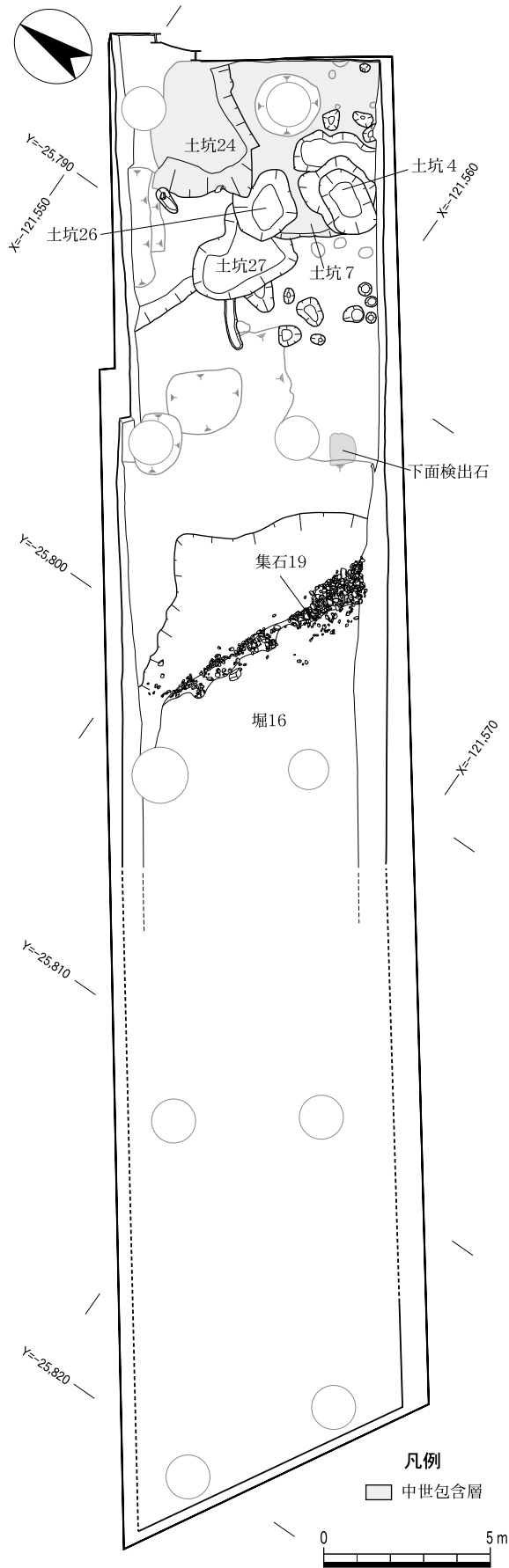


図15 B1区平面図 (1:200)

振れている。

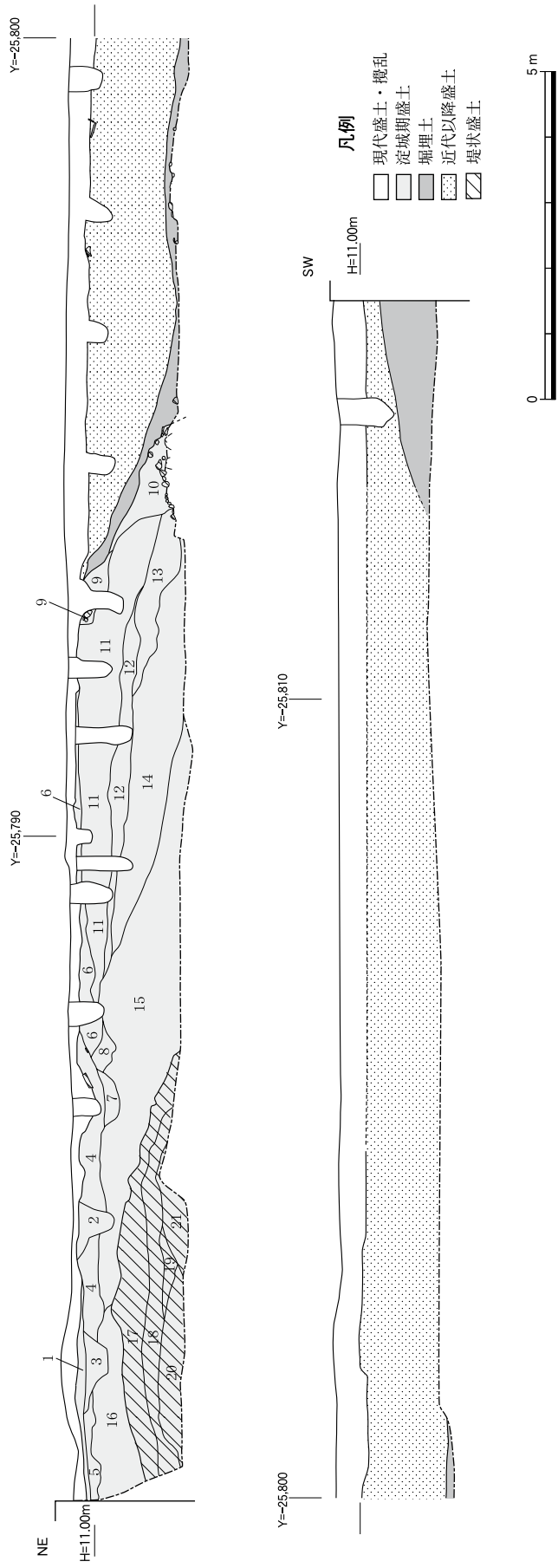
石罫7 上述した各遺構が成立する淀城期の盛土層を断ち割ったところ、調査区の西寄りで検出した南西に面を持つ、北西—南東方向の石罫を検出した。座標北に対しおよそ40度西に振れる。北西側で盛土層上面から1.1m(標高約10.3m)、南東側で盛土層上面から1.7m(標高約9.5m)の深さで検出した。A1区の外堀肩部からは約15m北東に位置する。拳大から一辺約0.7mの石を乱雑に積み上げる。南東側は1段、石罫の下面は北西側に深く数段積み上げているが、工事掘削深より深く確認できなかった。先述の堤状盛土の南前端に築かれており、内高嶋の造成土を流失させないようにした土留めのための施設とみられる。

(4) B1区の調査 (図15～17、
図版3・13)

本丸の南側の曲輪と内高嶋とにある中堀の北側に位置する。また、B1区の北東部には内高嶋から曲輪にいたる枇杷木御門が推定される。既往の調査では、礎石、土坑、杭列、中堀の北肩部などを検出している。

調査区は南東辺が40m、北西辺が45m、幅9mの南北に細長い台形である。調査前の地表面の標高は11.4m前後で、京阪電鉄軌道敷き直下に淀城期盛土層が検出され遺構面となる。遺構面の標高は、11.2mである。検出した遺構には、土坑、集石、堀などがある。また、A2区同様に淀城期盛土層の中に中世の遺物を包含する層を確認しており、土留めのための「堤状盛土」も顕著に確認した。

土坑4 長径2.8m以上、短径1.2m以上、深さ約0.3mの不定形な楕円形土坑である。



- | | | | |
|----|--|----|---|
| 1 | 10YR3/4 暗褐色 砂泥 | 12 | 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂泥 (細砂混、10YR6/2 灰黄褐色 粘質土ブロック含む) |
| 2 | 10YR4/2 灰黄褐色 砂泥 (瓦とφ10cmの礫を含む、炭化物少量混) | 13 | 10YR5/2 灰黄褐色 粘質土 (細砂混、10YR4/2 灰黄褐色 粘質土ブロック含む) |
| 3 | 10YR4/4 褐色 砂泥 [土坑 3] | 14 | 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂 (2.5Y6/3 にぶい黄色 粘土ブロックまばらに含む) |
| 4 | 2.5Y5/4 黄褐色 砂泥 (炭化物微量混) [土坑 4] | 15 | 10YR4/4 褐色 細砂 (2.5Y5/2 暗灰黄色 粘土ブロックまばらに含む) |
| 5 | 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂泥 (炭化物少量混) | 16 | 10YR5/3 にぶい黄褐色 極細砂 (2.5Y6/3 にぶい黄色 粘土ブロックまばらに含む) |
| 6 | 10YR4/4 褐色 粘質土 (細砂混) | 17 | 2.5Y5/3 黄褐色 細砂 |
| 7 | 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥 (少し粘質、炭化物微量混) | 18 | 2.5Y4/4 オリーブ黄色 細砂 (少し粘質、鉄分沈着) |
| 8 | 10YR3/2 黒褐色 砂泥 (炭化物少量混) | 19 | 10YR4/2 灰黄褐色 粘質土 (細砂混) |
| 9 | 10YR4/4 褐色 砂泥 (粘質、φ6~14cm礫含む) | 20 | 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘質シルト (炭化物少量混) |
| 10 | 7.5GY4/1 暗緑灰色 粘質土 (極細砂混、鉄分沈着) | 21 | 2.5Y4/1 黄灰色 粘質土 (細砂混、鉄分沈着) |
| 11 | 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂泥 (10YR5/3 にぶい黄褐色 粘土ブロック混) | | |

図 16 B1区南東壁断面図 (1 : 100)

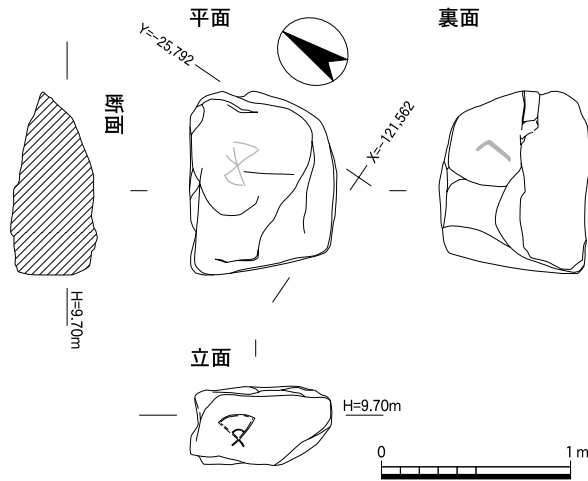


図 17 B 1 区下面検出石実測図 (1 : 40)

南側は、攪乱に壊される。埋土は、炭化物混じりの黄褐色砂泥層である。出土遺物には土師器、施釉陶器、軒丸瓦などがある。

土坑 7 土坑 4・24・26・27 などと重複しており、平面形・規模は不明、深さ 0.03 m の浅い土坑である。埋土は褐色砂泥層で、完形の土師器皿がまとまって出土した。また、鉄釘も出土した。

土坑 24 北西側は、コンクリート基礎杭により攪乱され、北は調査区外に延びる。東西・南北ともに 3 m を超える大型の土坑である

る。深さは約 0.32 m である。埋土は暗灰黄色砂泥層、出土遺物には土師器、染付、磁器、施釉陶器、焼締陶器、瓦、木製品などがある。

土坑 26 一辺約 1.8 m の方形、深さ 0.35 m の土坑である。埋土はにぶい黄褐色砂泥層、出土遺物には土師器、染付、施釉陶器、瓦、軒丸瓦、軒平瓦などがある。

土坑 27 北東側は土坑 26 に切られる。最大幅約 3.1 m の不定形な土坑である。埋土は褐色砂泥層で、出土遺物には土師器、施釉陶器、染付、磁器、瓦、軒平瓦などがある。また、中世の瓦器、用途不明の金属製品も出土している。

堀 16 中堀の北肩部を検出した。石垣は上部の石材が既に取り去られ残存しないが、裏込めとみられる集石を確認した (集石 19)。堀の埋土からは明治初期の陶磁器類などが出土する。堀底部は確認していないが、調査区南西端の断面観察で西から東に下がる堀埋土の堆積が観察されることから、南側の肩部は近いものと思われる。調査 12 では、調査区の南東に接する箇所 (調査 12 - 3) で北面する石垣を検出しており、中堀の南辺石垣と考えられている。

集石 19 調査 22 の石垣 7B、調査 23 の集石 5 の西延長線上で検出した。拳大から 0.4 m までの円礫や角礫を充填する。石材を失った南面する石垣の裏込めとみられる。

その他 他の調査区同様に淀城期の盛土層を工事掘削深まで掘り下げた。調査区北端から約 11 m の地点で地表下約 2.4 m、標高約 9.5 m 地点に据えられた、長軸 0.95 m、短軸 0.77 m、厚さ 0.44 m の扁平な石を検出した (図 17)。平坦面を上にして、ほぼ北東—南西を向く。上面の平坦な面に墨書による「☉」、南西側面には線刻による「凶」(扇に日の丸、図 71 - 379)、裏面に朱書きによる「へ」字状記号を確認した。この石材を据えるための掘形や根固めなどは確認できず、盛土層の中に据わった状態で検出した。

(5) B 2 区の調査 (図 18 ~ 22、図版 4・13)

本丸の南、内堀を隔てた南曲輪にあたる。既往の調査においても布掘基礎を有する建物を検出している。本調査では A 2 区同様に軌道敷きに伴う削平を受けているが、1 面で 2 時期にわけて

調査を行った。調査区は長辺 33m、短辺 8.5m の長方形である。調査前の地表面の標高は 11.3 ～ 11.5m で、厚さ 0.2 ～ 0.4m の現代盛土を除去した標高 10.0m 前後が遺構面となる。遺構面の標高は、11.2 m である。検出した遺構には、建物、石垣、集石、堀、井戸などがある。

1) I 期の遺構

建物 18 (図 20、図版 4) 布掘基礎 2・3・9、集石 16、石垣 4 からなる建物である。調査 22・23 で検出した建物の北部分にあたる。建物は、南北約 24 m、東西約 8 m の規模をもつ事が明らかとなった。方位は座標北で東に約 11 度振れる。

布掘基礎 2 は幅約 1.2 m、深さ約 0.5 m、南北方向に約 6 m にわたり検出した。拳大から 0.2 m の礫を密集して充填し基礎とする。調査 22 の布掘基礎 4、調査 23 の集石 5 の北側延長部分にあたる。布掘基礎 3 は幅 0.7 ～ 1.1 m、深さ約 0.5 m、南北方向に約 3.2 m にわたり検出した。拳大から 0.25 m の礫を密集して充填し基礎とする。調査 22 の布基礎 5、調査 23 の集石 15 の北側延長部分にあたる。布掘基礎 9 は幅 0.95 m、深さ 0.55 m、東西方向に約 3.6 m にわたり検出した。拳大から 0.2 m の礫を密集して充填し基礎とする。調査 23 の集石 13 に続く。建物の中を南北に 3 分割した北側の筋にあたる。集石 16 は西側が攪乱で削平されるが、直径約 1.4 m、深さ 0.3 m 円形の掘形に拳大の小礫を密集して充填する。礎石の根固めと考えられ、調査 23 の集石 6 に対応するとみられる。集石 16 は建物北側三分の一(8 m 四方)の中央に位置する。

石垣 4 (図 21) 調査区北東部で検出した東西方向の北面する石垣である。約 10 m 分を検出した。石垣は 3 段で、下段には一辺 0.3 ～ 0.5 m の自然石を並べる。その上の段は、0.4 ～ 0.9 m の大きめな自然石を積んでいる。裏込めは拳大から 0.3 m の小礫で埋めている。淀城期盛土

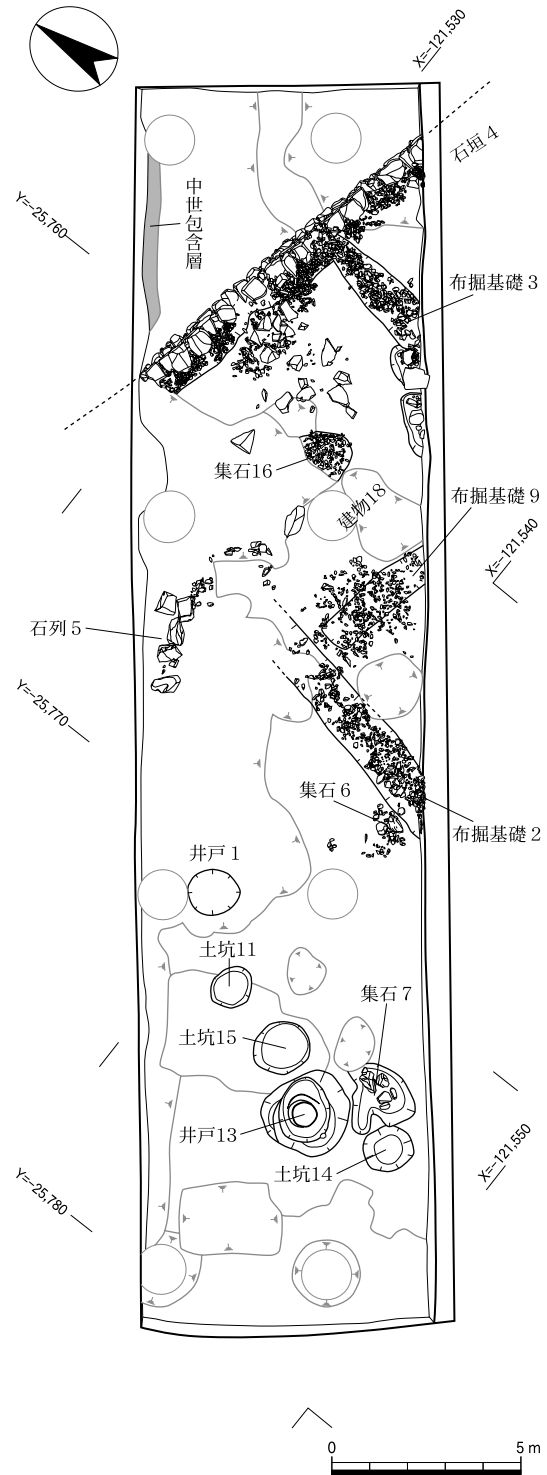


図 18 B 2 区平面図 (1 : 200)

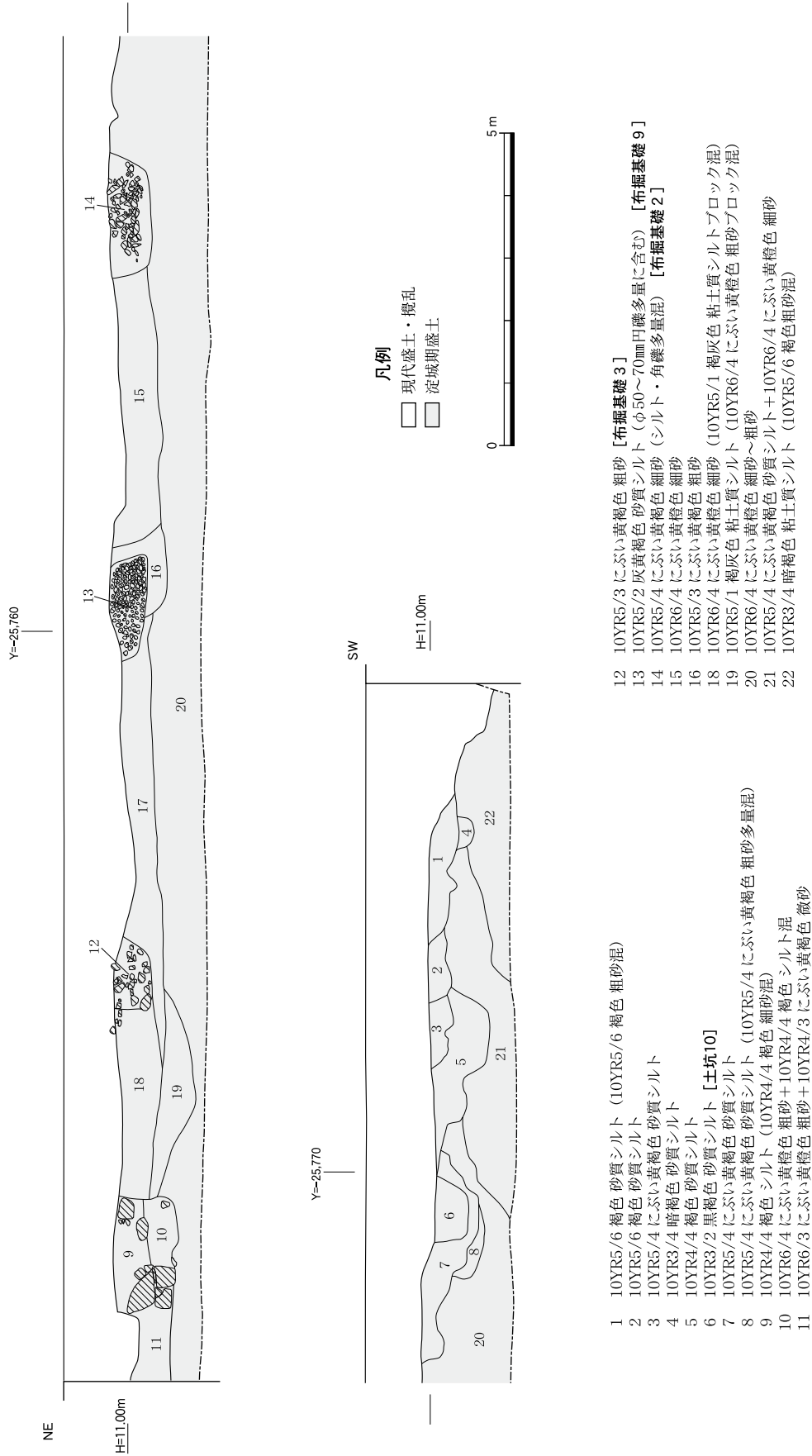


図 19 B2区南東壁断面図 (1:100)

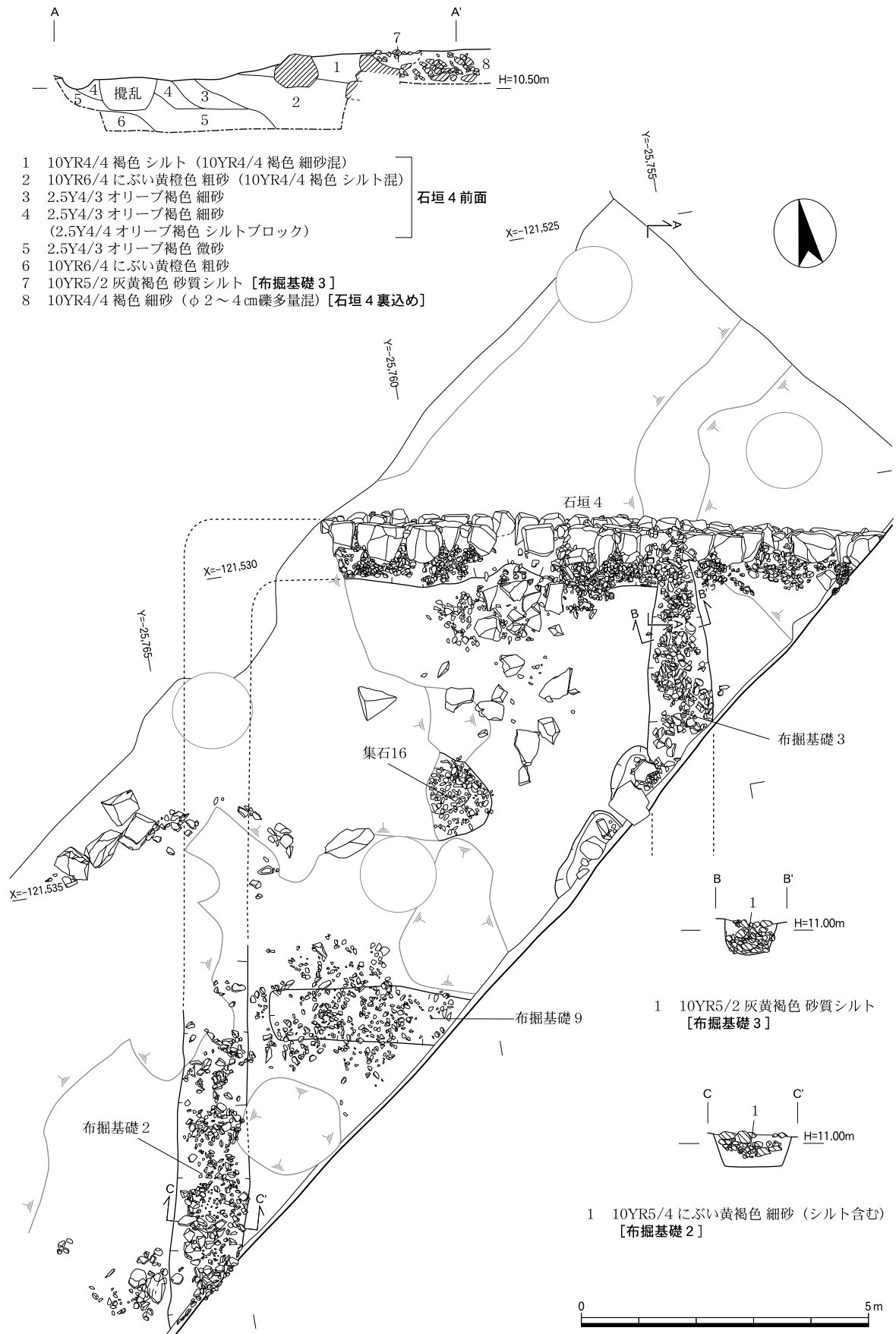


図 20 B 2 区建物 18 実測図 (1 : 100)



图 21 B2区石垣4实测图 (1:50)

層中のにぶい黄橙色細砂面に成立し、石垣の面をなして一段低くなる北側（前面）も盛土層であるにぶい黄橙色粗砂・黄褐色微砂層で埋められている。布掘基礎3は石垣4を超えて北に伸びないこと、建物18の規模などから、石垣4は建物18の北辺の基礎に代わる基礎として利用され、石垣の上段に建物18の北側の筋がのると思われる。石垣4の東延長は、調査22で検出した石列6に直交する。

石列5 調査区の中央部北西側中央の盛土層上面で検出した、5石の石材である。0.4～0.6 m、0.45～0.8 mほどの切石と自然石であった。石垣としては面を揃えておらず、軌道敷き敷設の際に石垣4または他の箇所から移動されたものと思われる。

集石6 布掘基礎2の南西側で検出した。1.0～1.3 mの範囲に0.3～0.5 mの2石を中心に、拳大の小石が不定形に集積される。掘形は検出できず、遺構の性格も不明である。出土遺物には土師器、施釉陶器、染付、瓦、土師質土器と用途不明の銅製品などがある。

集石7 長径1.7 m、短径1.5 mの不定形で、深さ0.06～0.1 mと浅い土坑である。0.4～0.7 mの自然石が集積される。出土遺物には、施釉陶器、染付、瓦などがある。

井戸1 布掘基礎2の南西5 mで検出した。直径1.2～1.4 mのほぼ円形を呈する。埋土は黒褐色砂質シルト層である。井筒などは確認していない。出土遺物には土師器、施釉陶器、焼締陶器、染付、磁器、瓦と銅製キセル雁首、鉄釘とみられる金属製品などがある。

2) II期の遺構

石垣4前面 石垣4の前面の堆積土は、粘土層ではなく淀城期の盛土層で埋められている。他の堀の埋土と異なり、空堀あるいは1段低い空閑地とみられる。全体的に盛土層からの出土遺物は少ないが、石垣4前面とした層中からは比較的多くの遺物が出土している。土師器、施釉陶器、焼締陶器、瓦、軒丸瓦とともに、中世の土師器、瓦器などが出土している。

井戸13 (図22) 直径2.2 mの円形掘形の井戸である。検出面から約1.25 mで円形縦板組の井戸枠を検出した。枠は0.6 mある。標高9.4 mまで掘り下げたが、井戸底は確認していない。埋土は、上層に黒褐色砂質シルト層（炭化物混）、枠内に黄橙色粗砂層（黒褐色シルトブロック・

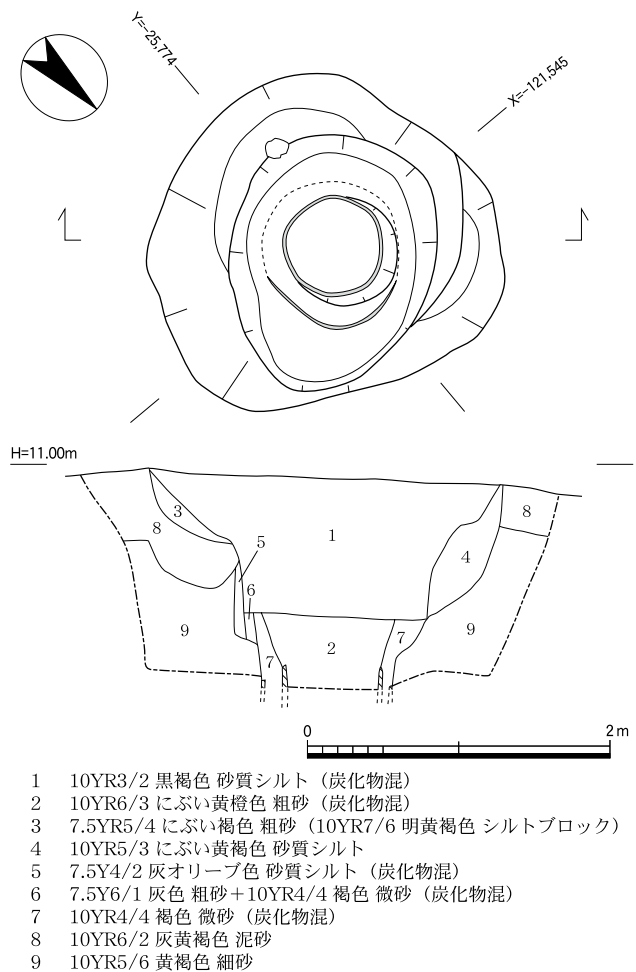


図22 B2区井戸13実測図(1:50)

炭化物混)が堆積する。出土遺物には土師器、施釉陶器、焼締陶器、染付、瓦、軒丸瓦、軒平瓦と混入品である中世の土師器、瓦器、滑石製鍋片などがある。

土坑 11 直径約 1.1 m の円形、深さ約 1.0 m の土坑である。埋土は暗褐色砂質シルト層の単層で少量の炭化物が混入している。出土遺物には土師器、施釉陶器、焼締陶器、染付、磁器、キセル雁首などの金属製品がある。

土坑 14 直径 1.2 m のほぼ円形、深さ 0.12 ～ 0.16 m の土坑である。埋土は暗褐色シルト層で多量の焼土、炭化物を含む。出土遺物には土師器、施釉陶器、染付、瓦、軒丸瓦、軒平瓦などがある。

土坑 15 直径 1.35 ～ 1.55 m のほぼ円形、深さは約 1.0 m の土坑である。埋土は暗褐色砂質シルト層である。出土遺物には土師器、施釉陶器、焼締陶器、染付、磁器、瓦と鉄釘などがある。

(6) B3区の調査 (図 23 ～ 25、 図版 5・14)

調査区は、本丸の南に位置し、内堀と B2区に続く南曲輪にあたる。調査 22・23 の成果から、調査区の大半が内堀にあっており、南西端で北面する石垣が検出されると想定された。堀は京阪電車敷設直前に埋められていることから、本年度の調査では石垣部のみを対象とした。

調査区は長辺 33m、短辺 8m の長方形である。調査前の地表面の標高は 11.3m 前後、現代盛土を除去した標高 10.7m 前後で淀城期の遺構面となる。

石垣 石垣は遺構検出面から約 0.8 m 堀を下げた段階で検出した。上下 1 ～ 3 段で東西に約 9m を検出した。石垣の石材は、小さい石で 0.3 × 0.5 m、奥行き約 0.5 m、大きい石で 0.6 × 0.9 m、奥行き 0.8 m の大きさの自然石で加工していない。裏込めには、0.05 ～ 0.25 m までの様々な大きさの礫を入れている。角礫が多い。

堀 石垣に面した箇所は、灰色泥砂と褐色粗砂層の混土で小礫を含む層があり、明治期に石垣上段を撤去する際に落ち込んだ裏込め土とみ

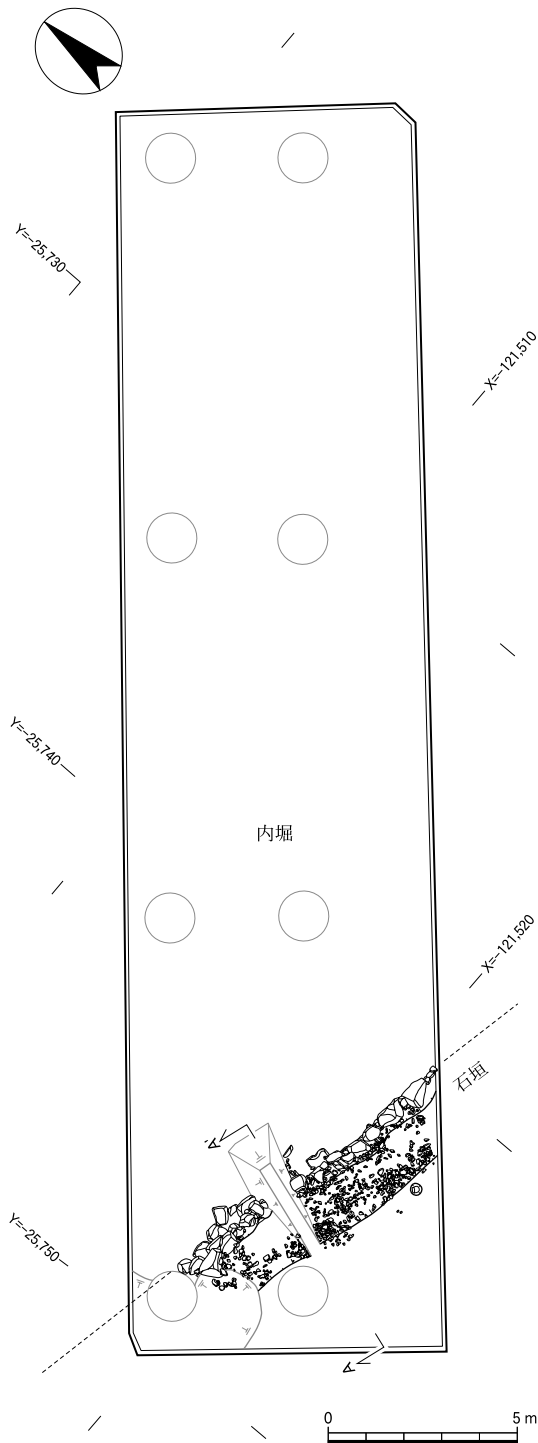


図 23 B3区平面図 (1:200)

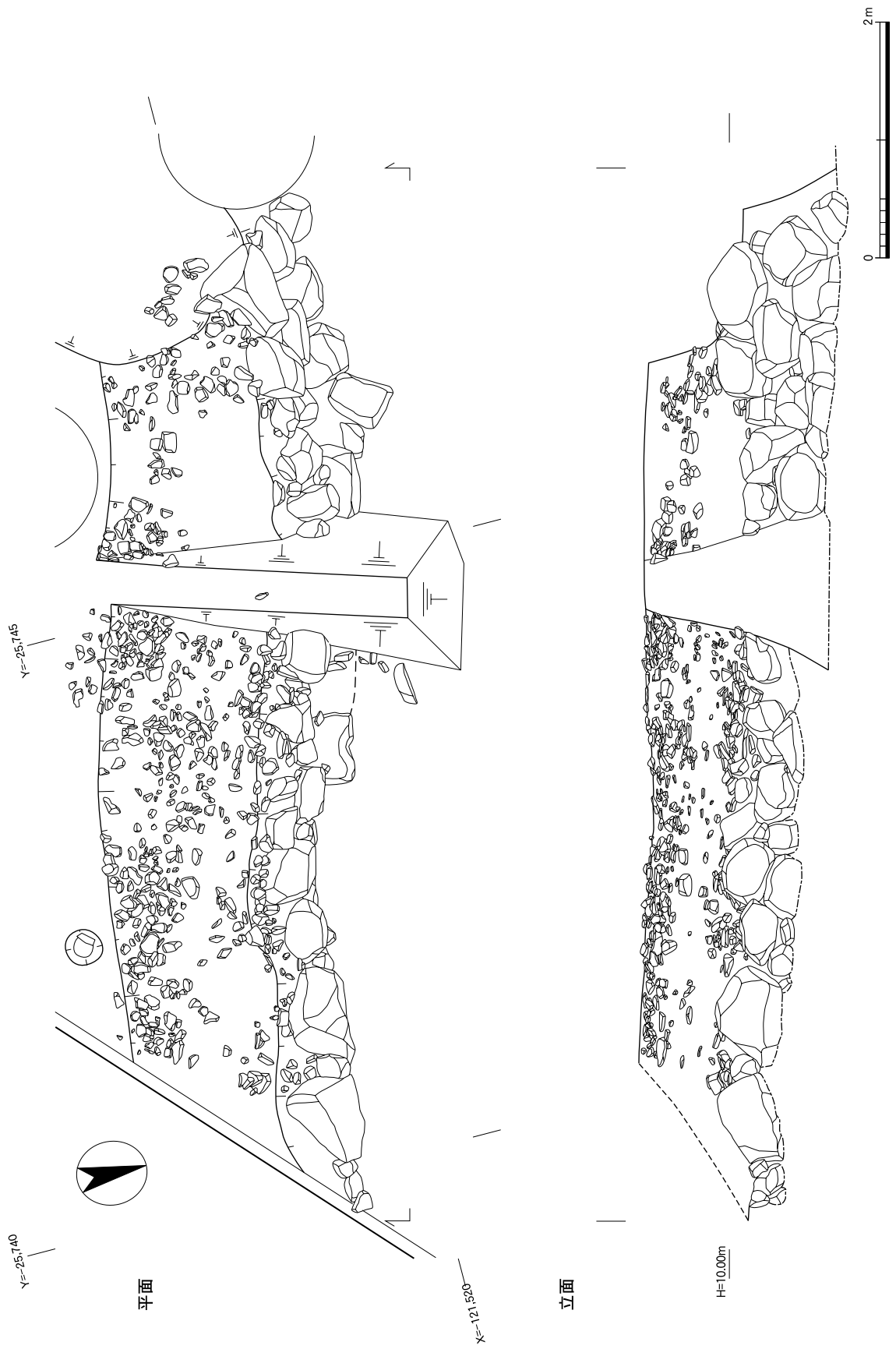


图 24 B 3 区石垣实测图 (1 : 50)

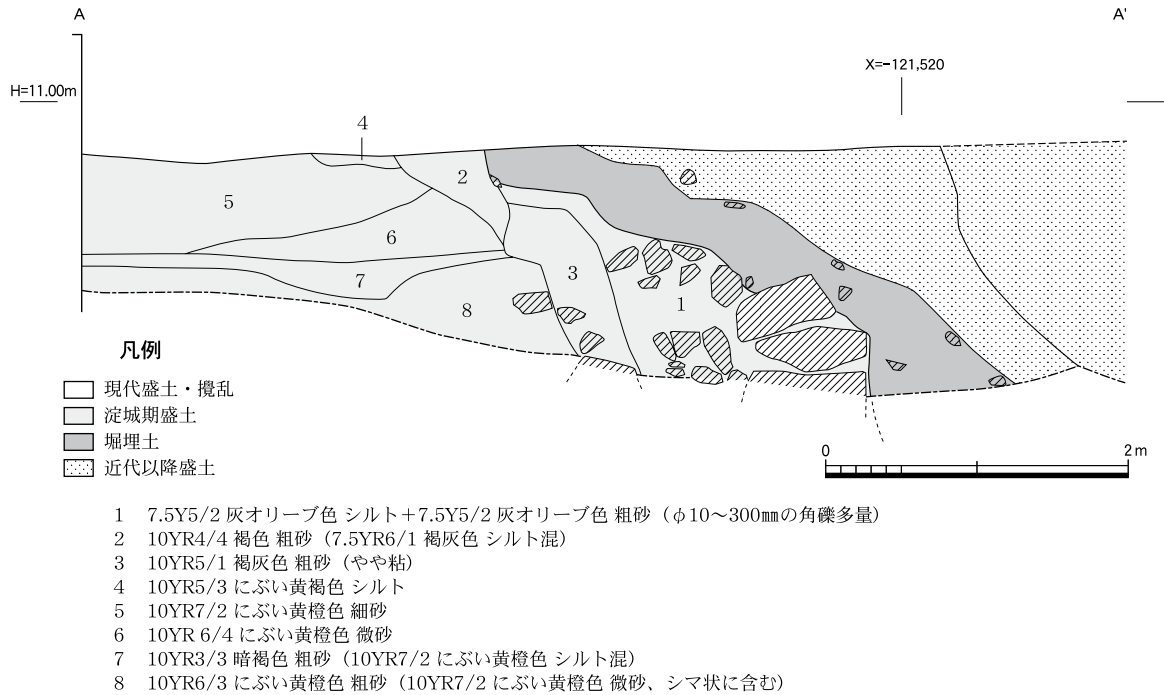


図 25 B 3 区石垣・盛土断剖面図 (1 : 50)

られる。他は灰色シルト層が全面に堆積し、ガラスなどを含む遺物が出土した。

(7) B 4 区の調査 (図 26 ~ 29、図版 6・15)

淀城期本丸・天守台の東側の内堀および、内堀と中堀に挟まれた曲輪の西半部にあたる。調査区は長辺 33m、短辺 8 m の長方形である。調査前の地表面の標高は 11.5m 前後で、現代盛土層を含む地表下 0.5 m まで工事による地中梁設置のため先行して重機掘削を行い、以下 (標高 11.0m 以下) を調査対象とした。この面で、おおよそ調査区の北東端から南東辺で 15m、北西辺で 11m を結ぶラインより西へ落ちる内堀の埋土を検出、約 1 m 掘り下げたところで 2 m 前面に内堀に西面する石垣を検出した。工事掘削深内では、石垣・堀および陸部はともに底あるいは地山に達しなかった。

陸部 曲輪にあたる陸部では土坑・柱穴など数基を検出したが、上面が削平を受けて、遺構の残存状況は良くなかった。陸部は砂層を中心に順次積み上げて、東から西へ平坦面を広げて、前面に石垣を構築している。

石垣 1 (図 28・29、図版 15 - 2) 内堀に西面する曲輪西辺の石垣である。検出した長さは 7.7m、最大 2 段 (高さ 0.5m)、方位はほぼ座標南北に沿っているが座標北に対して約 4 度東に振れている。石材はほとんどが花崗岩で、矢穴が確認できるものが数点あるものの、大半のものは加工痕が認められず、長径 1.0m 前後の大型の自然石を野面乱石積みする。石垣の上部の 4 ~ 5 段分の石材は解体・撤去され、その際に背後の裏込めが露出した状態で放置され、その後も機能したと思われる堀の堆積土が被覆する。裏込めには長径 0.2 ~ 0.3m の垂角礫を使用している。石垣の後ろの曲輪陸部は砂層を主体とした積土で、東から西へ順に積み上げられ、その前面に石垣が施されて

いる。

堀 2 内堀にあたり、東肩部は西面する石垣に画される。掘削深内では、肩部には青灰色系のシルトが肩部の傾斜に沿って堆積し、それよりも西は砂礫などによって埋められている。いずれもガラスなど現代遺物を含んでおり、前者は石垣上部が撤去された後も堀として機能していた時期、後者は京阪本線の敷設に伴う盛土と考えられる。

(8) B 5 区の調査 (図 30 ~ 37、
図版 7・15・16)

淀城期本丸・天守台の東側、内堀と中堀に挟まれた曲輪の東半部と中堀にあたる。調査区は長辺 36m、短辺は南西で 7.5m、北東で 4 m、北東半で北西側が細くなる形態である。調査前の地表面の標高は 11.7m 前後で、現代盛土 (厚さ 0.4m) を除去した標高 11.3m 前後が淀城期の遺構面となる。検出した遺構は淀城期のみで、曲輪である陸部の上面では集水枿を伴う石製の U 字溝 (溝 17)・土坑・柱穴など、東面する東辺の石垣 2 条 (石垣 28・29)、中堀 (堀 22)、さらに中堀に直交する土橋の南面する石垣 (石垣 27) などを検出した。工事掘削深内では、石垣・堀および陸部はともに底あるいは地山に達しなかった。

陸部 (図 31・37) 本丸東側の曲輪の東部にあたる。南東壁と南西壁および中央南寄り堀 22 西肩に直交する方向で、工事掘削深まで断割

り、構築状況の確認を行った。西から東へと砂層を中心に入れながら、ある程度積んだ段階で平坦面を構築する。前面に長径 0.1m の円・亜円礫を用いて幅 1.5m 以上の石塁を築いて土留めとしており、さらにその前面に東面する石垣 29 を積み上げている。調査区の南西端では、遺構面より 1 m ほど掘り下げた箇所で、南北方向に続く帯状の集石を検出しており、A 2 区で検出したものと同様の、盛土内に構築された土留めのための石塁の一部とみている (図 32)。

溝 17 (図 33、図版 16 - 1) 陸部の東端で検出した、西端に集水枿が取り付け石製 U 字溝を

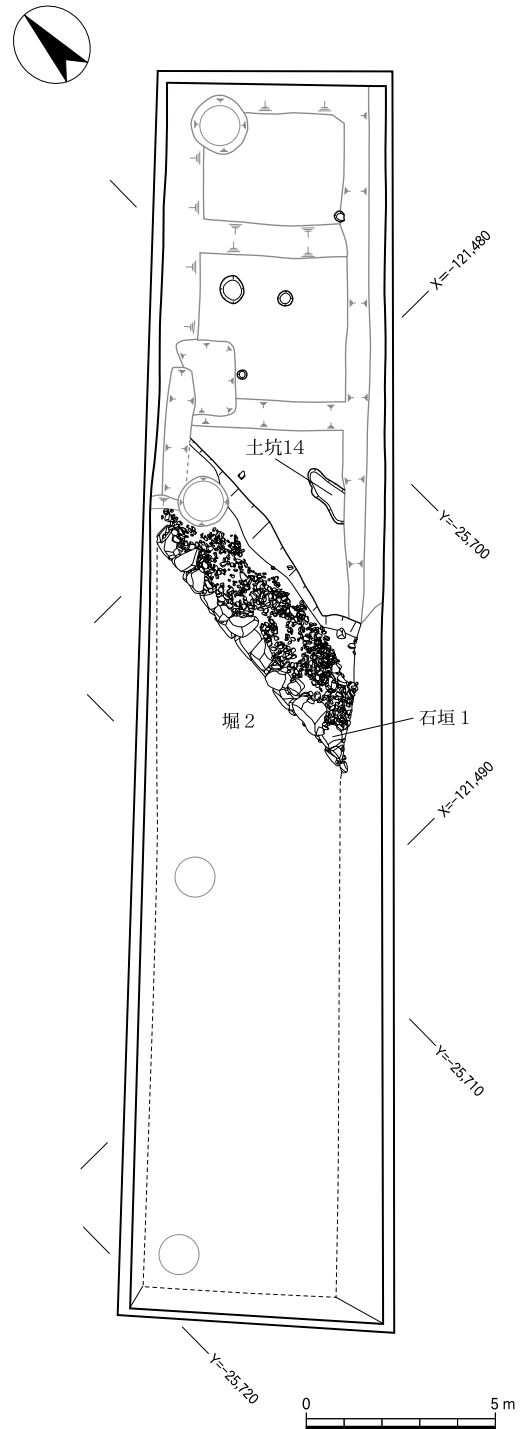
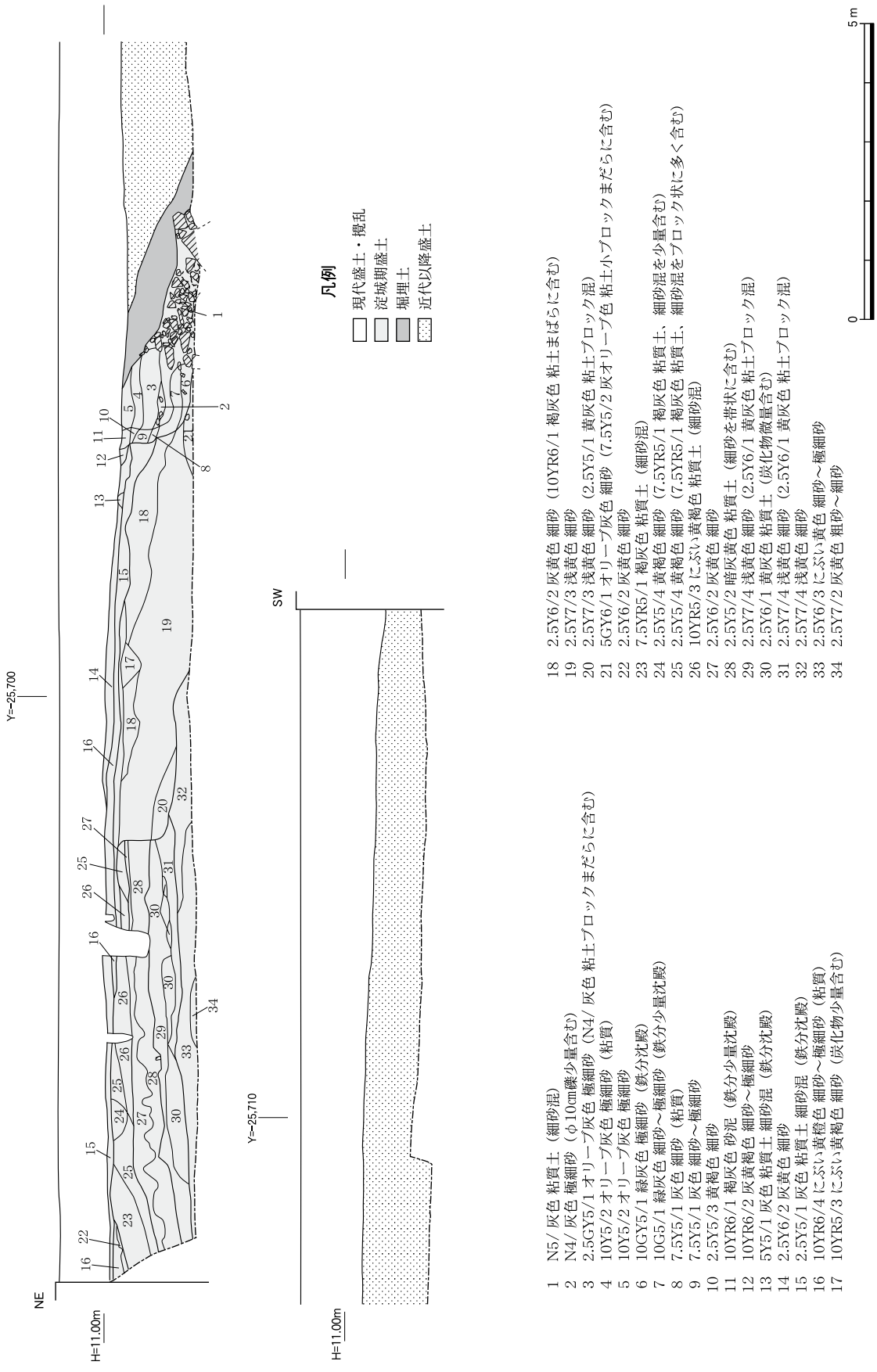


図 26 B 4 区平面図 (1 : 200)



- | | | | |
|----|---|----|--|
| 1 | N5/ 灰色 粘質土 (細砂混) | 18 | 2.5Y6/2 灰黄色 細砂 (10YR6/1 褐灰色 粘土まばらに含む) |
| 2 | N4/ 灰色 極細砂 (φ10cm 礫少量含む) | 19 | 2.5Y7/3 浅黄色 細砂 |
| 3 | 2.5GY5/1 オリーブ灰色 極細砂 (N4/ 灰色 粘土ブロックまばらに含む) | 20 | 2.5Y7/3 浅黄色 細砂 |
| 4 | 10Y5/2 オリーブ灰色 極細砂 (粘質) | 21 | 5GY6/1 オリーブ灰色 細砂 (7.5Y5/2 灰オリーブ粘土小ブロックまばらに含む) |
| 5 | 10Y5/2 オリーブ灰色 極細砂 | 22 | 2.5Y6/2 灰黄色 細砂 |
| 6 | 10GY5/1 緑灰色 極細砂 (鉄分沈殿) | 23 | 7.5YR5/1 褐灰色 粘質土 (細砂混) |
| 7 | 10G5/1 緑灰色 細砂～極細砂 (鉄分少量沈殿) | 24 | 2.5Y5/4 黄褐色 細砂 (7.5YR5/1 褐灰色 粘質土、細砂混を少量含む) |
| 8 | 7.5Y5/1 灰色 細砂 (粘質) | 25 | 2.5Y5/4 黄褐色 細砂 (7.5YR5/1 褐灰色 粘質土、細砂混をブロック状に多く含む) |
| 9 | 7.5Y5/1 灰色 細砂～極細砂 | 26 | 10YR5/3 にぶい黄褐色 粘質土 (細砂混) |
| 10 | 2.5Y5/3 黄褐色 細砂 | 27 | 2.5Y6/2 灰黄色 細砂 |
| 11 | 10YR6/1 褐灰色 砂泥 (鉄分少量沈殿) | 28 | 2.5Y5/2 暗灰黄色 粘質土 (細砂を帯状に含む) |
| 12 | 10YR6/2 灰黄褐色 細砂～極細砂 | 29 | 2.5Y7/4 浅黄色 細砂 (2.5Y6/1 黄灰色 粘土ブロック混) |
| 13 | 5Y5/1 灰色 粘質土 細砂混 (鉄分沈殿) | 30 | 2.5Y6/1 黄灰色 粘質土 (炭化物微量含む) |
| 14 | 2.5Y6/2 灰黄色 細砂 | 31 | 2.5Y7/4 浅黄色 細砂 (2.5Y6/1 黄灰色 粘土ブロック混) |
| 15 | 2.5Y5/1 灰色 粘質土 細砂混 (鉄分沈殿) | 32 | 2.5Y7/4 浅黄色 細砂 |
| 16 | 10YR6/4 にぶい黄褐色 細砂～極細砂 (粘質) | 33 | 2.5Y6/3 にぶい黄褐色 粗砂～細砂 |
| 17 | 10YR5/3 にぶい黄褐色 細砂 (炭化物少量含む) | 34 | 2.5Y7/2 灰黄色 粗砂～細砂 |

図 27 B4区南東壁断面図 (1:100)



图 28 B4区石垣1实测图 (1:50)

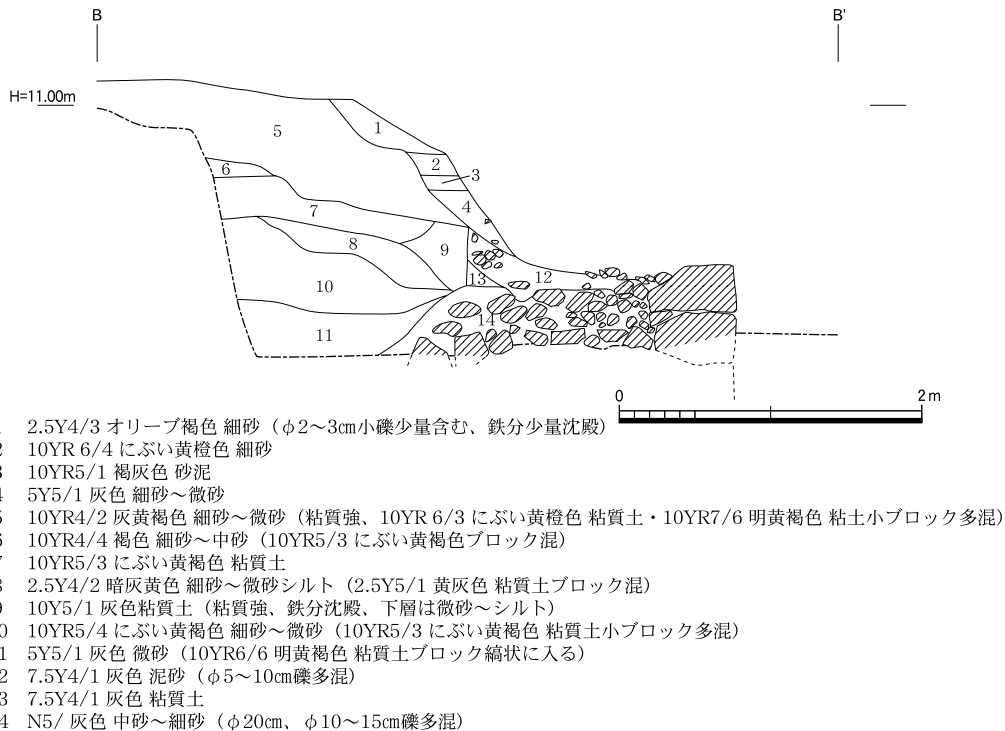


図 29 B 4 区石垣 1 断面図 (1 : 50)

用いた溝である。溝の東端は検出した堀の西肩部まで続いているが、本来は存在した石垣まで続き、堀に排水していたのだろう。

溝部分は、断面U字に刳貫いた石製のU字溝（トラフ）を3個体組み合わせている。いずれも一見コンクリート製にも見えるが、鑿状工具の刃痕が鮮明に残っており自然石を削ったものとみられる。天守台や南曲輪北辺などでも同種のU字溝が出土している¹⁾。後世の攪乱などによって削り取られたり、細かく割れたりしている。それぞれ外法で、aは長さ1.12m・幅0.4m・高さ0.21m、bは長さ0.31m・幅0.34m・高さ0.22m、cは長さ0.97m・幅0.39m・高さ0.23m、いずれも厚さは0.07~0.05mである。

柵部分は溝部分の西に取り付く、内法が東西0.5m、南北0.45mの方形、深さは0.4mである。底部の周縁には、先を上に向け錆びた鉄釘が0.05~0.1m間隔で直線的に立ち並んだ状態で検出したことから、底板を持つ木製の木枠が据えられたとみられる。この上の溝部分が取り付く東を除く三方に、長径0.3~0.5mの角礫をほぼ垂直に2~3石積上げ壁面を形成している。

中堀に面しては築地が南北に作られていたと考えられ、検出した位置から築地の内側の集水柵から築地の下を潜らせて、堀に排水をした暗渠であった可能性が高いと思われる。

堀 22 中堀にあたる。当初、遺構検出面では調査区の南端から東辺で11m、西辺で21mを結ぶラインで北へ落ちる南肩部を検出した。掘り下げた結果、北面する石垣（石垣 29）を約2m掘り下げた段階で約3m前面（北）に検出した。調査範囲内の他の堀と同様、明治期の石材抜き取り時に多くの石材が抜き取られ、その後も堀としては機能していたが、明治末年には埋め立てられる。一方、北東端で検出した石垣 27 は中堀に設けられた陸橋部の南辺の石垣であり、明治期の

石材抜き取りは受けていない。

石垣 27 (図 34、図版 15 - 4) 調査区の北東端、現代盛土を除去した標高 10.5m で検出した南面する石垣である。石垣としては最も残りが良く、最大 3 段 (高さ 1.3m)、長さ 5 m 分を検出した。長径 0.5 ~ 1.2 m の花崗岩を中心に、チャートを少量用い、野面乱石積みする。矢穴が認められるものがあり、積み上げ時に形状を調整するが、基本的には自然石を積んでいる。石垣面の方位は座標東で約 8 度北へ振り、石垣 28 と直交する。絵図などにみられる三鉄門と東曲輪を結ぶ、中堀に直交して設けられた陸橋南辺の石垣とみられる。

石垣 28 (図 35) 調査区の北西部で、堀の現代埋め土を除去した標高 9.6 ~ 9.8 m で検出した東面する石垣である。石垣 27 と直交する曲輪東辺の石垣の一部である。上部の石材は明治期に抜き取られたとみられる。南北の長さは 4 石分で 3.5 m、高さは 1 石分で最大 0.4 m である。やや方位がずれるが、後述の石垣 29 からは 2.5 m 東、前面で検出しており、絵図などに鉤手に描かれる中堀に架かる陸橋の三鉄門側の取り付け部東辺の引っ張りにあたるとみている。

石垣 29 (図 36・37、図版 16 - 2・3) 堀の現代埋め土を除去し検出した東面する石垣である。上部の石材は明治期に抜き取られており、比較的大きな 1 石が残された以外は、標高 9.2 ~ 9.4 m で検出した 1 石分、高さ最大 0.3 m 分が残されていた。検出長は 4.5 m、8 石分である。1 石のみ、2 段目の石 (幅 1 m・高さ 0.6 m) が残存していた。野面乱石積みとみられる。石垣面の方位は北で東に 14 度で、先の石垣 27・28 とは振れが異なる。これが構造上の差違であるのか、時期差であるのか、現状では判断できない。しかし、石垣 28 と結ぶ石垣は失われているが、絵図などの表現に従えば、本来鉤の手につながる一体の曲輪東辺石垣と考えられる。

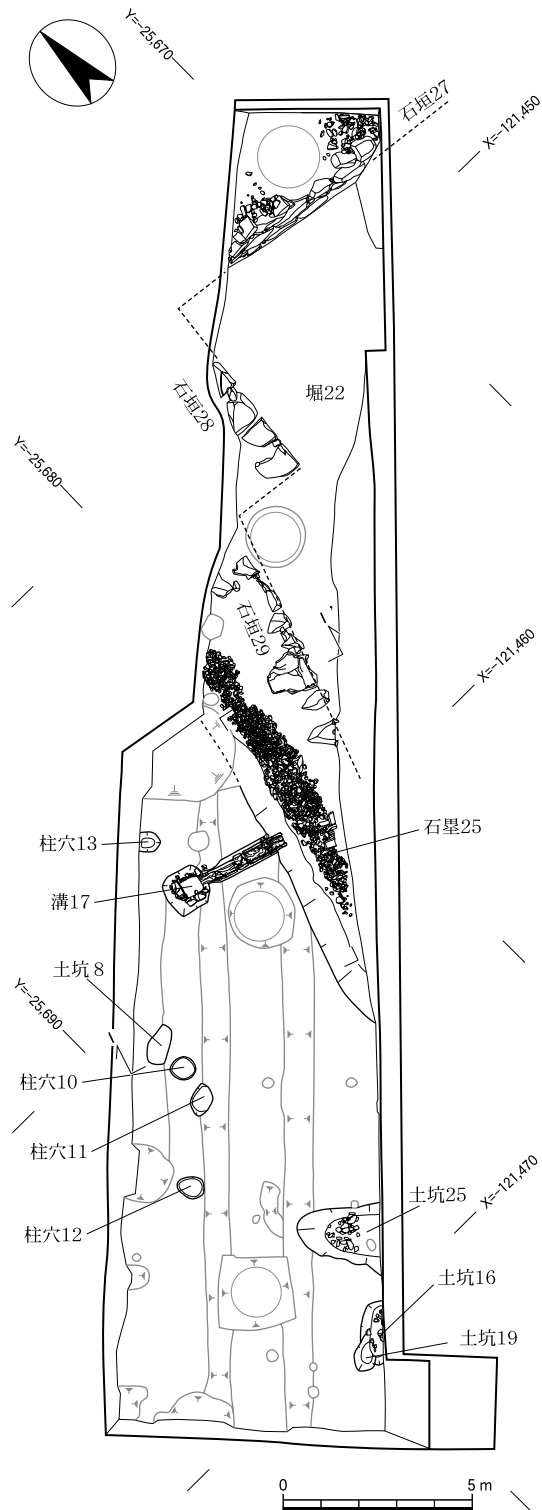


図 30 B5区平面図 (1 : 200)

石垣面の方位は北で東に 14 度で、先の石垣 27・28 とは振れが異なる。これが構造上の差違であるのか、時期差であるのか、現状では判断できない。しかし、石垣 28 と結ぶ石垣は失われているが、絵図などの表現に従えば、本来鉤の手につながる一体の曲輪東辺石垣と考えられる。

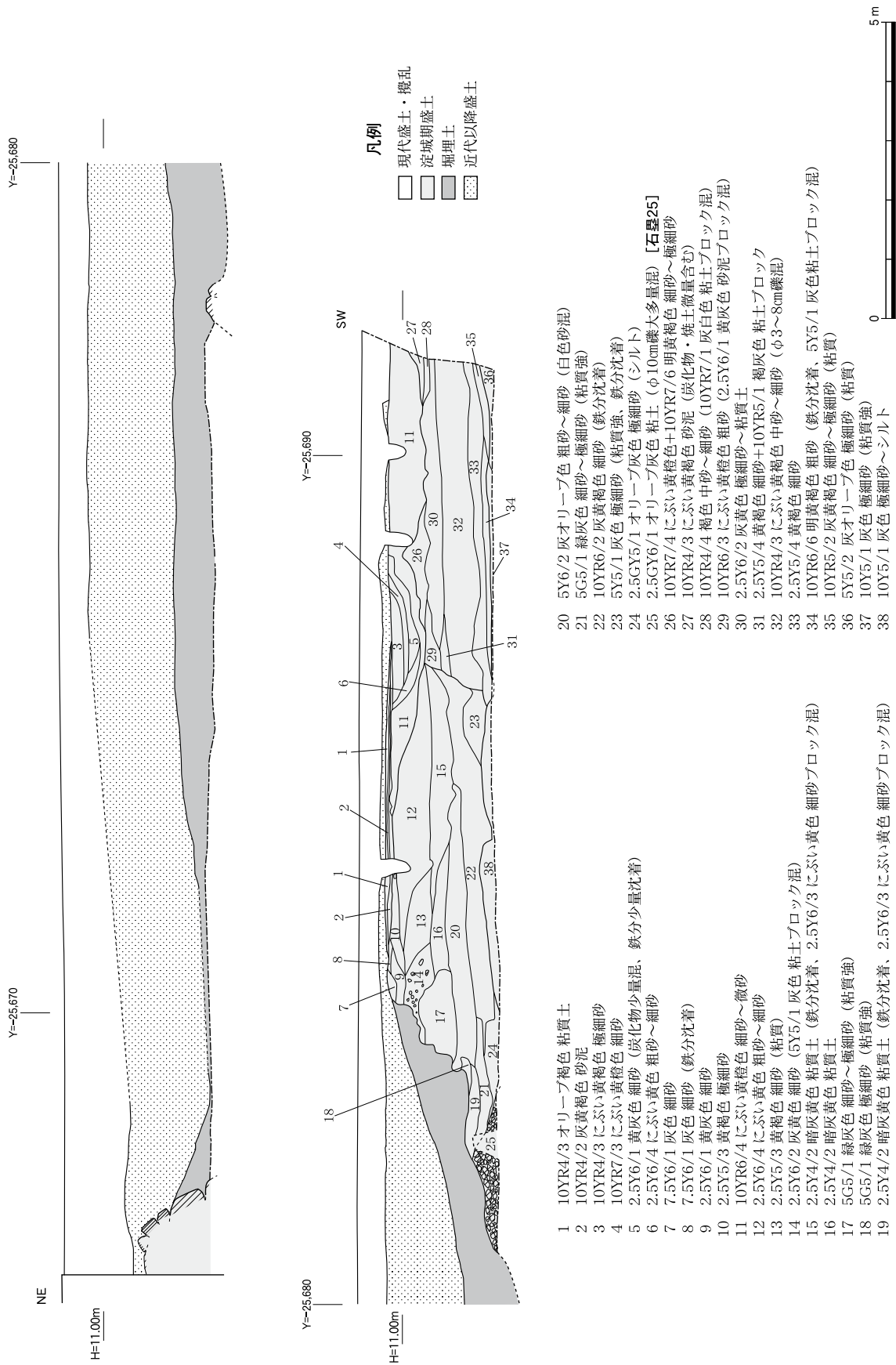


図 31 B5 区南東壁断面図 (1:100)



図 32 B 5 区陸部盛土内石畳検出状況（北東から）

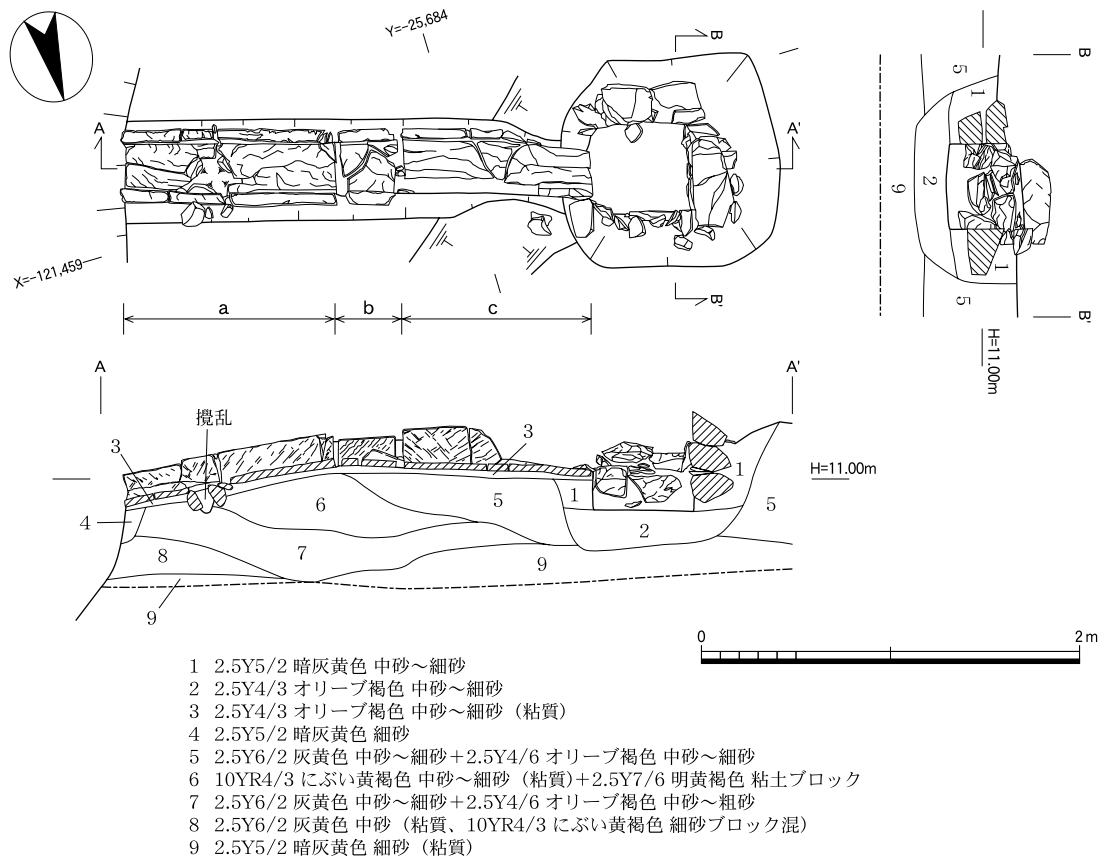
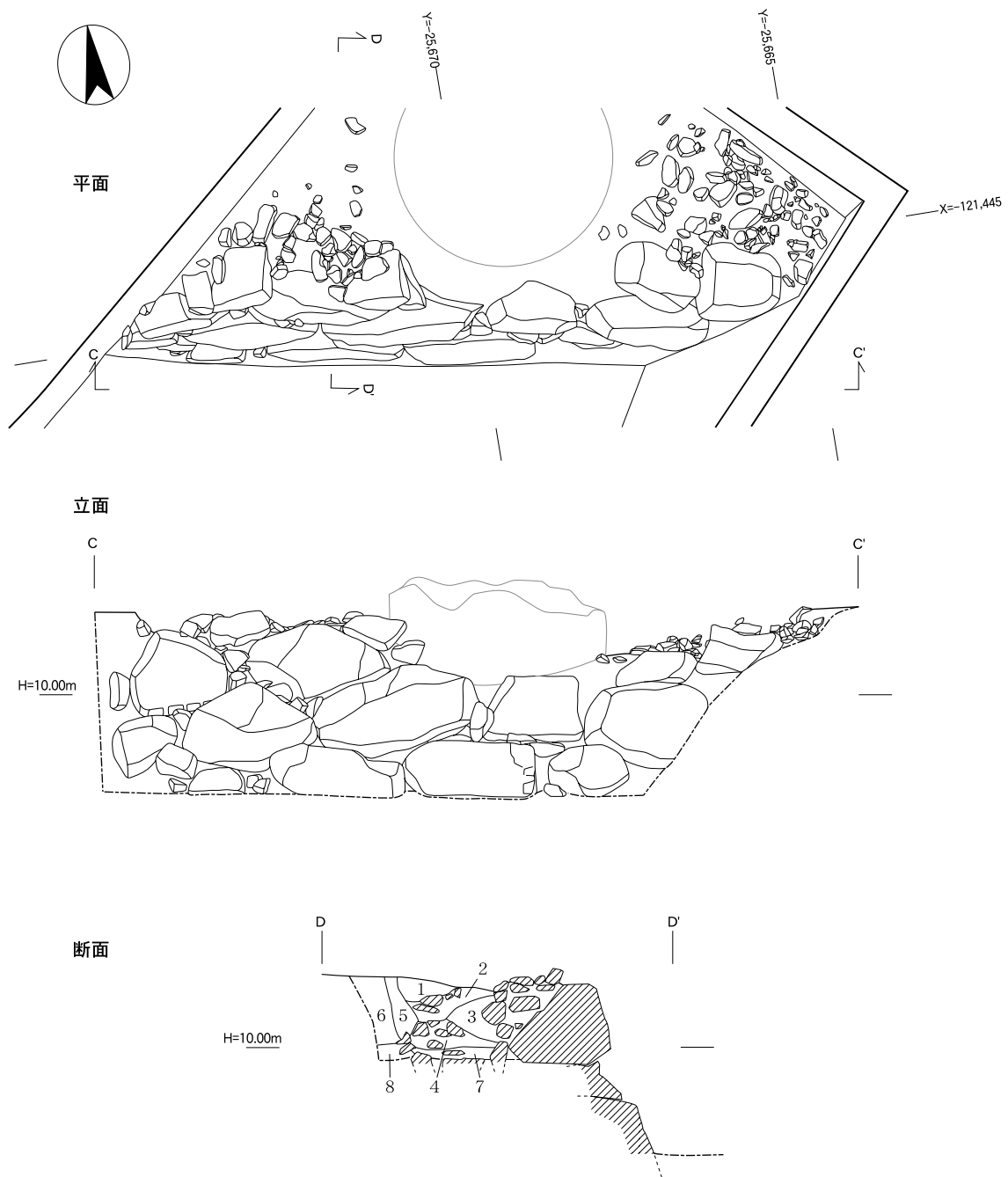


図 33 B 5 区溝 17 実測図（1：40）



- 1 2.5Y4/4 オリーブ褐色 泥砂
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色 泥砂 (粘質、φ3~10cm礫多量含む)
- 3 10YR4/4 褐色 泥砂 (φ5~15cm礫多量含む)
- 4 10YR3/4 暗褐色 泥砂 (φ5~15cm礫多量含む)
- 5 10YR3/3 暗褐色 泥砂
- 6 10YR4/6 褐色 泥砂 (砂主体)
- 7 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘質土 (φ5~10cm礫多量含む、10~20cmの礫主体)
- 8 10YR4/6 褐色 泥砂 (粘質)



図 34 B 5 区石垣 27 実測図 (1 : 50)

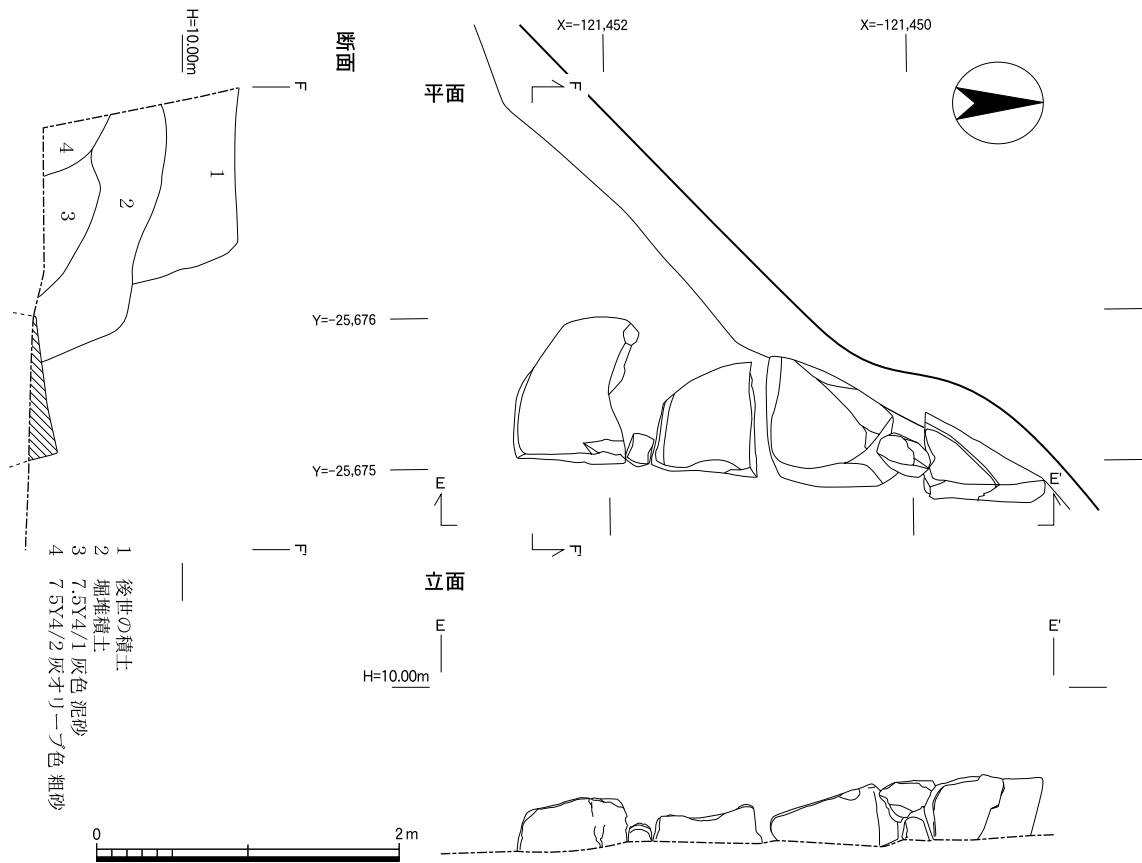


図 35 B5区石垣 28 実測図 (1:50)

(6) C1区の調査 (図 38 ~ 44、図版 8・9・17・18)

淀城期中堀と東曲輪、また淀城以前の大坂街道と西側の町屋にもあたっている。調査区は長辺 33m、短辺は北東半が 7.5m、南西半が 5.5m である。調査前の地表面の標高は 11.7 m、現代盛土 (厚さ 0.5m) を除去すると、淀城期の遺構面 (標高 11.2m 前後=第 1 面) となる。

第 1 面では、調査区北東端から南東壁で 22.5 m、北西壁で 16.5 m を結ぶラインを境として、東側が東曲輪にあたる陸部、西側が中堀にあたる堀 1 となる。堀 1 は工事掘削深内で底に達していない。北半の陸部は第 1 面以下、第 2 ~ 6 面までの遺構面を確認し、層序はおおまかに第 1 面整地層 (厚さ 0.4 ~ 0.5 m)、第 2 面整地層 (厚さ 0.1 ~ 0.2 m)、第 3 面整地層 (厚さ 0.5 ~ 0.6 m)、第 4 面整地層 (0.2 m)、第 5 面整地層 (厚さ 0.2 ~ 0.5 m) と続き、以下第 6 面整地層で、いわゆる地山は工事掘削深内では確認できていない。第 1・2 面が淀城期、第 3 面以下は淀城以前の町屋に関する整地層である (図 41)。

1) 第 1・2 面の遺構 (図 38、図版 17 - 1)

上記のように、第 1・2 面は淀城期の遺構面である。調査区の東側が東曲輪にあたる陸部、西側が中堀にあたる堀 1 となる。第 2 面はそれ以前の町屋に関する遺構を被覆した平坦面である。第 1 面は第 2 面を厚さ 0.3 m 前後の砂層 (7・9 層) で厚く覆い、その上面を路面状に小礫を多

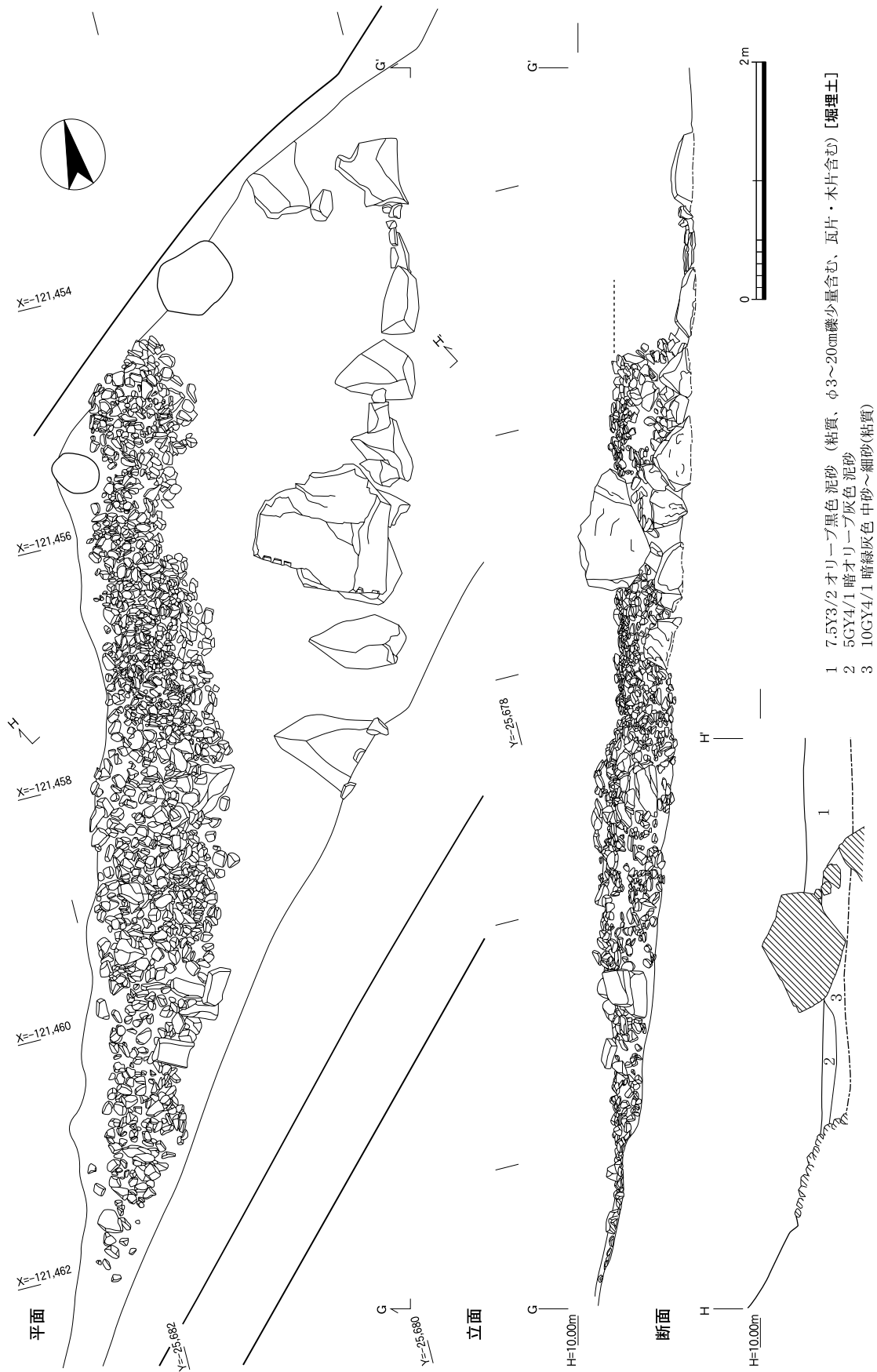
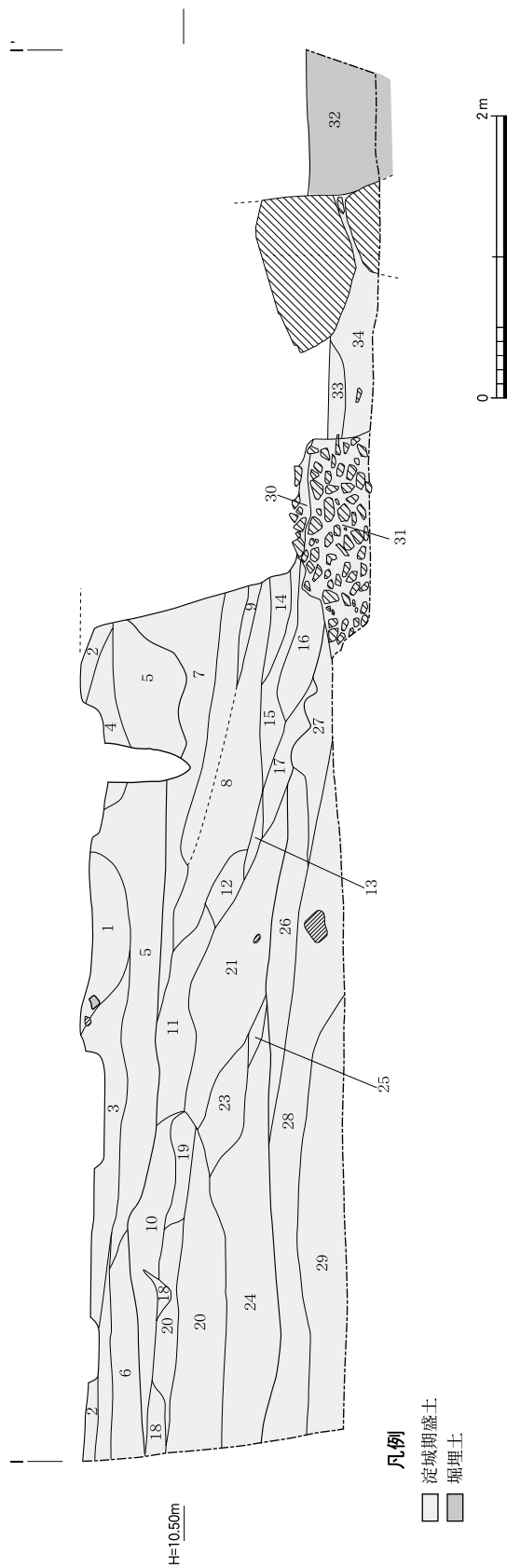
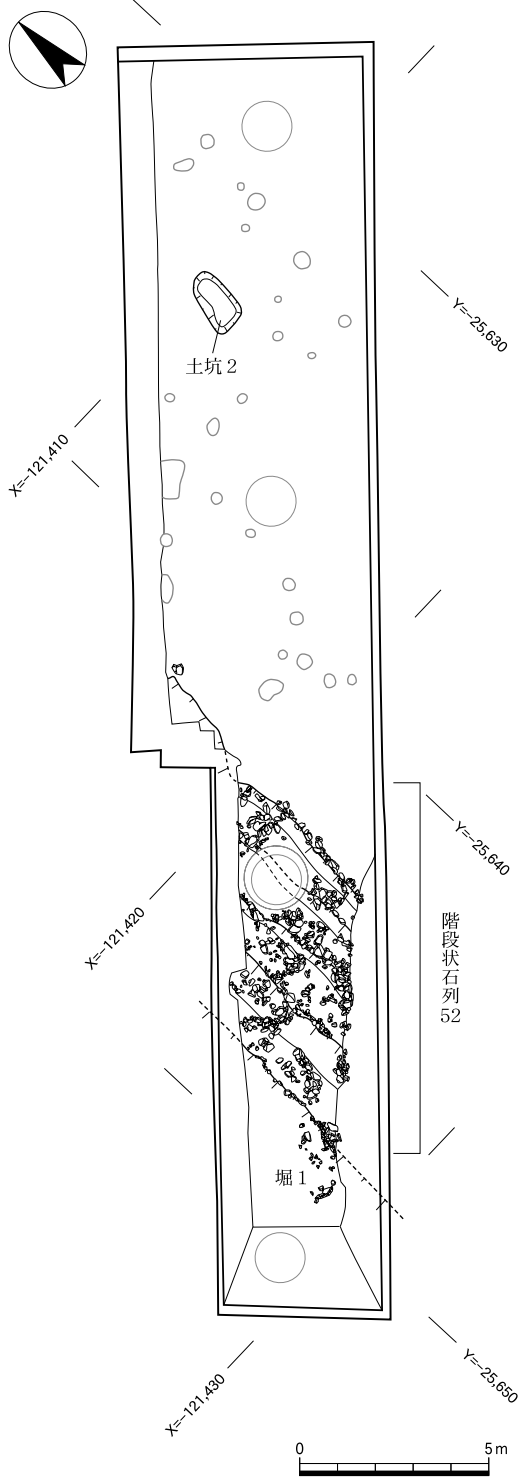


図 36 B5区石垣 29 実測図 (1 : 50)

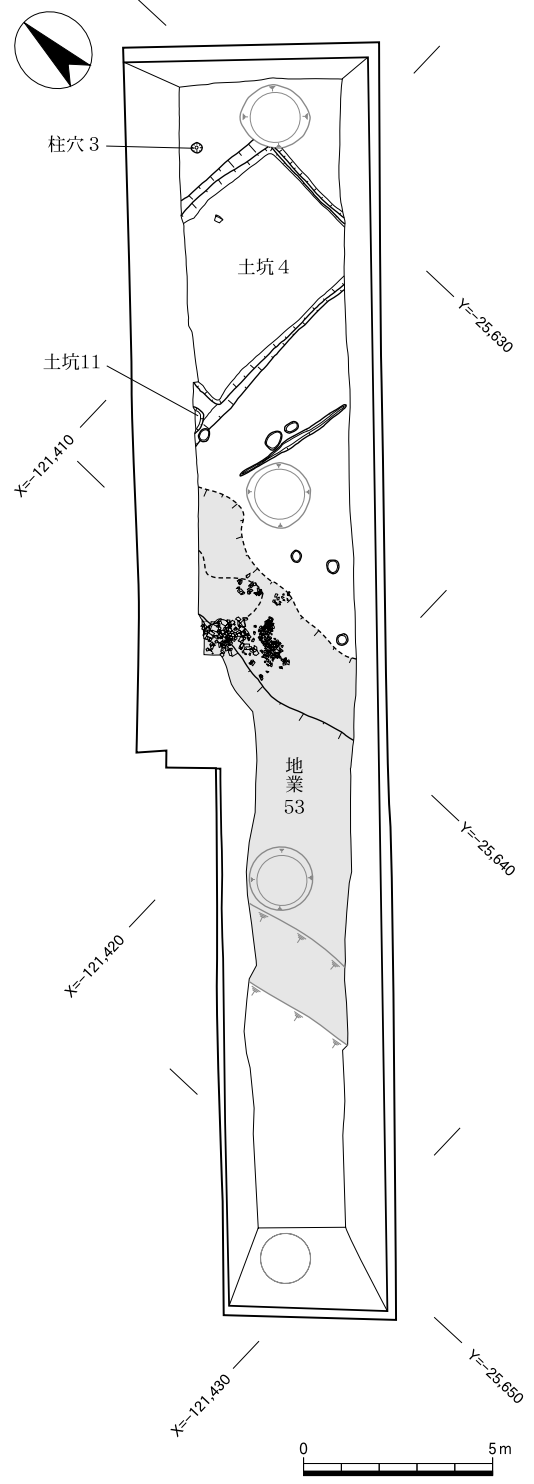


- 凡例
- 埋城期盛土
 - 埋埋土
- | | | | |
|----|--|----|--|
| 1 | 10YR3/4 暗褐色 砂泥 (φ2~8cm 礫少量混、瓦片含む) | 18 | 10YR5/4 にぶい黄褐色 粗砂~中砂 |
| 2 | 10YR4/4 褐色 砂泥 | 19 | 10YR4/3 にぶい黄褐色 泥砂 |
| 3 | 10YR5/4 にぶい黄褐色 泥砂 (炭化物微量含む) | 20 | 2.5Y6/3 にぶい黄褐色 細砂~極細砂 |
| 4 | 2.5Y5/4 黄褐色 中砂~細砂 | 21 | 2.5Y5/3 黄褐色 細砂~極細砂 |
| 5 | 10YR3/4 暗褐色 砂泥 (粗砂混) | 22 | 10YR4/4 褐色 細砂~極細砂 (粘質) |
| 6 | 10YR3/4 暗褐色 砂泥 (2.5Y5/4 黄褐色 細砂~極細砂粘質ブロック混) | 23 | 10YR5/2 灰黄褐色 細砂~極細砂 (φ3~12cm 礫少量混) |
| 7 | 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥 | 24 | 10YR4/3 にぶい黄褐色 粗砂~細砂 |
| 8 | 10YR6/3 にぶい黄褐色 中砂~細砂 (粘質土ブロックまばらに混入) | 25 | 2.5GY4/1 暗オリーブ色 極細砂 |
| 9 | 10YR6/3 にぶい黄褐色 中砂~細砂 (10YR5/1 褐灰色 粘土ブロック混) | 26 | 5Y5/2 灰オリーブ色 細砂 |
| 10 | 2.5Y5/4 黄褐色 細砂~極細砂 (粘質) | 27 | 2.5GY4/1 暗オリーブ色 極細砂 (φ5~12cm 礫少量混) |
| 11 | 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥 | 28 | 10YR4/6 褐色 細砂~極細砂 (シルト) |
| 12 | 2.5Y5/3 黄褐色 細砂 (粘質) | 29 | 5Y3/2 オリーブ黒色 極細砂 (シルト) |
| 13 | 2.5Y5/3 黄褐色 中砂~細砂 | 30 | 5GY5/1 オリーブ灰色 砂泥 (粘質) [石壁25] |
| 14 | 10YR5/3 にぶい黄褐色 粘土 | 31 | 2.5GY5/1 オリーブ灰色 粘質土 (φ5~15cm 礫多数含む) [石壁25] |
| 15 | 2.5Y5/2 暗灰黄色 中砂~細砂 (粘質) | 32 | 7.5Y3/2 オリーブ黒色 泥砂 (粘質、φ3~20mm 礫少量含む、瓦片・木片含む、埋埋土) |
| 16 | 2.5Y4/1 黄灰色 細砂~極細砂 | 33 | 5GY4/1 暗オリーブ灰色 泥砂 |
| 17 | 7.5Y5/2 灰褐色 中砂~細砂 | 34 | 10GY4/1 暗緑灰色 中砂~細砂 (粘質) |

図 37 B5区堀直交方向断剖面合成図 (1:50)

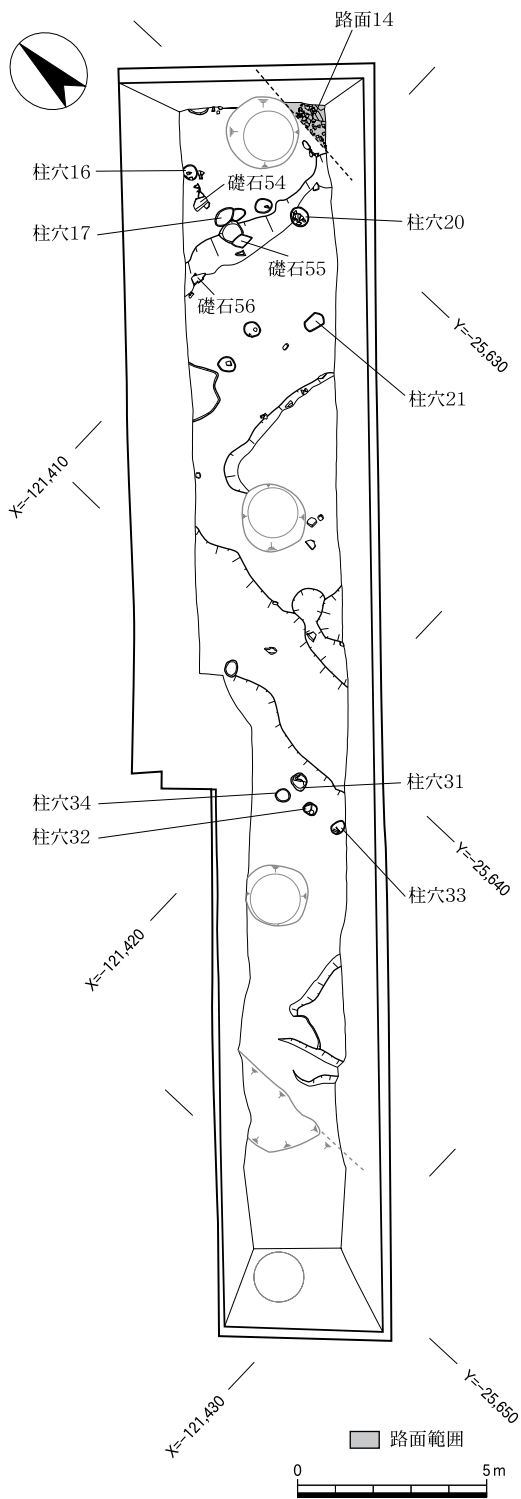


第1・2面

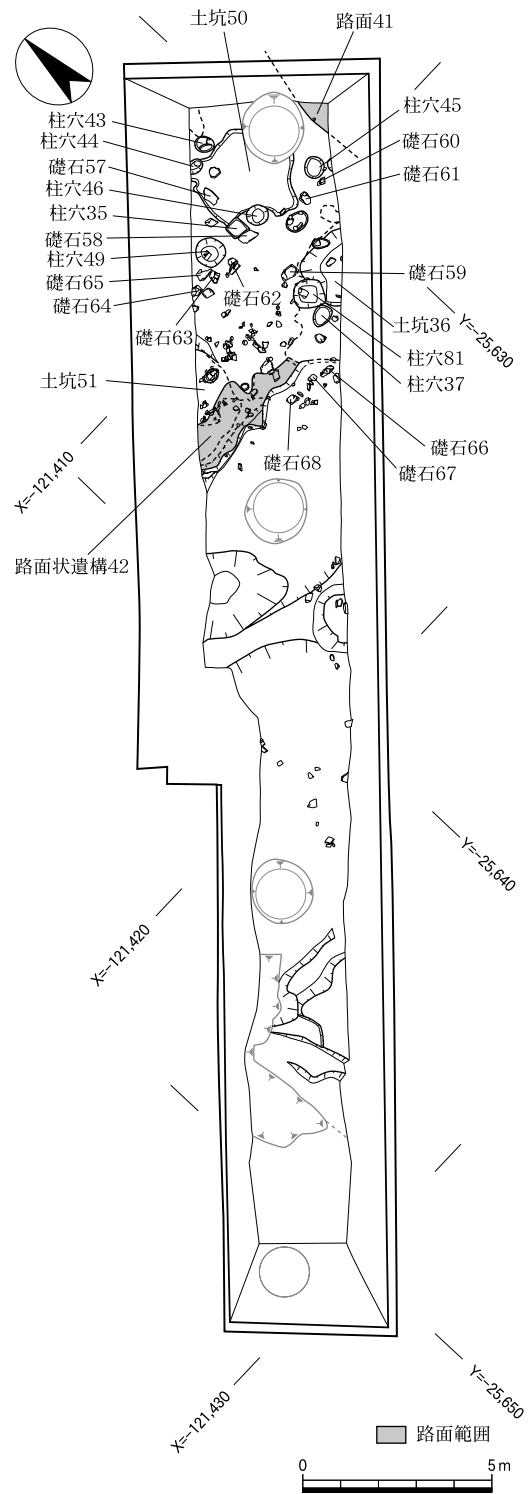


第3面

图 38 C1区第1・2面、第3面平面图 (1:200)

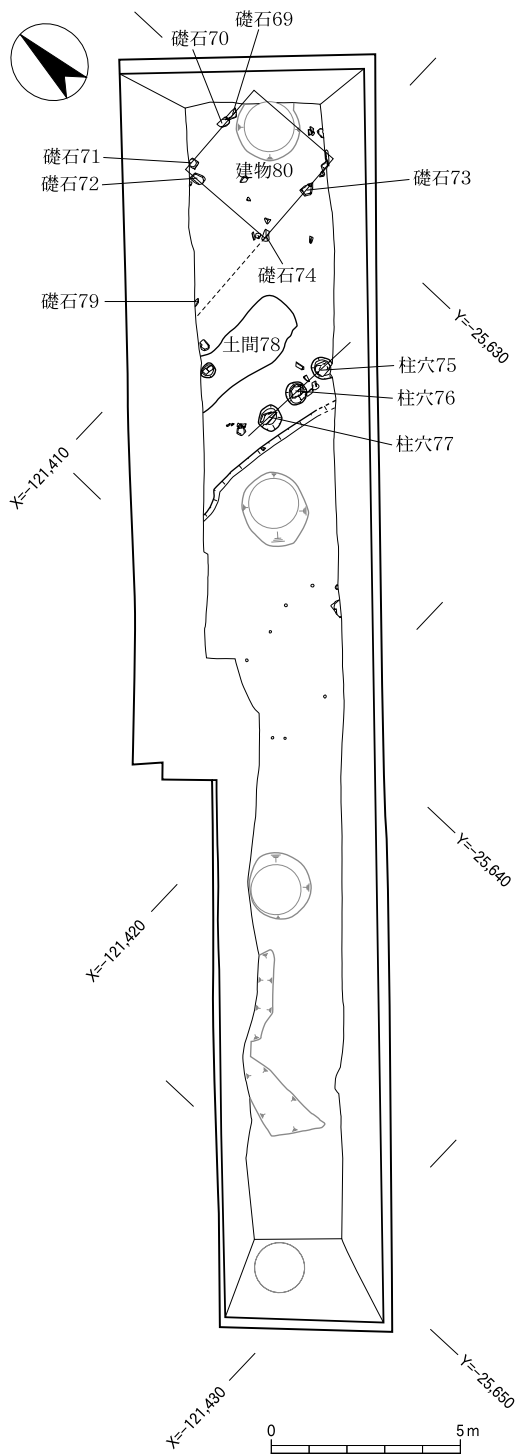


第4面



第5面

图39 C1区第4面、第5面平面图(1:200)



第6面

図40 C1区第6面平面図(1:200)

く含み叩き締められた数層(1~6層)を重ねて整地する。第2面では顕著な遺構は検出できず、第1面は上面に路面状の整地面が何層も重ねられた広場状の空間であり、第1・2面は淀城築城にあたっての一連の整地であると考えられる。

第1面では陸部で土坑2を検出、西半は内堀にあたる堀1であり、東曲輪の西辺にあたる堀の東肩部には階段状石列52を検出した。

階段状石列52(図42、図版17-2)堀1の東肩部にあたり、なだらかな西への落ち込みとして検出した。石垣は検出できず、幅1m前後の比較的平坦な面が0.2~0.4mずつ下がる段が少なくとも5段あり、階段状を呈する。外装の石材は失われているが、それぞれの段に沿うように径0.2m前後の垂円礫が並べられた状態で検出した。

堀1 階段状石列52の西側が、中堀にあたる堀1である。工事掘削深内では堀の底には達していない。おおまかに下半は石材が取り去られた後も機能していた期間に堆積した堀の堆積土、上半は京阪電鉄敷設に伴い埋め立てられた際の盛土である。

土坑2 長軸1.6m、短軸0.85mの長楕円形で、深さ0.1mの土坑である。棟丸瓦(小菊)を中心に瓦類が乱雑に充満しており、これらを廃棄するために掘られた遺構であろう。瓦類の他に、少量の国産施釉陶磁器や鉄製品などが出土した。

2) 第3面の遺構(図38、図版17-3)

薄い第2面整地層を除去した、町屋に関する遺構の最終面、淀城築城直前の遺構群である。第4面の上に厚さ0.5~0.6mの整地層を積み上げ、平坦面を作り出す。特に陸部の南半部については、丁寧な積土(地業53)が施され、整地層が崩れるのを防いでいる。第3面の整地層

中へ下層より砂層（図 41 - 28 ~ 30 層）の貫入がみられ、大地震による液状化現象の痕跡と考えられる。上面では土坑や柱穴などを検出したが、明確な大坂街道の路面整地は検出されなかった。

地業 53（図 43、図版 17 - 1） 第 3 面の整地層のうち、調査区北東端から南東壁で 16 m、北西壁で 11.5 m を結ぶラインよりも南に施された積土である。西は堀 1 に切り込まれ実際の広がりには不明であるが、まず東半部に砂層と粘質土（下層）を積んだ後、西半部の底面に平瓦を中心とした瓦片を敷き詰めて平坦面を形成し、その上に砂層・粘質土・砂泥層の順に水平に積み上げる（上層）。全体としては東から西へ順に整地が行われる一連の作業の一環であるが、当地が大坂街道に東面する町屋の裏手であり町尻に近いとみられ、整地層が崩れるのを防ぐために丁寧な積土がなされたと思われる。底面に敷かれた多量の瓦類の他、土師器・瓦器・国産施釉陶磁器・焼締土器などの土器類、五輪塔の一部、鉄製品などが出土した。

土坑 4（図 44） 調査区の北東部、大坂街道に東面する位置で検出した大型の土坑である。長軸 5.8 m、短軸 4.7 m の方形で、深さは 0.25 m 前後である。底面と側面に厚さ 0.1 m 前後の粘質のある砂泥を貼り付ける。実際の用途は不明であるが、水を溜めるための施設とみられる。遺構の方位は座標北に対して東へ 2 ~ 3 度である。なお、南西端で同様の土坑 11 の南東角を検出しており、東西に同じ構造の遺構が連結していたとみられる。いずれも小片であるが、土師器・瓦器・国産施釉陶磁器、瓦、木製品などが出土した。

3) 第 4 面の遺構（図 39）

第 3 面整地層を除去した、標高 10.5 m 前後で検出した町屋に関する遺構面である。第 4 面の整地層は陸部の北東部のみで認めた。検出した遺構の主なものは、大坂街道路面（路面 14）、柱穴、柱礎石、土坑などである。

路面 14 調査区の東角で検出した。大坂街道の西辺の一部にあたるが、これに伴う側溝は検出できなかった。検出した西辺の長さは短く、正確な方位は不明であるが、ほぼ座標軸に沿っている。路面には長径 0.1 ~ 0.3 m の角礫が敷き詰められる。

柱穴・柱礎石 町屋建物に関すると思われる柱穴・柱礎石を検出した。南北方向の柱列としては、柱穴 16・17・21、これとほぼ重なる形で礎石 54・55、南に離れた柱穴 32 ~ 34 などがある。東西方向柱列としては柱穴 20・礎石 56 がある。礎石は長径 0.3 ~ 0.6 m の扁平な石を据えて、柱を受けたものである。柱穴は直径 0.3 ~ 0.6 m 円形あるいは隅丸方形の掘形に柱を据えたものである。検出の範囲が狭く建物の復原には及ばなかった。

4) 第 5 面の遺構（図 39、図版 18 - 2）

陸部北東半の第 4 面整地層を除去した町屋に関する遺構面で、南西半は第 4 面とは変化がない。検出した主な遺構は、大坂街道路面（路面 41）、柱穴、柱礎石、土坑、路面状遺構 42 などである。

路面 41 調査区東角で検出した。第 4 面と同様大坂街道の西辺の一部である。ここでも西端の側溝は検出できなかった。路面の整地は粗砂から細砂に拠っている。

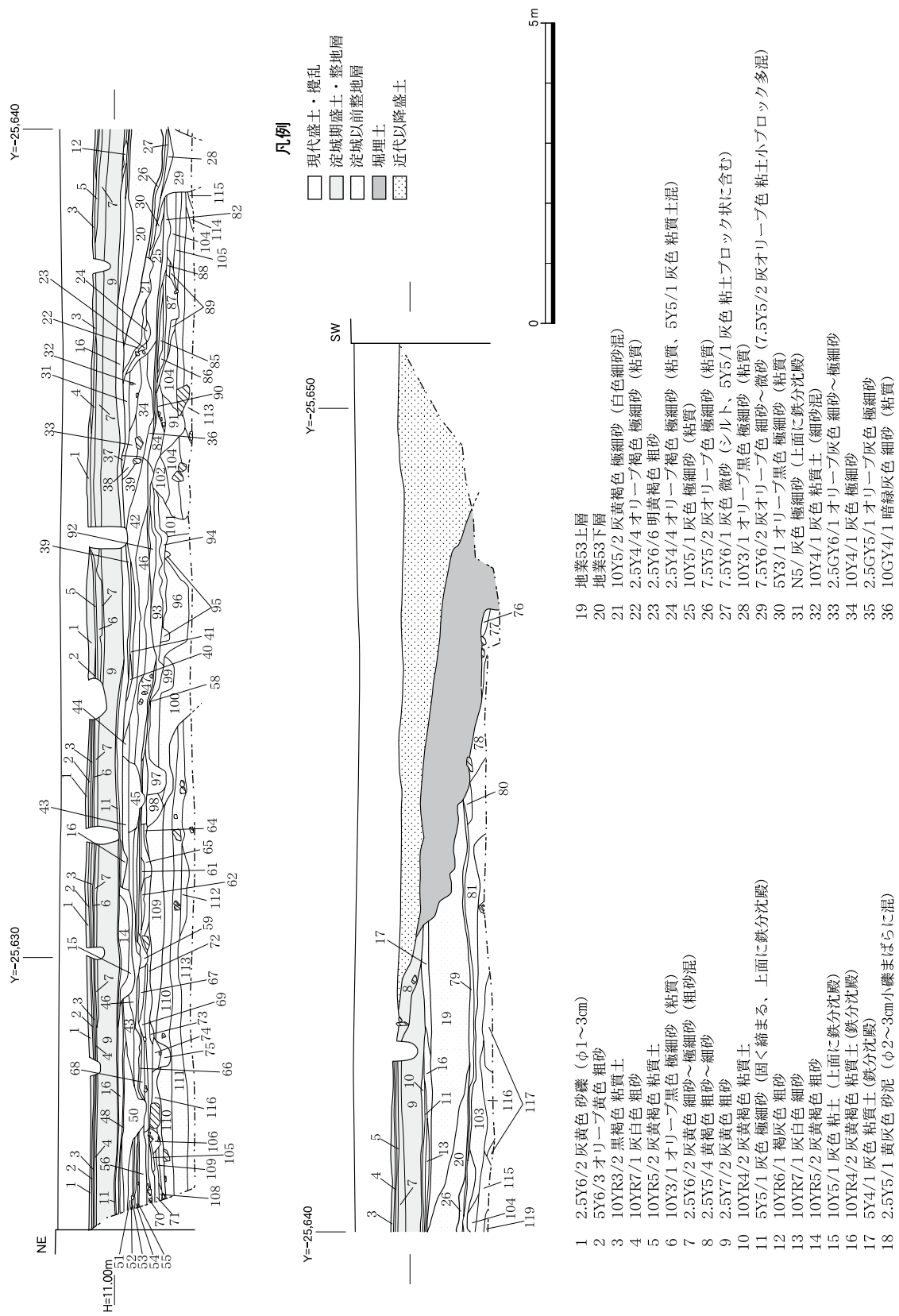


図 41 C1 区南東壁断面図 (1:100)

37	2.5Y6/1 黄灰色 極細砂	
38	2.5Y4/3 オリーブ褐色 極細砂	
39	2.5Y5/3 黄褐色 極細砂 細砂混	
40	2.5Y6/3 にぶい黄色 粘質土	
41	5Y4/1 灰色 細砂	
42	10YR4/3 にぶい黄褐色 細砂 (2.5Y7/1 灰白色 粘土ブロック混、炭化物少量混)	
43	2.5Y6/4 にぶい黄色 細砂+10Y5/1 灰色 粘質土	
44	10YR4/3 にぶい黄褐色 細砂 (2.5Y7/1 灰白色 粘土ブロック混、炭化物少量混、細砂ブロック含む)	
45	5Y6/2 灰オリーブ色 細砂 (10Y5/1 灰色 粘質土がまだらに混)	
46	5Y7/1 灰白色 粗砂	
47	5Y5/2 灰オリーブ色 細砂 (炭化物微量含)	
48	7.5GY6/1 緑灰色 粘質土 (上面に鉄分沈殿)	
49	N7/ 灰白色 極細砂	
50	7.5Y6/2 灰オリーブ色 細砂 (N4/ 灰色 粘土ブロック混)	
51	2.5Y6/3 にぶい黄色 細砂	
52	2.5GY6/1 オリーブ灰色 細砂 (上面に鉄分沈殿)	
53	N5/ 灰色 極細砂	
54	N4/ 灰色 極細砂	
55	2.5GY4/1 暗オリーブ灰色 細砂 (φ0.5cm 礫多混)	
56	7.5Y6/2 灰オリーブ色 細砂	
57	5Y3/1 オリーブ黒色 細砂	
58	5Y5/1 灰色 砂泥	
59	N5/ 灰色 極細砂	
60	5Y3/1 オリーブ黒色 極細砂	
61	N4/ 灰色 極細砂 (シルト)	
62	5GY5/1 灰色 泥砂 (焼土・炭化物多く含む)	
63	10Y5/1 灰色 砂泥 (炭化物混)	
64	10YR3/1 黒褐色 焼土層	
65	5GY6/1 灰色 粘質土 (焼土・炭化物多混)	
66	N4/ 灰色 極細砂	
67	10YR3/2 黒褐色 炭・焼土層	
68	5GY5/1 オリーブ灰色 粘質土	
69	7.5GY6/1 緑灰色 極細砂 シルト	
70	10Y5/1 灰色 砂泥 (炭化物微量混)	
71	N6/ 灰色 砂泥	
72	2.5GY5/1 オリーブ灰色 極細砂	
73	5Y7/2 灰白色 (灰炭化物多く含む)	
74	7.5GY5/1 緑灰色 極細砂	
75	7.5GY4/1 緑灰色 極細砂	
76	10Y4/1 灰色 粗砂 (φ1~3cm 礫少量含む)	
77	2.5GY4/1 暗オリーブ灰色 砂泥	
78	10YR6/4 にぶい黄褐色 粗砂 (部分的に鉄分沈着)	
79	10BG7/1 明青灰色 シルト	
80	N4/ 灰色 細砂~極細砂	
81	N5/ 灰色 微砂~シルト (粗砂多混)	
82	N5/ 灰色 微砂~シルト (粗砂多混)	
83	2.5Y5/3 黄褐色 粘質土 (鉄分沈殿)	
84	N3/ 暗灰色 細砂	
85	10Y7/1 灰白色 細砂~微砂	
86	5Y5/1 灰色 砂泥 (炭化物斑点状に少量含む)	
87	10Y4/1 灰色 砂泥 (炭化物多く含む)	
88	10Y4/1 灰色 砂泥	
89	10Y6/1 灰色 粘質土 (細砂混)	
90	10Y5/1 灰色 細砂 (炭化物・土器片まばらに含む)	
91	5GY5/1 オリーブ灰色 細砂 (炭化物・焼土含む)	
92	2.5Y4/1 黄灰色 砂泥 (炭化物斑点状に少量混)	
93	10Y5/1 灰色 砂泥 (炭化物斑点状に少量混、鉄分沈殿)	
94	5GY6/1 オリーブ灰色 細砂~微砂 (炭化物微量混、10Y5/2 オリーブ灰色 粘質土~極細砂 少ブロック含む)	
95	5Y5/1 灰色 砂泥	
96	10YR3/1 黒褐色 焼土層	
97	2.5Y6/2 灰黄色 砂泥 (炭化物微量混)	
98	2.5Y6/4 にぶい黄色 粘質土 (細砂混)	
99	2.5Y5/2 暗灰黄色 粘質土	
100	5Y7/1 灰白色 細砂 (底に鉄分沈殿)	
101	10Y5/2 オリーブ灰色 粘質土~極細砂	
102	7.5GY5/1 緑灰色 粘質土 (鉄分沈殿少量、炭化物少量混)	
103	7.5Y5/2 灰オリーブ色 極細砂 (シルト、粘質)	
104	7.5Y5/2 灰オリーブ色 極細砂 (粘質)	
105	N4/ 灰色 砂泥 (φ1cm 礫多混)	
106	2.5GY4/1 暗オリーブ灰色 砂泥 (φ3~5cm 礫多混)	
107	5GY5/1 オリーブ灰色 粘質土	
108	2.5GY4/1 暗オリーブ灰色 粘質土	
109	7.5GY5/1 緑灰色 粘質土	
110	10Y4/1 灰色 極細砂 (粘質、炭化物をブロック状に含む)	
111	2.5GY5/1 オリーブ灰色 極細砂 (粘質)	
112	2.5GY4/1 暗オリーブ灰色 粘質土 (鉄分沈殿)	
113	N5/ 灰色 細砂~極細砂 (粘質、細砂ブロック状に含む)	
114	N6/ 灰色 粗砂~細砂	
115	7.5Y6/2 灰オリーブ色 細砂~微砂	
116	5Y2/1 黒色 粘土 粗砂混	
117	7.5Y5/1 灰色 泥砂	

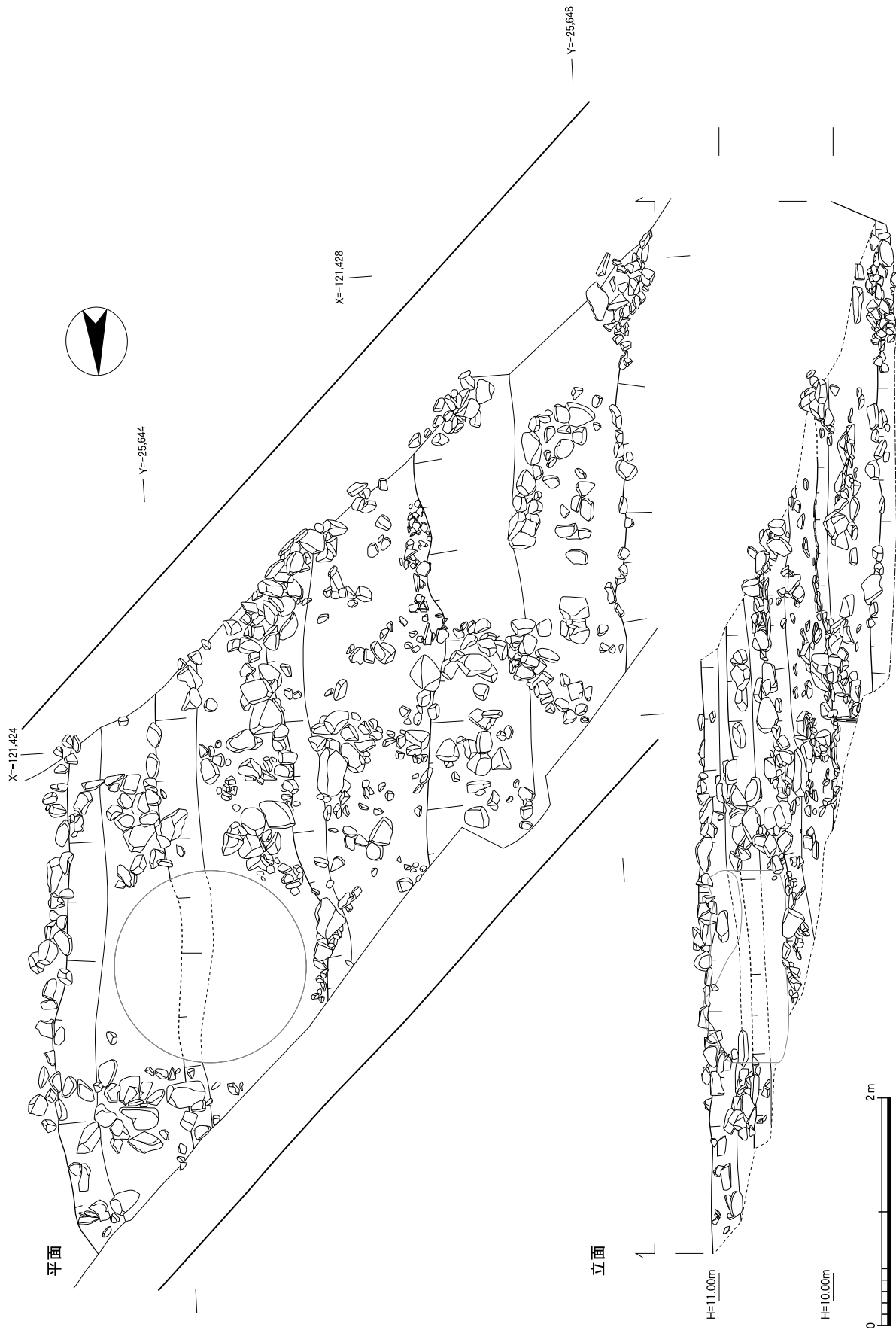


图 42 C1区第1面阶段状列石 52 实测图 (1 : 50)

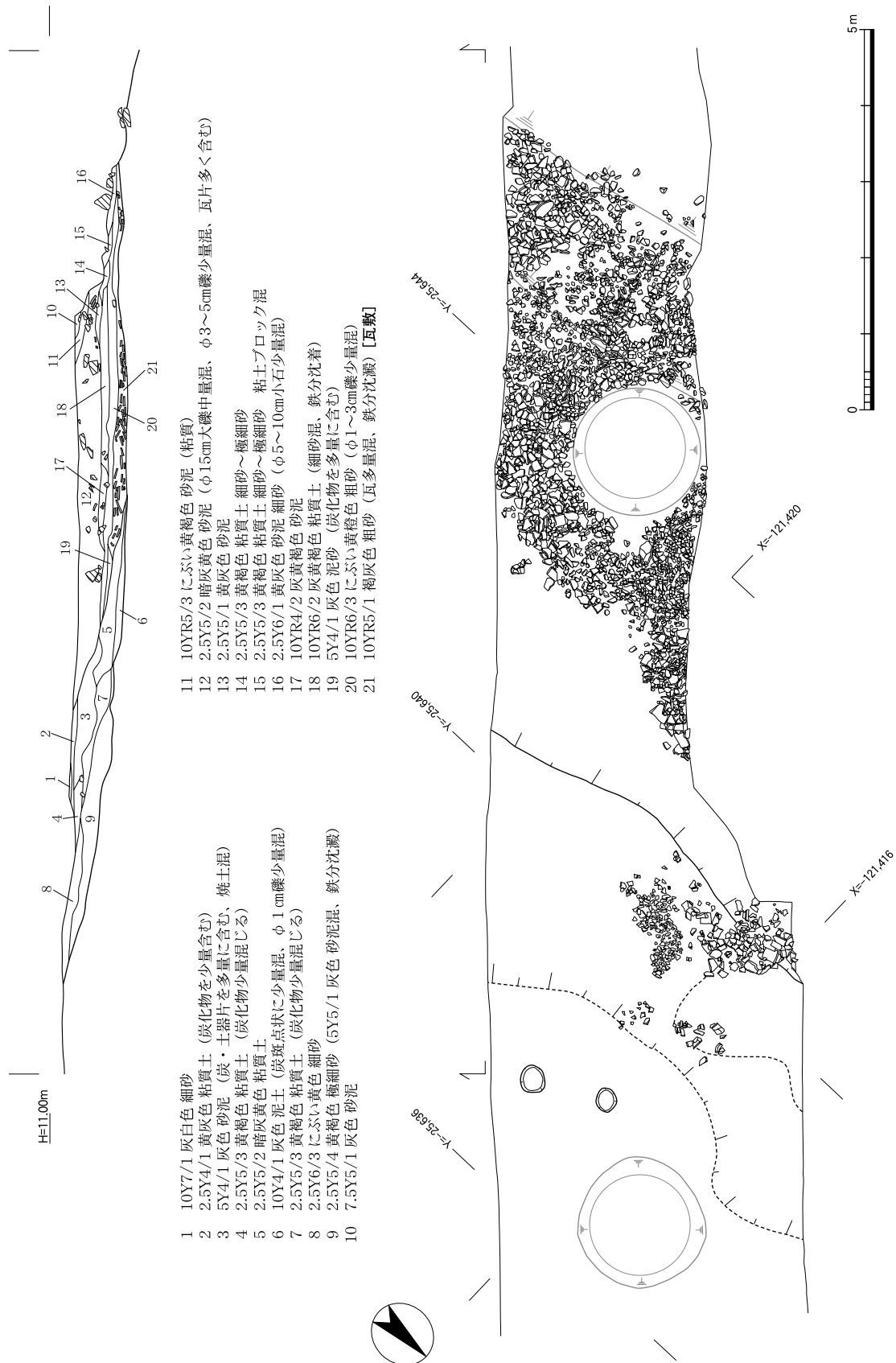
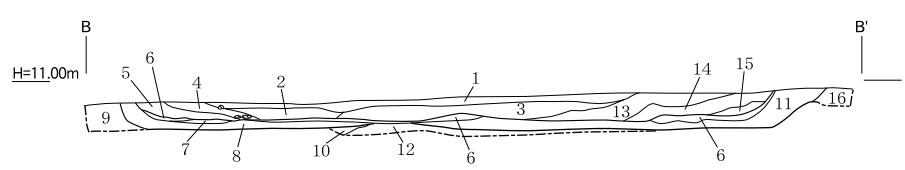
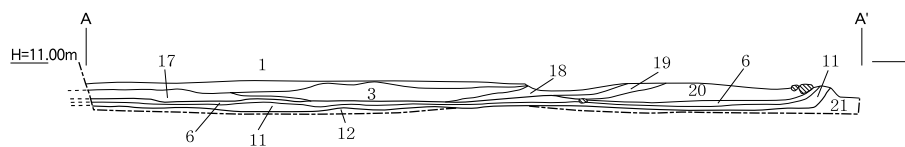
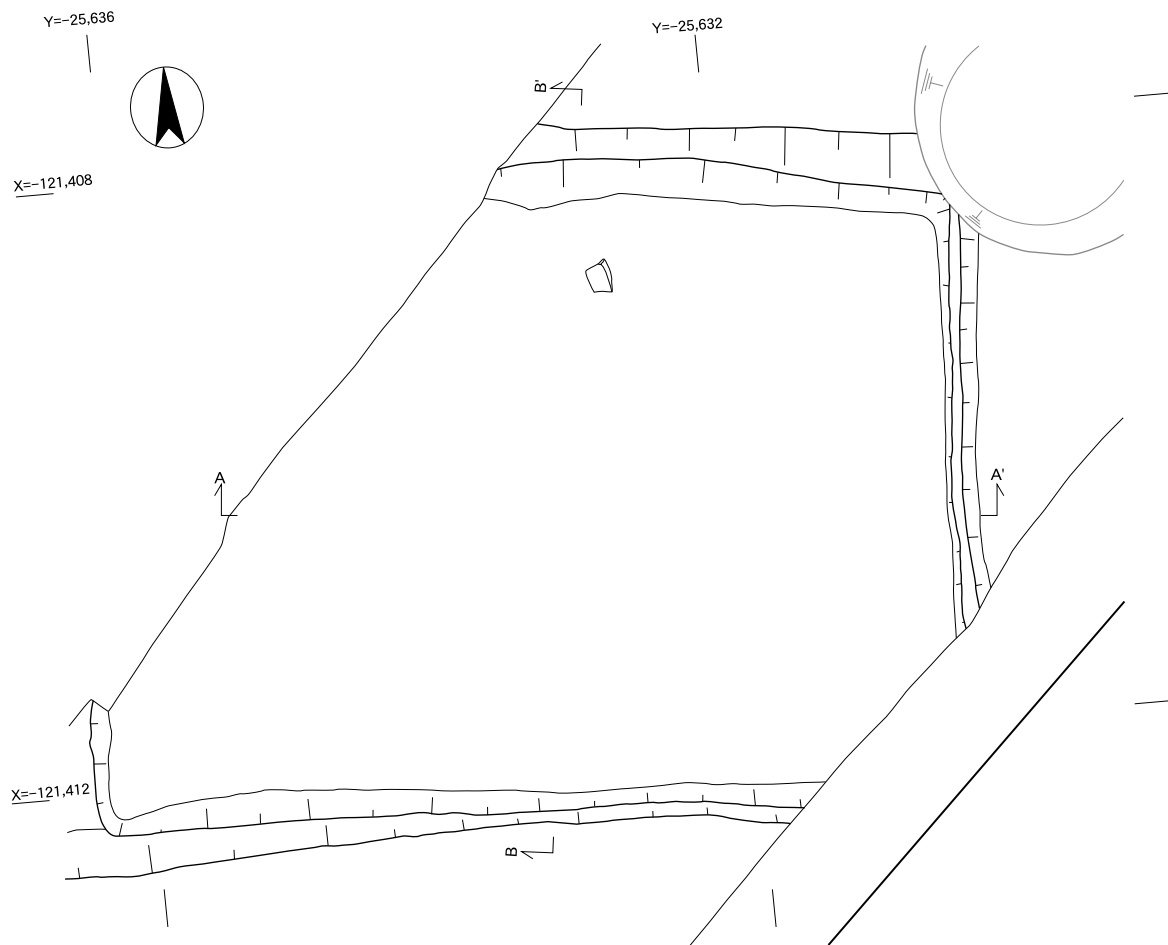


図 43 C1区第3面地業53実測図(1:80)



- | | |
|---|---------------------------------------|
| 1 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質砂泥 (上面に粗砂混) | 11 7.5Y5/1 灰色砂泥 |
| 2 10YR5/4 にぶい黄褐色 泥砂 (中~粗砂多く含む) | 12 5Y5/1 灰色砂泥 |
| 3 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥 (部分的に粗砂混、φ5cm礫少混) | 13 5Y4/1 灰色砂泥 (粗砂まばらに含む、木質少量含む) |
| 4 2.5Y5/3 黄褐色 砂泥 (φ5cm礫少量含む) | 14 5Y5/1灰色粘質砂泥 (微砂~シルト) |
| 5 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥 | 15 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥 (φ2~3cm小礫から粗砂多く含む) |
| 6 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂泥~7.5YR4/6 褐色 砂泥 (鉄分沈殿層 上面は粗砂が固着) | 16 2.5Y6/2 灰黄色 細砂 |
| 7 2.5Y4/1 黄灰色 砂泥 | 17 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂泥 (粗砂多く含む) |
| 8 2.5Y5/1 黄灰色 砂泥 | 18 2.5Y6/3 にぶい黄色 砂礫 (粗砂~φcm礫少量) |
| 9 10YR5/4 にぶい黄褐色 細砂 | 19 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂泥~シルト |
| 10 2.5Y5/3 黄褐色 微砂 | 20 10YR5/4 にぶい黄褐色 細砂~中砂 |
| | 21 5Y5/1 灰色砂泥 (粘質) |

図 44 C1区第3面土坑4実測図 (1:50)

柱穴・柱礎石 調査区の北部、大坂街道路面に近い箇所が多く検出した。町屋に関するものと思われ、大坂街道に平行、あるいは直交して列をなすが、検出範囲が狭く建物としてはまとめられなかった。南北列としては柱穴 43・46・81・37、柱穴 44・35、礎石 57～59、東西列としては柱穴 45・46・49、礎石 60～64、礎石 58・65、礎石 66～68 などが考えられる。

路面状遺構 42 調査区北東半中央で検出した小礫を敷き、叩き締めた路面状の遺構である。幅約 2 m、ほぼ座標の東西方向に沿って東西 4 m の範囲で検出した。宅地内の小径とみられる。

土坑 36 調査区北東半の北西壁沿いで検出した直径 2 m 前後の不定円形の土坑である。埋土に壁土や焼土・炭化物を多く含み、周辺にも炭化物が散乱した状態で検出した。土師器・瓦器・国産施釉陶磁器、砥石などが出土した。

土坑 50 調査区北端で検出した一辺 2.5 m の、深さ 0.1 m の不定形な土坑である。埋土には多量の炭化物が含まれる。土師器・須恵器・瓦器・国産施釉陶磁器、瓦などが出土した。

土坑 51 調査区北半中央の西壁で検出した南北 3 m、東西 1 m 以上、深さ 0.05 m の円形の土坑である。埋土に炭化物を多く含み、土師器・瓦器・国産施釉陶磁器・焼締土器、瓦、漆器などが出土した。

5) 第 6 面の遺構 (図 40、図版 18 - 2)

第 5 面整地層を除去した町屋に関する遺構面である。遺構面の標高は 9.7～10.1 m で、全体としては北が高く、南に緩やかに低くなる。座標 X=121,414 ラインに沿う辺りで約 0.3 m の段差をもって南へ下がり、以南は湿地状の堆積となり、明確な遺構は検出できなかった。検出した主な遺構には建物、柱礎石、柱穴、土間などがある。

建物 80 調査区の北東端で検出した。東西 1 間以上、南北 1 間の柱礎石と柱穴を併用した建物の一部と考えている。建物北辺は礎石 69・柱穴 71、南辺は礎石 73・74・79、南北柱筋は礎石 69 と礎石 73、柱穴 71 と礎石 74 が対応する。南北幅 2.8 m の東西に細長い建物が想定できる。

土間 78 建物 80 の南辺から約 1.2 m 南にほぼ建物に沿うように検出した。幅 1.2 m 前後の範囲の叩き締められた面である。上面には薄く炭化物が敷かれたように検出された。

柱列 土間 78 のさらに南 1.2 m に検出した柱穴 75～77 よりなる柱穴列である。いずれも直径 0.5～0.6 m の円形の掘形に、長径 0.3～0.4 m の扁平な石を入れて柱を受けたものである。各柱間は 1 m である。

(10) C 2 区の調査 (図 45～51、図版 10・11・18・19)

淀城期の東曲輪、淀城以前の大坂街道およびこれに面する東側の町屋にあたっている。調査区は長辺 31m、短辺 7 m の長方形である。調査前の地表面の標高は 12.0～12.2m で、北から南へ緩やかに下がっている。厚さ 0.7～0.9m の現代盛土層を除去した標高 11.5m 前後が淀城期の遺構面 (第 1 面) となる。

遺構面は第 1 面から第 4 面まで確認した。層序は第 1 面以下、第 1 面整地層 (厚さ 0.5 m)、第

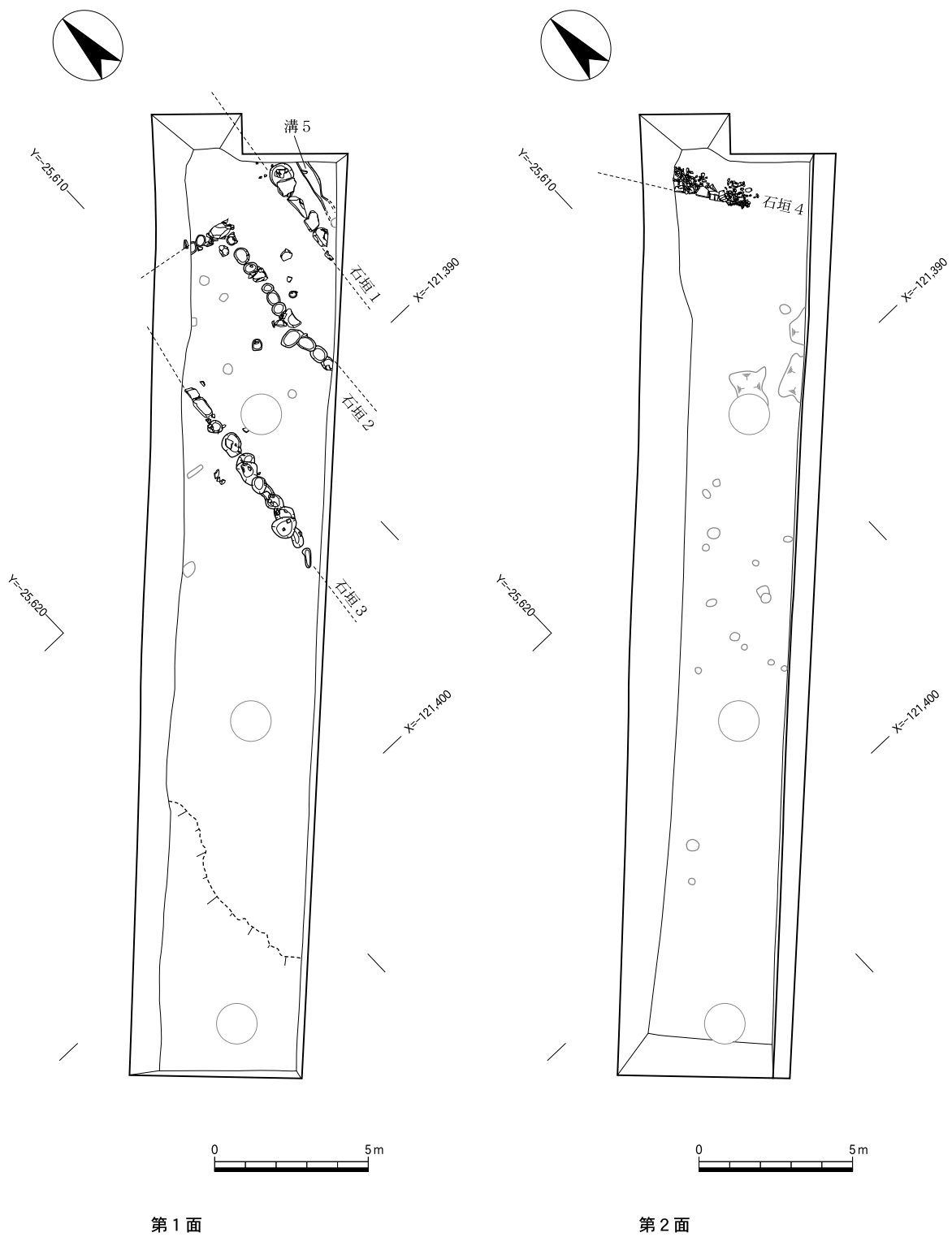
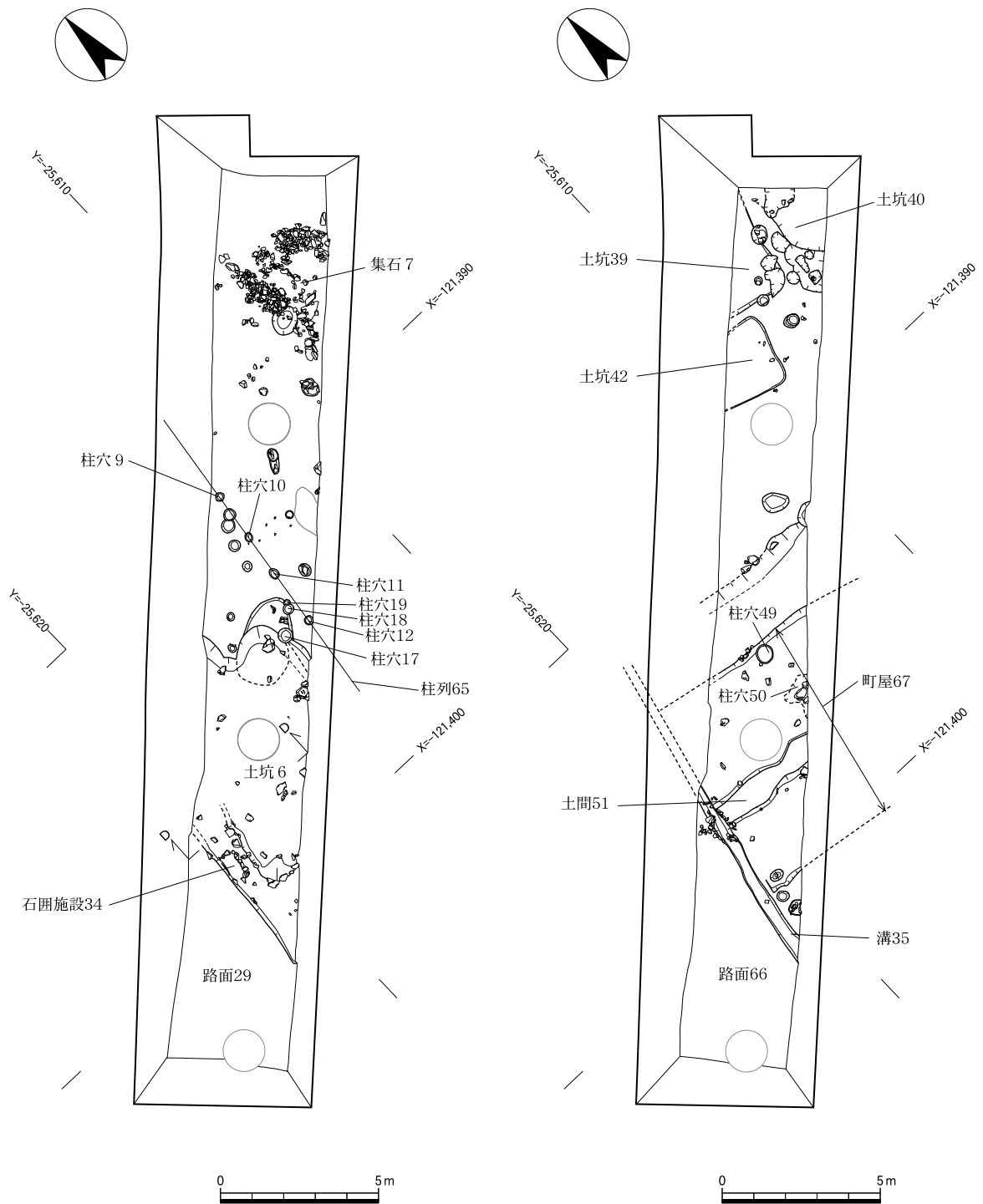


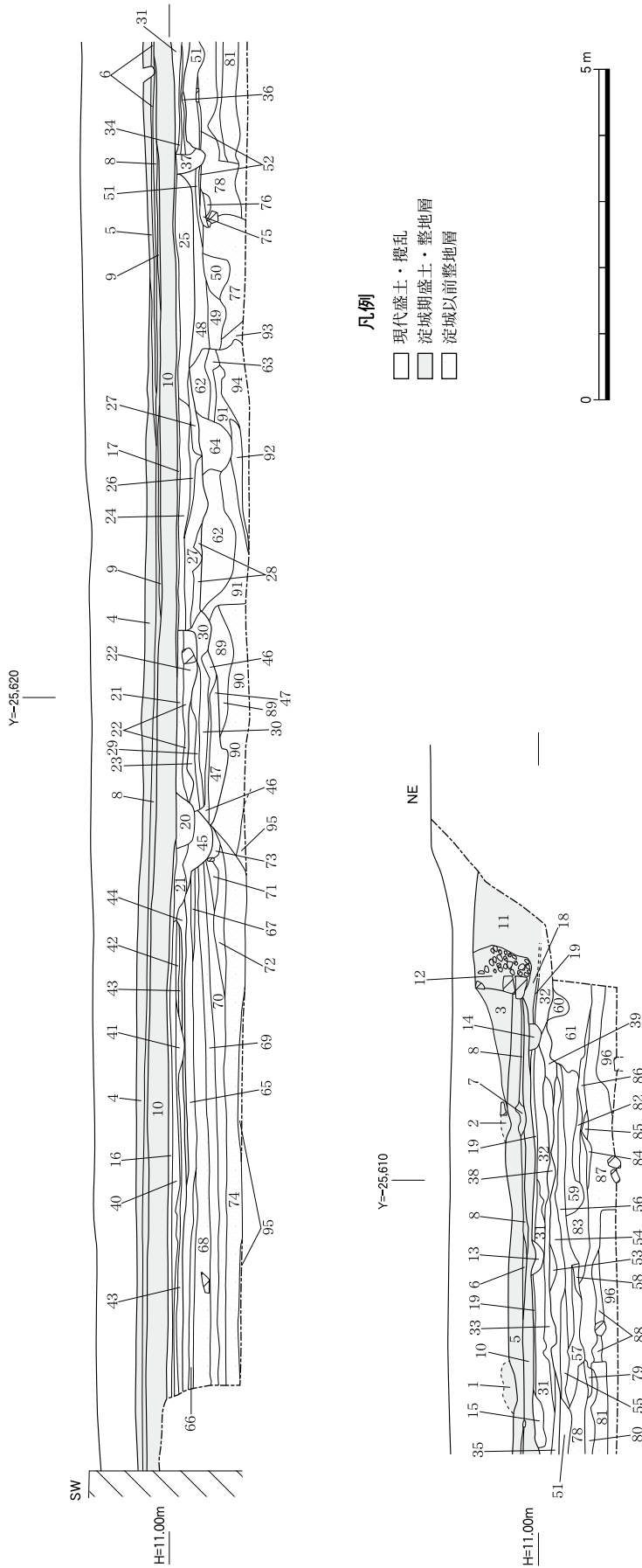
图 45 C 2 区第 1 面、第 2 面平面图 (1 : 200)



第3面

第4面

図46 C2区第3面、第4面平面図(1:200)



凡例

- 現代盛土・攪乱
- 淀城期盛土・整地層
- 淀城以前整地層

- 1 5Y5/3 吹オリーブ色粗砂
 2 5Y5/4 灰オリーブ色粗砂 [石垣2掘形痕]
 3 7.5YR4/3 褐色砂泥
 4 2.5Y6/3 にぶい黄色砂礫 (φ5cm未満礫多混)
 5 2.5Y5/6 黄褐色粘質土 (固く締まる)
 6 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂
 7 10YR4/4 褐色粘質土
 8 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂～微砂
 9 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土 (固く締まる)
 10 2.5Y5/3 黄褐色細砂

- 11 7.5YR4/3 褐色砂泥
 12 10YR3/4 暗褐色粘質土 (礫多量含む) [石垣4]
 13 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (瓦片多混)
 14 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (礫土、炭化物微量混)
 15 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂～シルト
 16 5Y5/2 灰オリーブ色細砂
 17 10YR4/4 褐色細砂 (鉄分沈殿)
 18 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂
 19 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (瓦片多混)
 20 5Y5/2 灰オリーブ色極細砂

図 47 C2区北西壁断面図 (1:100)

21	N3/ 暗灰色 粘質土	
22	N3/ 暗灰色 粘質土 (砂礫混)	
23	2.5Y5/3 黄褐色 粘質土	
24	2.5GY5/1 オリーブ灰色 粘質土 (焼土・炭化物含む)	
25	10YR6/3 にぶい黄褐色 粘質土 (焼土・炭化物少量混)	
26	N4/ 灰色 粘質土 (炭化物・土師器片少量混)	
27	10Y5/1 灰色 極細砂	
28	10YR6/2 灰黄褐色 極細砂	
29	7.5Y6/2 オリーブ灰色 粘質土 (焼土多く混)	
30	7.5Y5/6 明褐色 焼土層	
31	10YR3/2 黒褐色 砂泥 (焼土・炭化物少量混、土器微量含む、φ1~1.5cm礫少量混)	
32	10YR3/3 暗褐色 砂泥 (焼土・炭化物少量含む、土器微量含む)	
33	10YR4/3 にぶい黄褐色 粗砂 (炭化物少量含む)	
34	10YR4/4 褐色 細砂 (鉄分沈殿)	
35	10YR3/2 黒褐色 砂泥 (粗砂混、焼土・炭化物多量混)	
36	10YR4/3 にぶい黄褐色 粗砂 (粘質、焼土・炭化物少量混)	
37	10YR4/4 オリーブ褐色 砂泥 (粗砂・焼土・炭化物微量混)	
38	2.5Y4/4 オリーブ褐色 粗砂	
39	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 砂泥	
40	7.5Y5/1 灰色 砂泥 細砂混	
41	2.5Y6/2 灰黄色 細砂	
42	2.5Y6/3 にぶい黄色 細砂	
43	10YR5/3 にぶい黄褐色 中砂	
44	10YR5/3 にぶい黄褐色 微砂 (鉄分少量沈殿)	
45	5Y5/3 灰オリーブ色 細砂	
46	2.5Y6/1 黄灰色 極細砂	
47	10Y4/1 灰色 泥砂	
48	10Y5/1 灰色 極細砂	
49	7.5Y4/1 灰色 粘質土 (細砂混)	
50	10YR6/2 灰黄褐色 細砂	
51	10YR4/1 褐色 粘質土 (焼土・炭化物少量混)	
52	7.5Y1.7/1 炭、焼土層	
53	10YR3/2 黒褐色 砂泥 (炭化物少量含む)	
54	10YR3/4 暗褐色 砂泥	
55	10YR4/2 灰黄褐色 粘質土	
56	10YR2/1 黒色 炭化物層 (5YR4/4 にぶい赤褐色 焼土層含む)	
57	2.5Y5/1 黄灰色 砂泥 (焼土・炭化物少量混)	
58	10YR5/3 にぶい黄褐色 粘質土	
59	10Y4/1 灰色 粘質土 (鉄分少量沈殿)	
60	7.5YR4/4 褐色 焼土層	
61	10YR4/4 褐色 砂泥	
62	7.5Y4/1 灰色 粘質土 (細砂混)	
63	7.5Y4/1 灰色 粘質土 (10Y6/1 灰色 粘土ブロック混)	
64	2.5Y5/3 黄褐色 粘質土 (細砂混)	
65	10YR3/2 オリーブ黒色 細砂 (φ1cm礫少量混)	
66	10YR3/2 オリーブ黒色 粘質土 (φ1cm未満礫多混)	
67	2.5Y4/3 オリーブ褐色 中砂 (φ0.5cm礫多混)	
68	2.5GY4/1 暗オリーブ灰色 極細砂	
69	10YR5/2 灰黄褐色 中砂	
70	10Y5/1 灰色 粘質シルト	
71	7.5Y2/3 黒色 粗砂	
72	10Y3/1 オリーブ黒色 粘土 (小礫多混)	
73	N3/ 暗灰色 粘土 (粘質)	
74	7.5Y4/1 灰色 粘質土+小礫	
75	10YR4/1 褐灰色 粗砂	
76	7.5YR4/2 褐灰色 粗砂	
77	5Y5/3 灰オリーブ色 細砂~微砂	
78	10YR3/3 暗褐色 粘質土	
79	N5/ 灰色 粘質土 (細砂混)	
80	2.5Y4/1 黄灰色 粘質土 (焼土・炭化物少量混)	
81	10YR3/1 黒褐色 粗砂 (φ1cm未満礫混)	
82	10YR4/1 褐灰色 砂泥 (土器片少量混)	
83	10YR4/3 にぶい黄褐色 粘質土	
84	黒色 炭化物層	
85	2.5Y4/2 暗灰黄色 砂泥	
86	2.5Y6/4 にぶい黄色 極細砂	
87	2.5Y5/3 黄褐色 極細砂 (鉄分少量沈殿)	
88	2.5GY4/1 暗オリーブ灰色 粘質土 (粘質強)	
89	5GY4/1 暗オリーブ灰色 泥砂	
90	7.5GY3/1 暗緑色 粘質土	
91	N3/ 暗灰色 粘質土	
92	7.5Y5/6 明褐色 細砂	
93	5Y6/1 灰色 粘土 (粗砂混)	
94	7.5GY3/1 暗緑色 粘質土	
95	10Y4/2 オリーブ灰色 粘質土	
96	5Y5/3 灰オリーブ色 細砂~微砂	

2面整地層（厚さ0.1～0.2m）までが淀城期である。以下は淀城以前の大坂街道および町屋に関する遺構面（第3・4面）となる。おおよそ調査区南端から北へ東壁で4.5m、西壁で8.5mを結ぶライン以东は大坂街道の路面整地が幾重にも重なっており、以西は町屋に関する整地となっている。町屋部分はある程度部分的にでも捉えられる遺構面を第3面・第4面として調査を行ったが、面的に整地が行われた街道西側のC1区とは様相が異なり、それぞれ個別に盛土が行われ遺構が積み重ねられていった様相を呈している。工事掘削深内ではいわゆる地山には達しなかった（図47）。

1) 第1面の遺構（図45、図版18-3）

第1面は、全面が淀城期の東曲輪にあたっている。第2面を厚く砂層（7～9層）で覆い、上面は砂礫・粗砂（4・6層）を入れて叩き締め路面状に仕上げる。第1面北半には平行する石垣を3条（石垣1～3）、溝1条（溝6）を検出した。

石垣1～3（図48） 調査区の北半で検出した南北方向の平行する3条の石垣である。いずれも

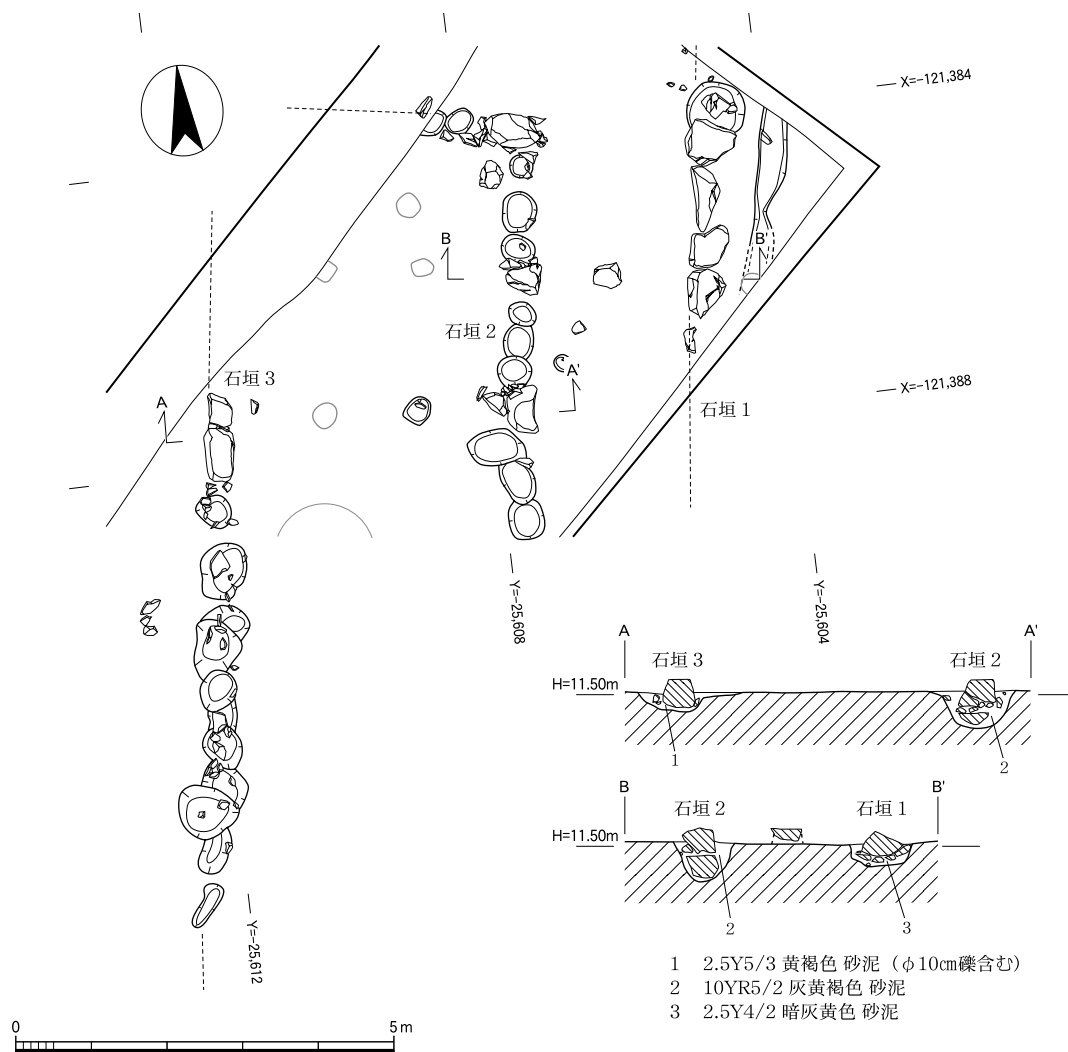


図48 C2区第1面石垣1～3実測図（1：50）

路面状整地面の上面に築かれており、座標北に対して約5度東に振れる。西の石垣1は西面する3.3m分を検出した。据えられた4石と石の据付け痕跡である。南北両端は調査区外へ延びる。中央の石垣2は東面する南北方向の6m分と北端で直角に西に折れ北面する東西方向の1.5m分を検出した。3石以外は石の据付け痕跡のみであった。南北方向の南端および東西方向の西端はそれぞれ調査区外へ延びる。東の石垣3は西面する南北7.5m分を検出、北端の2石以外はいずれも石の据付け痕跡であった。南北両端は調査区外へ延びる。

石垣2東面と石垣3西面との幅は4.4m、石垣2東面と石垣1西面間の幅は2.0mである。図示したように石垣2と石垣3は一体の構造物と考えられ、石垣1はこれに対面するものと考えられる。

溝5 石垣1の0.7m東にほぼ平行するように検出した南北方向の溝である。幅0.4m、深さ0.2mである。南北両端は調査区外へ延びており、石垣3などに伴うものかどうか判断できない。

2) 第2面の遺構 (図45)

第2面も、淀城期にあたりと考えられ、C1区同様築城にあたり町屋部分を平坦に整地したものと考えられ、部分的に薄い盛土(13・14層)がなされる。北端で石垣(石垣4)を1条検出した。

石垣4 (図49) 調査区北端で検出した南西面する北西-南東方向の石垣である。方位は座標北に対し34度西へ振れる。南東端は後世に壊されており、北西は調査区外に延びる。検出した範囲では、基底石とその上に1石分を確認し、背面には長径0.05~0.1mの円礫を入れ、裏込めとしている。この裏込めが南東端の石の南東側へも回り込んで施されていることから、元来この部分で南西に折れていた可能性がある。

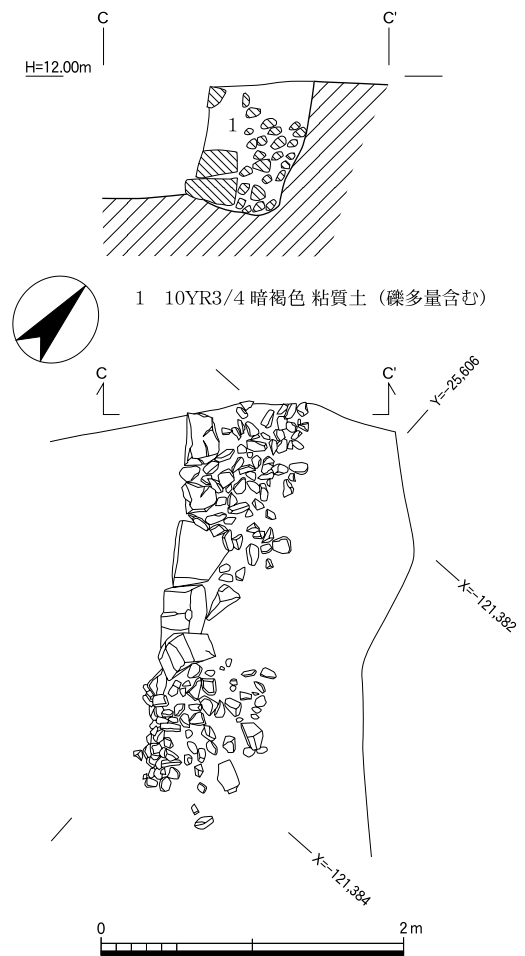


図49 C2区第2面石垣4実測図 (1:50)

3) 第3面の遺構 (図46、図版18-4)

第3面以下は淀城以前である。調査区の南1/4は大坂街道の路面にあたり、以北は街道に西面する町屋にあっている。検出した遺構は大坂街道路面、土坑、柱列、柱穴・柱礎石、集石などを検出した。

路面29 調査区南端から北へ西壁で8.5m、東壁4.5mを結ぶラインより東で検出した大坂街道の路面である。細砂の多く混じった砂泥層を叩き締め路面としており、検出範囲の南部には瓦を破碎して敷き詰めた部分もみられる。この路面に対応する東

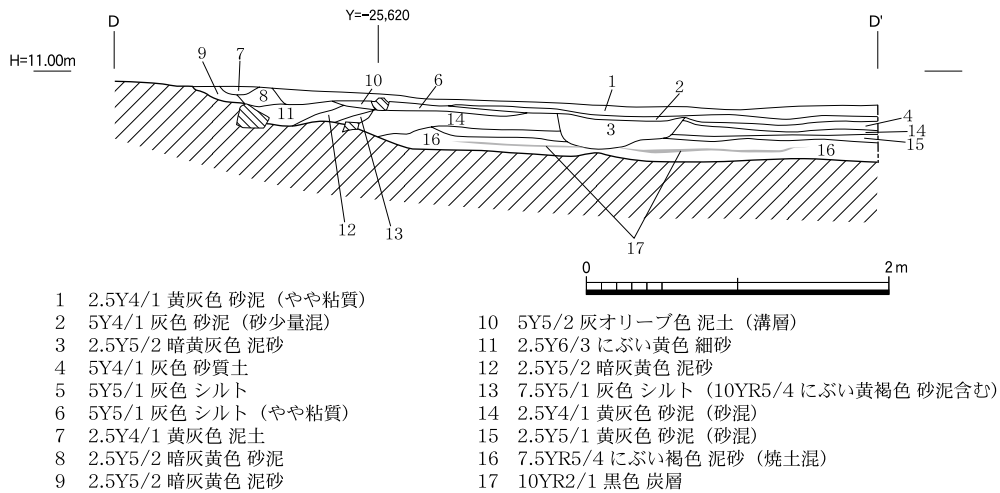


図 50 C 2 区第 3 面土坑 6 断面図 (1 : 50)

側溝は検出できなかった。

土坑 6 (図 50) 大坂街道に西面する町屋にあたり、道路東端にそって約 6 m の幅で低くなる部分である。路面より幅 1 m 分は 0.2 m 低く、東側はさらに一段 0.15 m 低くなる。一段下がる肩口には疎らながら長径 0.2 ~ 0.4 m の礫を並べる。埋土の下層には焼土や炭化物を多く含む。また、路面東端に沿った浅い部分には、長径 0.2 m の礫を南北 1 m、東西 0.5 m の方形に密に並べた施設を検出した (石囲施設 34)。土師器・瓦器・国産施釉陶磁器・焼締陶器、瓦類、壁土などが出土した。

柱列 65 調査区中央には柱穴を多く検出した。いずれも直径 0.3 ~ 0.4 m 程度の円形掘形のものである。それらのうち柱穴 9 ~ 12 は南北直線上に並び、柵のような構造物を構成していたと思われる。柱間は北から 1.5 m・1.5 m・1.8 m と不統一である。方位は座標北に対して 8 度東へ振れる。

集石 7 調査区の北東部で検出した長径 0.1 ~ 0.7 m の礫の平面的な集合体である。やや疎密の偏りをもって、南北 4.5 m の範囲に分布する。特に分布の西端は南北方向に直線的に見え、その方位はほぼ柱列 65 の方位と一致している。

4) 第 4 面の遺構 (図 46、図版 19 - 1)

第 4 面も淀城以前の遺構群である。第 3 面同様、調査区の南 1 / 4 が大坂街道の路面にあたり、以北は西面する町屋である。検出した遺構は、大坂街道路面および東側溝、土坑、溝、町屋整地、柱穴・柱礎石、溝などである。

路面 66 調査区南西端から北へ北西壁 9.5 m、南東壁 4.5 m を結ぶラインより東で検出した大坂街道の路面である。小礫が少量混じる細砂を叩き締めて路面としている。

溝 35 路面 66 に伴う東側溝である。幅は 0.4 ~ 0.5 m、深さは 0.1 m 前後である。検出範囲内の北部、後述する町屋整地 67 の土間 51 の前面部分には、溝の東西両肩に長径 0.1 ~ 0.2 m の礫を置いて、護岸をしている。この部分に板を渡して溝蓋をしたと考えられる。

町屋 67 (図 51) 路面 66・溝 35 に西面する一連と考えられる整地である。奥行き (東西) は

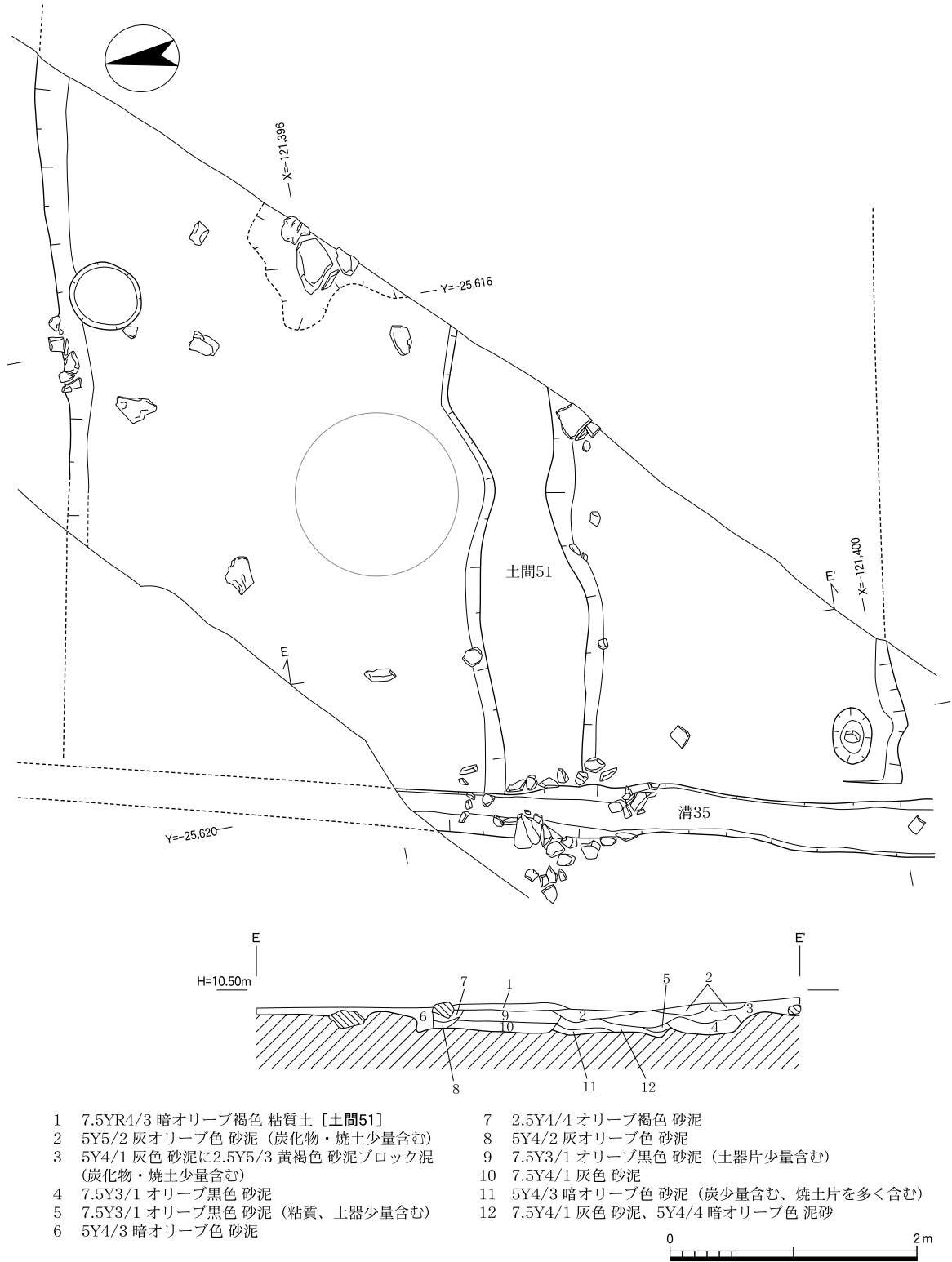


図 51 C 2 区第 4 面町屋 67 実測図 (1 : 50)

不明であるが、間口（南北）は 6.5 m 前後の範囲で、深さ約 0.2 m 掘り下げて砂泥を入れる。その上面のほぼ中央に、路面に直交して幅 0.9 ~ 1.1 m、厚さ 0.05 m の粘質土を貼り付けて叩き締め、東西方向の土間（土間 51）を設けている。土師器・国産施釉陶磁器・焼締陶器、土製品や鉄製品、砥石などが出土している。平安時代から室町時代に至る土器類も多く含んでいる。

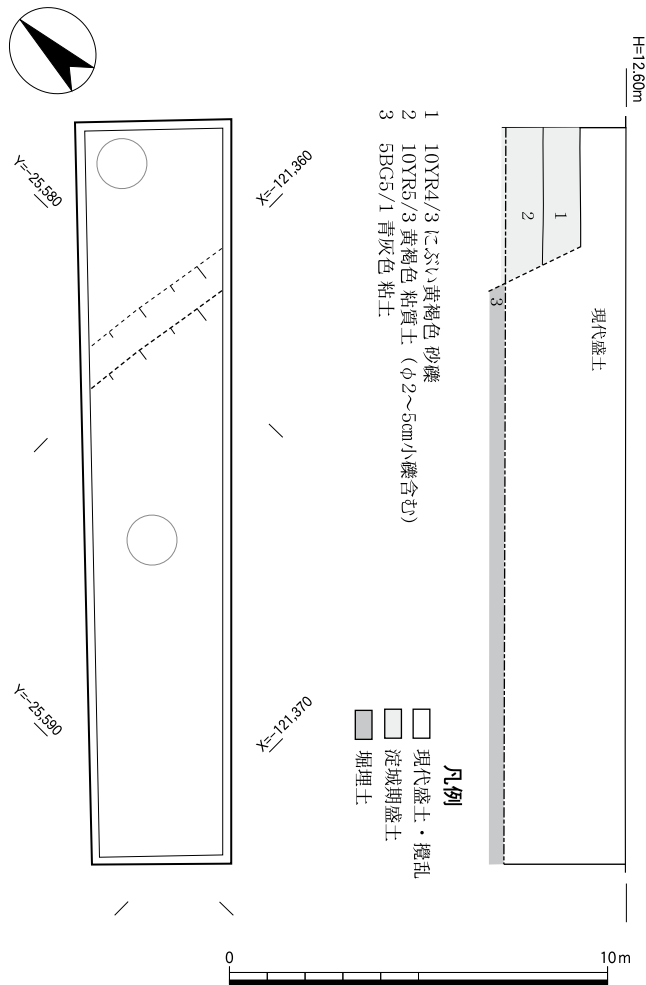


図 52 C 3 区実測図 (1 : 200)

調査区の北部で検出した土坑（土坑 39～42）には、方形で焼土や炭化物を含むものが多いが、部分的な検出で詳細は不明である。

(11) C 3 区の調査 (図 52)

淀城期の東曲輪北側の外堀とその北辺にあたる。調査区は長辺 19.5 m、短辺 4 m の方形である。調査前の地表面の標高は 12.6 m 前後で、厚さ 0.7 m 前後の現代盛土層を除去すると、大半は堀部分にあたり、その調査区北東端では淀城期の盛土層と考えられるにぶい黄褐色砂礫層となる。

上面は既存建物の基礎などによる攪乱で遺構の残存状況が良くなかったため、工事掘削深まで重機で掘り下げた断面観察を行った。調査区の南大半は中堀にあっており、北辺の陸部の立ち上がりを調査区北東壁の北端から 4.3 m の地点で確認した。

註

- 1) 調査 6 (表 1) では、天守台の外周部に巡らされている U 字溝を検出、1 つの大きさは長さ 0.75～1.3 m、幅 0.3 m、高さ 0.18 m であった (文献 1・3)。この調査時に素材について分析が行われ、コンクリート化合物ではないことが確かめられた (文献 2)。また、調査 20 の B 3 区の内堀埋土からも、長さ 0.41 m、幅 0.36 m、高さ 0.28 m の同質のものが 1 点出土している (文献 17)。なお、石材については、文献 1 では凝灰岩製、文献 2 では粘板岩系、文献 17 では礫岩とされている。

4. 遺 物

(1) 遺物の概要 (表3)

遺物は、整理用コンテナにA1区1箱、A2区3箱、B1区8箱、B2区5箱、B3区3箱、B4区4箱、B5区27箱、C1区65箱、C2区31箱、C3区1箱、それぞれ調査時に各調査区より出土した。その他に、調査時に抽出した金属製品1箱、木製品6箱がある。内訳では瓦類が圧倒的に多く、土器類がこれに次ぐ。出土遺物の時期は、おおまかに平安時代、鎌倉時代から室町時代、桃山時代から江戸時代初期、江戸時代前期以降の各時期にわたっており、江戸時代前期以降の遺物が多い。これらの中から、報告用に各調査区より抽出したため、土器類8箱、瓦類14箱、金属製品1箱、石製品・土製品1箱、木製品1箱、調査終了時よりも計25箱増加している。

平安時代の遺物は、淀城以前・淀城期の遺構・層などに混入して出土した。土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦類などがある。

鎌倉時代から室町時代の遺物は、淀城以前・淀城期の遺構・層など、特に淀城期の盛土層から出土した。土師器、須恵器、瓦器、施釉陶器、輸入磁器、瓦類などがある。

桃山時代から江戸時代初期（淀城以前）の遺物は、特にC1・2区の町屋関係遺構および整地層などから出土した。土師器、瓦器、国産施釉陶磁器、焼締陶器、瓦類、銭貨、金属製品、土製品、木製品などがあり、瓦類が多い。

江戸時代前期以降（淀城期）の遺物は、各調査区淀城期の堀・盛土ほか各遺構から出土した。土師器、瓦器、国産施釉陶磁器、焼締陶器、瓦類、銭貨、金属製品、木製品、石製品など多岐にわたり、量的にも多い。

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、 灰釉陶器、瓦類				
鎌倉時代 ～室町時代	土師器、須恵器、瓦器、施 釉陶器、輸入磁器、瓦類				
桃山時代～ 江戸時代初期	土師器、瓦質土器、施釉陶 器、焼締陶器、瓦類、銭貨、 金属製品、木製品、土製品、 石製品		土師器104点、国産施釉陶磁器47 点、焼締陶器5点、輸入磁器1点、 瓦質土器3点、焼塩壺1点、瓦29 点、金属製品53点、木製品14点、 土製品23点、石製品8点		
江戸時代前期 以降	土師器、施釉陶器、焼締陶 器、染付、瓦類、銭貨、金 属製品、木製品、石製品		土師器17点、国産施釉陶磁器15点、 軟質施釉土器2点、靱鉢1点、瓦 47点、金属製品7点、木製品1点		
合 計		180箱	378点 (12箱)	0箱	168箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後に遺物を抽出したため、出土時より25箱多くなっている。

(2) 土器類 (図 53 ～ 56、図版 20 ～ 23、付表 1)

土器類は各調査区より出土したが、比較的良好な出土状況と認識した土器群から抽出して掲載した。平安時代や鎌倉から室町時代の土器類も各調査区の遺構や層に混入して多くみられたが、本報告では除外した。掲載した各土器の詳細は観察表 (付表 1) にまとめた。

B 1 区土坑 7 出土土器 (図 53 - 1 ～ 9、図版 20) 土師器、国産施釉陶器などが出土した。特に土師器皿は完形のもものがまとまって検出した。土師器皿 (1 ～ 9) は小型で手づくねのもの (1・2)、やや厚手で口径 10 cm 前後のもので圈線を巡らすもの (3・4・6) と巡らせないもの (5・7)、薄手で口縁部が短く立ち上がる口径 12 cm 前後のもの (8・9) などがある。口縁端部に油煙が付着しており、灯明皿として使用されたものが多い。

B 1 区土坑 24 出土土器 (図 53 - 10 ～ 17、図版 20) 土師器、国産施釉陶器などが出土した。土師器皿 (10 ～ 14) はいずれも口径 10 ～ 11 cm 前後で、内面に圈線を巡らせる。口縁部の立ち上がりやや長い 10 と短い 11 ～ 14 がある。施釉陶器は、瀬戸・美濃皿 (15) ・香炉 (17) と唐津丸椀 (16) がある。香炉とみる 17 は底部のみで、平坦な底面に小さく丸い脚が 3 箇所つく。この 3 箇所の脚の間に胎土目痕が 3 箇所ある。

B 2 区土坑 11 出土土器 (図 53 - 18 ～ 30、図版 20) 土師器、軟質施釉土器、国産施釉陶磁器などが出土した。土師器には皿 (18 ～ 21)、羽釜 (23) などがある。土師器皿のうち、18 は口縁端部を面取りする小型厚手のものである。19 ～ 21 は内面に圈線を巡らせる。羽釜 (23) は厚手、小型のもので、体部中央に突帯を巡らせる。軟質施釉土器皿 (22) は灯明皿で、内面に圈線を巡らせ、横方向のハケメを 2 条施す。国産施釉陶磁器には、白磁壺蓋 (24)、伊万里染付端反椀 (25) ・輪花皿 (26) ・丸椀 (27・28)、唐津刷毛目椀 (29)、京焼丸椀 (30) などがある。25 は見込みに桔梗花文を描き、高台内面には「大明成化年製」の銘を書く。26 は見込みに口縁の輪花に合わせて 6 弁の花文を描く。27 は外面に型抜きによる花文を施す。28 は外面に手描きによる風景画が表現される。30 は外面に多色による花文を描き、底部高台内に「音羽」の刻印を施す。

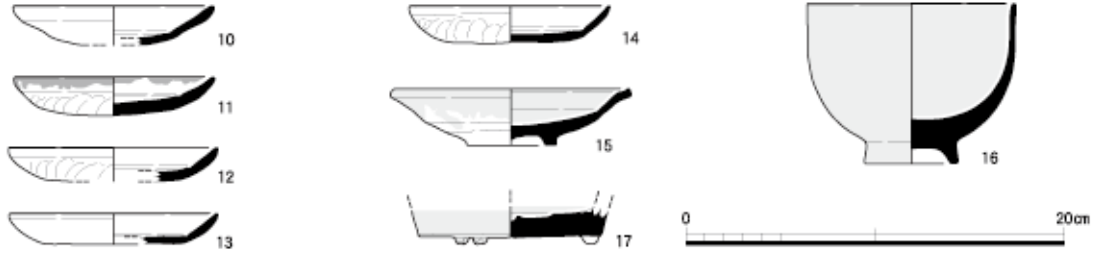
B 2 区土坑 15 出土土器 (図 53 - 31 ～ 44、図版 20) 土師器、軟質施釉土器、国産施釉陶磁器、鞆鉢などがある。土師器皿 (31 ～ 37) には小型手づくねのもの (31)、口径 8 ～ 9 cm で内面に圈線の巡らないもの (32・33)、口径 10 ～ 11 cm で圈線の巡るもの (34 ～ 37) がある。軟質施釉土器皿 (38) は灯明皿で、内面に圈線を巡らせ、横方向のハケメを 2 条施す。国産施釉陶磁器には、唐津長石釉の火入 (39)、伊万里染付丸椀 (40・41) ・皿 (42・43) などがある。40・41 は外面に手描きによる草花文、風景文を施し、高台内面に「大明年製」と銘を書く。染付皿 42 は草花・竹文を口縁部内面にスタンプし、外面には記号文を手描きする。43 は縁折れの皿で、内外面とも丁寧に幾何学文様や花鳥文などを手描きする。鞆鉢 (44) は底部を糸切りするもので、口縁端部と底部外縁部に重ね焼いた痕跡が明瞭に残る。

C 1 区第 3 面地業 53 出土土器 (図 54 - 45 ～ 49、図版 21) 地業 53 は底部に瓦敷が施されており、出土遺物の大半は瓦片であった。少量の土器類には土師器、国産施釉陶磁器、焼締陶器

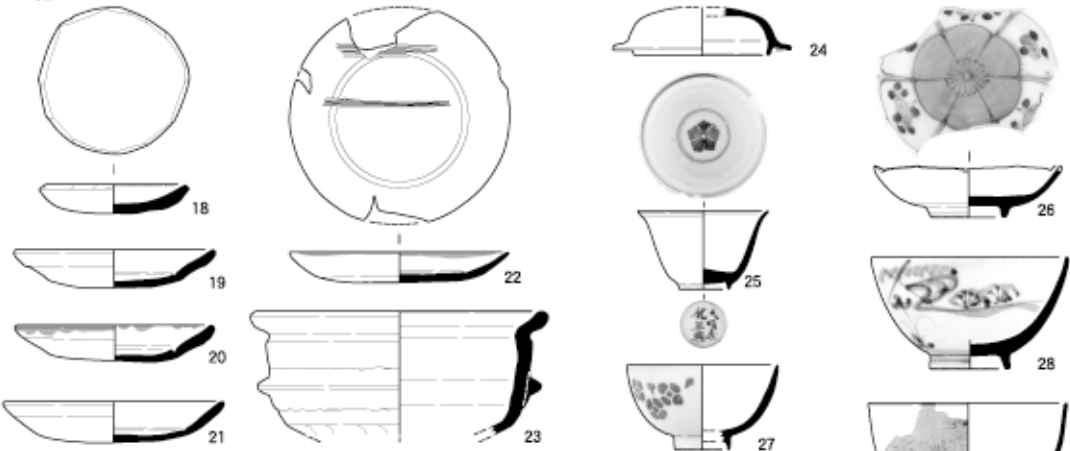
B1区土坑7



B1区土坑24



B2区土坑11



B2区土坑15

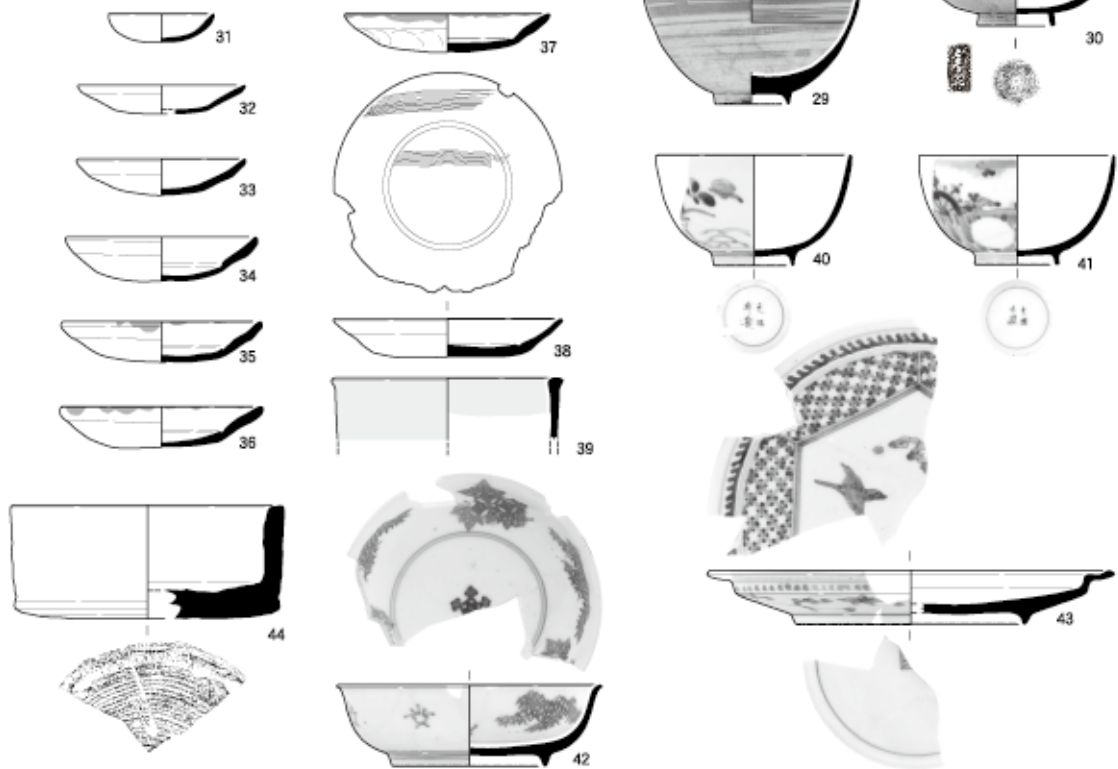
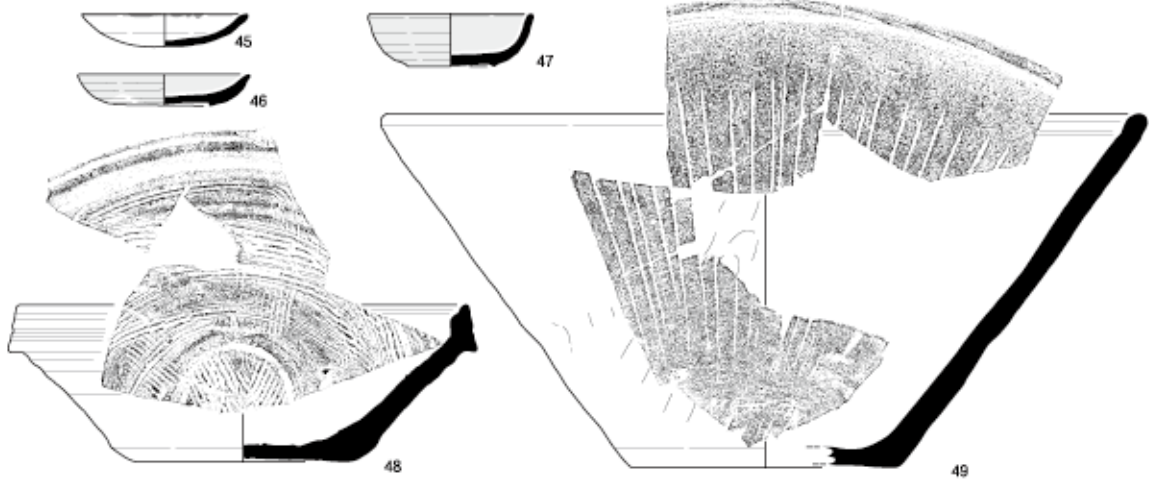
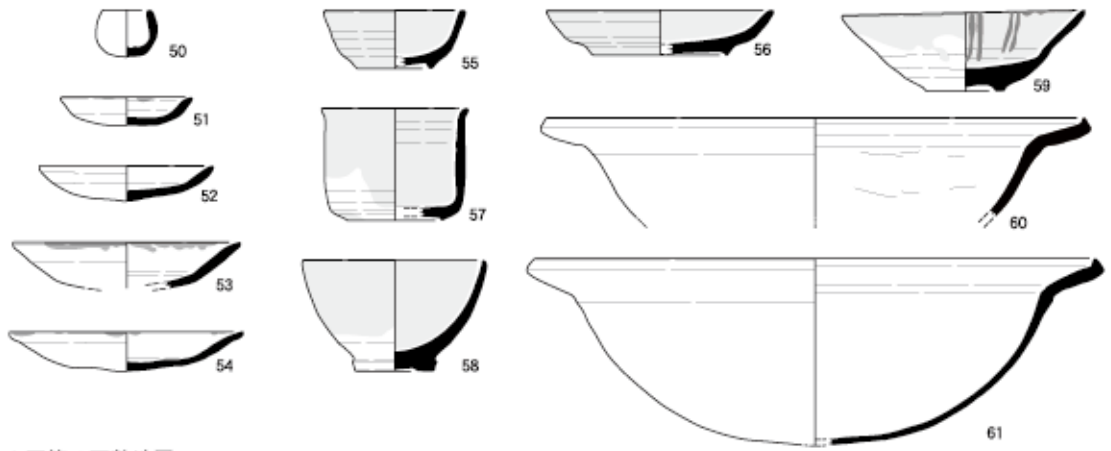


图 53 土器实测图 1 (1 : 4)

C 1 区地業53



C 1 区第 3 面整地層



C 1 区第 4 面整地層

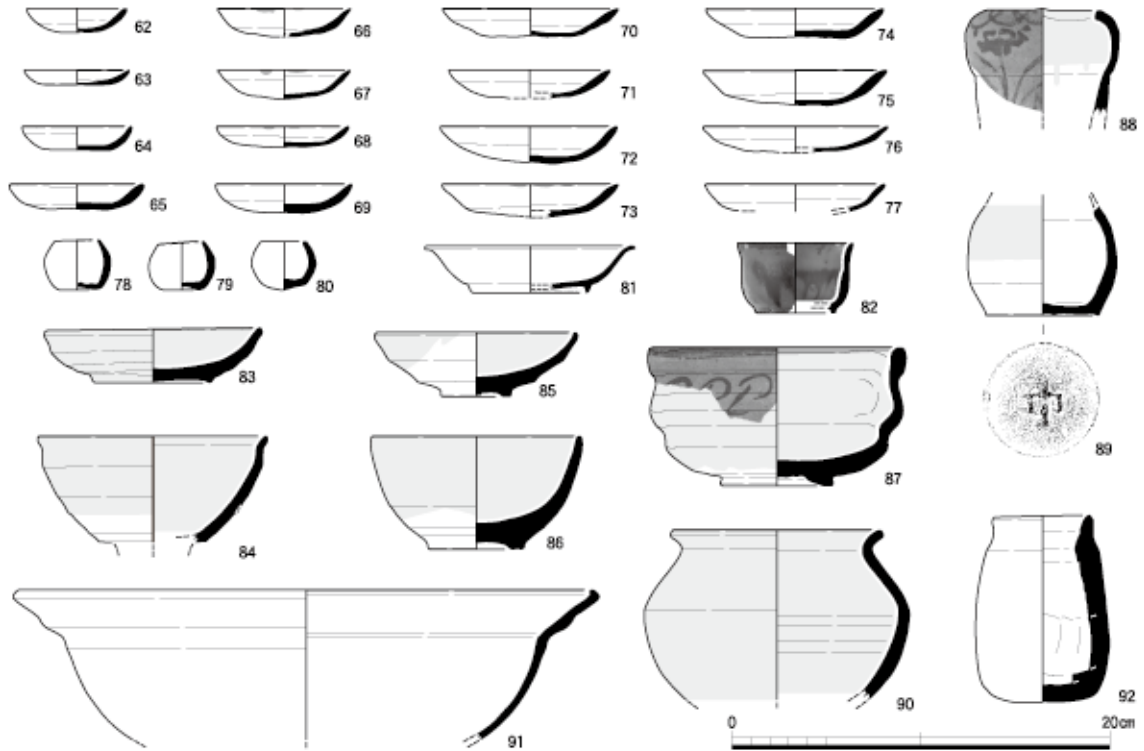


图 54 土器实测图 2 (1 : 4)

などがある。土師器皿（45）は内面に圏線の巡らない、やや厚手のものである。国産施釉陶磁器には瀬戸・美濃の灰釉丸皿（46・47）がある。焼締陶器はいずれも播鉢（48・49）である。48は10本単位の播り目を縦方向の後に横方向に施す備前のもの。49は1本単位の播り目を縦方向に施す丹波の大型品である。

C1区第3面整地層出土土器（図54－50～61、図版21、表4）第3面整地層の出土土器は総破片数90片、その内訳は土師器47.8%、瓦器7.8%、国産施釉陶磁器32.2%、焼締陶器10.0%、輸入陶磁器2.2%である。詳細は表4に示した。土師器には小壺（50）、皿（51～54）、

表4 C1区第3面整地層出土土器の構成（破片数） 表5 C1区第4面整地層出土土器の構成（破片数）

器種	器形	破片数	比率（%）		
土師器	皿	32	74.4%	47.8%	
	鍋・釜	10	23.3%		
	炉・火鉢	0	0.0%		
	他・不明	1	2.3%		
	小計	43	100.0%		
瓦器	炉・火鉢	5	71.4%	7.8%	
	鉢	2	28.6%		
	他・不明	0	0.0%		
	小計	7	100.0%		
国産施釉陶磁器	瀬戸・美濃	碗・皿	8	100.0%	27.6%
		鉢・向付	0	0.0%	
		壺・瓶	0	0.0%	
		盤・大皿	0	0.0%	
		他・不明	0	0.0%	
	小計	8	100.0%		
	唐津	碗・皿	16	76.2%	72.4%
		鉢・向付	0	0.0%	
		壺・瓶	2	9.5%	
		盤・大皿	3	14.3%	
		他・不明	0	0.0%	
	小計	21	100.0%		
伊万里	碗・皿	0	-	0.0%	
	鉢・大皿	0	-		
	壺・瓶	0	-		
	他・不明	0	-		
小計	0	-			
京焼・他	碗・皿	0	-	0.0%	
	鉢・大皿	0	-		
	壺・瓶	0	-		
	他・不明	0	-		
小計	0	-			
国産施釉陶磁器計		29	100.0%	32.2%	
焼締陶器	備前	甗	1	20.0%	55.6%
		壺	0	0.0%	
		播鉢	4	80.0%	
		盤・大皿	0	0.0%	
		他・不明	0	0.0%	
	小計	5	100.0%		
	信楽（伊賀）	甗	0	0.0%	22.2%
		壺	0	0.0%	
		播鉢	2	100.0%	
		盤・大皿	0	0.0%	
他・不明		0	0.0%		
小計	2	100.0%			
丹波	甗	0	0.0%	22.2%	
	壺	0	0.0%		
	播鉢	1	50.0%		
	盤・大皿	1	50.0%		
	他・不明	0	0.0%		
小計	2	100.0%			
他・不明	甗	0	-	-	
	壺	0	-		
	播鉢	0	-		
	盤・大皿	0	-		
	他・不明	0	-		
小計	0	-			
焼締陶器計		9	-	10.0%	
輸入陶磁器	碗・皿	2	100.0%	2.2%	
	鉢	0	0.0%		
	壺・瓶	0	0.0%		
	他・不明	0	0.0%		
	小計	2	100.0%		
総数		90		100.0%	

器種	器形	破片数	比率（%）		
土師器	皿	52	78.8%	45.2%	
	鍋・釜	11	16.7%		
	炉・火鉢	0	0.0%		
	他・不明	3	4.5%		
	小計	66	100.0%		
瓦器	炉・火鉢	20	74.1%	18.5%	
	鉢	7	25.9%		
	他・不明	0	0.0%		
	小計	27	100.0%		
国産施釉陶磁器	瀬戸・美濃	碗・皿	16	100.0%	41.0%
		鉢・向付	0	0.0%	
		壺・瓶	0	0.0%	
		盤・大皿	0	0.0%	
		他・不明	0	0.0%	
	小計	16	100.0%		
	唐津	碗・皿	18	78.3%	59.0%
		鉢・向付	0	0.0%	
		壺・瓶	3	13.0%	
		盤・大皿	1	4.3%	
		他・不明	1	4.3%	
	小計	23	100.0%		
伊万里	碗・皿	0	-	0.0%	
	鉢・大皿	0	-		
	壺・瓶	0	-		
	他・不明	0	-		
小計	0	-			
京焼・他	碗・皿	0	-	0.0%	
	鉢・大皿	0	-		
	壺・瓶	0	-		
	他・不明	0	-		
小計	0	-			
国産施釉陶磁器計		39	100.0%	26.7%	
焼締陶器	備前	甗	2	28.6%	100.0%
		壺	2	28.6%	
		播鉢	2	28.6%	
		盤・大皿	0	0.0%	
		他・不明	1	14.3%	
	小計	7	100.0%		
	信楽（伊賀）	甗	0	-	0.0%
		壺	0	-	
		播鉢	0	-	
		盤・大皿	0	-	
他・不明		0	-		
小計	0	-			
丹波	甗	0	-	0.0%	
	壺	0	-		
	播鉢	0	-		
	盤・大皿	0	-		
	他・不明	0	-		
小計	0	-			
他・不明	甗	0	-	0.0%	
	壺	0	-		
	播鉢	0	-		
	盤・大皿	0	-		
	他・不明	0	-		
小計	0	-			
焼締陶器計		7	100.0%	4.8%	
輸入陶磁器	碗・皿	7	100.0%	4.8%	
	鉢	0	0.0%		
	壺・瓶	0	0.0%		
	他・不明	0	0.0%		
	小計	7	100.0%		
総数		146		100.0%	

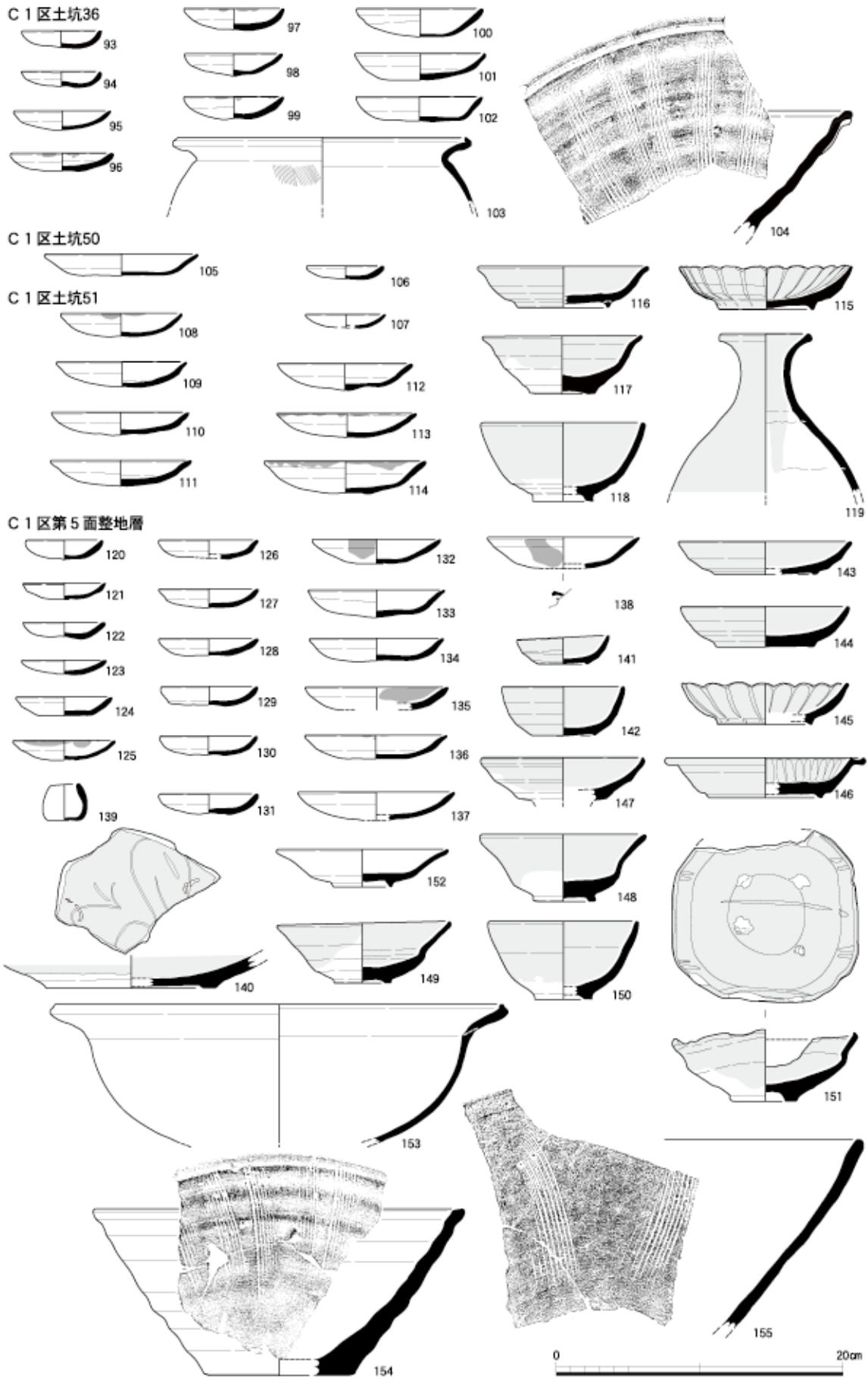


图 55 土器实测图 3 (1 : 4)

鍋 (60・61) がある。土師器皿には口径7 cm前後のもの (51)、口径9 cm前後のもの (52)、口径12 cm前後のもの (53・54) がある。国産施釉陶磁器には、瀬戸・美濃の灰釉丸皿 (55・56)・志野椀 (57)、唐津丸椀 (58)・向付 (59) などがある。58は底面に糸切痕が残る削り出し高台の丸椀である。59は口縁内面と端部に鉄絵を施す向付である。

C1区第4面整地層出土土器 (図54 - 62 ~ 92、図版21、表5) 第4面整地層の出土土器は総破片数146片、その内訳は土師器45.2%、瓦器18.5%、国産施釉陶磁器26.7%、焼締陶器4.8%、輸入陶磁器4.8%である。詳細は表5に示した。土師器には小壺 (78 ~ 80)、皿 (62 ~ 77)、鍋 (91) がある。土師器皿には小型手づくねのもの (62・63)、口径6 cm前後のもの (64)、7 cm前後のもの (65 ~ 69)、8 ~ 9 cmのもの (70 ~ 77) があり、内面に圏線の巡らないものが主体である。国産施釉陶磁器には、白磁皿 (81)、瀬戸・美濃の小杯 (82)・志野丸皿 (83)・天目椀 (84)、唐津皿 (85)・椀 (86)・沓茶椀 (87)・火入あるいは香炉 (88)・徳利 (89)・壺 (90) がある。87・88は外面に鉄絵を施す。89は底部中央に「巾」と読める文字が陽刻されている。焼塩壺 (92) は輪積み成形によるもので、刻印はない。

C1区第5面土坑36出土土器 (図55 - 93 ~ 104、図版22) 土師器、瓦器、国産施釉陶磁器、焼締土器などが出土した。土師器には皿 (93 ~ 102)、羽釜 (103) がある。土師器皿は小型手づくねのもの (93・94)、口径7 cm前後のもの (95 ~ 99)、口径9 cm前後のもの (100 ~ 102) がある。羽釜 (103) は欠損しているが、胴部下半に小さな把手の付くものと考えられる。焼締陶器には信楽の播鉢 (104) がある。端部の一端を外へ引き出し片口とし、5本単位の播り目を放射状に施す。

C1区第5面土坑50出土土器 (図55 - 105) 土師器、須恵器、瓦器、国産施釉陶磁器などがあるが、図示できたのは土師器皿 (105) のみである。口径10 cmを越える、圏線の巡らない皿である。

C1区第5面土坑51出土土器 (図55 - 106 ~ 119、図版22) 土師器、国産施釉陶磁器、焼締陶器などがある。土師器には皿 (106 ~ 114) があり、小型手づくねのもの (106・107)、口径9 ~ 10 cmのもの

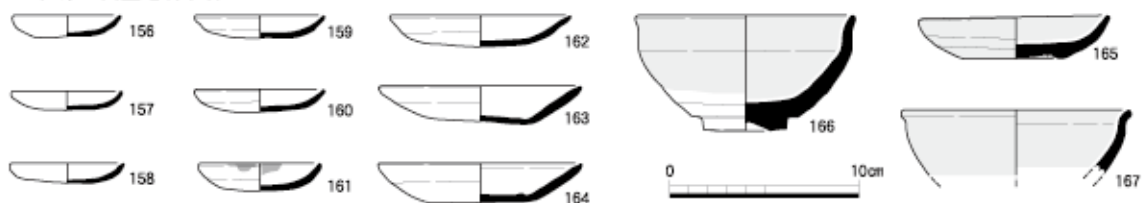
表6 C1区第5面整地層出土土器の構成 (破片数)

器種	器形	破片数	比率 (%)		
土師器	皿	128	90.1%	34.4%	
	鍋・釜	14	9.9%		
	炉・火鉢	0	0.0%		
	他・不明	0	0.0%		
	小計	142	100.0%		
瓦器	炉・火鉢	57	77.0%	17.9%	
	鉢	17	23.0%		
	他・不明	0	0.0%		
	小計	74	100.0%		
	国産施釉陶磁器	瀬戸・美濃	椀・皿		58
鉢・向付			0	0.0%	
壺・瓶			1	1.6%	
盤・大皿			1	1.6%	
他・不明			1	1.6%	
小計		61	100.0%		
唐津		椀・皿	73	97.3%	55.1%
		鉢・向付	1	1.3%	
		壺・瓶	1	1.3%	
		盤・大皿	0	0.0%	
	他・不明	0	0.0%		
小計	75	100.0%			
伊万里	椀・皿	0	-	0.0%	
	鉢・大皿	0	-		
	壺・瓶	0	-		
	他・不明	0	-		
	小計	0	-		
京焼・他	椀・皿	0	-	0.0%	
	鉢・大皿	0	-		
	壺・瓶	0	-		
	他・不明	0	-		
	小計	0	-		
国産施釉陶磁器計		136	100.0%	32.9%	
焼締陶器	備前	甕	6	31.6%	40.4%
		壺	8	42.1%	
		播鉢	5	26.3%	
		盤・大皿	0	0.0%	
		他・不明	0	0.0%	
	小計	19	100.0%		
	信楽 (伊賀)	甕	0	0.0%	44.7%
		壺	0	0.0%	
		播鉢	21	100.0%	
		盤・大皿	0	0.0%	
		他・不明	0	0.0%	
	小計	21	100.0%		
	丹波	甕	2	28.6%	14.9%
		壺	0	0.0%	
		播鉢	4	57.1%	
盤・大皿		0	0.0%		
他・不明		1	14.3%		
小計	7	100.0%			
他・不明	甕	0	-	0.0%	
	壺	0	-		
	播鉢	0	-		
	盤・大皿	0	-		
	他・不明	0	-		
小計	0	-			
焼締陶器計		47	-	11.4%	
輸入陶磁器	椀・皿	14	100.0%	3.4%	
	鉢	0	0.0%		
	壺・瓶	0	0.0%		
	他・不明	0	0.0%		
	小計	14	100.0%		
総数		413	100.0%		

(108～113)、口径10cmを越えるもの(114)がある。内面に圈線を施さない。国産施釉陶磁器には唐津菊皿(115)・皿(116・117)、朝鮮唐津徳利(119)、瀬戸・美濃丸椀(118)などがある。115・117は灰釉、116は鉄釉を施した後に灰釉を垂らしている。

C1区第5面整地層出土土器(図55-120～155、図版22、表6) 第5面整地層の出土土器は総破片数413片、その内訳は土師器34.4%、瓦器17.9%、国産施釉陶磁器32.9%、焼締陶器11.4%、輸入陶磁器3.4%である。詳細は表6に示した。土師器には皿(120～138)、小壺(139)、鍋(153)がある。土師器皿には小型手づくねのもの(120～123)、口径6～7cmのもの(124～131)、口径8～9cmのもの(132～136)、口径10cmを越えるもの(137・138)が

C1区第5面整地層下層



C2区第3面土坑6

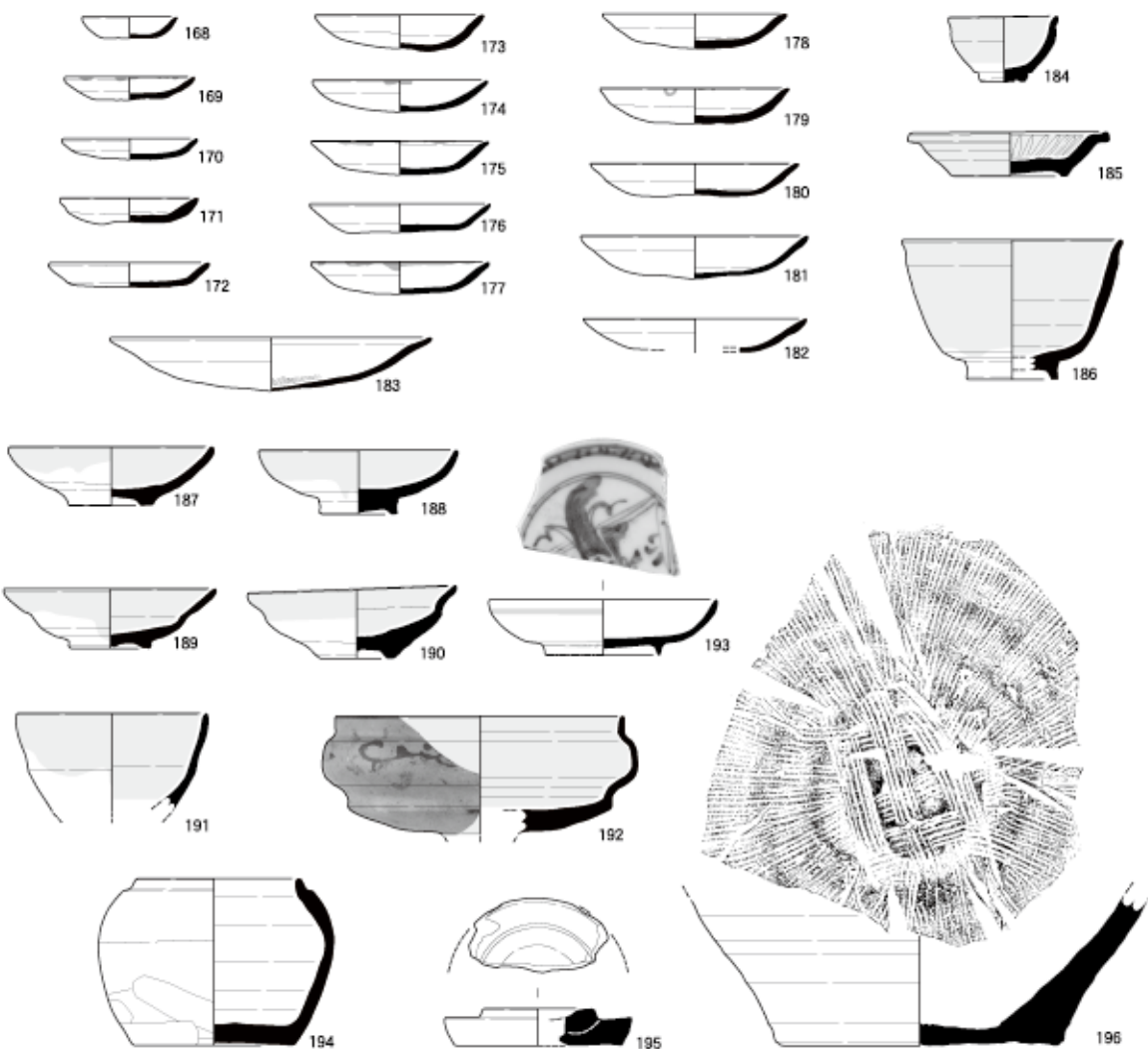


図56 土器実測図4 (1:4)

ある。138は底部外面に墨書が施されるが、破片であるため判読できない。国産施釉陶磁器には、軟質施釉陶器皿(140)、瀬戸・美濃小杯(141)・志野杯(142)・丸皿(143・144)・菊皿(145)・縁折ソギ皿(146)、唐津皿(147～149)・丸椀(150)・杳茶椀(151)などがある。140は見込みに線刻による花文様の文様を描き、外面高台外面と高台内面は釉をナデ取って濃淡をつけている。釉は還元作用により銀化する。151は内面口縁端部・口縁部・見込みに鉄絵を施すものであるが、色が失われ痕跡のみが残る。焼締陶器には信楽挿鉢(154)がある。挿り目は6本単位で放射状に施される。瓦質土器には挿鉢(155)がある。挿り目は9本単位でやや間隔をあけて放射状に施す。

C1区第5面整地層下層出土土器(図56-156～167、図版23)土師器、須恵器、瓦器、国産施釉陶磁器、焼締陶器、瓦質土器などがある。土師器には皿(156～164)があり、小型手づくねのもの(156～158)、口径6～7cmのもの(159～161)、口径9cm前後のもの(162)、口径10cmを越えるもの(163・164)がある。国産施釉陶磁器には瀬戸・美濃丸皿(165)・天目椀(166・167)がある。

C2区第3面土坑6出土土器(図56-168～196、図版23)土師器、須恵器、瓦器、国産施釉陶磁器、輸入陶磁器、焼締陶器、瓦質土器などがある。土師器には皿(168～183)があり、小型手づくねのもの(168)、口径7cmのもの(169～171)、口径8～10cmのもの(172～179)、口径10cmを越えるもの(180～182)、口径17cm前後のもの(183)がある。国産施釉陶磁器には瀬戸・美濃天目椀(184)・折縁ソギ皿(185)・丸椀(186)、唐津皿(187～190)・丸椀(191)・杳茶椀(192)などがある。184は鉄釉と灰釉、185は灰釉、186は鉄釉を施す。192は外面に鉄絵を施す。輸入陶磁器には明染付皿(193)がある。瓦質土器には壺(194)、灯火具(195)などがある。焼締陶器には信楽挿鉢(196)などがある。196は6本単位の挿り目を見込みに縦横に3条、口縁部には密に放射状に施す。

これら土器類は形態的な特徴や器種組成などから、大きく2つの時期にわけられる。B1区土坑7、C1区地業53・第3面整地層・第4面整地層・土坑36・土坑50・土坑51・第5面整地層・第5面整地層下層、C2区土坑28・土坑6出土土器は17世紀初頭の淀城以前の時期、B1区土坑24、B2区土坑11・土坑15出土土器は17世紀末から18世紀初頭の淀城期に位置付けられる。

(3) 瓦類(図57～64、図版24～27、付表2)

瓦類は丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、棧瓦、道具瓦などが各調査区から出土した。大半が現代盛土や淀城期の堀埋土などから出土したもので、江戸時代以降のものである。

1) 軒丸瓦(図57～59-197～220、図版24・25)

軒丸瓦はいずれも三巴文の周りに珠文を巡らせる。巴文は右巻きのものが主体で、左巻きのもの(211・216)は極くわずかである。三巴文には外周に圏線のあるもの(197・199・203・204・220)とないものがあり、ないものが主体的である。圏線のあるもののうち、197・220は

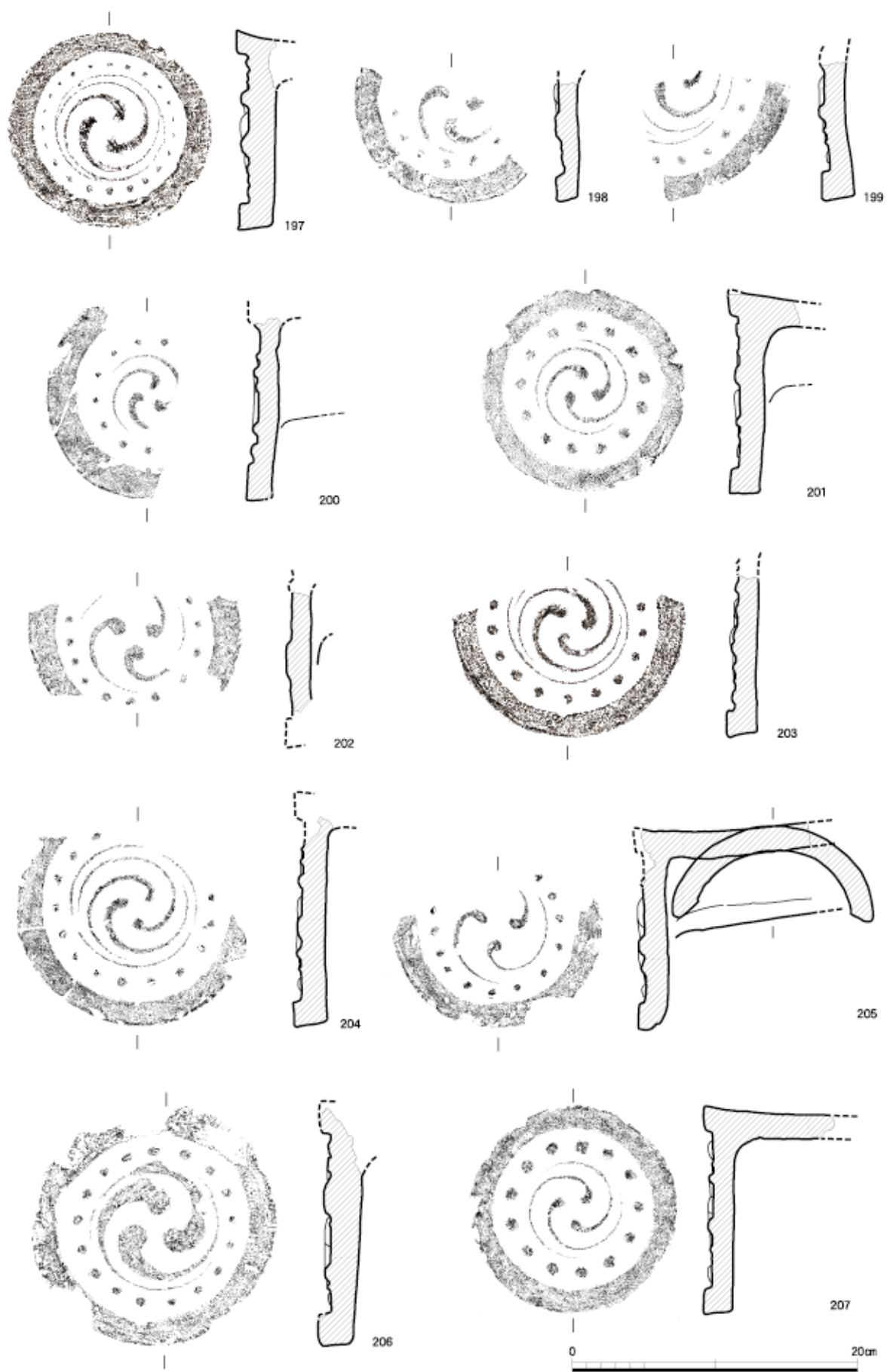


图 57 軒丸瓦拓影・実測図 1 (1 : 4)

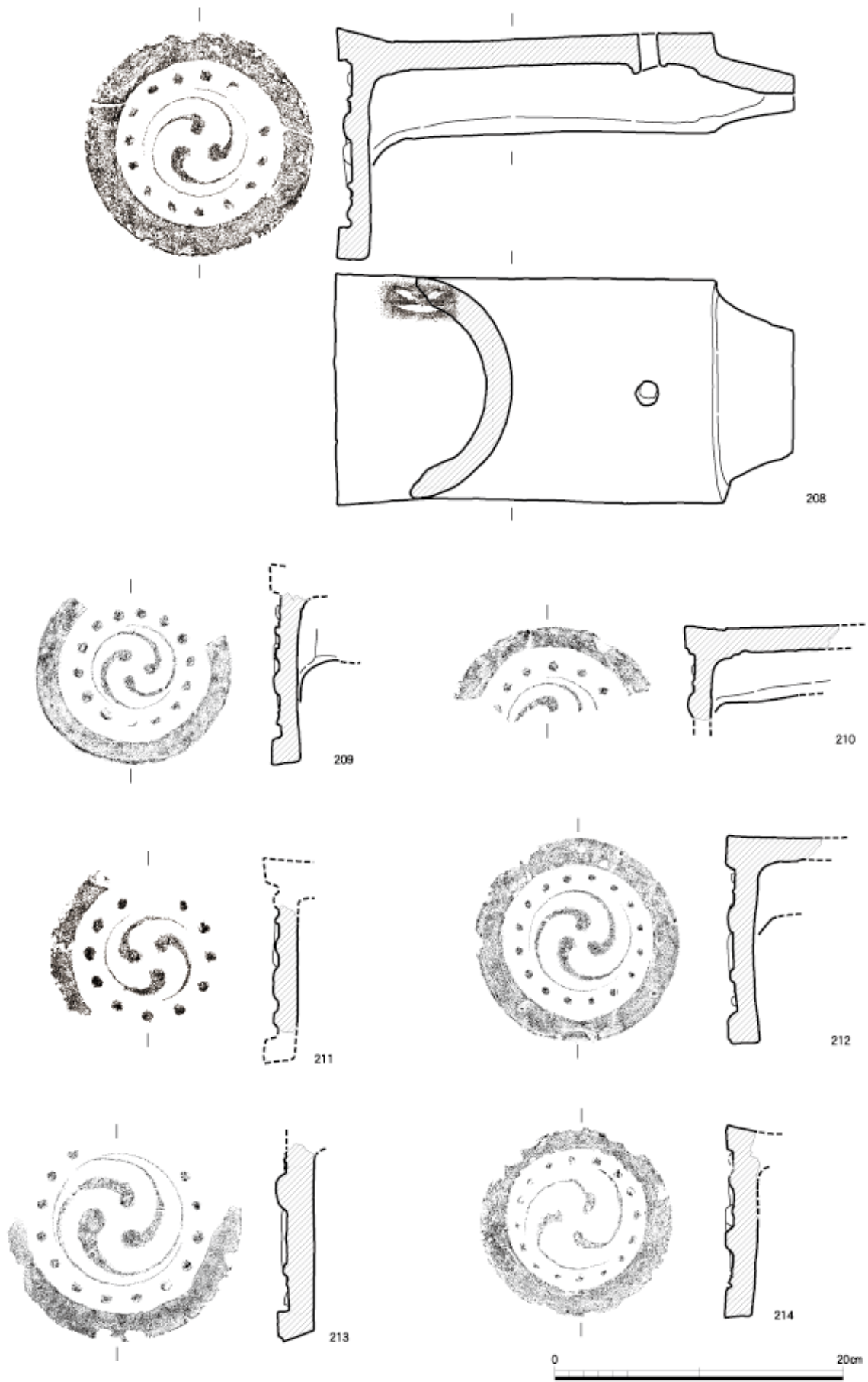


图 58 軒丸瓦拓影・実測図 2 (1 : 4)

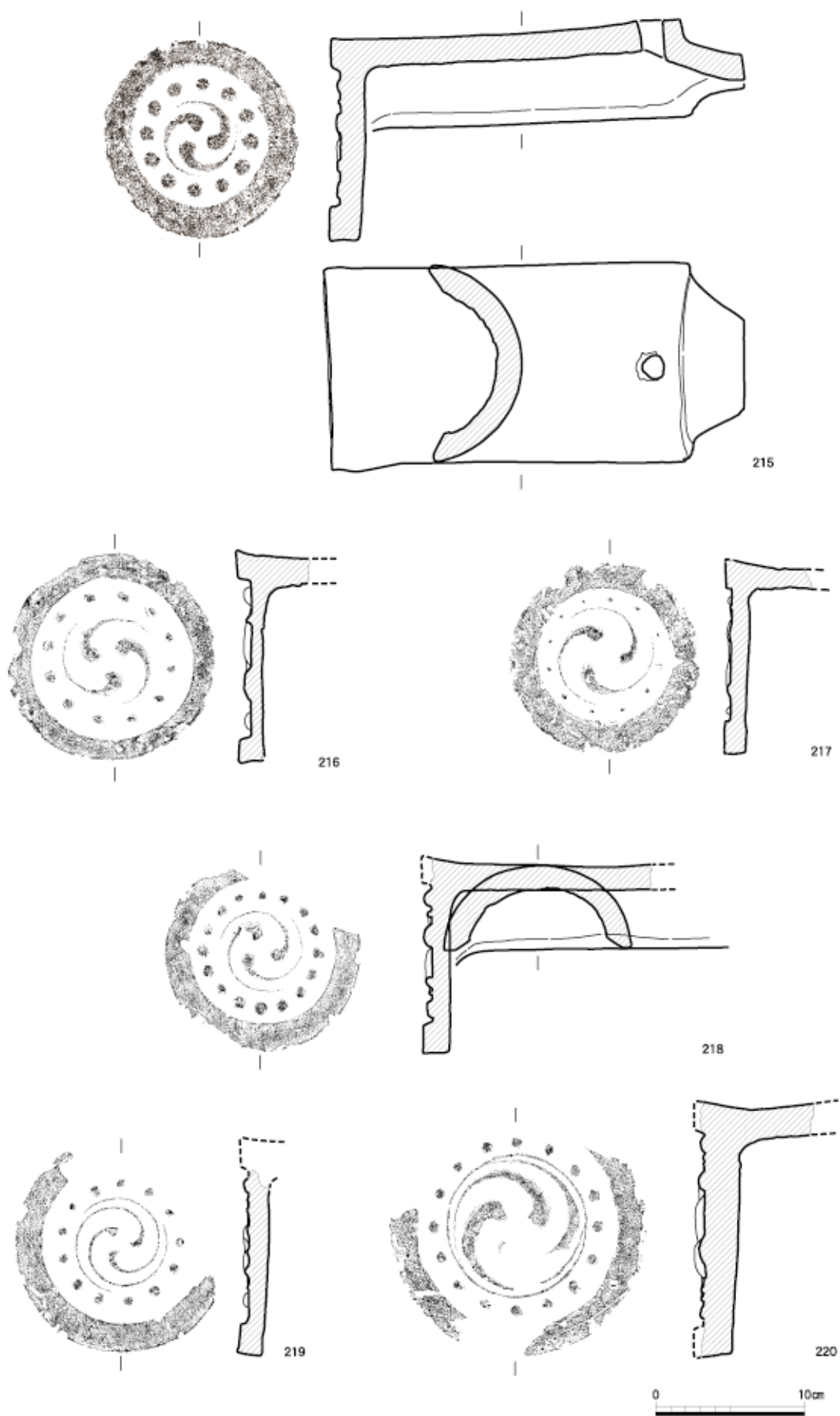


图 59 軒丸瓦拓影・実測図 3 (1 : 4)

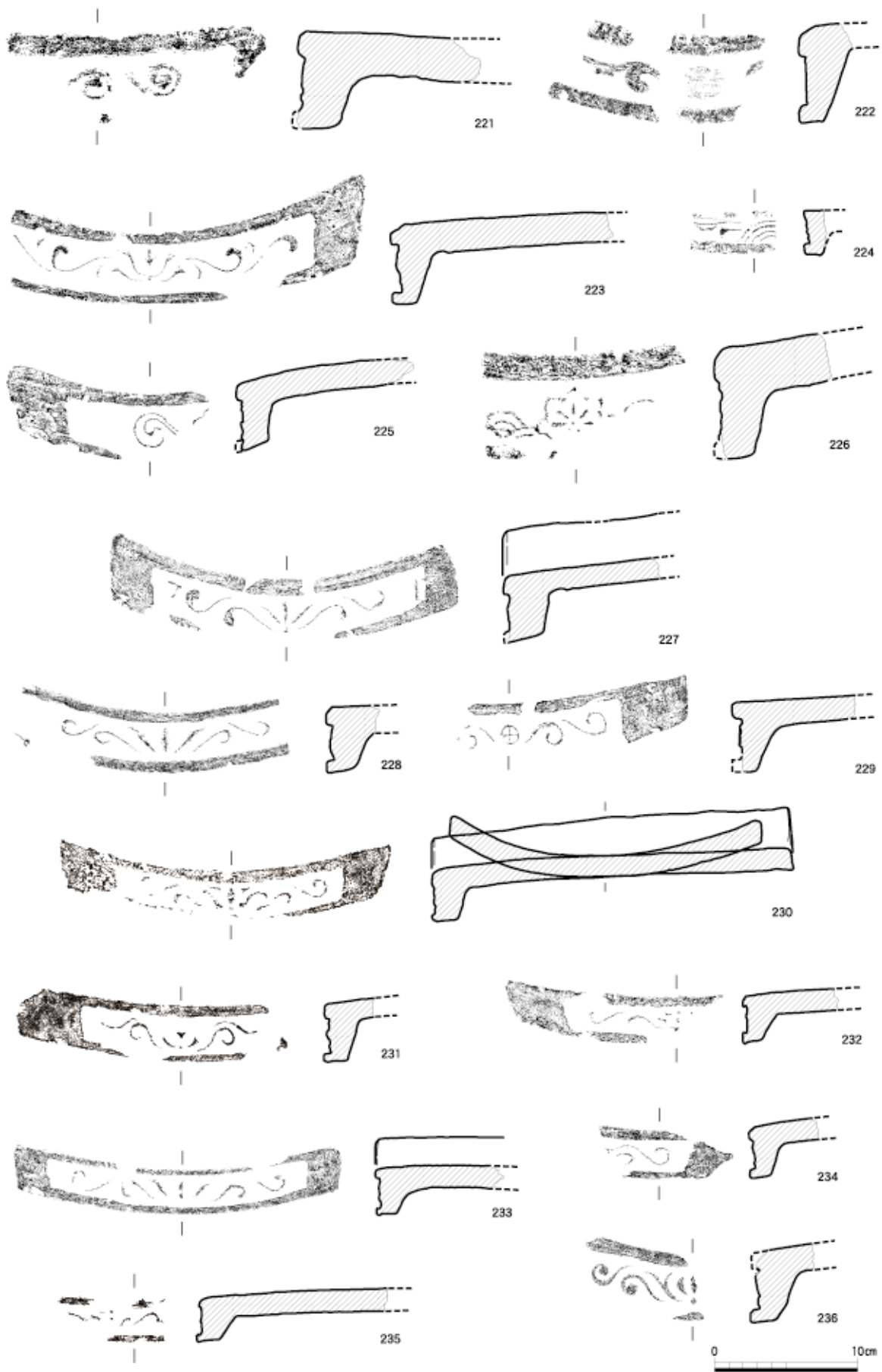


图 60 軒平瓦拓影・実測図 (1 : 4)

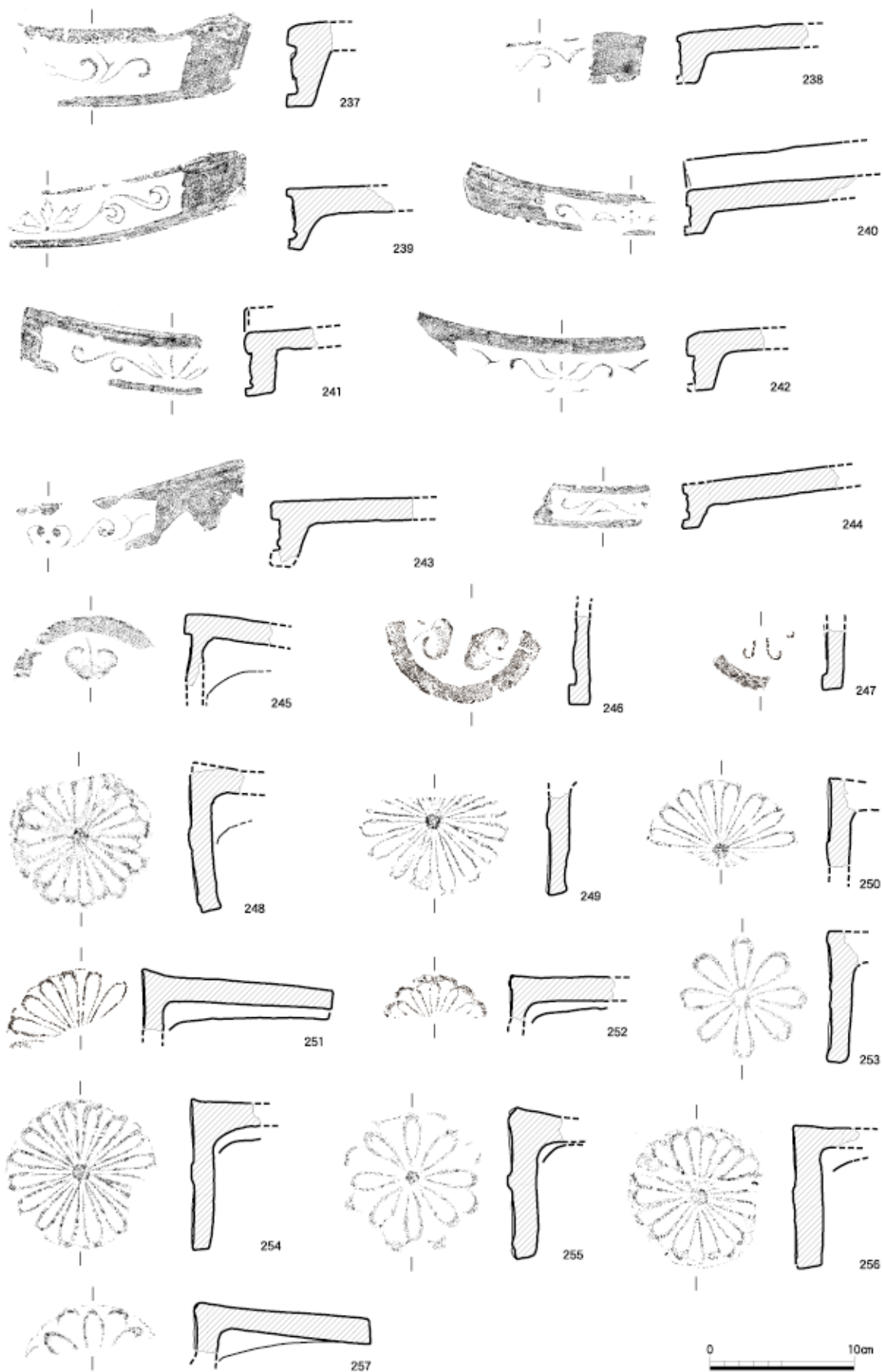


图 61 軒平瓦、棟丸瓦拓影・実測図（1：4）

巴の尻尾が長く伸びて圏線に接する。珠文は数や一つの大きさなどさまざまである。

完形のもものは丸瓦部の中央、玉縁寄りに目釘穴が開けられる (208・215)。208は丸瓦部凸面の軒寄りの側縁に「K」字状の記号が削り込まれる。

2) 軒平瓦 (図 60・61 - 221 ~ 244、図版 25・26)

軒平瓦は大半が均整唐草文である。中心飾りは葉形が多く、花形 (226) や「丸に十」(229)、上向き「C」字形 (243) などがある。唐草文のほかに立浪文 (224) がある。瓦当面にはハナレ

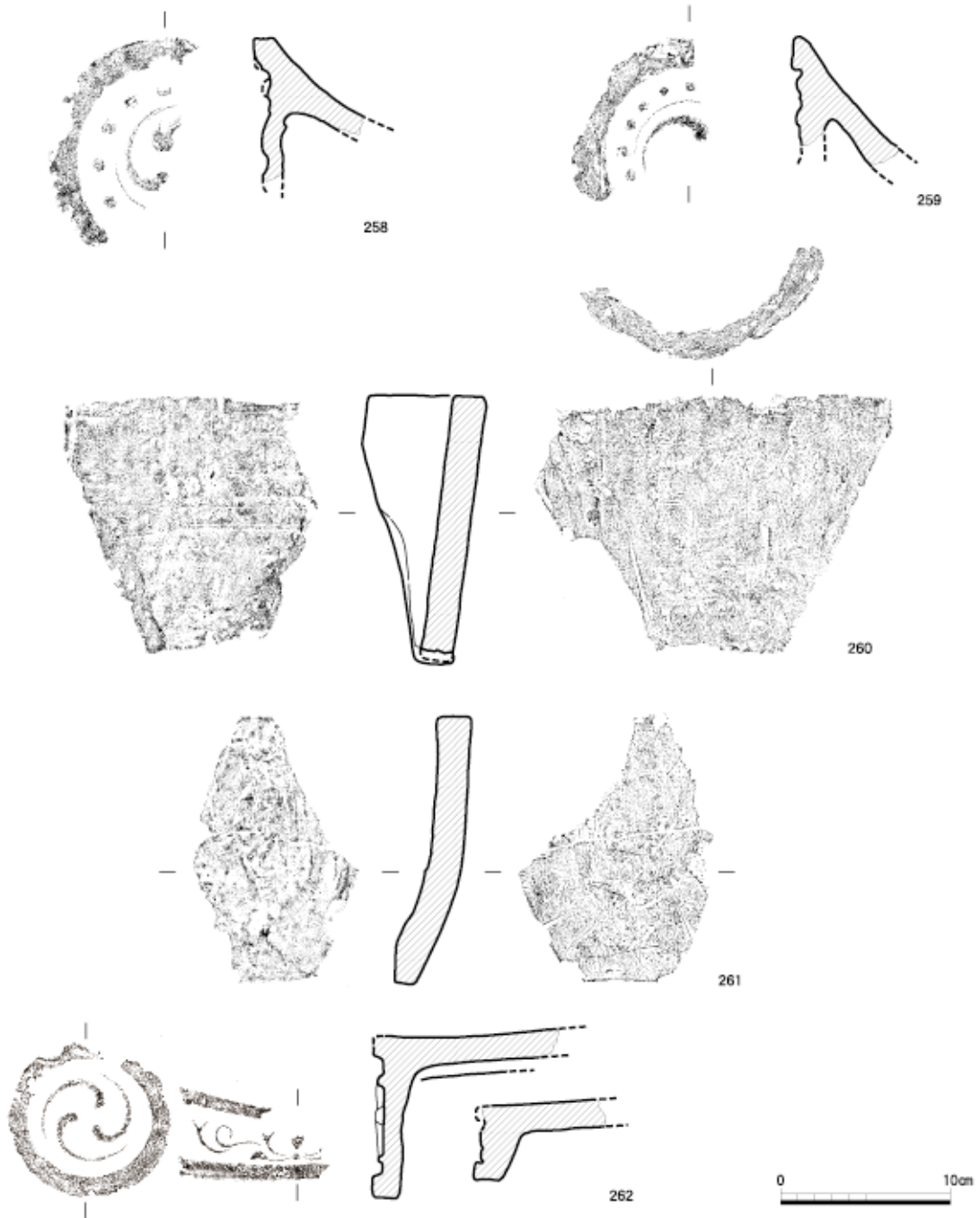


図 62 鳥衾、輪違瓦、軒棧瓦拓影・実測図 (1 : 4)

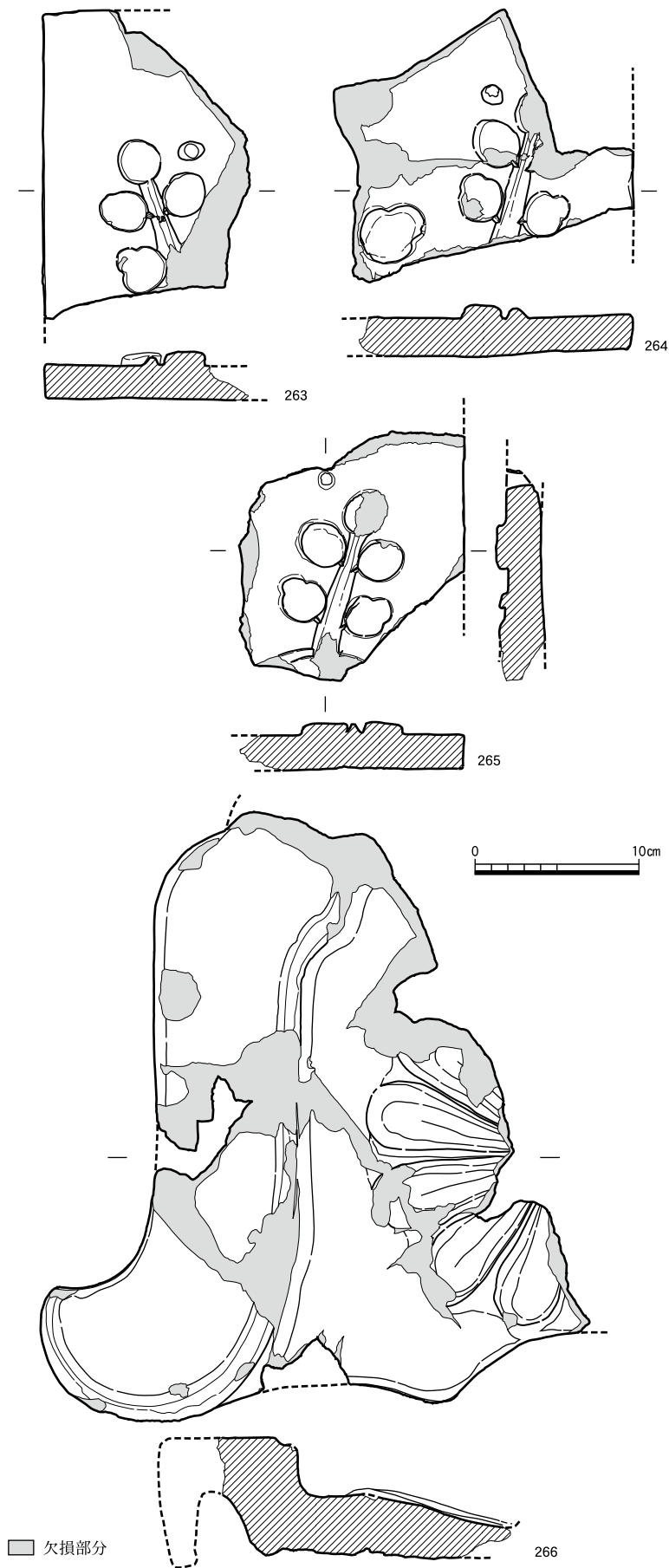


図 63 鬼瓦実測図 (1 : 4)

砂が顕著なものが多い。また、瓦当面の上面を面取りするものも多い。

3) その他の瓦 (図 61 ~ 64 - 245 ~ 272、図版 24・26・27)

その他の瓦としては、棟丸瓦 (図 61 - 245 ~ 257)、鳥衾 (図 62 - 258・259)、輪違瓦 (図 62 - 260・261)、軒棧瓦 (図 62 - 262)、鬼瓦 (図 63 - 263 ~ 266) などがある。

棟丸瓦には三葉葵文 (245 ~ 247) と菊文 (248 ~ 257) がある。三葉葵文は、いずれも葉の葉脈が表現されないもので、葉茎が右へ流れる。菊文は 8 葉単弁 (253)、8 葉複弁 (255・257)、16 葉単弁 (249・250)、16 葉複弁 (251・254)、22 葉のもの (248・256) がある。輪違瓦には、通常的一方へ開放するもの (260) と両端がすばまるもの (261) がある。鳥衾は三巴文で、259 は右巻き、258 は左巻きである。軒棧瓦 (262) は、軒丸部分は珠文を配さない右巻きの三巴文、軒平部分は中心飾りが葉形の均整唐草文である。鬼瓦は、いずれも残存状況が良くない。硬質で薄手の方形板状

で桐文のもの（263～265）とやや軟質で大型並型で中央に菊文を施すのもの（266）がある。

このほか、丸瓦の凸面に刻印のあるものが6点（図64-267～272）あった。二重の亀甲に「天」字（267・268）、蕪様文に「天」字（269）、菊花文か（270）、楕円形と「×」の組み合わせ（271）、○に「丸」あるいは「九」（272）などである。

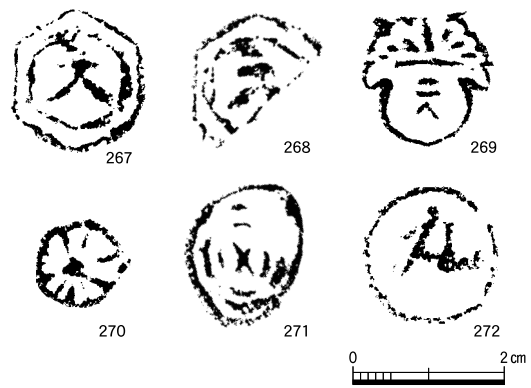


図64 丸瓦刻印拓影（1：1）

（4）金属製品（図65～67、図版28・29・31）

金属製品は多種多様なものが各調査区より出土した。素材は鉄、銅などがみられる。鉄製のものには鋤先や鎌、鑿などの農工具、包丁や刀子などの利器のほか、皿や棒状・環状のものなどがあり、釘が最も多い。銅製のものにはキセル雁首・吸い口、錘、銅線などと、銅銭がある。

鉄製鋤先（273） C1区第4面で検出したほぼ完形の鋤先である。装着部に木質も残存していたので、埋没時は装着した状態であったと思われる。長さ30.65 cm、幅18.1 cm、厚さ1.8 cm、重さ826 g。

鉄製鎌（274） C1区第4面整地層から出土した。装着部を欠損する。残存の長さ15 cm、最大幅は3.2 cm、重さ58 g。

鉄製包丁（275） C1区第5面整地層から出土した。一部欠損するが、ほぼ完形である。長さ19.8 cm、最大幅4 cm、重さ51.2 g。

鉄製皿（276） C1区第5面整地層から出土した。欠損があり、錆や付着物多いため、明瞭ではないが、口縁部は輪花となっているようである。底部には小さな脚が3箇所付く。直径12.0 cm、器高2.2 cm、重さ220.8 g。

鉄製鍋（277） C1区第5面整地層下層から出土した。鍋部分の大半は失われているが、把手部分とみられる。把手部分中空で、柄を差し込んで使用したと思われる。把手上面と鍋内面に線状の浮き彫りがなされている。把手部分の長さ5 cm、幅4 cm、縦幅最大2.5 cm、全体の重さ147.3 g。

鉄製釘（278） C1区第4面整地層から出土した。断面方形の釘である。残存長12.9 cm、幅0.8 cm、重さ15.6 g。

鉄製棒状具（279） C1区第4面整地層から出土した。太さ0.35 cm、折り曲げた鉄線状のものである。簪の様な用途が考えられる。重さ9.2 g。

鉄製針（280） C1区第4面整地層から出土した。太さ0.5 cmの棒状具で、一端を細く延ばして輪状に作り、もう一端は細く尖る。畳針と考えられる。残存長16 cm、重さ11 g。

鉄製鋌（281） C1区第4面整地層から出土した。頭部は直径0.9 cmの円形、針部は方形で先が尖る。全長4 cm、重さ10 g。

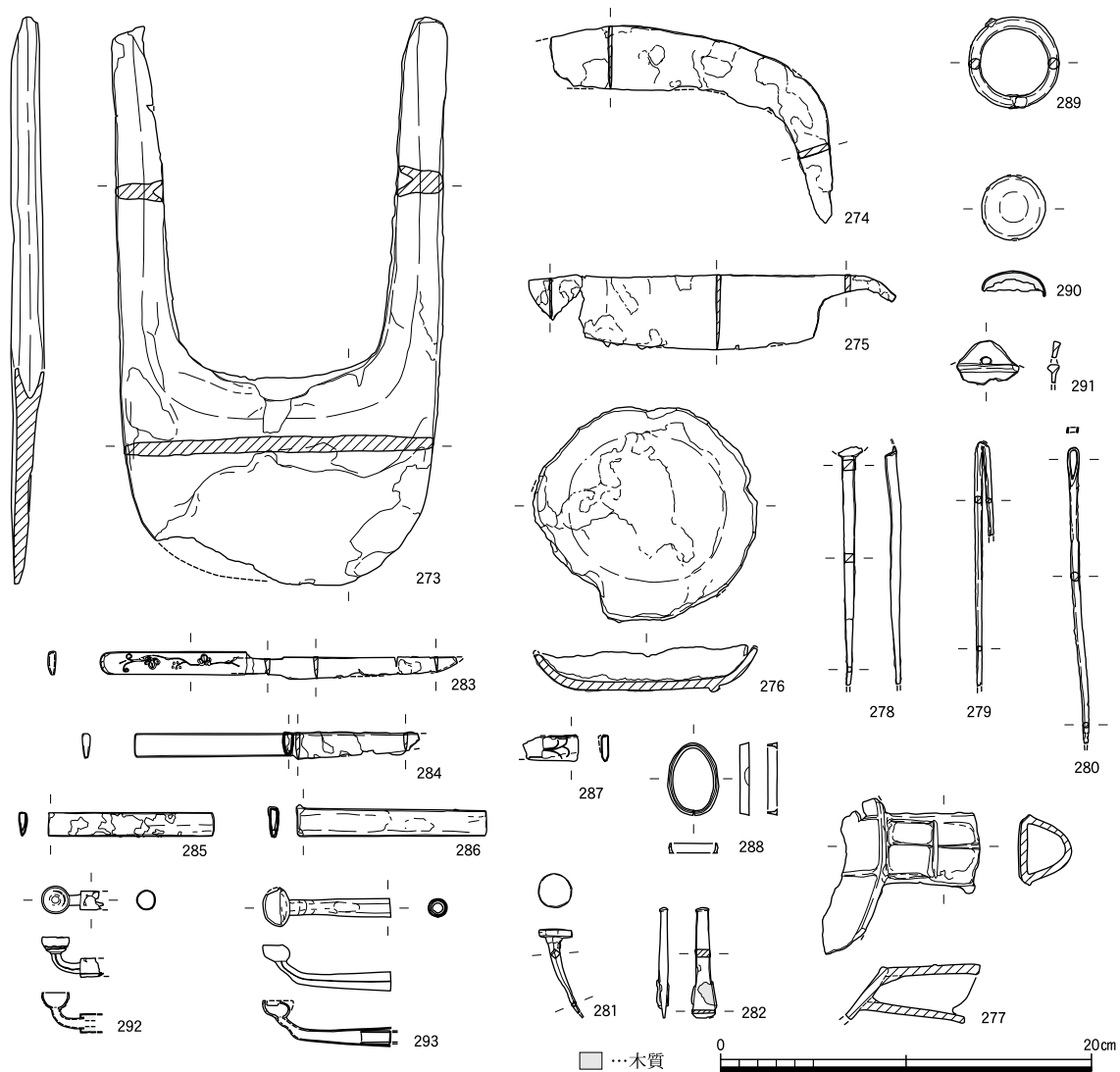


図 65 金属製品実測図 1 (1 : 4)

鉄製鑿 (282) C 1 区第 3 面整地層から出土した。幅 0.4 cm、厚み 0.3 cm の断面方形の板状のもの的一端を敲いて平たい刃を作り出したもの。刃と反対側を叩いて使用した痕跡があり、小型の鑿あるいは鑿とみられる。刃の周辺に木質が残存する。長さ 6 cm、重さ 11 g。

小柄 (283) C 1 区第 5 面整地層下層から出土した。ほぼ完形で、刃部分は鉄製、柄部分は銅製である。柄には草花文が浮き彫りされる。長さ 19.2 cm、刃部分の最大幅 0.6 cm、柄部分の幅 0.6 cm、重さ 28.3 g。

小柄 (284) C 1 区第 6 面整地層以下から出土した。刃部分は鉄製、柄部分は銅製、刃先を欠損する。残存長 15.1 cm、刃部分の最大幅 0.6 cm、柄部分の幅 0.6 cm、重さ 35.5 g。

小柄 (285・286) 285 は C 1 区第 6 面整地層以下、286 は B 1 区土坑 22 から出土した。いずれも銅製、285 は長さ 8.9 cm、幅 0.6 cm、重さ 15.1 g。286 は長さ 10 cm、幅 0.7 cm、重さ 22.4 g。

小柄鞘 (287) C 1 区第 6 面整地層以下から出土した。銅製、中空のもので、表面に毛彫の草様の文様が施される。幅 0.6 cm、重さ 2 g。

銅製刀装具 (288) C 1 区第 4 面整地層から出土した。長径 3.8 cm、短径 2.3 cm の平面楕円形で、

長辺の両側縁に彫りが施される。実測図の上面側が薄く、下面側が厚く面をもつ。重さ 5.8 g。

鉄製環 (289) C 1 区第 5 面土坑 36 から出土した。厚さ 0.3 cm、径 4.8 cm の環である。重さ 23.6 g。

銅製金具 (290) C 1 区第 5 面整地層から出土した。直径 3.4 cm、高さ 1 cm の半球状の飾り金具である。上面には赤色塗料の痕跡が残る。下端に差し込むための突起が 2 箇所残存する。内面には木質が残存する。重さ 8.8 g。

鉄製金具 (291) C 1 区第 4 面整地層から出土した。底辺 3.2 cm、高さ 2 cm の三角形の金属片である。中央に 0.5 cm の円形孔が貫通する。三角形の底辺側の本体に付く把手状の部品とみられる。赤色の塗装が施される。

キセル雁首 (292・293) 292 は C 1 区第 4 面整地層、293 は B 2 区土坑 11 から出土した。292 は真鍮製とみられ、火皿が小さく、底に補強体が付く。また首部の先に肩が付けられ、煙管(羅宇)が差し込まれる。残存長は 3 cm、重さ 5.7 g。293 は銅製で、後世に変形を受けるが、比較的火皿が大きく、首部には肩が設けられず、煙管が差し込まれる。残存長は 6.7 cm、重さ 6.9 g。

目貫 (294) C 1 区第 6 面整地層から出土した。材質は銅製、長さ 6.0 cm、幅 3.0 cm の木の葉状の形態の表面に、葉様の浮き彫りが施される。部分的に金箔が残っている。重さ 3.8 g。

銅製軸 (295) C 1 区第 4 面整地層から出土した。長さ 4.6 cm、幅 0.8 cm の銅製中空の筒状のものである。一方は径 1.2 cm と太く作られ、もう一方には小孔が穿孔される。この間に車輪のようなものを挟み、小孔にピンを差込んで固定する車軸のような機能のものと思われる。重さ 1.5 g。

鍾 (296・297) 296 は C 1 区第 4 面で検出、297 は C 1 区第 5 面土坑 50 から出土した。両者とも銅製とみられる。296 は一辺 1.3 cm、高さ 2.5 cm の直方体、上面に摘みがつく。側面の 1 面に「天下一」、両側面にはほぼ同じ三葉様の小さな文様を 5 つ組み合わせたもの、裏面にも文字が刻印されるが読めない。重さは 2.55 g。297 は一辺 1.0 cm、高さ 1.5 cm の直方体、中央に直径 0.4 cm の円孔が貫通し、一方の側面に縦方向のスリットが入られる。重さは 1.3 g。

銅銭 (図 67、図版 31、附表 3) 銅銭は各調査区から 66 枚出土した。初鑄年の古いものから、開元通寶 4、宋通元寶 1、淳化元寶 1、咸平元寶 1、景德元寶 2、祥符元寶 2、祥符通寶 3、天禧通寶 2、天聖元寶 1、皇宋通寶 3、至和元寶 1、嘉祐元寶 1、熙寧元寶 8、元豐通寶 8、元祐通寶 6、紹聖元寶 3、元符通寶 3、大觀通寶 1、政和通寶 1、大定通寶 1、洪武通寶 1、永樂通寶 1、慶長通寶 1、寛永通寶 4 のほか、両面が無文のもの 1、不明が 5 であった。大半が北宋銭であり、唐の開元通寶、金の 大定通寶、明の 洪武通寶・永樂通寶 などがあり、日本の 慶長通寶・寛永通寶 がある。

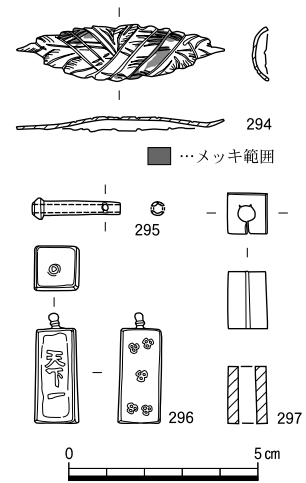


図 66 金属製品実測図 2 (1 : 2)

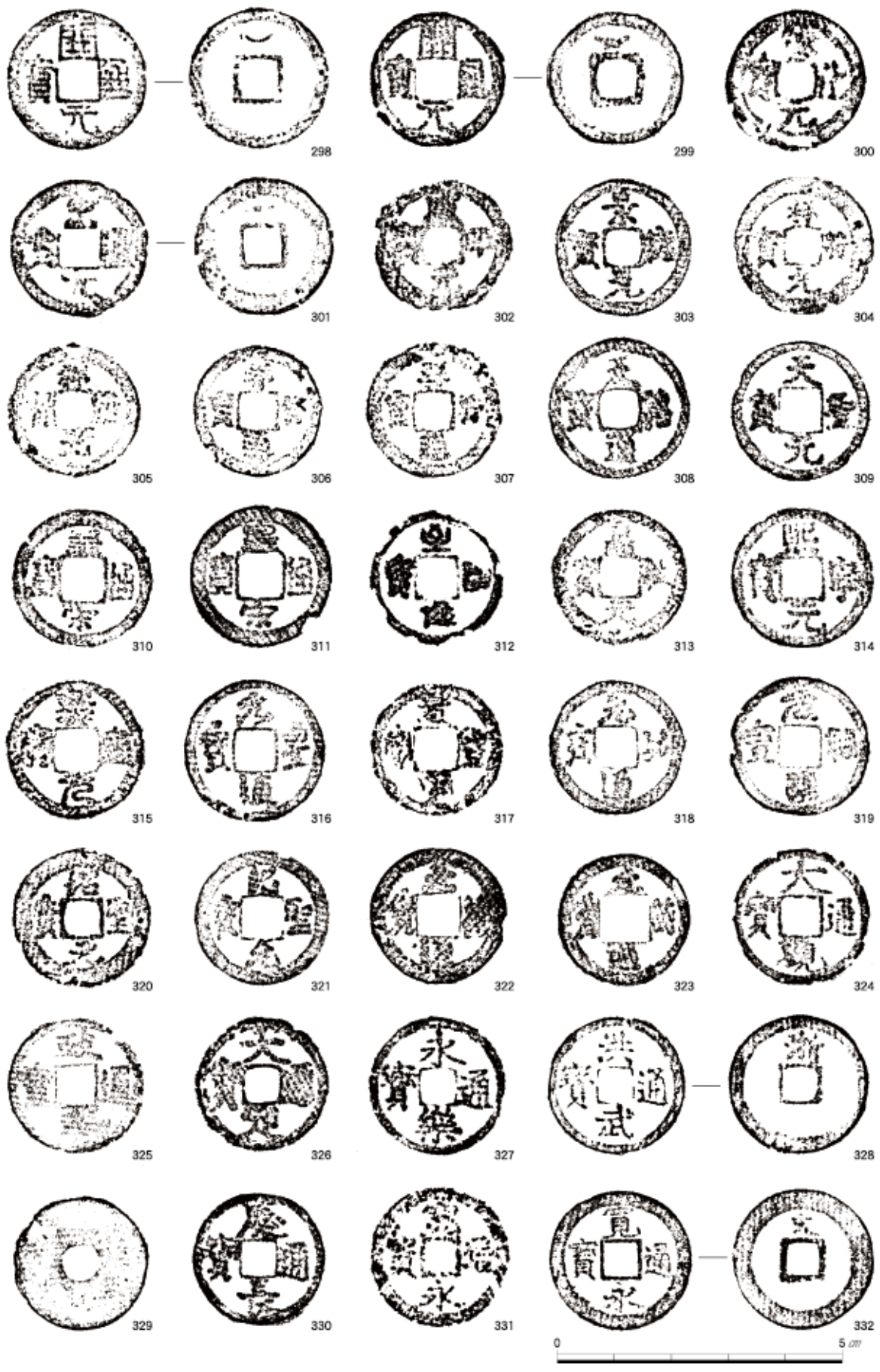


图 67 銅錢拓影 (1 : 1)

(5) 木製品・漆器 (図 68、図版 29・30)

木製品・漆器は各調査区から出土した。淀城期の堀の埋め土などから出土したものは大半が明治時代以降のものと考えられる。淀城期の盛土などからも出土したが残存状況は良くなかった。特に淀城以前のはC1・C2区の町屋に関する遺構や整地層などから比較的良好な遺存状態で出土した。

木製柄 (333) C1区第4面で検出した。直径2.3cmの断面円形の棒状具である。端部に幅0.7cm、厚さ0.2~0.3cmの鉄製環が付けられる。もう一方の端は欠損しており不明であるが、何らかの柄と考えられる。

糸巻き部品 (334) C1区第5面整地層から出土した。長さ16.2cm、幅2.5cm、厚さ1.6cmの方形板の上端と下端それぞれ4cmを削り取り、中央を2.5cm方形の切り込み、中心に径1cmの円孔を穿つ。糸巻きの部品と考えられる。

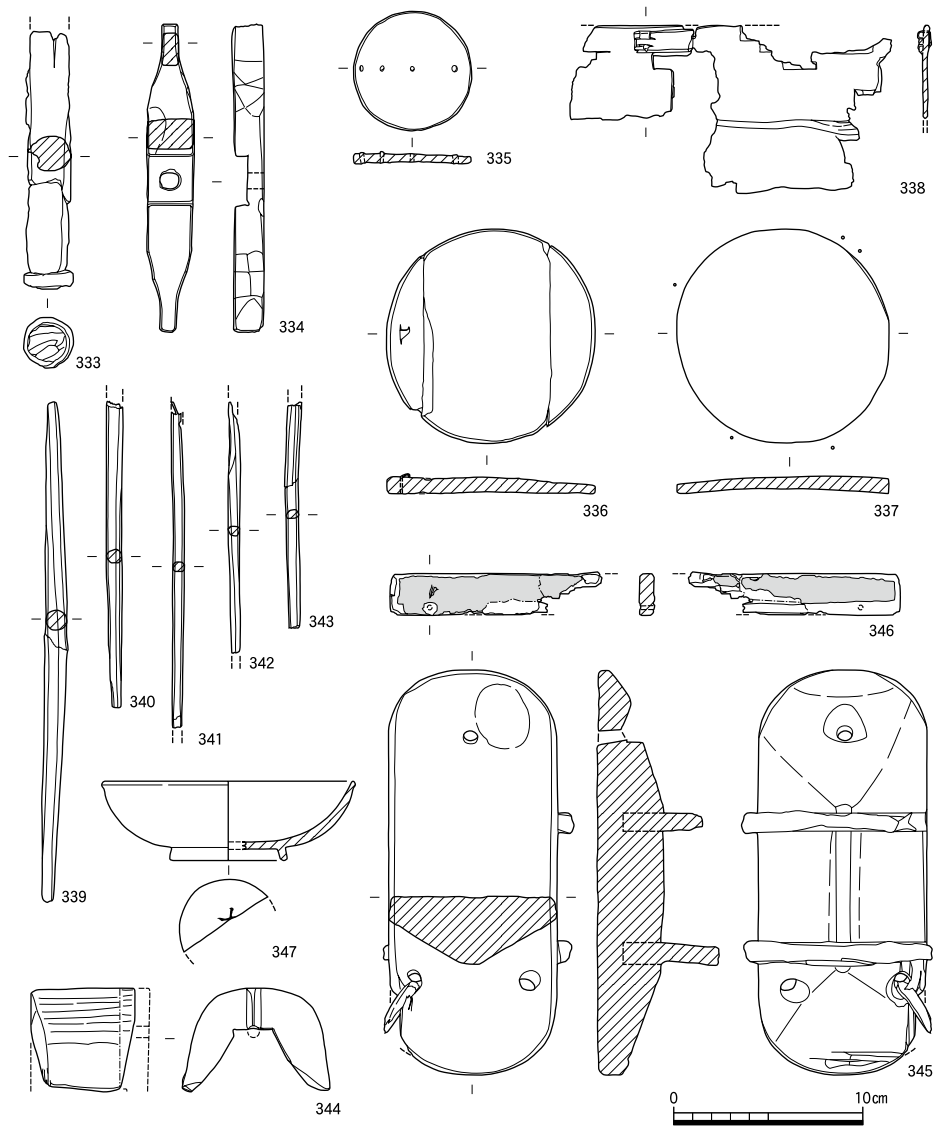


図 68 木製品実測図 (1 : 4)

小型円盤(335) C1区第5面整地層下層から出土した。直径6.2 cm、厚さ0.65 cmの木製円盤で、中心と直線上の向かって右に1箇所、左に2箇所、直径0.2 cm前後の小孔が穿たれ、木質が充填された状態である。細い棒状のものが差込まれていたようである。

円盤(336・337) C1区第5面整地層から出土した。直径11.3 cm、厚さ0.9 cmの木製円盤である。336は向かって左の端に桜皮を差込む。337は側縁に数箇所極く小さい円孔がある。

曲物(338) C1区第5面整地層から出土した。遺存状況はあまり良くないが、縦幅は最大で8.5 cm程度である。重ねて桜皮で綴じた部分もみられる。先の336が蓋、337が底板として組み合わさって蓋付きの桶であったと考えられる。

箸(339～343) C1区第5面整地層から出土した。339以外は一方あるいは両方の端が欠損している。339は最大径が1.1 cm、長さ26.5 cm、その他のものは径0.6 cm前後である。

下駄(344・345) 344はC1区第5面整地層、345はB5区堀内埋土から出土した。344は丸型の割り下駄の前歯部分である。図面の向かって右が平面図、左は側面図とした。上部が下駄の前面にあたり、側面図の左が下面、右が上面にあたる。歯の下端は磨減りが顕著で、上端は上面の台が欠損する。歯外面の上面側には黒漆が帯状に塗られている。また、平面図中央に鼻緒の目と思われる円孔の一部が残存する。345は丸型の構造下駄あるいは差歯下駄といわれるもので、台は中央で厚くなる舟形、切り込みを入れて前歯・後歯を差込み、横緒孔は後歯の後方に開けられる。前歯が著しく磨減る。台上面の鼻緒前壺の孔の右側に親指の痕跡が認められ、左足用とわかる。

漆塗り製品部分(346) C1区第5面整地層から出土した。欠損しているが、幅2.2 cm、厚さ0.8 cmの板状のものである。側面には朱、上辺には黒の漆が塗られている。また、下端に目釘の痕跡も確認でき、漆塗り折り敷の一側辺と考えられる。

漆器椀(347) C1区第5面土坑51から出土した。半截された状態で検出したが、残存状況は頗る良好であった。口径13.2 cm、器高4.2 cm、底径6.0 cm、内外面とも朱塗りの椀である。高台内に墨書がなされるが、文字の大半が欠損するため、判読できない。

(6) 土製品 (図69、図版30、付表4)

土製品には土錘、土製円盤、犬形土製品がある。出土地点はB5区が淀城期の盛土である以外は、C1・C2区の淀城以前の町屋に関する遺構・整地層であった。

土錘(348～362) 欠損するものもあるが、最も短いものは348で2.7 cm、最も長いものは362で4.6 cm、太さは直径1 cm前後である。いずれも土師質の胎土のものである。

土製円盤(363～369) いずれも土器や瓦の破片を加工して作ったものである。素材が土師器363・366・368、瓦器367・369、瓦364・365で、側縁を欠いて粗く形を整えた後、研磨して仕上げていく。いずれも上面が円滑に仕上げられている。369は側縁の欠き痕が明瞭で、素材である瓦器の質感も残っており、加工途中のものともみられる。

犬形土製品(370) C1区第6面以下から出土した。首より上位を欠損する。胴部長さ3.3 cm、幅2.1 cm、高さ2.5 cm、4本足である。

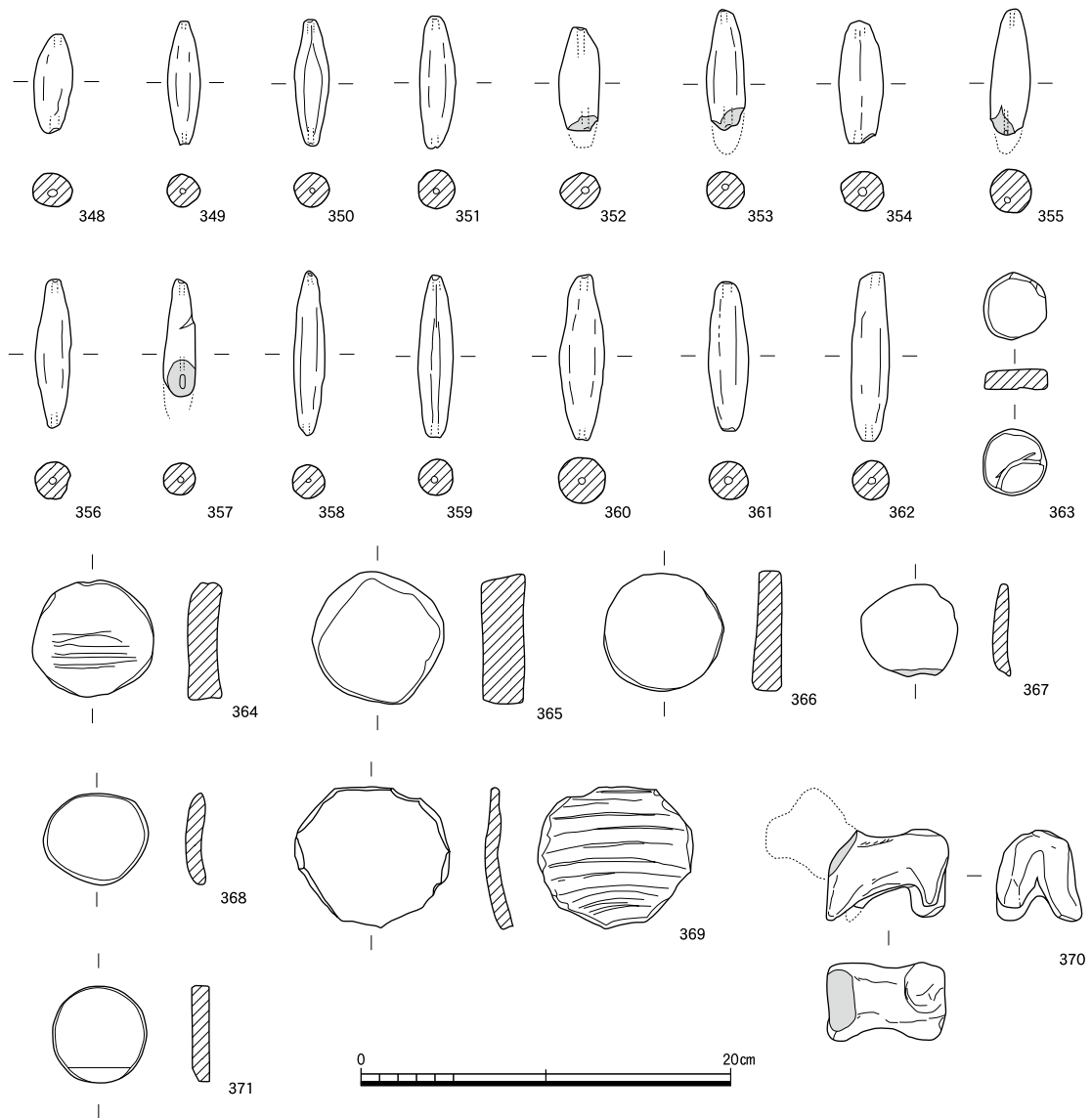


図 69 土製品・石製品実測図（1：2）

(7) 石製品（図 69～71 - 371～390、図版 30・32）

石製品には石製円盤、硯、砥石、五輪塔部品、このほかに淀城期の石垣などに使用された石材のうち線刻などのあるものを扱う。なお、B5区溝17に使用された石製U字溝はここでは触れない。

石製円盤（371） C1区第5面整地層から出土した。直径2.6 cm、厚さ0.5 cmの円形で、上面の下端を面取りする。研磨によって平滑に仕上げる。粘板岩系の素材か。

硯（372・373） いずれも長方硯で、C2区第3面土坑6から出土した。372は幅6.3 cm、厚さ1.4 cm、硯池部分の破片である。373は幅5.0 cm、長さ14.0 cm、厚さ1.4 cm、硯面の中央に墨堂、両側に硯池を持つものである。

砥石（374～377） 砥石とみられる破片は多く出土した。ほとんどがC1・C2区の淀城以前の町屋に関する遺構・整地層から出土した。374はC1区第5面整地層から出土した。幅4.6 cm、

長さ 14.4 cm、厚さ 0.9 cm 長方形の板状の砥石である。上端に円孔が穿たれ、紐を通して携帯された。砥面は図面の上面一面のみで、細かい刺突痕が多くみられる。375はC 1区第6面以下で出土した。一辺 4.9 cm の方形柱状のもので、下部は欠損している。砥面は図面の上面と左側面を使用している。376はC 2区第3面土坑6から出土した。幅 4.3 cm、厚さ 3.3 cm の方形柱状のもの、砥面は上面1面のみを使用している。377はC 1区第4面整地層から出土した。幅 7.5 ~ 8.5 cm、厚さ 3.3 cm の方形柱状の素材を4面とも砥面として使用し、中央が強く凹む。砥面の上下端は磨滅しておらず、

荒れており、使用時に地面などに固定された痕跡とみられる。

五輪塔部品 (378) C 1区第3面地業53から出土した。最大径 15.0 cm、高さ 21.2 cm、花崗岩製の風輪と空輪を一体に作ったものである。下端には組み合わせのための突起を作り出す。

線刻石 (図 71 - 379 ~ 390) 線刻ある石はすべて淀城期のものと考えられ、379 以外はすべて石垣に使用されていたものである。379はB 1区盛土内に据えられた石 (図 17) に刻まれたものである。扇形の扇面の中央に小さな円形の彫込みがあり、日の丸の表現と考えられる。先にも触れたが、この石の上面には記号が墨書され、下面には「へ」字が朱書きされていた。380 ~ 384はB 2区石垣4に用いられた石材に施された刻印である。380は「〇」2つと下に棒線、381は「の」字状、382と383は同一の石になされたもので「九」と「力」、384は「×」の上端に短い棒線が付く。385 ~ 389はB 3区石垣に用いられた石材の刻印、385は「L」字状、386・387は同じ記号、388は「卍」の左下の空間に小さな円形の彫込みが付加されたもの、389は「〇」の中に「△」であろうか。390はB 4区石垣に用いられた石材のもので、「〇」に「×」を組み合わせたものである。

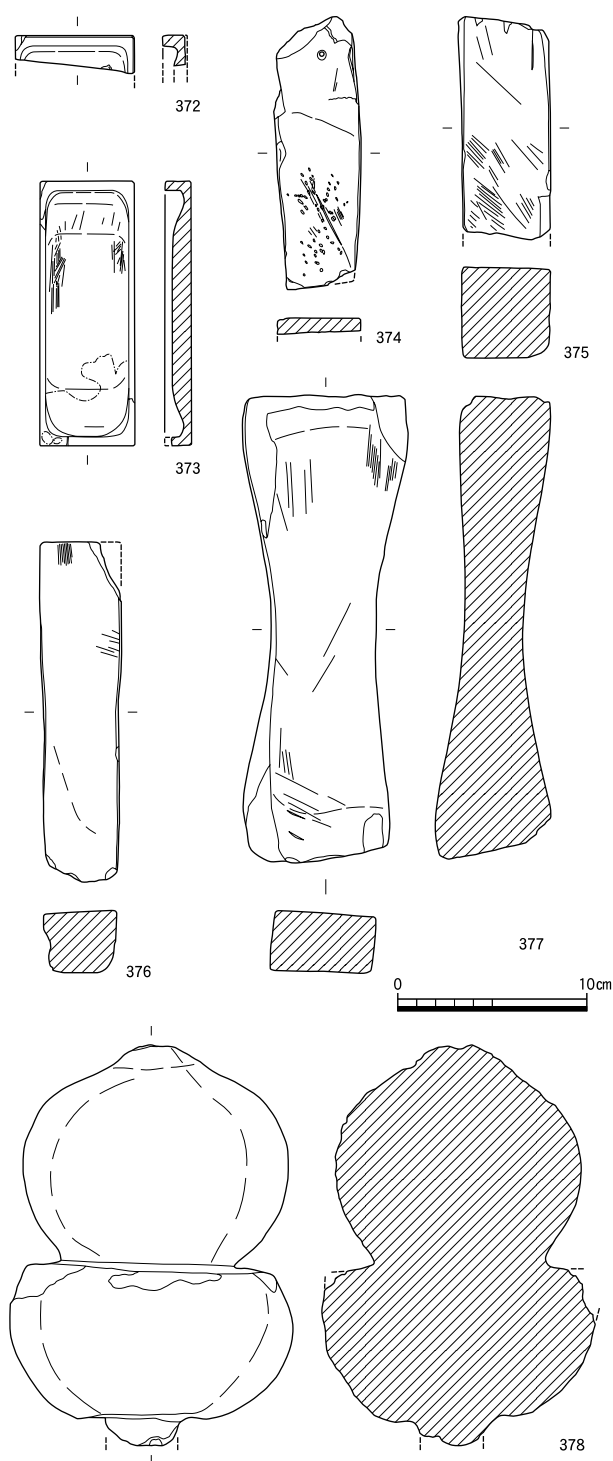


図 70 石製品実測図 (1 : 4)

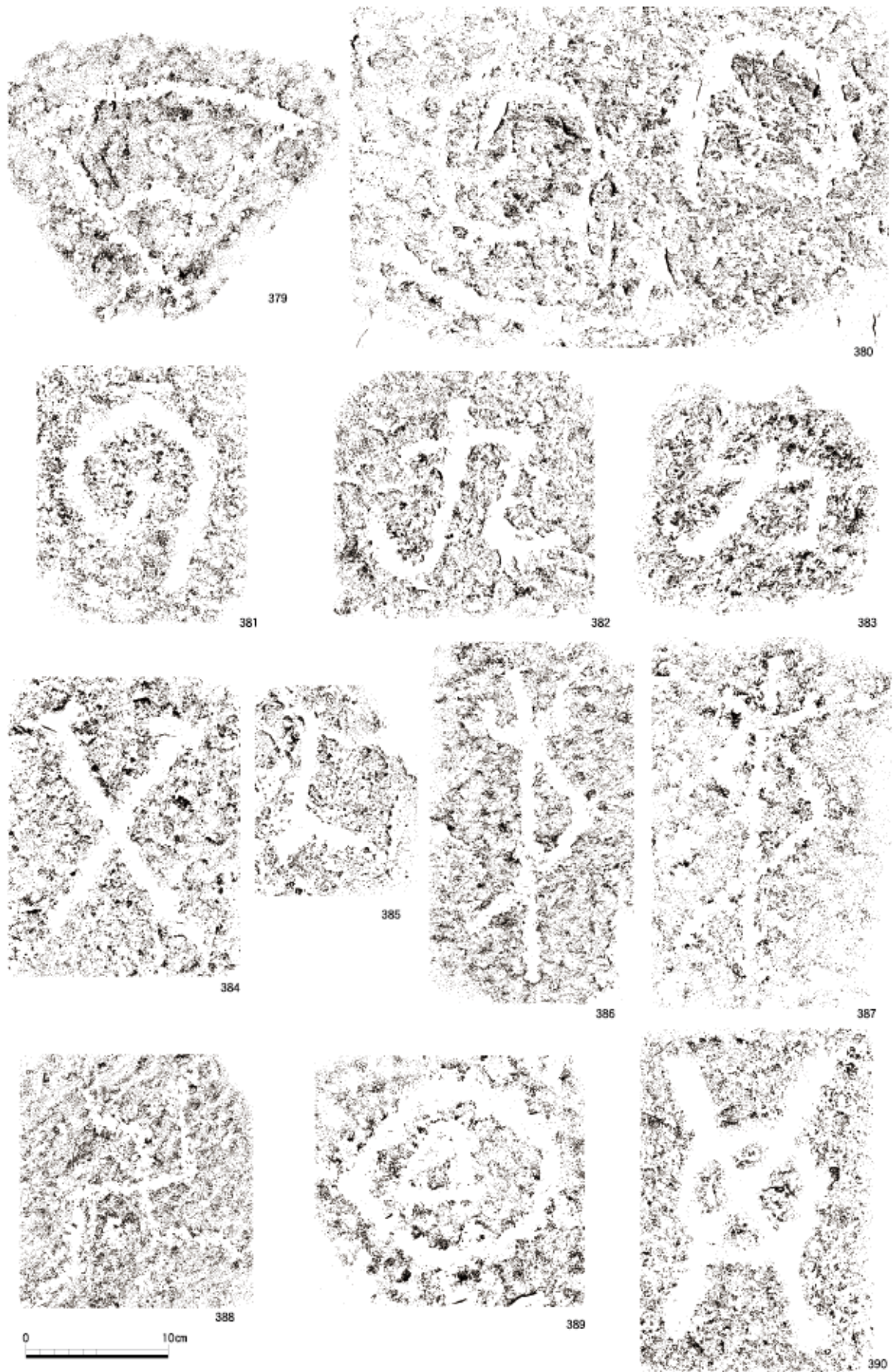


图 71 石垣線刻拓影 (1 : 4)

5. 土壌分析の成果

C1区第5面土坑36とC2区第3面土坑6、第4面町屋67の3つの遺構のそれぞれ炭化物・焼土を多く含む層序の土壌分析を行った。C1区第5面土坑36は整理用コンテナ1箱分(約15ℓ)、C2区第3面土坑6は整理用コンテナ2箱分と遺物袋4袋(約34ℓ)、第4面町屋67は遺物袋1袋(約1ℓ)の土壌を採取、洗浄・選別した。選別した遺物は目視および、実体顕微鏡・生物顕微鏡で判別・同定した。C1区第5面土坑36とC2区第3面土坑6の土壌は、焼けた壁土・炭化物の多い火災残土と思われる土であった。

1) 壁土(図72、図版32)

壁土は焼損することで固化し、埋土中に残存した。粘土に長さ4～5cmの藁スサが多く混入している。壁下地は壁土に残存する当たりから、外側に4～5cm間隔の径1～1.5cmのマダケと内側に2本組の径約0.8cmのアシを直交させて組んだ木舞と考えられる。木舞から外面までは1.5cmの粘土厚がある。外壁面はスサが粗く見える荒壁仕上で上塗りの痕跡は見られない。

2) 炭化物(図73、図版32、表7)

部材

マダケは断面の維管束の配置・節の部分からマダケ類と同定した。径は1～1.5cmで、厚さはほとんどのものは0.3cmであるが、1点だけ厚さ0.6cmのものがある。

アシは断面の維管束の配置・表面の凹凸・節の形状からアシと同定した。径は約0.8cmである。

スギは大きな材を板状に加工したもので厚さ約1.5cm、幅約17.5cm以上。

マツは形状不明であるが、心持ち材をほぼそのまま使用している。

広葉樹はアカガシ亜属と散孔材4種類ほどがみられる。心持ち材である。

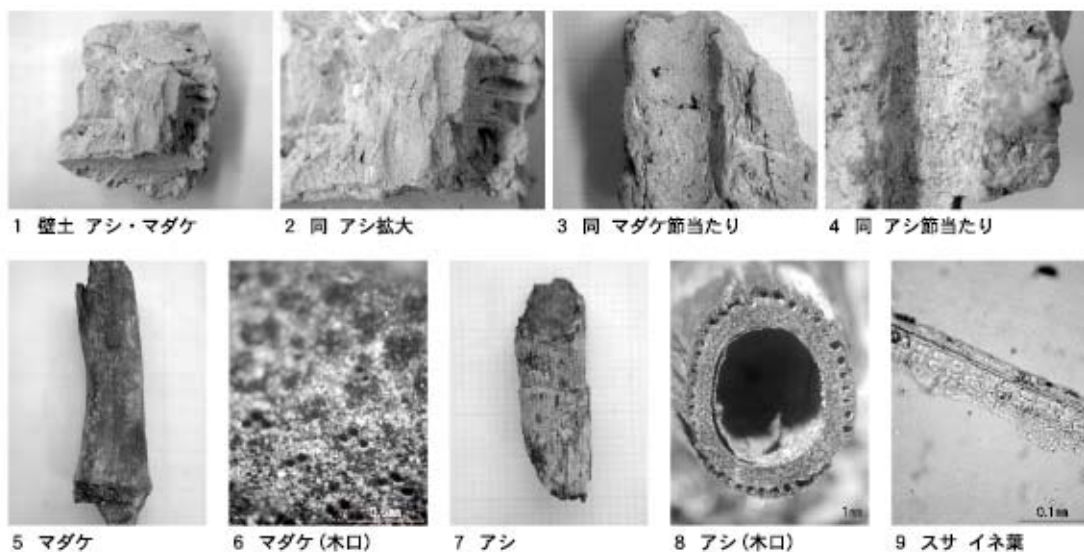


図72 同定資料 壁土

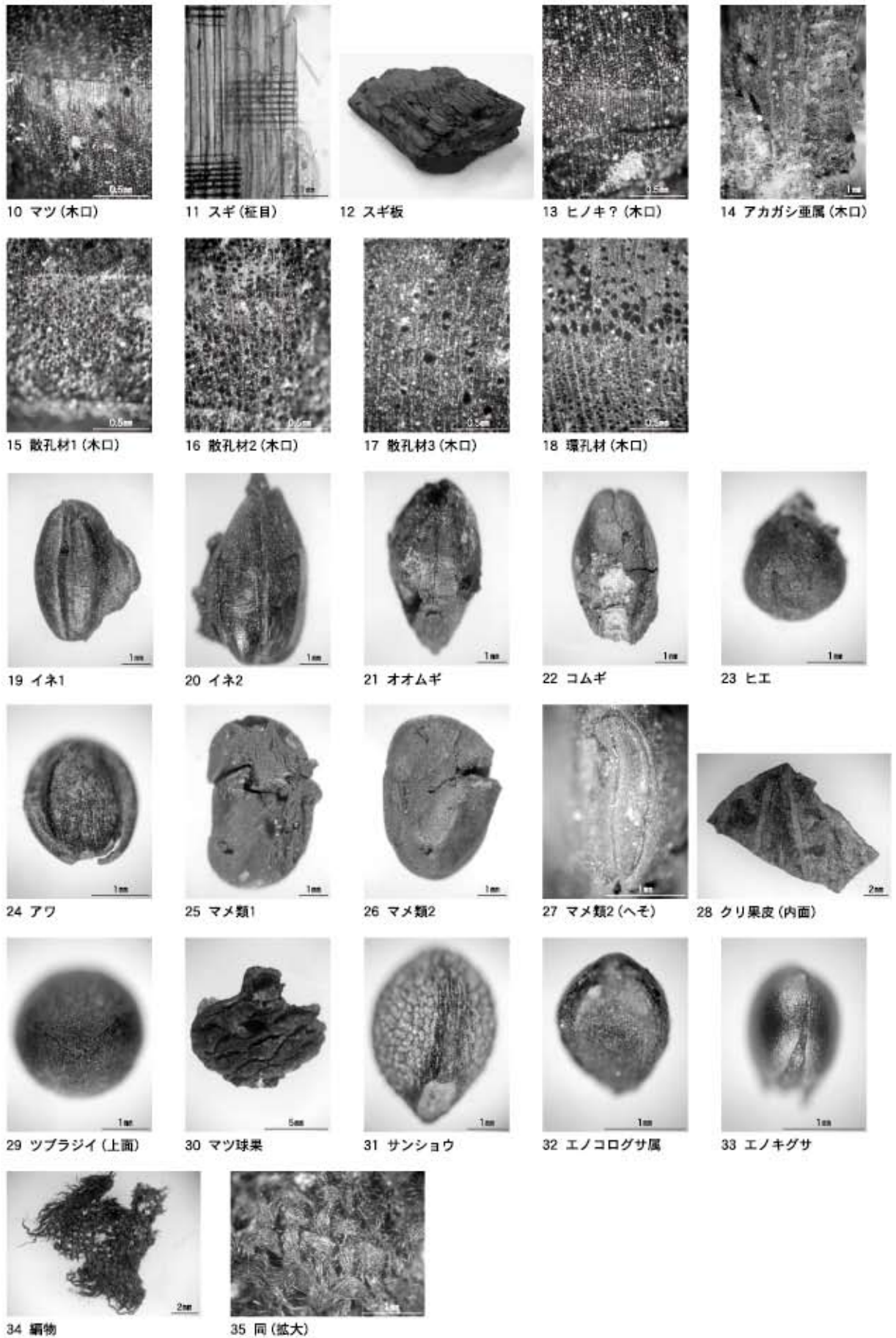


図 73 同定資料 炭化物

表7 種実等一覧表

種 類	C1区土坑36	C2区土坑6	C2区町屋67
イネ	18	9	
コムギ		11+1 (集塊)	
オオムギ		10	
ヒエ	1	5	
アワ	1		
マメ類	5	4	
マツ類		2 (球果)	
クリ	1 (果皮)		
ツブラジイ	2 (幼果)		
サンショウ	1	1	
エノコログサ属		1	
エノキグサ	1		
アカザ属orヒユ属		2	2
編物	○	○	

種実類

イネは穎の残るものもあり、胚珠だけのものも一部膨脹しており、本来は籾の状態であったものが焼損・炭化したと思われる。

オオムギ・コムギはイネ同様に膨脹している。

ヒエ・アワは胚乳表面に穎が付着しており穂あるいは脱穀した状態であったと思われる。

マメ類は大小あるがへその形状が判別できる3点はすべてダイズ属である。

クリは果皮の一部が出土している。

ツブラジイは幼果が出土している。

マツ属の球果が出土している。

サンショウは近辺に植生していた可能性もある。

アカザ属かヒユ属は近辺に植生していたと思われる。

エノコログサ属・エノキグサは雑草として近辺に植生していたと思われる。

その他

編物は繊維を右撚りにして交互に組んだ平織のものである。

6. ま と め

本調査は、1999年度より継続的に行ってきた京阪本線淀駅周辺整備事業に伴う発掘調査の最終年度の調査である。新しく建設された京阪本線淀新駅の南西で行われた高架化工事に伴って10箇所調査区を設定し、それぞれ調査を行った。これまでに先行して隣接あるいは周辺で行ってきた調査の成果を踏まえ、本調査の成果を位置付けてまとめとする。

対象とした主な時代と遺構は、桃山時代から江戸時代初期までの大坂街道を中心とした中世末期淀津の町屋（淀城以前）と、江戸時代前期に淀藩に封じられた松平定綱によって築城された近世・淀城（淀城期）に関する遺構である。なお、以前は長岡京の左京域にも含まれていたが、新条坊復元案では京外となり、これまでの調査からも遺構・遺物の検出は見込まれなかった。

調査は工事で掘削される深さまでで、それ以下の遺構・遺物については現地保存されることから調査を行っておらず、堀・石垣・盛土・整地層のいずれも底面を確認することができなかった。

出土遺物は桃山時代から江戸時代のものが大半であった。各調査区から平安時代中期・後期、鎌倉時代から室町時代の土器類や瓦類が比較的多く出土するが、いずれも桃山時代から江戸時代の遺構・層に混入したもので、室町時代以前の遺構は検出できなかった。それらの時期の遺構・層はさらに深い箇所是否存在するか、あるいは調査地周辺に存在するものと考えられる。いずれにしても、当地に平安時代以降人々の営みがなされたことを裏付ける。

(1) 淀城以前（図74、図版9・11）

調査地点より北、当時の宇治川を越えた「納所」辺りにあったとされる「淀古城」期より続く、南北方向の大坂街道の路面遺構とこれに沿って展開した町屋に関する遺構をC1・C2区で検出した。工事掘削深内で3～4面を確認した。洪水などの度に路面や敷地境を踏襲しながら徐々に砂層を中心に整地し嵩上げしている。特にC1区で検出した地業53や調査23の地業2のように、底面に多量の瓦片を敷き詰めるなど丁寧な盛土を行っている。これらの層から出土した土器類の検討からは、各整地層間に大きな時間差が認められず、いずれも17世紀の初頭、淀城が築城される直前に位置付けられる。短い時間の間に数度にわたり盛土して、1m近くもの嵩上げが行われたことがわかり、洪水などの頻度も比較的高かったと考えられる。

大坂街道の路面遺構は、C1区調査区の北東の角と、C2区の南1/3で検出した。側溝は西側では検出できず、東側でのみ検出した。おおよそ幅7mで、路面は礫石あるいは瓦片を敷いており、工事掘削深内で最大10面を確認した。これも町屋部分と同様、短い期間に、何度も補修や積み上げが繰り返された結果であろう。

町屋に関する遺構は、大坂街道を挟んで西（C1区）と東（C2区）で検出した。いずれも大坂街道に直交する敷地割で、これに平行あるいは直交する掘込みや柱穴列・礎石列、溝などで、焼土や炭化物を多く含む箇所もあり、火災あるいは鍛冶に関する遺構とみられるものもある。

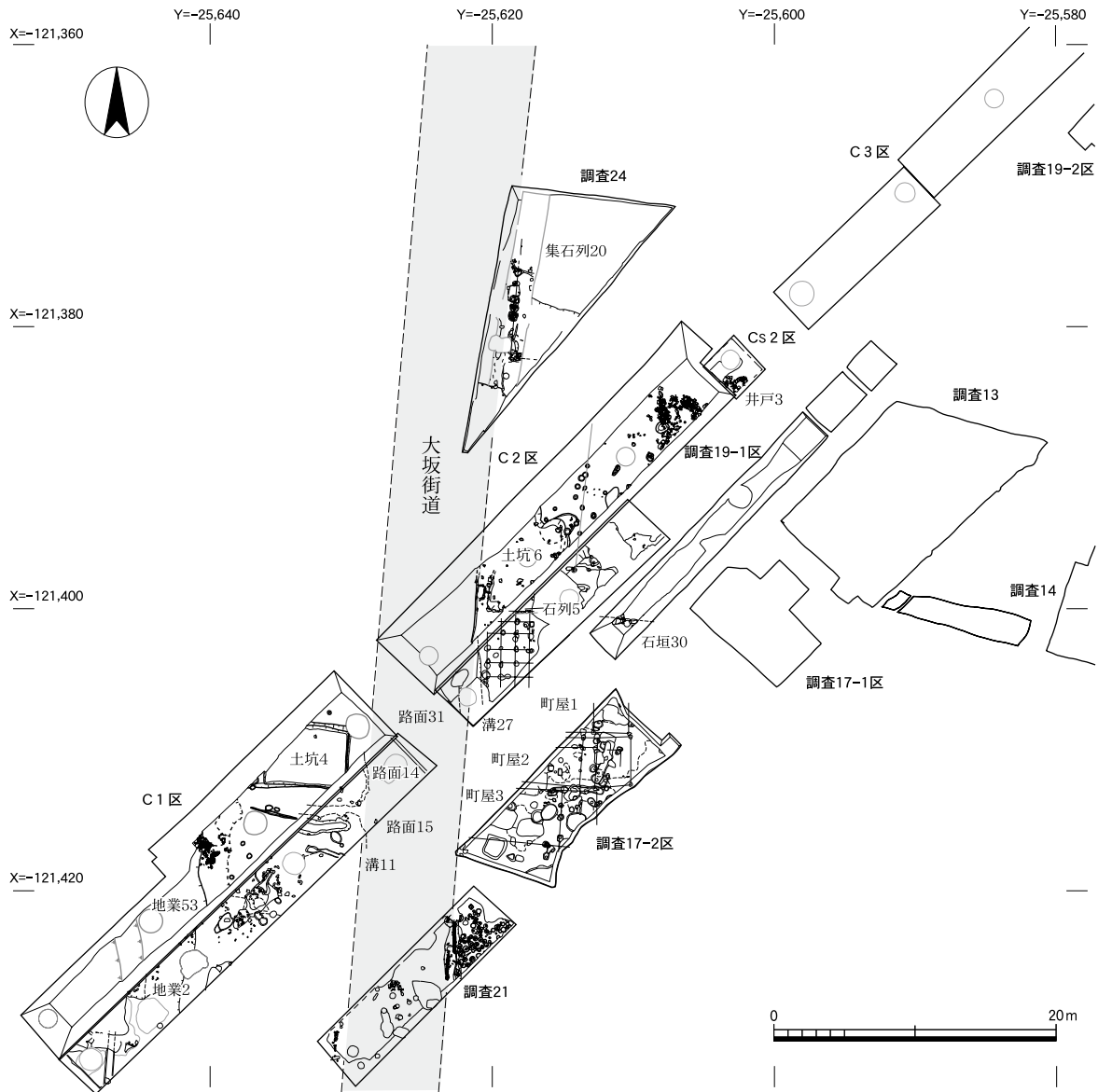


図 74 淀城以前 町屋関連主要遺構分布図 (1 : 1,000)

(2) 淀城期 (図 75、図版 1 ~ 8、10)

今も内堀と本丸・天守台が残されている江戸時代前期に築城された淀城に関する遺構は、今回設定した全調査区で検出した。しかし、明治期には廃城に伴って、石垣の石材が解体・撤去され、当地では京阪本線が敷設、旧淀駅のプラットフォームが建設されており、各調査区とも地表面から 0.5 m内外の厚さの現代盛土直下が遺構面で、上面での遺構残存状況は良くなかった。

江戸時代に作成された¹⁾絵図の検討やこれまでの調査成果によれば、今回の調査地は北から東曲輪の北西 - 中堀 - 内堀南東部 - 南曲輪 - 中堀 - 内高嶋 - 外堀にあたっており、本丸の南西を北東から南西に縦断する形での調査となった。

1) 陸部

陸部は北から東曲輪、天守台東の曲輪、南曲輪、内高嶋にあたる部分である。いずれも築城にあたり、盛土を行って陸部を確保している。

東曲輪（C 1・2区）では他の部分と異なり、下層に直前まで大坂街道とこれに面する町屋の遺構が存在しており、その上面を覆う形で盛土が行われている。盛土は砂層を中心としており、厚さは0.5～0.6 mと他の陸部に比べて薄い。上面は礫を多く含む砂層で覆い、叩き締め路面状となっている。東曲輪の北西部にあたり、梁間2間（7.88 m）、桁行10間（39.40 m）の長大な東西建物（土蔵跡²⁾）が見つまっている。その西面に南北方向の石垣が3条あり、その西には路面状に整地された広場状の空間となっている。

天守台東の曲輪（B 4・5区）、南曲輪（B 1・2区）、内高嶋（A 1・2区）では、いずれも工事掘削内深までの2 m前後がすべて砂層を主体に積み上げられた盛土である。要所要所にA 2・B 1区で顕著な堤状盛土やA 2・B 5区で検出した石塁などを設けて崩壊防止策を講じている。A 2区の石塁7は人頭大の礫を東西に並べるもので、内高嶋のほぼ中央で検出している。B 5区の石塁25は拳大の礫を帯状に積み上げており土留めとともに、東前面の石垣29との関連が考えられる。

これらの地区では上面の遺構の残存状況が良くなかったが、天守台東の曲輪（B 5区）では曲輪から堀への排水のための石製のU字溝を据えた溝を検出した。また、南曲輪（B 2区）では先の東曲輪で検出した土蔵跡と同じ工法で小型の梁間2間（7.88 m）、桁行6間（23.6 m）の建物18を検出した（図版4）。建物18は北辺を石垣4に載せている。また東辺の外側に礎石根石とみられる集石（調査22集石3）が建物内中央のもの（調査23集石6）と対応するように検出されており、建物本体とどのような関係になるかについては今後の課題である。

2) 石垣

石垣は陸部（曲輪）の堀に面する辺に設けられたものと、平面上に作られた段差や囲いなど区画のために設けられたものがある。前者は東曲輪の北辺（調査24）、天守台東の曲輪の東辺（B 5区）、同西辺（B 4区）、南曲輪の北辺（B 3区、調査12-4）、同南辺（B 1区、調査8）内高嶋の北辺（調査12-3）などで検出している。いずれも石材は花崗岩を主体として、チャートが少量含まれる。自然石を必要に応じて割り、野面乱石積みする。ただし、これまでも記述しているが、淀城廃城後に石材の取得を目的として石垣の解体が行われており、ほとんどの箇所では石垣の上部は失われている。B 5区では中堀に設けられた陸橋の南辺の石垣を検出した（石垣27）。この部分が当時も陸橋として機能していたためか、この石垣のみ解体を免れているようである。また、この陸橋が取り付く曲輪の西辺では石垣を鉤の手に検出している（石垣28・29）。江戸時代の絵図にはいずれも陸橋の取り付く曲輪西辺に鉤の手に折れる石垣が表現されており、これを検出したものと考えられる。曲輪西辺の石垣29は、曲輪陸部と石垣前面の距離が約3 mと広く、陸部に接して石塁25が築かれている。他の石垣部分では見られない構造である。上部が失わ

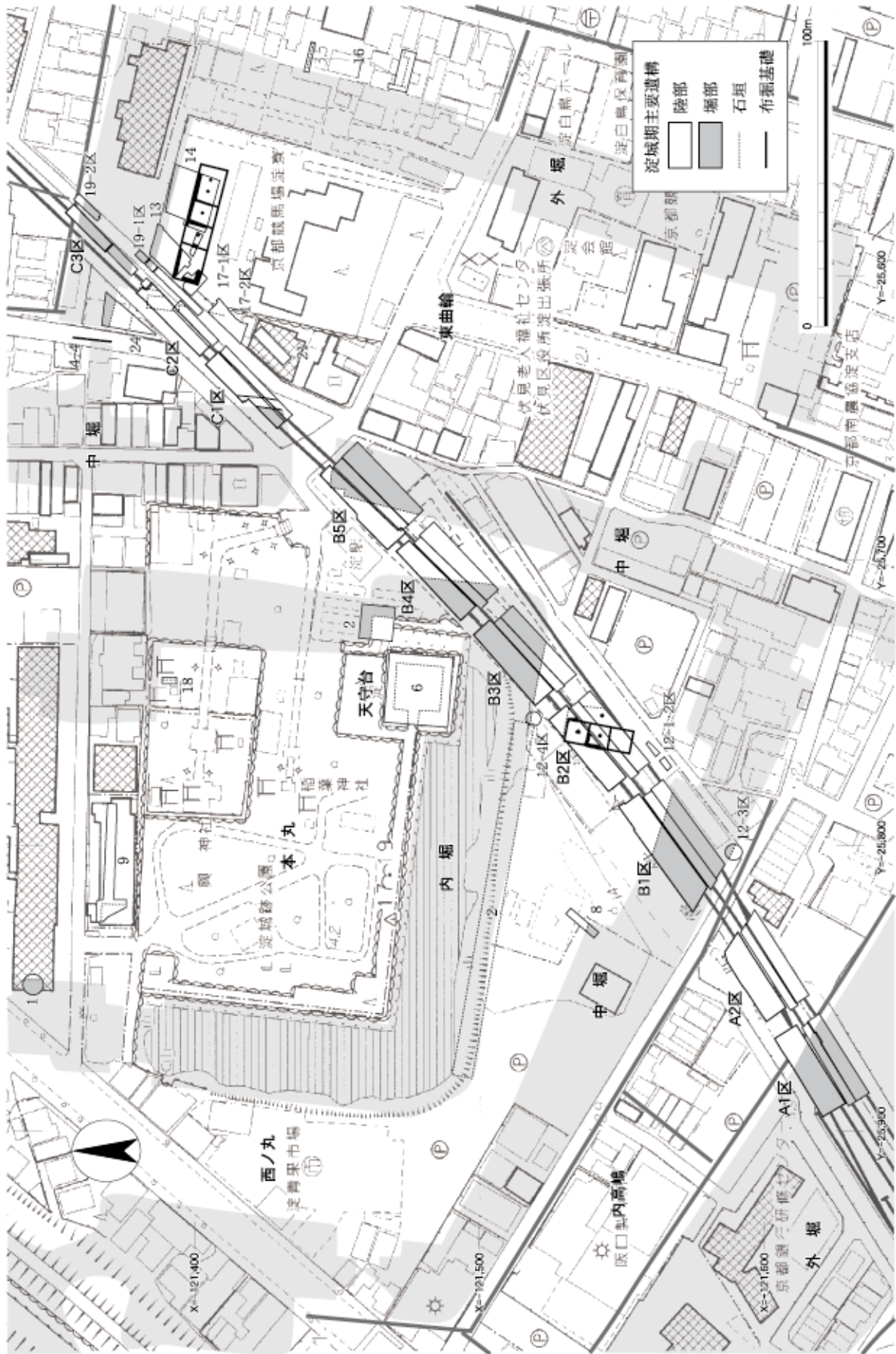


图 75 淀城期 主要遺構分布图 (1 : 2,000)

れていて不明であるが、犬走りのような施設が設けられていたのかもしれない。

なお、C1区では中堀の東辺に、石垣ではなく階段状石列52を検出した。江戸時代の絵図の一部に陸橋北側に階段が描かれているものがあり、石材が失われているが、階段状の施設が設けられていたと考えられる。

平面に設けられた区画のための石垣は、東曲輪（C2区、調査17-3、24）、南曲輪（B2区）で検出した。B2区(図版4)で検出した石垣4と石列6は直交する一体の石垣と考えられ、土蔵(建物18)の北辺を支えるとともに、一段高く囲う区画施設である。

3) 堀

堀は、東曲輪の北側の外堀（C3区、調査13、14、19-1・2、24）、同西側の中堀（B5・C1区）、天守台南東の内堀（B3・B4区）、南曲輪の南側の中堀（B1区、調査8）、内高嶋の南の外堀（A1区）で検出している。いずれも、掘削を行った地表下2.2m前後で、堀の底は確認できていない。深さや底の状態は不明である。明治初期に石垣石材が取り去られた後も、堀として機能していたとみられ、上部の堆積土にはガラス片などが入る。その後、これらの堀は明治末年までに完全に埋められている。

註

- 1) 江戸時代の淀城を描いた絵図としては、「(淀城ノ図)」(江戸時代中期)、「淀城大絵図」(年記欠、永井尚政の時代か)、「城砦淀之城図」(寛永14年以前か)、「(淀城下全図)」(江戸時代中期)、「山州淀城府内之図」(寛延3年4月、渡辺善右衛門守業)のほか、「笹井家本 洛外図屏風」などが知られている。(西川幸治編『淀の歴史と文化』淀観光協会、1994年9月)
- 2) 調査13・14・17-1で検出した、礫を充填した布掘基礎と礎石を組み合わせた建物である。外周と仕切り壁が土壁で、長い棟を棟柱で支える構造の土蔵と考えられ、江戸時代の絵図などに記される「米クラ」・「米蔵」にあたるようである。京間(1.97m)2間を柱間1間としている。文献11。

付表1 土器観察表

番号	調査区	出土遺構	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存 (%)	色調	胎土	備考
1	B1区	土坑7	土師器	皿	7.9		1.5	25	10YR6/3にぶい黄橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	口縁油煙付着
2	B1区	土坑7	土師器	皿	9.0		1.4	25	10YR7/3にぶい黄橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャート・赤色粒を含む	
3	B1区	土坑7	土師器	皿	10.0		2.5	35	7.5YR7/4にぶい橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャート・雲母を含む、赤色粒を少量含む	
4	B1区	土坑7	土師器	皿	11.0		2.3	25	10YR6/3にぶい黄橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャート・赤色粒を含む	
5	B1区	土坑7	土師器	皿	9.9		2.0	100	7.5YR7/6橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャート・赤色粒を含む	口縁油煙付着
6	B1区	土坑7	土師器	皿	10.5		2.1	100	7.5YR7/6橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャートを含む	口縁油煙付着
7	B1区	土坑7	土師器	皿	11.0		2.3	75	7.5YR7/6橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャート・雲母・赤色粒を含む	口縁油煙付着
8	B1区	土坑7	土師器	皿	12.0		2.0	50	7.5YR7/4にぶい橙色	密、φ2mm以下の石英・長石・チャート・赤色粒を多く含む	焼成やや軟 口縁油煙付着
9	B1区	土坑7	土師器	皿	12.0		1.7	25	10YR7/4にぶい黄橙色	やや密、φ1~2mmの石英・長石多く、φ1mm以下のチャート・赤色粒少量含む	
10	B1区	土坑24	土師器	皿	10.5		2.1	40	7.5YR7/4にぶい橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャートを含む	
11	B1区	土坑24	土師器	皿	10.5		2.1	75	7.5YR7/6橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャート・赤色粒を含む	
12	B1区	土坑24	土師器	皿	11.0		1.8	20	7.5YR7/3にぶい橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャート・赤色粒を含む	
13	B1区	土坑24	土師器	皿	10.9		1.7	20	10YR7/3にぶい黄橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャートを含む	
14	B1区	土坑24	土師器	皿	10.5		2.0	75	10YR7/3にぶい黄橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャート・赤色粒を含む、	
15	B1区	土坑27	施釉陶器	皿	6.4	4.8	3.0	65	2.5Y7/2灰黄色	やや粗、φ1mm以下の石英・長石・チャートを含む	唐津
16	B1区	土坑24	施釉陶器	丸椀	10.9	4.8	8.5	50	素地5Y8/1灰白色 釉2.5Y8/3淡黄色	やや粗	唐津
17	B1区	土坑24	施釉陶器	香炉	9.5		残高 2.0	底部 100	2.5Y6/2黄灰色	やや粗、φ1mm以下の石英・長石・チャート・赤色粒を含む	瀬戸・美濃
18	B2区	土坑11	土師器	皿	7.9		1.6	100	10YR8/4浅黄橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャート・雲母を含む	
19	B2区	土坑11	土師器	皿	10.5		2.1	85	10YR8/4浅黄橙色	やや粗、φ1mm以下の石英・長石・チャート・赤色粒を含む	
20	B2区	土坑11	土師器	皿	10.3		1.9	85	10YR8/4浅黄橙色	やや粗、φ1mm以下の石英・長石・チャートを含む	口縁油煙付着
21	B2区	土坑11	土師器	皿	11.5		2.2	75	7.5YR7/3にぶい橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャート・雲母・赤色粒を含む	
22	B2区	土坑11	軟質 施釉土器	皿	11.5		1.7	85	素地5YR6/4にぶい橙色 釉5YR5/6明赤褐色	密、φ1mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	口縁油煙付着
23	B2区	土坑11	土師器	羽釜	15.0		6.6	35	2.5Y6/3にぶい黄色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャート・雲母を含む	
24	B2区	土坑11	白磁	壺蓋	7.0		2.6	50	白色	密	伊万里
25	B2区	土坑11	染付	端反椀	6.9	2.6	4.2	100	N7/0灰白色	精良	伊万里
26	B2区	土坑11	染付	輪花皿	9.8	4.0	2.7	60	5GY8/1灰白色	緻密	伊万里「大明成化年製」銘
27	B2区	土坑11	染付	丸椀	7.9	2.8	4.5	35	N8/0灰白色	精良	伊万里
28	B2区	土坑11	染付	丸椀	10.3	4.1	6.0	85	N8/0灰白色	精良	伊万里
29	B2区	土坑11	施釉陶器	刷毛目椀	11.4	3.9	6.0	85	素地7.5YR7/4にぶい橙色 釉7.5YR6/4にぶい橙色+ 2.5Y8/4淡黄色	精良	唐津 下半部二次焼成受ける
30	B2区	土坑11	施釉陶器	丸椀	10.4	4.0	5.7	50	素地10YR8/3浅黄橙色 釉7.5Y8/1灰白色	精良	京焼 「音羽」刻印

番号	調査区	出土遺構	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存 (%)	色 調	胎 土	備 考
31	B2区	土坑15	土師器	皿	3.5		1.6	75	10YR7/4にぶい黄橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャート・雲母を含む	
32	B2区	土坑15	土師器	皿	8.8		1.5	35	7.5YR7/4にぶい橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャート・赤色粒を含む	
33	B2区	土坑15	土師器	皿	8.8		2.0	65	7.5YR8/6浅黄橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャート・雲母・赤色粒を含む	
34	B2区	土坑15	土師器	皿	10.0		2.4	65	7.5YR8/6浅黄橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャートを含む	
35	B2区	土坑15	土師器	皿	10.4		1.2	80	7.5YR8/4浅黄橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャートを含む	口縁油煙付着
36	B2区	土坑15	土師器	皿	10.6		2.2	60	7.5YR7/6橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャート・赤色粒を極少量含む	口縁油煙付着
37	B2区	土坑15	土師器	皿	10.8		2.1	60	10YR8/2灰白色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャート・赤色粒を含む	口縁油煙付着
38	B2区	土坑15	軟質 施釉土器	皿	12.0		2.1	80	素地N2/0黒色 釉2.5Y6/2黄灰色	密、φ1mm以下の石英・長石を含む	
39	B2区	土坑15	施釉陶器	火入	11.8		残高 3.3	35	素地2.5Y7/3灰白色 釉2.5Y7/3浅黄色	密、φ1mm以下の石英・長石を含む	唐津
40	B2区	土坑15	染付	丸椀	10.2	4.1	5.9	25	白色	精良	伊万里
41	B2区	土坑15	染付	丸椀	10.2	4.3	5.8	40	白色	精良	伊万里
42	B2区	土坑15	染付	皿	13.8	8.0	4.8	65	白色	精良	伊万里
43	B2区	土坑15	染付	皿	21.0	12.0	2.9	25	白色	精良	伊万里
44	B2区	土坑15		鞘鉢	14.2	14.0	6.0	20	7.5YR4/2灰褐色	密、φ2mm以下の石英・長石・チャートを含む	底部糸切
45	C1区	地業53	土師器	皿	8.7		1.8	100	10YR8/4浅黄橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャート・雲母・赤色粒を含む	口縁油煙付着
46	C1区	地業53	施釉陶器	丸皿	9.0	5.0	1.7	100	釉2.5Y8/3淡黄色	密	瀬戸・美濃
47	C1区	地業53	施釉陶器	丸皿	8.5	4.1	2.8	75	素地5Y8/1灰白色 釉2.5Y8/2灰白色	精良、φ1mm以下の石英・長石を少量含む	瀬戸・美濃
48	C1区	地業53	焼締陶器	擂鉢	23.2	11.0	8.3	35	外面5YR4/2灰褐色、 内面5YR4/3にぶい赤褐色、 断面N8/0灰褐色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャートを含む	備前
49	C1区	地業53	焼締陶器	擂鉢	40.0	14.0	18.7	20	外面2.5YR5/6明赤褐色～ 2.5YR3/2暗赤褐色、 内面・断面5YR5/8明赤褐色	密、φ1mm前後の石英・長石・チャートを多く含む、φ3mmの長石・φ10mmのチャートを含む	丹波
50	C1区	第3面整地層	土師器	小壺	2.4		2.5	100	10YR7/2にぶい黄橙色	密	
51	C1区	第3面整地層	土師器	皿	6.9		1.5	100	10YR8/3浅黄橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャート・赤色粒を含む	口縁油煙付着
52	C1区	第3面整地層	土師器	皿	9.0		1.9	100	10YR8/3浅黄橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャート・赤色粒を含む	
53	C1区	第3面整地層	土師器	皿	12.0		2.4	35	10YR7/3にぶい黄橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャートを含む	口縁油煙付着
54	C1区	第3面整地層	土師器	皿	12.3		2.1	60	10YR7/3にぶい黄橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャートを含む	口縁油煙付着
55	C1区	第3面整地層	施釉陶器	丸皿	7.2	3.9	3.1	40	素地2.5Y8/2灰白色 釉2.5Y7/2灰黄色	精良	瀬戸・美濃
56	C1区	第3面整地層	施釉陶器	丸皿	11.8	7.0	2.4	35	素地2.5Y8/1灰白色 釉2.5Y7/1灰白色	精良	瀬戸・美濃
57	C1区	第3面整地層	施釉陶器	椀	7.5	5.0	6.0	35	素地白色、釉2.5Y7/1灰白色 +7.5YR7/3にぶい橙色	精良	瀬戸・美濃 (志野)
58	C1区	第3面整地層	施釉陶器	丸椀	9.6	4.0	5.9	35	素地5YR6/4にぶい橙色 釉5Y4/2灰オリーブ色～5Y 4/3暗オリーブ色	精良	唐津
59	C1区	第3面整地層	施釉陶器	向付	12.8	4.2	4.2	75	素地2.5YR4/3にぶい赤褐色 ～7.5YR5/3にぶい褐色 釉5Y4/2灰オリーブ色	密	唐津
60	C1区	第3面整地層	土師器	鍋 (焙烙)	30.0		残高 5.5	40	外面7.5YR4/2灰褐色、内 断面7.5YR6/4にぶい橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャートを含む	

番号	調査区	出土遺構	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存 (%)	色 調	胎 土	備 考
61	C1区	第3面整地層	土師器	鍋 (焙烙)	30.0		残高 10.0	40	外面10YR4/1褐灰色、 内面10YR5/3にぶい橙色、 断面7.5YR6/2灰褐色	密、φ1mm以下の石英・長石・ チャート・赤色粒を含む	
62	C1区	第4面整地層	土師器	皿	5.2		1.3	65	7.5YR7/6橙色～10YR8/2 灰白色	密、φ1mm以下の石英・長石・ チャートを含む	
63	C1区	第4面整地層	土師器	皿	5.5		0.8	65	2.5Y6/3にぶい黄色	密、φ1mm以下の石英・長石・ チャートを含む	
64	C1区	第4面整地層	土師器	皿	5.7		1.3	100	外面2.5Y7/2灰黄色、 内面10YR7/4にぶい黄橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・ チャート・雲母を含む	
65	C1区	第4面整地層	土師器	皿	7.0		1.4	100	2.5Y8/2灰白色	密、φ1mm以下の石英・長石・ チャートを含む	
66	C1区	第4面整地層	土師器	皿	7.0		1.5	50	2.5Y8/3淡黄色	密、φ1mm以下の石英・長石・ チャート・赤色粒を含む	口縁油煙付着
67	C1区	第4面整地層	土師器	皿	6.9		1.6	35	2.5Y7/3浅黄色	密、φ1mm以下の石英・長石・ チャート・赤色粒を含む	口縁油煙付着
68	C1区	第4面整地層	土師器	皿	6.9		1.1	50	10YR8/4浅黄橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・ チャートを含む	口縁油煙付着
69	C1区	第4面整地層	土師器	皿	7.1		1.5	100	2.5Y7/3浅黄色	密、φ1mm以下の石英・長石・ チャート・赤色粒を含む	
70	C1区	第4面整地層	土師器	皿	9.2		1.5	25	2.5Y7/4浅黄色	密、φ1mm以下の石英・長石・ チャートを含む	
71	C1区	第4面整地層	土師器	皿	8.5		1.5	20	2.5Y7/3浅黄色	密、φ1mm以下の石英・長石・ チャートを含む	
72	C1区	第4面整地層	土師器	皿	9.4		1.9	100	2.5Y6/2灰黄色	密、φ1mm以下の石英・長石・ チャートを含む	
73	C1区	第4面整地層	土師器	皿	9.2		1.8	50	2.5Y5/2暗灰黄色	密、φ1mm以下の石英・長石・ チャートを含む	口縁油煙付着
74	C1区	第4面整地層	土師器	皿	9.3		1.5	50	2.5Y6/2灰黄色	密、φ1mm以下の石英・長石・ 雲母を含む	
75	C1区	第4面整地層	土師器	皿	9.6		1.9	60	2.5Y6/2黄灰色	密、φ1mm以下の石英・長石・ チャート・赤色粒を含む	全体に油分 染込み
76	C1区	第4面整地層	土師器	皿	9.7		1.4	35	2.5Y5/2暗灰黄色	密、φ1mm以下の石英・長石・ チャート・赤色粒を含む	
77	C1区	第4面整地層	土師器	皿	9.4		残高 1.5	20	5Y5/1灰色	密、φ1mm以下の石英・長石・ チャート・雲母を含む	
78	C1区	第4面整地層	土師器	小壺	2.4		2.7	100	5Y7/2灰白色	精良、φ1mm以下の長石を少 量含む	
79	C1区	第4面整地層	土師器	小壺	2.3		2.6	100	5Y7/2灰白色	精良、φ2mm以下の長石含む	
80	C1区	第4面整地層	土師器	小壺	2.4		2.6	100	5Y7/2灰白色	精良、φ1mm以下の長石・チャ ートを含む	
81	C1区	第4面整地層	白磁	皿	10.9	6.0	2.5	25	7.5Y8/1灰白色	精密	
82	C1区	第4面整地層	施釉陶器	小杯	6.0		3.7	20	素地2.5Y6/2灰黄色 釉7.5YR4/4褐色	精密	瀬戸・美濃
83	C1区	第4面整地層	施釉陶器	丸皿	11.4	6.2	2.9	75	素地2.5Y8/1灰白色、釉2.5Y 8/2灰白色～2.5Y8/3淡黄色	精良	瀬戸・美濃 (志野)
84	C1区	第4面整地層	施釉陶器	天目椀	12.0		残高 5.6	50	素地2.5Y7/3浅黄色、 釉10YR3/2黒褐色	密、φ1mm以下の石英・長石・ チャートを含む	瀬戸・美濃
85	C1区	第4面整地層	施釉陶器	皿	10.5	3.2	3.9	65	素地2.5Y7/4浅黄色 釉7.5YR7/3にぶい橙色	精良	唐津
86	C1区	第4面整地層	施釉陶器	椀	10.9	4.9	6.0	35	素地7.5YR6/4にぶい橙色 釉5Y5/3灰オリブ色	密、φ1mm以下の長石・チャ ートを含む	唐津
87	C1区	第4面整地層	施釉陶器	沓茶椀		5.8	7.3	20	素地5Y7/1灰白色 釉5Y6/1灰色	精密	唐津
88	C1区	第4面整地層	施釉陶器	火入/ 香炉	6.0		残高 5.5	25	素地10YR6/3にぶい黄橙色 釉5Y6/2灰オリブ色	精密	唐津
89	C1区	第4面整地層	施釉陶器	德利		6.0	残高 5.8	65	素地7.5YR4/1褐灰色 釉2.5Y7/2灰黄色	密、φ1mm以下の長石を含む	唐津
90	C1区	第4面整地層	施釉陶器	壺	11.0		残高 9.0	35	素地5Y7/1灰白色 釉7.5Y6/1灰色	密、φ1mm以下の長石・チャ ートを含む	唐津
91	C1区	第4面整地層	土師器	鍋	30.3		7.9	20	10YR7/4にぶい黄橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・ チャートを含む	

番号	調査区	出土遺構	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存 (%)	色 調	胎 土	備 考
92	C1区	第4面整地層	土製品	焼塩壺	5.0		9.9	80	10YR7/4にぶい黄橙色	やや粗、φ1mm前後の石英・長石・チャートを含む	
93	C1区	土坑36	土師器	皿	5.5		1.2	80	5Y7/1灰白色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャートを含む	
94	C1区	土坑36	土師器	皿	5.5		1.1	65	2.5Y7/2灰黄色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャート・雲母を含む	
95	C1区	土坑36	土師器	皿	6.9 ×6.4		1.4	85	2.5Y7/2灰黄色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャートを含む	楕円形
96	C1区	土坑36	土師器	皿	7.0		1.3	100	2.5Y7/2灰黄色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャートを含む	口縁油煙付着
97	C1区	土坑36	土師器	皿	6.9		1.5	100	2.5Y6/2黄灰色～2.5Y5/2暗灰黄色	密、φ1mm以下の石英・長石を含む	口縁油煙付着
98	C1区	土坑36	土師器	皿	6.8		1.6	100	2.5Y7/2灰黄色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャートを含む	
99	C1区	土坑36	土師器	皿	6.9		1.5	85	2.5Y7/2灰黄色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャートを含む	口縁油煙付着
100	C1区	土坑36	土師器	皿	8.8		1.9	85	5Y7/2灰黄白色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャートを含む	
101	C1区	土坑36	土師器	皿	9.0		1.9	50	2.5Y4/1黄灰色	密、φ1mm以下の石英・長石を含む	
102	C1区	土坑36	土師器	皿	8.7		1.7	65	7.5YR5/2灰褐色	密、φ1mm以下の石英・長石を含む	
103	C1区	土坑36	土師器	羽釜	(20)		残高 5.7	20	外面10YR6/4にぶい黄橙色、内・断面2.5Y7/2灰黄色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャートを含む	
104	C1区	土坑36	焼締陶器	播鉢			残高 8.7	破片	7.5YR3/3暗褐色～5YR5/4にぶい赤褐色	密、φ2mm前後の石英・長石を含む	信楽
105	C1区	土坑50	土師器	皿	10.6		1.5	35	2.5Y7/2灰黄色	密、φ1mm以下の石英・長石・雲母を含む	
106	C1区	土坑51	土師器	皿	5.2		1.0	85	2.5Y7/4浅黄色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャートを含む	
107	C1区	土坑51	土師器	皿	5.5		0.9	35	2.5Y7/1灰白色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャートを含む	
108	C1区	土坑51	土師器	皿	8.3		1.6	65	5Y7/1灰白色	密、φ1mm以下の石英・長石・φ6mmの礫含む	口縁油煙付着
109	C1区	土坑51	土師器	皿	9.0		1.8	50	10YR4/2灰黄褐色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャート・赤色粒を含む	
110	C1区	土坑51	土師器	皿	9.5		1.6	50	10YR3/2黒褐色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャートを含む	内外面油煙付着
111	C1区	土坑51	土師器	皿	9.7		1.8	100	2.5Y5/2暗灰黄色	密、φ1mm以下の石英・長石を含む	
112	C1区	土坑51	土師器	皿	9.3		1.9	85	10YR8/3浅黄橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャートを含む	
113	C1区	土坑51	土師器	皿	9.7		1.7	85	10YR8/2灰白色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャートを含む	口縁油煙付着
114	C1区	土坑51	土師器	皿	11.2		2.2	100	2.5Y8/2灰白色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャート・雲母を含む	口縁油煙付着
115	C1区	土坑51	施釉陶器	菊皿	11.9	6.3	3.1	100	素地5Y8/1灰白色 釉5YR8/2灰白色	やや粗	瀬戸・美濃
116	C1区	土坑51	施釉陶器	皿	11.7	6.2	2.9	40	素地2.5Y8/2灰白色 釉5YR4/4にぶい赤褐色	やや粗、φ1mm以下の石英を含む	唐津
117	C1区	土坑51	施釉陶器	皿	10.9	3.6	4.1	100	素地5YR7/6橙色 釉2.5Y7/3浅黄色	密、φ1mm以下の長石・赤色粒を含む	唐津
118	C1区	土坑51	施釉陶器	丸椀	11.1	4.2	6.0		素地5YR5/1褐灰色 釉7.5Y4/2灰オリーブ色	密、φ1mm以下の長石を含む	唐津
119	C1区	土坑51	施釉陶器	德利	6.0		残高 11.2	25	素地7.5YR5/2灰褐色 釉5Y6/3オリーブ黄色	精良、φ1mm前後の長石含む	朝鮮唐津
120	C1区	第5面整地層	土師器	皿	5.2		1.4	100	10YR5/1褐灰色	密、φ1mm以下の長石・チャート・雲母を含む	
121	C1区	第5面整地層	土師器	皿	5.6		1.1	40	2.5Y7/2灰黄色	密、φ1mm以下の長石・チャートを含む	
122	C1区	第5面整地層	土師器	皿	5.7		1.0	85	10YR7/2にぶい黄橙色	密、φ1mm以下の長石・チャート・雲母を含む	

番号	調査区	出土遺構	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存 (%)	色 調	胎 土	備 考
123	C1区	第5面整地層	土師器	皿	5.8		1.1	100	10YR6/3にぶい黄橙色	密、φ1mm以下の長石・チャート・雲母を含む	
124	C1区	第5面整地層	土師器	皿	6.6		1.3	50	10YR6/2灰黄褐色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャートを含む	
125	C1区	第5面整地層	土師器	皿	7.0		1.4	50	2.5Y7/3浅黄色	密、φ1mm以下の長石・チャートを含む	口縁油煙付着
126	C1区	第5面整地層	土師器	皿	6.8		1.4	90	外面5Y7/2灰白色、 内面2.5Y4/1黄灰色	密、φ1mm以下の長石・チャート・雲母を含む	
127	C1区	第5面整地層	土師器	皿	6.8		1.3	100	10YR8/3浅黄橙色	密、φ1mm以下の長石・チャートを含む	
130	C1区	第5面整地層	土師器	皿	6.8		1.2	65	2.5Y8/3淡黄色	密、φ1mm以下の長石・チャート・雲母を含む	
131	C1区	第5面整地層	土師器	皿	6.6		1.4	100	2.5Y7/2灰黄色	密、φ1mm以下の長石・チャートを含む	
130	C1区	第5面整地層	土師器	皿	6.7		1.4	100	2.5Y7/2灰黄色	密、φ1mm以下の長石・チャートを含む	
131	C1区	第5面整地層	土師器	皿	6.6		1.5	100	外面2.5Y7/2灰黄色～5Y7/ 2灰白色、内面N3/0暗灰色	密、φ1mm以下の長石・チャートを含む	
132	C1区	第5面整地層	土師器	皿	8.8		1.7	75	2.5Y7/2灰黄色	密、φ1mm以下の長石・チャートを含む	口縁油煙付着
133	C1区	第5面整地層	土師器	皿	9.4		1.9	100	2.5Y8/1灰白色	密、φ0.5mm以下のチャート・雲母・赤色粒を含む	
134	C1区	第5面整地層	土師器	皿	9.2		1.7	75	5Y7/1灰白色	密、φ1mm以下の長石・黒色粒を含む	
135	C1区	第5面整地層	土師器	皿	9.8		1.6	75	外面7.5YR6/4にぶい橙色、 内面10YR7/3にぶい黄橙色	密、φ1mm以下の長石・チャートを含む	
136	C1区	第5面整地層	土師器	皿	9.9		1.7	40	2.5Y8/2灰白色	密、φ1mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	
137	C1区	第5面整地層	土師器	皿	10.8		2.0	50	2.5Y7/2灰黄色	密、φ0.5mm以下の長石・チャートを含む	
138	C1区	第5面整地層	土師器	皿	10.6		2.2	65	2.5Y7/2灰黄色	密、φ1mm以下の長石・チャートを含む	底部外面墨書
139	C1区	第5面整地層	土師器	小壺	1.8		2.6	100	2.5Y6/2灰黄色	密、φ1mm以下の長石・チャートを含む	
140	C1区	第5面整地層	施釉陶器	皿		11.8	残高 1.6	底部 25	素地2.5Y8/2灰白色 釉10Y3/1オリーブ黒色	やや粗、φ1mm前後の石英・長石を含む	
141	C1区	第5面整地層	施釉陶器	小杯	6.3	3.4	2.0	100	素地5Y8/1灰白色 釉5Y7/3浅黄色	やや粗、φ3mm前後の石英を含む	瀬戸・美濃
142	C1区	第5面整地層	施釉陶器	杯	8.4	4.4	3.5	80	素地7.5Y8/1灰白色 釉5Y8/1灰白色	やや粗、φ1mm以下の長石・チャートを含む	瀬戸・美濃 (志野)
143	C1区	第5面整地層	施釉陶器	丸皿	12.0	7.3	2.3	50	素地5Y8/1灰白色 釉5Y8/1灰白色	粗、φ1mm以下の長石を含む	瀬戸・美濃
144	C1区	第5面整地層	施釉陶器	丸皿	11.6	6.8	2.9		素地5Y8/1灰白色 釉5Y7/1灰白色	やや粗、φ1mm以下の長石を含む	瀬戸・美濃
145	C1区	第5面整地層	施釉陶器	菊皿	10.4	6.2	2.9	40	釉5Y7/1灰白色	密、φ1mm以下の長石・チャート・黒色粒を含む	瀬戸・美濃
146	C1区	第5面整地層	施釉陶器	折縁 ソギ皿	13.7	8.0	2.8	底部 100	釉5Y7/1浅黄色	密、φ1mm以下の長石・チャートを含む	瀬戸・美濃
147	C1区	第5面整地層	施釉陶器	皿	11.1		残高 3.1	25	素地10YR8/2灰白色 釉10YR7/3にぶい黄橙色	やや粗、φ0.5mm以下の石英・長石を含む	唐津
148	C1区	第5面整地層	施釉陶器	皿	11.2	3.6	4.7	75	素地10YR5/4にぶい黄褐色 釉5Y6/1灰色	密、φ1mm以下の長石・チャートを含む	唐津
149	C1区	第5面整地層	施釉陶器	皿	12.0	4.0	4.3	75	素地10YR6/3にぶい黄橙色 釉7.5Y6/1灰色	やや粗、φ1mm以下の長石・黒色粒を含む	唐津
150	C1区	第5面整地層	施釉陶器	丸椀	10.3	4.0	5.5	35	素地10YR7/4にぶい黄褐色 釉N7/0灰白色	やや粗、φ1mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	唐津
151	C1区	第5面整地層	施釉陶器	向付	12.5	4.5	5.0	80	素地2.5YR6/4にぶい橙色 釉10YR5/2灰黄褐色	密、φ2mm以下の長石・チャートを含む	唐津
152	C1区	第5面整地層	白磁	皿	12.0	3.8	2.7	25	白色	精密、φ1mm以下の黒色粒を含む	
153	C1区	第5面整地層	土師器	鍋	31.2		残高 9.7	35	外面2.5Y3/1黒褐色、内面 2.5Y6/2灰黄色	密、φ2mm以下の長石・チャート・赤色粒を含む	

番号	調査区	出土遺構	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存 (%)	色 調	胎 土	備 考
154	C1区	第5面整地層	焼締陶器	播鉢	25.8	(9.4)	11.6	20	5YR6/6橙色	密、φ4mm以下の長石・チャートを含む	信楽、 内面煤付着
155	C1区	第5面整地層	瓦質土器	播鉢			残高 13.2	破片	7.5YR7/3にぶい橙色	やや粗、φ2mm以下の石英・長石・チャート・赤色粒を含む	大和？ 南山城？
156	C1区	第5面整地層 下層	土師器	皿	5.6		1.2	100	2.5Y7/2灰黄色	密、φ1mm以下の石英・長石を含む	
157	C1区	第5面整地層 下層	土師器	皿	5.7		1.1	100	2.5Y6/1黄灰色	密、φ1mm以下の石英・長石・雲母を含む	
158	C1区	第5面整地層 下層	土師器	皿	5.9		1.1	90	2.5Y7/2灰黄色	密、φ1mm以下の石英・長石・雲母を含む	
159	C1区	第5面整地層 下層	土師器	皿	6.8		1.2	100	2.5Y7/2灰黄色	密、φ0.5mm以下の石英・長石を含む	
160	C1区	第5面整地層 下層	土師器	皿	6.8		1.2	100	2.5Y7/2灰黄色	密、φ0.5mm以下の石英、φ1mmのチャートを含む	
161	C1区	第5面整地層 下層	土師器	皿	6.3		1.5	60	2.5Y8/2灰白色	密、φ1mm以下の石英・雲母・赤色粒を含む	口縁油煙付着
162	C1区	第5面整地層 下層	土師器	皿	9.5		1.7	65	2.5Y7/2灰黄色	密、φ0.5mm以下の石英・長石を含む	
163	C1区	第5面整地層 下層	土師器	皿	10.6		2.0	75	10YR7/2にぶい黄橙色	密、φ0.5mm以下の石英含む	
164	C1区	第5面整地層 下層	土師器	皿	10.7		2.1	100	10YR8/1灰白色～10YR6/2灰黄褐色	密、φ0.5mm以下の石英・赤色粒を含む	
165	C1区	第5面整地層 下層	施釉陶器	丸皿	9.8	5.1	2.3	100	素地N8/0灰白色 釉7.5Y7/2、灰白色	やや粗	瀬戸・美濃
166	C1区	第5面整地層 下層	施釉陶器	天目椀	11.4	4.4	6.1	40	素地2.5Y8/2灰白色 釉7.5Y4/2灰褐色	粗、φ1mm以下の長石・黒色粒を多く含む	瀬戸・美濃
167	C1区	第5面整地層 下層	施釉陶器	天目椀	11.9		残高 3.4	35	素地2.5Y7/2灰黄色 釉7.5YR2/3極暗褐色	やや粗	瀬戸・美濃
168	C2区	土坑6	土師器	皿	5.0		1.1	25	10YR7/4にぶい黄橙色	密、φ1mm以下の長石・雲母を含む	
169	C2区	土坑6	土師器	皿	6.8		1.3	100	10YR8/3浅黄橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	口縁油煙付着
170	C2区	土坑6	土師器	皿	7.1		1.1	65	2.5YR8/3浅黄色	やや粗、φ1mm以下の石英を含む	
171	C2区	土坑6	土師器	皿	7.2		1.3	100	2.5Y8/4淡黄色	精良、φ1mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	
172	C2区	土坑6	土師器	皿	8.4		1.3	85	7.5YR7/6橙色	密、φ1mm以下の赤色粒含む	
173	C2区	土坑6	土師器	皿	8.8		1.8	100	10YR7/3にぶい黄橙色	精良、φ1mm以下の石英を含む	
174	C2区	土坑6	土師器	皿	9.2		1.7	75	2.5Y8/2灰白色	密、φ0.3mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	口縁油煙付着
175	C2区	土坑6	土師器	皿	9.3		1.8	100	2.5Y8/2灰白色	密、φ0.5mm以下の石英・赤色粒を含む	
176	C2区	土坑6	土師器	皿	9.5		1.6	90	10YR8/2灰白色	密、φ1mm以下の石英・雲母・赤色粒を含む	
177	C2区	土坑6	土師器	皿	9.3		1.7	65	10YR8/3浅黄橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	口縁油煙付着
178	C2区	土坑6	土師器	皿	9.6		1.9	65	2.5Y7/2灰黄色	密、φ2mm以下の石英・長石を含む	
179	C2区	土坑6	土師器	皿	9.9		1.9	100	2.5Y8/3淡黄色	精良、φ1mm以下の石英・長石を含む	口縁油煙付着
180	C2区	土坑6	土師器	皿	11.0		1.7	35	10YR8/3浅黄橙色	密	
181	C2区	土坑6	土師器	皿	12.0		2.3	65	2.5Y8/4淡黄色	密、φ1mm以下の石英・長石・雲母を含む	
182	C2区	土坑6	土師器	皿	11.8		残高 1.8	25	10YR8/3浅黄橙色	密、φ1mm以下の長石を含む	
183	C2区	土坑6	土師器	皿	17.0		2.8	20	10YR8/3浅黄橙色	密、φ1mm以下の石英・雲母・赤色粒を含む	

番号	調査区	出土遺構	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存 (%)	色 調	胎 土	備 考
184	C2区	土坑6	施釉陶器	天目碗	5.7	2.8	3.5	80	素地10YR8/2灰白色、釉10YR7/3にぶい黄橙色YR3/1黒褐色+10YR6/2灰黄褐色	密、φ1mm以下の長石を含む	瀬戸・美濃
185	C2区	土坑6	施釉陶器	折縁ソギ皿	10.1	5.4	2.4	100	素地2.5Y7/2灰黄色 釉7.5Y6/3オリーブ灰色	密	瀬戸・美濃
186	C2区	土坑6	施釉陶器	丸碗	11.5	4.8	7.4	50	素地白色、釉2.5Y2/1黒色	精密	瀬戸・美濃
187	C2区	土坑6	施釉陶器	皿	10.7	4.5	3.1	80	素地5YR5/4にぶい赤褐色 釉5Y5/2灰オリーブ色	密、φ1mm以下の長石を含む	唐津
188	C2区	土坑6	施釉陶器	皿	10.4	3.9	3.4	65	素地10YR7/3にぶい黄橙色 釉2.5Y6/2灰黄色	密、φ1mm以下の長石・チャートを含む	唐津
189	C2区	土坑6	施釉陶器	皿	11.2	4.2	3.2	50	素地5Y7/1灰白色 釉5Y6/2灰オリーブ色	密、φ1mm以下の長石・チャートを含む	唐津
190	C2区	土坑6	施釉陶器	皿	10.9	3.9	3.7	80	素地2.5Y7/2灰黄色 釉5GY6/1オリーブ灰色	密	唐津
191	C2区	土坑6	施釉陶器	丸碗	10.0		残高 5.2	20	素地7.5YR4/2灰褐色 釉5Y5/2灰オリーブ色	精密	唐津
192	C2区	土坑6	施釉陶器	沓茶碗			残高 6.3	20	素地N7/0灰色 釉7.5Y6/1灰色	やや粗、φ1mm以下の長石を含む	唐津
193	C2区	土坑6	染付	青花皿	12.0	6.1	3.0	25	N9/0白色	密、堅緻	
194	C2区	土坑6	瓦質土器	壺	8.5	8.6	8.8	60	外面5Y4/1灰色、内面N3/0 暗灰色～5Y8/1灰白色	密、φ1mm以下の石英・長石・雲母・黒色粒を含む	
195	C2区	土坑6	瓦質土器	灯火具		8.8	2.0		10YR7/3にぶい黄橙色	密、φ1mm以下の石英・長石・雲母・赤色粒を含む	
196	C2区	土坑6	焼締陶器	播鉢	14.4		残高 8.0	底部 100	5YR4/2灰褐色	やや粗、φ1～5mmの石英・長石・チャートを多く含む	信楽

付表2 瓦観察表

番号	調査区	出土遺構	種類	文様	色調・胎土	調整・特徴
197	C1区	第6面以下掘下げ	軒丸瓦	巴文	外面N5/0灰色、断面N7/0灰白色、胎土密、φ5mm以下の石英・長石・チャート含む、焼成良	瓦当周縁・側面・裏面ナデ。
198	C2区	第2面整地層	軒丸瓦	巴文	外面N4/0灰色、断面10Y8/1灰白色、胎土密、φ2mm以下の石英・長石・チャート含む、焼成良	瓦当側面・裏面ナデ。
199	C2区	第2面整地層	軒丸瓦	巴文	外面5Y7/1灰白色、断面N6/0灰色、胎土密、φ1mm以下の石英・長石・チャート含む、焼成良	瓦当側面・裏面ナデ。
200	C2区	第2面整地層	軒丸瓦	巴文	外面2.5Y7/2灰黄色、断面10Y8/1灰白色、胎土やや粗、φ2mm以下の石英・長石・チャート含む、焼成やや軟	瓦当側面・裏面ナデ。
201	C2区	調査区壁整形中	軒丸瓦	巴文	外面10YR8/2灰白色、断面2.5Y8/2灰白色、胎土やや粗、φ2mm以下の石英・長石・チャート・クサリレキ多く含む、焼成良	瓦当側面・裏面ナデ、瓦当面・裏面部分的に煤附着
202	C2区	第2面整地層	軒丸瓦	巴文	外面N5/0灰色、断面N8/0灰白色+N4/0灰色、胎土密、φ2mm以下の石英・長石・φ3mm前後のチャート含む、焼成良	瓦当裏面ナデ。
203	C2区	第2面整地層	軒丸瓦	巴文	外面2.5Y8/1灰白色+N5/0灰色、断面N7/0灰白色、胎土密、φ1mm以下の石英・長石・チャート含む、φ5mmの長石少量含む、焼成良	瓦当周縁・裏面ナデ。
204	B4区	石垣1裏込め	軒丸瓦	巴文	外面N5/0灰色～N7/0灰白色、断面10Y8/1灰白色、胎土やや粗、φ2～3mm石英・長石・チャート多く含む、焼成良	瓦当周縁部・側面ケズリ後ナデ。裏面ナデ。
205	B4区	石垣1裏込め	軒丸瓦	巴文	外面N5/0～N6/0灰色、断面7.5Y8/1灰白色+7.5Y5/1灰色、胎土密、φ5mm以下の石英・長石・チャート含む、焼成良	瓦当周縁部ケズリ後ナデ。側面ケズリ。裏面～丸瓦部凹面ナデ、玉縁側布目、丸瓦凸面ナデ。
206	B4区	石垣1裏込め	軒丸瓦	巴文	外面2.5Y7/2灰黄色、断面2.5Y7/1灰白色、胎土やや粗、φ5mm以下の石英・長石・チャート・クサレレキ多く含む、焼成やや軟	瓦当面ハナレ砂附着。周縁部・側面・裏面外周ケズリ。裏面中央ナデ。
207	B5区	土坑15	軒丸瓦	巴文	外面N3/0暗灰色+2.5Y7/2灰黄色、断面2.5Y8/2灰白色、胎土やや粗、φ3mm以下の石英・長石・チャート含む、赤色粒子多く含む、焼成やや軟	瓦当面ハナレ砂附着。周縁・裏面、丸瓦凹凸部ナデ。
208	B2区	土坑10	軒丸瓦	巴文	外面2.5Y7/1灰白色+N6/0～N5/0灰色、断面N8/0灰白色、胎土密、φ2～3mmの石英・長石・チャート・雲母含む、焼成良	瓦当周縁部・側面・裏面ナデ。丸瓦部凸面ナデ、側縁近くに記号刻む。凹面ナデ、玉縁側布目、玉縁寄り中央に目釘穴。
209	B1区	土坑25	軒丸瓦	巴文	外面5Y7/1灰白色～2.5Y5/1黄灰色、断面N8/0灰白色、胎土やや粗、φ1mm以下の長石・チャート多く含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂附着。周縁～瓦当裏面ナデ。
210	B1区	土坑4	軒丸瓦	巴文	外面N4/0灰色、断面7.5Y8/1灰白色、胎土密、φ3mm以下の長石・チャート含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂附着。上面～丸瓦凸部ナデ。瓦当裏面ナデ。
211	A2区	西側攪乱	軒丸瓦	巴文	外面2.5Y5/1黄灰色+N4/0灰色、断面5Y8/1灰白色、胎土やや粗、φ2mm以下の長石・チャート多く含む、焼成やや軟	瓦当面ハナレ砂附着。裏面ナデ。
212	B5区	堀22	軒丸瓦	巴文	外面N6/0灰色+N4/0灰色、断面N7/0灰白色、胎土密、φ2mm以下の石英・長石・チャート含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂附着。周縁ケズリ。側面・裏面、丸瓦凸面ナデ。瓦当面に火傷。
213	B5区	堀22	軒丸瓦	巴文	外面N4/0灰色、断面N8/0灰白色、胎土密φ1mm以下の石英・長石・チャート含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂附着。側面ケズリ。裏面ナデ。
214	B5区	堀22	軒丸瓦	巴文	外面2.5Y6/1黄灰色+N5/0灰色、断面7.5Y8/1灰白色、胎土密、φ2mm以下の石英・長石・チャート含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂附着。側面・裏面ナデ。
215	B5区	堀22	軒丸瓦	巴文	外面N3/0暗灰色～N4/0灰色、胎土やや粗、φ3mm以下の石英・長石・チャート含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂附着。周縁部ナデ。側面ケズリ瓦当裏面ケズリ後ナデ。丸瓦部凹凸面ナデ、玉縁。寄り中央に目釘穴。
216	B5区	堀22	軒丸瓦	巴文	外面N3/0暗灰色、断面N8/0灰白色、焼成良	瓦当側面・裏面、丸瓦凹凸面ナデ。二次焼成。
217	B5区	堀22	軒丸瓦	巴文	外面N5/0灰色+5Y7/1灰白色、断面N8/0灰白色、胎土やや粗、φ2mm以下の石英・長石・雲母含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂附着。周縁・側面・裏面、丸瓦凸部ナデ。
218	B5区	堀22	軒丸瓦	巴文	外面N6/0灰色、断面N7/0灰白色、胎土やや粗、φ2mm以下の石英・長石・チャート・黒色粒子多く含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂附着。周縁・側面・裏面、丸瓦凹凸部ナデ。
219	B5区	堀22	軒丸瓦	巴文	外面N4/0灰色、断面N7/0灰白色、胎土密、φ2mm以下の石英・長石・チャート・雲母含む、焼成良	瓦当周縁・側面・裏面ナデ。
220	C1区	堀1	軒丸瓦	巴文	外面N4/0～N6/0灰色、断面5Y8/1灰白色、胎土密、φ2mm以下の石英・長石・チャート多く含む、焼成良	瓦当側面・裏面、丸瓦凸面ナデ。
221	C2区	第2面整地層	軒平瓦	唐草文	外面N6/0～N5/0灰色、断面2.5Y8/3黄灰色、胎土やや粗、φ3mm以下の石英・長石・チャート・クサリレキ多く含む、焼成軟	瓦当上面面取。周縁、頸部、裏面、平瓦凹凸面ナデ。
222	C1区	地業53底面瓦敷	軒平瓦	唐草文	外面N5/0灰色～N7/0灰白色、断面N8/0灰白色、胎土やや粗、φ5mm以下の石英・長石・チャート多く含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂附着。上面面取。平瓦凹部ナデ。頸部～裏面ケズリ後ナデ。

番号	調査区	出土遺構	種類	文様	色調・胎土	調整・特徴
223	C1区	地業53 底面瓦敷	軒平瓦	唐草文	外面N5/0灰色、断面N8/0灰白色、胎土密、φ2mm以下の石英・長石・チャート含む、焼成やや軟	瓦当上面面取。周縁、顎部、裏面、平瓦凹凸面ナデ。
224	C1区	地業53 底面瓦敷	軒平瓦	立波文	外面N4/0灰色、断面5Y8/1灰白色、胎土密、φ2mm以下の石英・長石・チャート含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂付着。側面・裏面、平瓦凹面ナデ。
225	C1区	地業53 底面瓦敷	軒平瓦	唐草文	外面N4/0灰色、断面2.5Y8/3淡黄色、胎土密、φ2mm以下の石英・長石・チャート含む、焼成良	顎部、平瓦凹凸面ナデ。瓦当裏面板ナデ。
226	B4区	石垣1 掘形	軒平瓦	花文	外面N4/0～N5/0灰色、断面7.5Y8/1灰白色、胎土密、φ2mm以下の石英・長石・チャート含む、焼成やや軟	瓦当面ハナレ砂付着。瓦当上面面取。顎部～裏面ケズリ。
227	C1区	地業53 底面瓦敷	軒平瓦	唐草文	外面N5/0+N4/0灰色、断面7.5Y8/1灰白色、胎土やや粗、φ5mm以下のチャート含む、石英・長石多く含む、焼成良	瓦当上面面取。顎部、平瓦凹凸面ナデ。裏面ケズリ後ナデ。
228	C2区	調査区壁 清掃中	軒平瓦	唐草文	N5/0～N6/0灰色、断面N6/0灰色、胎土密、φ1mm以下の石英・長石・細粒多く含む、φ3mm以下のクサリレキ少量含む、焼成やや軟	瓦当上面面取。顎部、裏面、平瓦凹面ナデ。
229	B3区	淀城期盛土	軒平瓦	唐草文	外面N6/0灰色、断面5Y8/1灰白色、胎土密、φ1～2mm長石・チャート含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂付着。上面面取。平瓦凹部ケズリ後ナデ。顎部～平瓦凸部ナデ。
230	B4区	石垣1 裏込め	軒平瓦	唐草文	外面2.5Y6/1～2.5Y5/1黄灰色、断面N8/0灰白色～N5/0灰色、胎土密、φ1～2mm石英・長石・チャート多く含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂付着。上面面取。平瓦凹部ナデ。顎部～裏面ケズリ後ナデ。平瓦凸部ナデ。
231	A2区	淀城期盛土	軒平瓦	唐草文	外面10YR5/1褐色+10YR7/1灰白色、断面7.5Y8/1灰白色、胎土密、φ2mm前後の長石少量含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂付着。上面ケズリ、平瓦凹面ナデ。顎部～瓦当裏面強いナデ。
232	B1区	土坑27	軒平瓦	唐草文	外面N4/0灰色、断面5Y8/1灰白色+N4/0灰色、胎土やや粗、φ2mm以下の長石・チャート多く含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂付着。上面面取。平瓦凹部ナデ。顎部～裏面ケズリ。平瓦凸部ナデ。
233	B5区	土坑15	軒平瓦	唐草文	外面2.5Y5/1黄灰色、断面5Y8/1灰白色、胎土やや粗、φ2～3mmの石英・長石・チャート多く含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂付着。顎部～平瓦凸部、凹部ナデ。
234	B1区	土坑27	軒平瓦	唐草文	外面N4/0灰色、断面7.5Y8/1灰白色+10Y4/1灰色、胎土やや粗、φ5mm前後の長石・チャート多く含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂付着。上面面取。平瓦凹部ナデ。顎部～裏面ケズリ後ナデ。平瓦凸部ナデ。
235	B1区	土坑4	軒平瓦	唐草文	外面10YR6/1褐色、断面5Y8/1灰白色+7.5Y5/1灰色、胎土やや粗、φ5mm以下の石英・長石・チャート含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂付着。上面面取。平瓦凹部ナデ。顎部～平瓦凸部ナデ。
236	C1区	堀1	軒平瓦	唐草文	外面5Y7/1灰白色、胎土密、φ1mm以下の石英・長石・チャート含む、焼成良・須恵質	瓦当周縁・顎部・裏面ナデ。
237	C1区	堀1	軒平瓦	唐草文	外面N5/0灰色、断面10Y8/1灰白色、胎土密、φ2mm以下の石英・長石・チャート含む、焼成やや軟	顎部・瓦当裏面ケズリ後ナデ。
238	B5区	土坑21	軒平瓦	唐草文	外面N8/0～N7/0灰白色、断面N8/0灰白色、胎土密、φ2mm以下の石英・長石・雲母含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂付着。周縁、顎部、裏面、平瓦凹凸面ナデ。
239	B5区	土坑21	軒平瓦	唐草文	外面N4/0～N5/0灰色、断面N8/0灰白色、胎土やや粗、φ5mm以下の石英・長石・チャート含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂付着。周縁、顎部、裏面、平瓦凹凸面ナデ。
240	B5区	土坑21	軒平瓦	唐草文	外面5Y7/1灰白色、断面N8/0灰白色、胎土やや粗、φ2mm以下の石英・長石・チャート・赤色粒含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂付着。上面面取。周縁ナデ。顎部・裏面ケズリ後ナデ。平瓦凹凸部ナデ。
241	B5区	土坑24	軒平瓦	唐草文	外面N4/0灰色、断面N8/0灰白色、胎土やや粗、φ1mm以下の石英・長石・チャート・雲母含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂付着。周縁、顎部、裏面、平瓦凹凸面ナデ。
242	B5区	堀22	軒平瓦	唐草文	外面N5/0～N6/0灰色、断面7.5Y7/1灰白色、胎土密、φ1mm以下の石英・長石・チャート含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂付着。上面面取。顎部～平瓦凸部ナデ。平瓦凹面ナデ。
243	B5区	堀22	軒平瓦	唐草文	外面N4/0～N5/0灰色、胎土密、φ2mm以下の石英・長石・チャート含む、焼成良	瓦当上面面取。裏面、平瓦凹凸面ナデ。
244	B5区	堀22	軒平瓦	唐草文	外面N6/0灰色、胎土やや粗、φ5mm前後の長石・チャート含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂付着。顎部ケズリ。裏面強いナデ。平瓦凹凸面ナデ。
245	C2区	調査区壁 整形中	棟丸瓦	三葉葵文	外面2.5Y7/2黄灰色+N5/0灰色、断面2.5Y8/1灰白色+N5/0灰色、胎土密、φ2mm以下の石英・長石含む、φ5mm以下のクサリレキ多く含む、焼成やや軟	瓦当裏面、丸瓦凹凸面ナデ。
246	C2区	第2面整地層	棟丸瓦	三葉葵文	外面N6/0灰色、断面N7/0灰白色、胎土密、φ2mm以下の石英・長石・チャート含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂付着。側面・裏面ナデ。
247	B5区	攪乱	棟丸瓦	三葉葵文	外面2.5Y5/1黄灰色、断面5Y8/2灰白色+5Y5/1灰色、胎土密、φ1mm以下の石英・長石・赤色粒含む、焼成軟	瓦当面ハナレ砂付着。側面・裏面ナデ。
248	C2区	第2面整地層	棟丸瓦	菊文	外面N5/0灰色、断面N5.0灰色、胎土やや粗、φ2mm以下の石英・長石・チャート含む、φ5mm以下のクサリレキ多く含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂付着。側面・裏面ナデ。
249	B2区	堀8	棟丸瓦	菊文	外面2.5Y6/1黄灰色、断面5Y8/2灰白色、胎土密、φ2～3mmの石英・長石・チャート含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂付着。周縁、裏面周縁部ナデ。

番号	調査区	出土遺構	種類	文様	色調・胎土	調整・特徴
250	C1区	土坑2	棟丸瓦	菊文	外面N4/0~N5/0灰色、断面2.5Y7/4浅黄色、胎土やや粗、φ2~3mm以下の石英・長石・チャート多く含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂付着。側面ケズリ後ナデ。丸瓦凹凸面ナデ。
251	C1区	土坑2	棟丸瓦	菊文	外面N6/0灰色、断面7.5Y8/1灰白色、胎土密、φ3mm以下の石英・長石・チャート多く含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂付着。裏面、丸瓦凹凸面ナデ。
252	C1区	土坑2	棟丸瓦	菊文	外面N5/0灰色、断面2.5Y7/3浅黄色、胎土やや粗、φ3mm以下の石英・長石・チャート多く含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂付着。裏面、丸瓦凹凸面ナデ。
253	C1区	土坑2	棟丸瓦	菊文	外面N4/0灰色、断面2.5Y7/3浅黄色、胎土密、φ2mm以下の石英・長石・チャート含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂付着。側面、裏面ナデ。
254	C1区	土坑2	棟丸瓦	菊文	外面2.5Y7/2灰黄色、断面2.5Y7/2灰黄色、胎土密、φ3mm以下の石英・長石・チャート含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂付着。側面、裏面、丸瓦凸面ナデ。
255	C1区	土坑2	棟丸瓦	菊文	外面N4/0灰色、断面2.5Y7/4浅黄色、胎土やや粗、φ3mm以下の石英・長石・チャート・φ10mmの大チャート含む、焼成やや軟	瓦当面ハナレ砂付着。側面、裏面、丸瓦凸面ナデ。
256	C1区	地業53 底面瓦敷	棟丸瓦	菊文	外面N4/0灰色、断面5Y8/1灰白色、胎土密、φ2mm以下の石英・長石・チャート含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂付着。側面、裏面、平瓦凸面ナデ。
257	C2区	石垣4	棟丸瓦	菊文	外面2.5Y6/1黄灰色、断面2.5Y8/3淡黄色+2.5Y5/1黄灰色、胎土やや粗、φ2mm以下の石英・長石・チャート含む、クサリレキ少量含む、焼成良	瓦当裏面、丸瓦凹凸面ナデ。
258	A2区	淀城期盛土	鳥衾	巴文	外面N4/0~N5/0灰色、断面7.5Y8/1灰白色、胎土やや粗、φ2mm前後の長石・チャート多く含む、焼成良	瓦当面ハナレ砂付着。上面~丸瓦凸部ナデ。裏面ナデ。
259	C2区	土坑6	鳥衾	巴文	外面N4/0~N5/0灰色、断面N8/0灰白色、胎土密、φ2mm以下の石英・長石・チャート含む、焼成やや軟	丸瓦凹凸面ナデ。
260	C1区	地業53	輪違瓦		外面N4/0灰色、断面N8/0灰白色、胎土やや粗、φ2mm以下の石英・長石・チャート含む、焼成やや軟	端面・凸面ナデ。凹面布目ナデ消し。
261	C1区	地業53	輪違瓦		外面N4/0灰色、断面10YR7/3にぶい黄橙色、胎土密、φ5mm以下の石英・長石・チャート・クサリレキ多く含む、焼成やや軟	端面・凸面ナデ。
262	C1区	堀1	軒棧瓦	巴唐草文	外面N4/0~N5/0灰色、断面2.5Y7/2灰黄色、胎土やや粗、φ3mm以下の石英・長石・φ1mm前後のチャート含む、焼成やや軟	瓦当面ハナレ砂付着。側面・頸部、瓦凹凸面ナデ。
263	C1区	第6面以下掘下げ	鬼瓦	桐文	外面N5/0~N6/0灰色、断面N8/0+N7/0灰白色、胎土密、φ2mm以下の石英・長石・チャート含む、φ5~10mmのチャート疎らに含む、焼成良	箆面ハナレ砂付着。端面・裏面ナデ
264	C1区	第6面以下掘下げ	鬼瓦	桐文	外面N5/0~N6/0灰色、断面N8/0+N7/0灰白色、胎土密、φ2mm以下の石英・長石・チャート含む、φ5~10mmのチャート疎らに含む、焼成良	箆面ハナレ砂付着。端面・裏面ナデ
265	C1区	第5面整地層下層	鬼瓦	桐文	外面N3/0暗灰色、断面N8/0~N7/0灰白色、胎土密、φ2mm以下の石英・長石・チャート雲母含む、焼成良	箆面ハナレ砂付着。端面・裏面ナデ
266	C1区	地業53 底面瓦敷	鬼瓦	菊文	外面N4/0~N5/0灰色、断面5Y7/2灰白色、胎土やや粗、φ5mm以下の石英・長石・チャート・クサリレキ多く含む、長石特に多い、焼成やや軟	表面・裏面ナデ。

付表3 錢貨一覽表

番号	錢貨名	書体	背面	調査区	出土遺構	径 (cm)	重さ (g)	初鑄年
298	開元通寶	真書	上月文	C1区	第4面整地層	2.55	2.984	唐／武徳四(621)
299	開元通寶	真書	上月文	C1区	第4面整地層	2.40	2.746	唐／武徳四(621)
300	宋通元寶	真書	上甲文	C1区	第5面整地層下層	2.50	2.973	北宋／建隆元(960)
301	淳化元寶	真書		C1区	第6面以下整地層	2.55	2.400	北宋／淳化元(990)
302	咸平元寶	真書		C2区	柱穴15	2.40	2.584	北宋／咸平元(998)
303	景德元寶	真書		C1区	第4面整地層	2.50	2.327	北宋／慶徳元(1004)
304	祥符元寶	行書		C1区	第4面整地層	2.55	3.602	北宋／大中鄧符元(1009)
305	祥符通寶	行書		C1区	第4面整地層	2.35	2.620	北宋／大中鄧符元(1009)
306	祥符元寶	行書		C1区	第4面整地層	2.35	2.256	北宋／大中鄧符元(1009)
307	祥符通寶	行書		C1区	第4面整地層	2.45	2.563	北宋／大中鄧符元(1009)
308	天禧通寶	行書		C1区	第4面整地層	2.60	1.967	北宋／天禧元(1017)
309	天聖元寶	真書		C1区	第4面整地層	2.55	2.907	北宋／天聖元(1023)
310	皇宋通寶	真書		C1区	第5面整地層	2.55	3.087	北宋／寶元元(1038)
311	皇宋通寶	真書		C2区	第3面検出中	2.55	2.578	北宋／寶元元(1038)
312	至和元寶	篆書		C1区	路面41	2.40	2.196	北宋／至和元(1054)
313	嘉祐元寶	真書		C1区	第5面整地層下層	2.45	3.211	北宋／嘉祐元(1056)
314	熙寧元寶	真書		C1区	第5面掘整地層	2.50	3.270	北宋／熙寧元(1068)
315	熙寧元寶	篆書		C1区	第4面整地層	2.45	3.754	北宋／熙寧元(1068)
316	元豐通寶	行書		C1区	第5面整地層下層	2.55	2.706	北宋／元豐元(1078)
317	元豐通寶	篆書		C2区	土坑6下層	2.40	1.979	北宋／元豐元(1078)
318	元祐通寶	行書		C1区	第5面整地層	2.45	3.400	北宋／元祐元(1086)
319	元祐通寶	篆書		C1区	第5面整地層	2.55	3.566	北宋／元祐元(1086)
320	紹聖元寶	行書		C1区	第6面以下整地層	2.55	2.640	北宋／紹聖元(1094)
321	紹聖元寶	行書		A2区	淀城期盛土	2.45	2.702	北宋／紹聖元(1094)
322	元符通寶	行書		C1区	第4面整地層	2.45	2.016	北宋／元符元(1098)
323	元符通寶	行書		C1区	第4面整地層	2.35	1.408	北宋／元符元(1098)
324	大觀通寶	真書		C1区	第4面整地層	2.45	2.829	北宋／大觀元(1107)
325	政和通寶	分楷		C1区	第5面整地層下層	2.50	3.242	北宋／政和元(1111)
326	大定通寶	真書		C2区	土坑6	2.40	2.303	金／大定一八(1178)
327	永樂通寶	真書		C1区	第3面整地層	2.50	1.818	明／永樂六(1408)
328	洪武通寶	重点通	上「漸」	C2区	土坑6下層	2.45	1.980	明／洪武元(1368)
329	(無文)			C1区	第4面整地層	2.40	3.138	?
330	慶長通寶	真書		C1区	第4面整地層	2.40	1.869	日本／慶長年間(1596-1615)
331	寛永通寶	真書		A2区	土坑2	2.55	2.722	日本／
332	寛永通寶	真書	上「文」	B1区	堀16	2.55	4.164	日本／

付表4 土製品観察表

番号	調査区	出土遺構	器形	長さ・径 (cm)	厚み (cm)	色 調	胎 土	備考
348	B5区	淀城期盛土	土錘	2.70	1.00	5Y5/1灰色	密	
349	C1区	地業53	土錘	3.30	0.90	2.5Y6/2灰黄色	密	
350	C2区	町屋67	土錘	3.35	0.95	5YR6/4にぶい橙色	密、φ1mmの長石・クサリレキ疎らに含む	
351	C1区	地業53	土錘	3.60	0.95	10YR6/3にぶい黄橙色	密、φ1mm前後の長石・チャート・クサリレキを含む	
352	C1区	第6面以下 下層	土錘	(2.80)	1.00	2.5Y8/1灰白色	密、φ1mm前後の石英・長石・チャートを多く含む	
353	C2区	町屋67	土錘	(3.20)	1.00	7.5YR6/4にぶい橙色	密	
354	C2区	土坑46	土錘	(3.30)	1.10	5YR7/6橙色	密、φ1mm以下のクサリレキを含む	
355	C1区	地業53	土錘	(3.40)	1.10	7.5YR7/4にぶい橙色	密	
356	C1区	第5面整地層	土錘	4.00	1.00	2.5Y5/2暗灰黄色	密	
357	C2区	第5面整地層 下層	土錘	(3.20)	0.85	2.5Y5/1黄灰色	密、φ1mm前後の石英を含む	
358	C1区	第5面整地層 下層	土錘	4.40	0.85	N3/0暗灰色	密	
359	C2区	第4面 遺構検出中	土錘	4.40	0.90	10YR8/1灰白色	密、φ1mm以下のクサリレキを含む	
360	C1区	地業53	土錘	4.50	1.25	2.5Y6/2灰黄色	密	
361	C2区	町屋67	土錘	4.00	1.10	10YR4/1褐灰色	密、φ1mm以下の石英・長石を含む	
362	C2区	町屋67	土錘	4.60	1.05	7.5YR7/3にぶい橙色	密、φ1mmの長石・クサリレキを含む	
363	C2区	第3面 遺構検出中	円盤	1.70	0.50	7.5YR7/4にぶい橙色	密、φ1mm以下のクサリレキを多く含む	
364	C1区	第5面整地層 下層	円盤	3.10	0.80	7.5Y7/1灰白色	密、φ1mm前後の石英・長石を含む	瓦器を転用
365	C1区	第5面整地層 下層	円盤	3.60	1.20	上面N8/0~N7/0灰白色 断面10Y8/1灰白色 下面N5/0灰色	密、φ3mm以下の石英・長石・チャートを含む	瓦を転用
366	C1区	第4面整地層	円盤	3.20	0.70	N8/0灰白色	密、φ1mm以下の石英・長石・チャートを含む	瓦を転用
367	C2区	土坑6	円盤	2.50	0.40	10YR8/2灰白色	密	土師器を転用 未製品
368	C1区	第5面整地層	円盤	3.80	0.40	N4/0灰色 断面N8/0灰白色	密	瓦器を転用 未製品
368	C1区	第5面整地層	円盤	2.40	0.45	2.5Y8/2灰白色	密、φ1mm以下のクサリレキを多く含む	土師器を転用
370	C1区	第6面以下 下層	人形 (犬)	(2.50)	2.10	2.5Y7/2灰黄色	密、φ1mm以下の石英・長石・雲母を含む	頭部欠損

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながおかきょうあと・よどじょうあと							
書名	長岡京跡・淀城跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2011-7							
編著者名	高橋 潔・菅田 薫・竜子正彦							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2012年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうあと 長岡京跡 よどじょうあと 淀城跡	きょうとしふしみく 京都市伏見区 よどきづちょう・しも 淀木津町・下 づちょうちない 津町地内	26100	3 1191	34度 54分 16秒	135度 43分 08秒	2011年9月 20日～2011 年12月7日	1,727m ²	整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
長岡京跡 淀城跡	都城跡 平城跡	桃山時代～ 江戸時代初頭 江戸時代	土坑、柱穴、礎石、 路面、溝、地業、 石列、縁石、小径、 空閑地、落込み	土師器、瓦器、国産施 釉陶磁器、焼締陶器、 輸入陶磁器、瓦類、金 属製品、木製品、土製 品、石製品、石造物				
			土坑、柱穴、礎石、 石列、石垣、堀、 階段状列石、集石、 路面状整地、溝、 布掘基礎建物、井 戸	土師器、瓦器、国産施 釉陶磁器、焼締陶器、 輸入磁器、瓦類、金属 製品、銭貨、木製品、 土製品、石製品、石造 物				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-7
長岡京跡・淀城跡

発行日 2012年3月30日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の1
〒602-8435 Tel 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒604-0093 Tel 075-256-0961